
熊谷市

北島遺跡Ⅶ

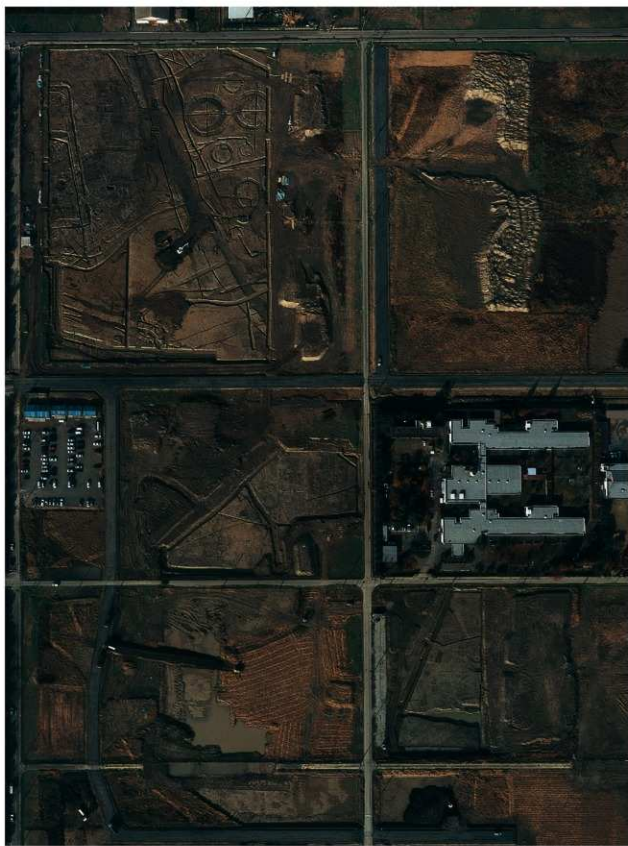
熊谷スポーツ文化公園建設事業関係

埋蔵文化財発掘調査報告

—Ⅲ—

2004

埼玉県
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



北島遺跡第17地点空中写真



北島遺跡第17地点A区水田跡



北島遺跡第17地点C区水田跡

序

都市の緑の中核である都市公園は、自然環境の保全、防災、レクリエーションなどのさまざまな機能を有しており、安全でゆとりある生活に欠かせない施設であります。

熊谷スポーツ文化公園もこのような理念に基づき整備が進められ、このほど第59回国民体育大会秋季大会のメイン会場として活用されることとなりました。

熊谷スポーツ文化公園内には北島遺跡があり、公園の設備工事に伴い発掘調査が行われ、これまでに縄文時代から近世にいたるまでの多くの遺構・遺物が発見されました。それらの成果は、すでに6冊の報告書として刊行されています。

このたび、陸上競技場、屋内運動施設、調整池などの建設に先立ち、関係機関が慎重に協議を重ねた結果、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、やむを得ず現状での保存が困難となった範囲について、埼玉県県土整備部の委託を受けて、当事業団が埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査を行いました。

その結果、県内ではじめて弥生時代中期の水利施設を伴う水田跡と集落跡が発見され、関東地域でも有数の遺跡となりました。また、古墳時代前期の畠跡の検出は県内でも貴重な調査事例です。この他に、古墳時代前期の大規模集落、埴輪をめぐらした古墳、古代豪族の館跡、中世から近世にかけての井戸など多くの遺構・遺物が発見されました。

今回の発掘調査により得られた成果は、埼玉県の歴史をさまざまな時代を通して深めてゆく上で、多いに役立つものと思われます。

今回の報告書は、弥生時代中期集落部分の発掘調査報告書に引き続き、メインスタジアム建設用地で発見された弥生時代中期水田跡の発掘調査並びに、屋内競技場施設北側道路用地の発掘調査部分の成果をまとめたものです。

本書が埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及・啓発及び教育機関の参考資料として広く活用いただければ幸いです。

なお本報告書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、県土整備部都市整備公園課、埼玉県北部公園建設事務所、熊谷市教育委員会並びに地元関係者各位に対し深く感謝申し上げます。

平成16年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 桐川卓雄

例言

1. 本書は、埼玉県熊谷市に所在する北鳥遺跡の発掘調査報告書（第3巻）である。

本編では、北鳥遺跡第17地点の弥生時代中期に属する主な遺構・遺物と、20地点の主な遺構・遺物について記述した。また、第19地点の自然遺物分析の結果についても掲載した。

北鳥遺跡は、これまでに以下の報告書を当事業団から刊行している。

北鳥遺跡	事業団報告書第81集
北鳥遺跡Ⅱ	事業団報告書第88集
北鳥遺跡Ⅲ	事業団報告書第103集
北鳥遺跡Ⅳ	事業団報告書第195集
北鳥遺跡Ⅴ	事業団報告書第278集
北鳥遺跡Ⅵ	事業団報告書第286集

2. 遺跡の略号と代表地番及び各年度の発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

平成10年度

北鳥遺跡 第9次（59-058）

熊谷市大字上川上町田364他

平成10年7月27日付 教文第2-77号

平成11年度

北鳥遺跡 第12次（59-058）

熊谷市大字上川上町田364他

平成11年4月16日付 教文第2-5号

平成12年度

北鳥遺跡 第15次（59-058）

熊谷市大字上川上323・192他

平成12年4月19日付 教文2-3号

3. 発掘調査は、埼玉県立熊谷スポーツ文化公園建設事業に伴う記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県北部公園事務所の委託を受けて、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4. 発掘調査事業は、第I章-3に示す組織によ

り実施した。このうち、本書にかかる第17地点の発掘事業については、平成10年7月1日から平成11年3月31日までを小野美代子、新屋雅明、福田 聖が、平成11年4月8日から平成11年12月8日までを利根川章彦、岩田明広が、平成12年7月1日から平成12年10月31日までを赤熊浩一、吉田 稔が担当した。また、第20地点については、平成12年1月11日から平成12年3月24日までを黒坂禎二、田中広明が、平成12年5月1日から6月30日までを大谷 徹、山本 靖が担当した。

5. 遺跡の基準点測量と航空写真は、株式会社シン技術コンサルに委託した。

6. 掲載した遺構写真は各調査担当者が、遺物写真は大屋道則が撮影した。出土品の整理及び図版の作成は、吉田が行なった。

7. 自然遺物（人骨・動物遺存体）の分析は、株式会社バリノサーヴェイに委託した。また、その他の分析は株式会社古環境研究所に委託した。

8. 本書の執筆は、第I章-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、第VI章を久保田睦子、富田和夫、吉田 稔、その他を吉田が行なった。

9. 本書の編集は、吉田が行なった。

10. 発掘調査から報告書の刊行まで下記の方々にご教示、ご協力を賜った。記して感謝を表します。

熊谷市教育委員会・相京建史・石川日出志・飯島義雄・及川良彦・甲斐博幸・栗原文蔵・黒沢 浩・恋河内昭彦・小出輝雄・笹森健一・笹森紀己子・佐藤明人・佐原 真・設楽博己・鈴木敏弘・鈴木正博・田口一郎・谷口 肇・棚宜田佳男・藤田典夫・松井一明・松本 完・若狭 徹（敬称略）

凡例

本報告書における挿図等の指示は、以下のとおりである。

1. 遺跡全体におけるX・Yの数値は、国土標準平面直角座標第Ⅸ系（原点：北緯36° 00' 00"、東経139° 50' 00"）に基づく座標値を示す。また、各挿図における方位はすべて座標北を示す。
2. 遺跡におけるグリッドの設定は、国土標準平面直角座標に基づき、10m×10m方眼を基本グリッドとしている。
3. グリッドの名称は、北西杭を基準として、南北方向は北から順にA・B・C…とアルファベットを付し、東西方向は西から1・2・3…と算用数字で付し、A-1グリッド等の名称を付けた。但し南北方向については、アルファベットを重複させてグリッド表示を行っている。
4. 本報告書における遺構番号は、原則として発掘調査時に付した番号を掲載している。但し、本書掲載において番号を変更したものについては新旧の番号表示を表記した。
5. 本報告書における本文・挿図・表に示す遺構の略号は以下のとおりである。

SJ…竪穴住居跡 SB…掘立柱建物跡

SK…土壌 SD…溝 P…柱穴・小穴

6. 本報告書における挿図の縮尺は以下のとおりである。但し、例外もある。

全体図 1/1000 1/1600 遺構図 1/60
水田跡全測図 1/500・600 水田跡遺構・等高線図 1/100 水田跡断面図 1/100 水田跡基本土層図 1/80 水田跡出土遺物微細図 1/40 畠跡全体図 1/200 畠跡区割図 1/100 畠跡断面図 1/100 溝平面図 1/400 溝断面図 1/60 河川跡 1/200

遺物 実測土器 1/4 土器拓影図 1/3 底部・土製品 1/3 石器 1/3 土鍾 1/3 木

製品 1/4

7. 遺物のうち、土器実測図の網掛けは、20%が軸、40%が赤彩範囲を示す。
8. 遺構断面図に表記した水準数値は、海拔標高を示す。
9. 遺物観察表の表記方法は、以下のとおりである。

胎土は土器に含まれる鉱物等のうち、特徴的なものを示した。

A-赤色粒子 B-石英 C-長石 D-角閃石
E-白色粒子 F-白色針状物質 G-雲母 H-一砂粒 I-片岩 J-礫 K-雲母粒子 L-黒色粒子 M-砂粒にチャートを含む。

色調は、『新版標準土色帖』1997年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修）を基に通用表記とした。

焼成は良好-I・普通-II・不良-IIIの3段階に分けて表示した。

残存率は、5%刻みで表示した。あくまでも目安としてのおおまかな全体表示である。

須恵器の底部調整手法については下記のように示す。

底部ヘラ切り…A 底部糸切…B

切り離し後の調整なし…0 ナデ…1 手持ちヘラ削り…2 回転ヘラ削り…3 調整範囲が全面に及ぶもの…a 周辺部のみ…b 底部全面と体部下端…c 底部周辺と体部下端…d

例えば、底部回転糸切り後、周辺ヘラ削り調整の場合、底部B3b手法とする。底部が全面ヘラ削りされ、切り離し手法が不明の場合、底部3a手法とする。

10. 本報告書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/50,000、1/25,000と熊谷市都市計画図1/2,500を使用した。

目次

口絵

発刊に寄せて

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	(4) 畠跡	81
1. 発掘調査に至る経過	1	(5) 水田跡	88
2. 発掘調査と報告書作成の経過	2	(6) 遺構外（グリッド）出土遺物	88
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3	3. 古代の遺構と遺物	92
II 遺跡の立地と環境	5	(1) 竪穴住居跡	92
1. 地理的環境	5	(2) 掘立柱建物跡	121
2. 歴史的環境	7	(3) 土壌	126
III 遺跡の概要	13	(4) 井戸跡	131
IV 第17地点の調査	17	(5) 小穴	132
1. 第17地点の概要	17	(6) 溝	138
2. 弥生時代中期の遺構と遺物	19	(7) 溝遺構外（グリッド）出土遺物	151
(1) 土壌	19	V 付編	155
(2) 溝	21	1. 第19地点出土の自然科学分析	155
(3) 河川跡	27	2. 第19地点出土遺物（補遺）	162
(4) 水田跡	31	(1) 堰周囲出土遺物	162
(5) 遺構外（グリッド）出土遺物	64	(2) 竪穴住居跡出土遺物	163
V 第20地点の調査	66	(3) 遺構外出土遺物	174
1. 第20地点の概要	66	3. 第17地点の自然科学分析	176
2. 古墳時代の遺構と遺物	71	VI 調査のまとめ	189
(1) 竪穴住居跡	71	写真図版	
(2) 小穴	77	付図	
(3) 溝	78		

挿図目次

第1図	埼玉県の地形	5	第36図	A区水田跡エレベーション図	49
第2図	熊谷市周辺の地形分類図	6	第37図	A区水田跡基本土層図	51
第3図	周辺の遺跡	8	第38図	A区水田跡出土遺物微細図	52
第4図	周辺の遺跡(弥生時代)	10・11	第39図	A区水田跡出土遺物	52
第5図	北島遺跡のこれまでの調査区	14・15	第40図	C区水田跡基本土層図	53
第6図	第17地点基本土層図	17	第41図	C区水田跡等高線図	54
第7図	第17地点遺構全体図	18	第42図	C区水田跡区割図	55
第8図	土壌	19	第43図	C区水田跡(1)	56
第9図	第17地点溝区割図	20	第44図	C区水田跡(2)	57
第10図	C区溝	22	第45図	C区水田跡(3)	58
第11図	第91号溝遺物出土微細図・土層断面図	23	第46図	C区水田跡(4)	59
第12図	第91号溝出土遺物	24	第47図	C区水田跡(5)	60
第13図	A区溝	25	第48図	C区水田跡(6)	61
第14図	F区溝	26	第49図	C区水田跡(7)	62
第15図	第107・124号溝土層断面図	27	第50図	遺構外(グリッド)出土遺物	65
第16図	第171号溝エレベーション図	27	第51図	第20地点基本土層図	66
第17図	F区河川跡	29	第52図	第20地点下層遺構配置図	67
第18図	河川跡出土遺物	30	第53図	第20地点上層遺構配置図	67
第19図	A区水田跡等高線図	32	第54図	下層遺構全体図(1)	68
第20図	A区水田跡遺構全体図	33	第55図	下層遺構全体図(2)	69
第21図	A区水田跡区割図	34	第56図	下層遺構全体図(3)	70
第22図	A区水田跡(1)	35	第57図	第41号住居跡	71
第23図	A区水田跡(2)	36	第58図	第41号住居跡出土遺物	72
第24図	A区水田跡(3)	37	第59図	第42号住居跡	73
第25図	A区水田跡(4)	38	第60図	第42号住居跡出土遺物	74
第26図	A区水田跡(5)	39	第61図	第43号住居跡	75
第27図	A区水田跡(6)	40	第62図	第43号住居跡出土遺物	75
第28図	A区水田跡(7)	41	第63図	第47号住居跡	76
第29図	A区水田跡(8)	42	第64図	第47号住居跡出土遺物	76
第30図	A区水田跡(9)	43	第65図	小穴	77
第31図	A区水田跡(10)	44	第66図	溝(1)	79
第32図	A区水田跡(11)	45	第67図	溝(2)	80
第33図	A区水田跡(12)	46	第68図	溝出土遺物	80
第34図	A区水田跡(13)	47	第69図	第1面畠跡エレベーション図	81
第35図	A区水田跡(14)	48	第70図	畠跡遺構全体図・土層断面図	82

第71図	第1面畠跡(1)	83
第72図	第1面畠跡(2)	84
第73図	第2面畠跡(1)	85
第74図	第2面畠跡(2)	86
第75図	第2面畠跡エレベーション図	87
第76図	水田跡	87
第77図	遺構外(グリッド)出土遺物	88
第78図	上層遺構全体図(1)	89
第79図	上層遺構全体図(2)	90
第80図	上層遺構全体図(3)	91
第81図	第1号住居跡	92
第82図	第2・3号住居跡	93
第83図	第2・3号住居跡出土遺物	93
第84図	第4・5・7・8・40号住居跡	95
第85図	第4号住居跡出土遺物	96
第86図	第5号住居跡出土遺物	97
第87図	第4～7・7号住居跡出土遺物	98
第88図	第8・40号住居跡出土遺物	99
第89図	第9・10号住居跡	100
第90図	第9号住居跡出土遺物	102
第91図	第11号住居跡	103
第92図	第11号住居跡出土遺物	103
第93図	第12号住居跡	104
第94図	第12号住居跡出土遺物	104
第95図	第13号住居跡	104
第96図	第14・15・16号住居跡	105
第97図	第15・16号住居跡出土遺物	106
第98図	第17・18号住居跡	106
第99図	第18・19号住居跡出土遺物	107
第100図	第19・20号住居跡	107
第101図	第21・22・23・25・26・27・38号住居跡	109
第102図	第21・22・25・26号住居跡出土遺物	110
第103図	第24・28号住居跡	111
第104図	第24号住居跡出土遺物	111
第105図	第29・30・31号住居跡	112
第106図	第30号住居跡出土遺物	113
第107図	第32・33・34号住居跡	114

第108図	第35号住居跡	114
第109図	第32・33・34・35号住居跡出土遺物	115
第110図	第36号住居跡	116
第111図	第36号住居跡出土遺物	116
第112図	第37号住居跡	117
第113図	第44号住居跡出土遺物	117
第114図	第44号住居跡	118
第115図	第45号住居跡	119
第116図	第45号住居跡出土遺物	119
第117図	第46号住居跡	120
第118図	第46号住居跡出土遺物	120
第119図	第1号掘立柱建物跡	121
第120図	第2号掘立柱建物跡	122
第121図	第3号掘立柱建物跡	123
第122図	第4号掘立柱建物跡	124
第123図	掘立柱建物跡出土遺物	125
第124図	土壌(1)	127
第125図	土壌(2)	129
第126図	土壌出土遺物	130
第127図	第1号井戸跡	131
第128図	小穴(1)	133
第129図	小穴(2)	134
第130図	小穴(3)	137
第131図	溝(1)	139
第132図	溝出土遺物(1)	140
第133図	溝(2)	142
第134図	溝(3)	143
第135図	溝(4)	145
第136図	溝出土遺物(2)	146
第137図	溝(5)	148
第138図	溝(6)	149
第139図	溝出土遺物(3)	150
第140図	遺構外(グリッド)出土遺物(1)	152
第141図	遺構外(グリッド)出土遺物(2)	153
第142図	第19地点堀周囲出土遺物	155
第143図	第317号住居跡遺物出土状況	163
第144図	第317号住居跡出土遺物(1)	164

第145図	第317号住居跡出土遺物 (2)	166
第146図	第317号住居跡出土遺物 (3)	168
第147図	第318号住居跡遺物出土状況	169
第148図	第318号住居跡出土遺物 (1)	171

第149図	第318号住居跡出土遺物 (2)	172
第150図	第361号住居跡出土遺物	173
第151図	遺構外出土遺物	175

表目次

第1表	北島遺跡周辺の遺跡地名表	9
第2表	A区水田跡計測表 (1)	50
第3表	A区水田跡計測表 (2)	51
第4表	C区水田跡計測表	63
第5表	第20地点遺構番号新旧対応表	67
第6表	第41号住居跡出土遺物観察表	71
第7表	第42号住居跡出土遺物観察表	74
第8表	第43号住居跡出土遺物観察表	76
第9表	第47号住居跡出土遺物観察表	76
第10表	溝出土遺物観察表	80
第11表	遺構外 (グリッド) 出土遺物観察表	88
第12表	第2・3号住居跡出土遺物観察表	94
第13表	第4号住居跡出土遺物観察表	96
第14表	第5号住居跡出土遺物観察表	98
第15表	第4～7・7号住居跡出土遺物観察表	99
第16表	第8・40号住居跡出土遺物観察表	100
第17表	第9号住居跡出土遺物観察表	101
第18表	第11号住居跡出土遺物観察表	103
第19表	第12号住居跡出土遺物観察表	104

第20表	第15・16号住居跡出土遺物観察表	106
第21表	第18・19号住居跡出土遺物観察表	107
第22表	第21・22・25・26号住居跡出土遺物観察表	110
第23表	第24号住居跡出土遺物観察表	112
第24表	第30号住居跡出土遺物観察表	113
第25表	第32・33・34・35号住居跡出土遺物観察表	115
第26表	第36号住居跡出土遺物観察表	116
第27表	第44号住居跡出土遺物観察表	117
第28表	第45号住居跡出土遺物観察表	120
第29表	第46号住居跡出土遺物観察表	120
第30表	掘立柱建物跡出土遺物観察表	125
第31表	土曜出土遺物観察表	131
第32表	溝出土遺物観察表 (1)	141
第33表	溝出土遺物観察表 (2)	147
第34表	溝出土遺物観察表 (3)	151
第35表	遺構外 (グリッド) 出土遺物観察表	154
第36表	補遺編掲載遺物新旧対照表 (1)	174
第37表	補遺編掲載遺物新旧対照表 (2)	175

図版目次

図版1	北島遺跡遠景 (南西から)
	北島遺跡全景 (西から)

第17地点の調査 弥生時代

図版2	A区西壁土層堆積状況
	A区西壁土層堆積状況 (近接)
図版3	A区水田跡 AU39～43グリッド付近 (西から)

	A区水田跡 AS39～43グリッド付近 (西から)
図版4	A区水田跡 AN41～43・AS39～43グリッド付近 (西から)
	A区水田跡, 第124号溝跡 AO41～43グリッド付近 (東から)
図版5	A区水田跡・大坪 AO40～43・AP41～43グリッド付近 (東から)

	第91号溝跡
図版 6	C区水田跡 AF～AH28～32 グリッド（南から）
	第171号溝跡
図版 7	河川跡完掘状況
	第74号土壇
	第75号土壇
	第76号土壇
	第77号土壇
図版 8	第91号溝跡遺物出土状況
	第91号溝跡遺物出土状況
	第91号溝跡遺物出土状況（近接）
	第107号溝跡
	A区水田跡 畦・水口検出状況
	A区水田跡 小畦畔検出状況
	A区水田跡 大畦遺物出土状況
	A区水田跡 大畦遺物出土状況 （近接）
図版9	第91号溝跡 第12図 1
	A区水田跡大畦 第39図 1
図版10	第91号溝跡 第12図 2～4
	河川跡 第18図 1～20
図版11	河川跡 第18図21～36
	河川跡 第18図37～46
図版12	遺構外 第50図 1～10
	遺構外 第50図11～15

第20地点の調査

古墳時代

図版13	調査区全景（東側半分）
	調査区全景（西側半分）
図版14	第41号住居跡
	第42号住居跡
図版15	第47号住居跡（南東から）
	第47号住居跡（南西から）
図版16	畠跡全景（東から）
	畠跡全景（西から）
図版17	畠跡全景（西から）

	畠跡 ZR31グリッド付近
図版18	畠跡 ZR32グリッド付近
	畠跡 ZR33グリッド付近
図版19	水田跡全景（西から）
	第41号住居跡遺物出土状況
	第14号溝跡
	第15・16号溝跡
	調査風景
図版20	第41号住居跡 第58図 1
	第41号住居跡 第58図 2
	第41号住居跡 第58図 3
	第41号住居跡 第58図 4
	第41号住居跡 第58図 5
	第41号住居跡 第58図 8
図版21	第41号住居跡 第58図 6
	第41号住居跡 第58図 7
	第42号住居跡 第60図 3
	第43号住居跡 第62図 2
	第43号住居跡 第62図 3
	第42号住居跡 第60図 2
	第43号住居跡 第62図 5
	第43号住居跡 第62図 1
図版22	第43号住居跡 第62図 6
	第47号住居跡 第64図 2
	第47号住居跡 第64図 3
	第15号溝跡 第68図 1
	第31号溝跡 第77図 2
	第14号土壇 第77図 3

古 代

図版23	調査区ZR19～22グリッド付近 （東から）
	調査区ZS13～15グリッド付近 （東から）
図版24	調査区ZR19～20グリッド付近 （西から）
	調査区ZR22～25グリッド付近 （西から）

図版25	調査区 ZR 23～27グリッド付近 (東から)		第44号小穴 第7号溝跡
	調査区 ZR 23～30グリッド付近 (東から)	図版36	第8～11号溝跡, 第19号土壌, 第7～16号小穴
図版26	第1号住居跡, 第6号溝跡 第2～8号住居跡		第17・18号溝跡 (北西から) 第17・18号溝跡, 第34・36号小穴 (南から)
図版27	第2～12号住居跡, 第2号溝跡 第5・7・8号住居跡, 第1号溝跡		第20・21号溝跡, 第15号土壌, 第49号小穴
図版28	第13・17～20号住居跡, 第3・4号溝跡, 第1～3号小穴 第14～16号住居跡, 第1・2号土壌, 第4・5号溝跡, 第1・2号小穴, 旧河道		第25～29号溝跡, 第3号掘立柱建物跡 第30～35号溝跡 (南西から) 第30～35号溝跡 (西から) 第37号溝跡
図版29	第21～27号住居跡 第28～31号住居跡, 第8・9号溝跡	図版37	第5号住居跡 第86図17 第5号住居跡 第86図16 第9号住居跡 第90図22 第16号住居跡 第97図4 第21号住居跡 第102図5 第32・33号住居跡 第109図7
図版30	第35～37号住居跡, 第11号溝跡, 第14～17号小穴 第36号住居跡		
図版31	第44号住居跡, 第3号土壌 第45号住居跡	図版38	第36号住居跡 第111図3 第40号住居跡 第88図8 第45号住居跡 第116図8 第45号住居跡 第116図9
図版32	第46号住居跡 第1～3号掘立柱建物跡群		
図版33	第1・2号掘立柱建物跡群 掘立柱建物跡群 (第2号を中心に)	図版39	第45号住居跡 第116図12 第45号住居跡 第116図13 第1号掘立柱建物跡 第123図5 第3号掘立柱建物跡 第123図12 第1号土壌 第126図5
図版34	第4号掘立柱建物跡 第5号住居跡カマド跡 第32・33号住居跡遺物出土状況 第44号住居跡カマド跡 第1号掘立柱建物跡 P2, 第2号掘立柱建物跡 P4	図版40	第1号溝跡 第132図2 第25号溝跡 第136図26 第29号溝跡 第139図53 遺構外 第140図18 遺構外 第140図1 遺構外 第141図47
図版35	第3号掘立柱建物跡 P5 第1号土壌 第12・13号土壌, 第22号溝跡, 第46号小穴 第14号土壌 第1号井戸跡曝出土状況 第1号井戸跡完掘状況	図版41	第9号住居跡 第90図27 遺構外 第141図46 第1号土壌 第126図11

	墨書 第90図18	
	墨書 第104図3	
	墨書 第113図2	
	墨書 第139図54	
	墨書 第141図36	
図版42	須恵器甕類（外面）第4・5号住居跡， 第1・26号溝跡 第85・86・132・136図 須恵器甕類（内面）第4・5号住居跡， 第1・26号溝跡 第85・86・132・136図	
図版43	灰釉陶器（外面）第18号住居跡， 遺構外 第99・141図 土鍾 第2・3・4～7・24号住居跡 第83・87・104図	

付編

補遺

図版43	木製容器 第142図1 丸木弓 第142図2	
図版44	第317号住居跡 第144図1 第317号住居跡 第144図5 第317号住居跡 第144図6 第317号住居跡 第144図2 第317号住居跡 第144図3 第317号住居跡 第144図4	
図版45	第317号住居跡 第144図9 第317号住居跡 第145図10 第317号住居跡 第145図11 第317号住居跡 第145図12 第317号住居跡 第145図13 第317号住居跡 第145図14	
図版46	第317号住居跡 第145図15 第317号住居跡 第145図17 第317号住居跡 第145図18	

	第317号住居跡 第144図8	
	第318号住居跡 第148図1	
	第318号住居跡 第148図2	
	第318号住居跡 第148図3	
図版47	第318号住居跡 第148図4 遺構外 第151図1 遺構外 第151図2 第318号住居跡 第149図31 第317号住居跡 第145図12 縄文 第317号住居跡 第145図14 粉痕	
図版48	第317号住居跡 第145図19～30， 第146図31～36 第317号住居跡 第146図37～43	
図版49	第318号住居跡 第148図5～30 第318号住居跡 第149図31～47	
図版50	第361号住居跡 第150図1～18 遺構外 第151図3～6	

自然科学分析

図版51	分類群 1 イネ 分類群 2 イネ 分類群 3 イネ（側面） 分類群 4 ヨシ属 分類群 5 棒状珪酸体 分類群 6 海綿骨針	
図版52	北島遺跡の花粉・胞子遺体	
図版53	1 a. ヒト下顎骨咬面（人骨1） 1 b. ヒト下顎骨左側面（人骨1）	
図版54	第19地点出土獣骨（1） 第19地点出土獣骨（2）	
図版55	第19地点出土獣骨（3） 第19地点出土獣骨（4）	

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県は、「環境優先・生活重視」、「埼玉の新しいくづくり」を基本理念として、豊かな彩の国づくりを推進するため、種々の施策を講じている。各種大型のスポーツ大会の開催やスポーツ施設の整備を進めてきたのは、本県におけるスポーツの振興を図り、時代を担う人づくりを目標とした施策である。

2004年に開催される第59回国民体育大会、第40回全国身体障害者スポーツ大会に向け、そのメイン会場となる熊谷スポーツ文化公園の拡張整備事業も、その一環として計画されたものである。

熊谷スポーツ文化公園の拡張整備事業に先立ち、公園課長から平成9年7月18日付公園第277号で、埋蔵文化財の所在の有無およびその取扱いについて、文化財保護課長あて照会があった。それに対して文化財保護課は、平成9年12月2日～5日に遺跡範囲確認のための試掘調査を実施し、その結果、埋蔵文化財の所在が明確になったことから、平成9年12月22日付け教文第1254号で、概ね次のような回答をした。

1 埋蔵文化財の所在

名 称	種 別	時 代	所 在 地
天神遺跡 (59-101)	集落跡・古墳・墓	弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世	熊谷市大字上川上
北島遺跡 (59-058)	集落跡・墓	弥生・古墳・奈良・平安・中世	熊谷市大字今井
田谷遺跡 (59-071)	集落跡	古墳・奈良・平安	熊谷市上中条
天神東遺跡 (59-078)	集落跡	古墳・奈良・平安・近世	熊谷市大字上川上

2 取扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地は現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づき発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施してください。なお、発掘調査の実施については当課と別途協議してください。

さらに、公園外周道路については、平成11年9月2日付け公園第355号で照会があり、平成11年9月16・17日に遺跡範囲確認調査を行い、平成11

年9月22日付け教文第622号で次のとおり回答した。

1 埋蔵文化財の所在

名 称	種 別	時 代	所 在 地
赤城遺跡 (59-100)	集落跡	古墳・奈良・平安	熊谷市大字今井
北島遺跡 (59-058)	集落跡・墓	弥生・古墳・奈良・平安・室町	熊谷市大字上中条
田谷遺跡 (59-071)	集落跡	古墳・奈良・平安	熊谷市上中条

2 取扱い（省略）

文化財保護課は、公園課や北部公園建設事務所と協議を重ねて工事と埋蔵文化財保護との調整を図り、できるだけ盛土による現状保存の措置を講じた。しかし、工事の計画変更が不可能であるメイン陸上競技場、調整池、屋内運動場、外周道路などについては、止むを得ず記録保存の発掘調査を実施することとし、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に発掘調査を依頼した。

調査は平成10年7月～平成12年12月まで2年5ヶ月にわたって行われた。財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団から文化財保護法第57条第1項にもとづき、埼玉県教育委員会教育長あてに埋蔵文化財発掘調査届が、また埼玉県知事から第57条の3にもとづき発掘通知が提出された。それに対する指示通知は以下のとおりである。

発掘調査届：平成10年7月27日付け教文第2-77号

平成10年10月5日付け教文第2-120号

平成11年1月21日付け教文第2-178号

平成11年4月16日付け教文第2-5号

平成12年1月24日付け教文第2-129号

平成12年1月24日付け教文第2-130号

平成12年1月24日付け教文第2-131号

平成12年4月19日付け教文第2-3号

発掘通知：平成10年7月28日付け教文第3-278号

平成10年7月28日付け教文第3-279号

（文化財保護課）

2. 発掘調査と報告書作成の経過

発掘調査

北島遺跡第17地点の発掘調査は、第9次調査を平成10年7月1日から平成11年3月31日、及び第12次調査を平成11年4月8日から平成11年12月8日、第15次調査を平成12年7月1日から平成12年10月31日まで行なった。調査面積は、合計で15,000m²である。発掘調査の経過は、以下のとおりである。

第9次調査は、平成11年度7月当初より調査事務所を設置及び調査区の開掘工事をし、重機による表土除去に着手した。表土除去は、古代の水田跡が想定される面まで掘り下げた。調査対象区はA区及びB区であった。A区は、古代の集落跡が検出され遺構の残存状況が悪く早々に精査を実施して下層の遺構掘削に取り掛かった。下層では古墳時代前期の畠跡が検出された。B区は、古代の水田跡が検出されたが、自然の谷地形が入り込んでいた。第12次調査は、4月当初から表土掘削作業に入り順次遺構精査に入った。調査対象区は、D-E-B-A-C区の順で行った。各調査区とも上層にある水田跡を調査した後に下層の調査に移った。下層遺構は、古墳時代前期を主体とするもので、ほぼ全調査区にわたって検出された。さらに、A・C区では、弥生時代中期の水田跡が検出された。第15次調査は、先年度末了であったF区及びB区に残る生活用道路部分の調査を実施した。B区は、遺構が希薄で上層である古代の面で溝等を検出するにとどまった。F区は、地上の構造物を撤去後パイル打ち込み部分を回避しながら表土掘削を行った。遺構精査の結果、上層の古代の面で大形の掘立柱建物跡を中心とする集落跡が検出された。また、下層では、古墳時代前期の竪穴住居跡・溝・畠跡等が検出された。

20地点の発掘調査は、第12次調査を平成12年1月11日から平成12年3月24日、及び第15次調査を平成12年5月1日から平成12年6月30日、まで行なった。調査面積は、合計で1,780m²である。

第12次調査は、外周道路西側部分について調査を実施した。表土掘削後上層である古代の面で遺構密度の高い集落跡が検出され精査を実施した。また、下層の古墳時代前期の面では、竪穴住居跡・溝等が検出された。第15次調査では、引き続き調査区を東側に延長して実施した。上層の古代の面では、12次調査と同様に密度の高い集落跡が検出された。下層の古墳時代前期の面では、畠跡が検出された。これらの遺構を精査した後、機材を撤収して調査を終了した。

第19地点については、本報告では、自然遺物を中心として取り扱うため、その採取状況について記載する。骨類遺存体（主に人骨と獣骨）に付いては、弥生時代中期から古代にかけての遺構及び遺物包含層から検出されたものを採取した。採取後の保管に際しては、アルコール水溶液を満たした容器に入れて保管した。

整理・報告書の作成

整理・報告書作成事業は、平成15年度4月当初から開始し、平成15年度3月末をもって完了した。4月当初より、遺物の洗浄・注記及び、遺構図面の整理から着手した。続いて遺物の接合・復元を行い、実測図、断面図、拓本採取を行った。またこれと平行して遺構第二原図の作成を行なった。8月より、遺構図版の作成及び、遺物トレースに着手し、終了後図版の作成及び原稿の執筆に取りかかった。10月に自然遺物（骨類の鑑定及び木製品の樹種同定）の委託分析を行った。尚、骨類の分析成果については報告書に掲載した。遺物については11月に写真撮影を実施した。また重要遺物については、観察表を作成した。図版作成及び事実記載の終了後、11月に割付作業を開始した。12月割付表を作成し、入札を行なった。3回の校正を経て、平成16年3月報告書を刊行した。刊行の前後に本報告書で取り扱った図面類・写真類・遺物等を整理・分類し、収納作業を行なった。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査（平成10・11・12年度）

理事長（平成10・11）	荒井 桂	調査部副部長（平成12）	石岡憲雄
理事長（平成12）	中野健一	調査第二課長（平成10）	杉崎茂樹
副理事長	飯塚誠一郎	統括調査員（平成10・12）	宮井英一
常務理事（平成10）	鈴木 進	統括調査員（平成11）	富田和夫
常務理事兼管理部長（平成11・12）	広木 卓	統括調査員（平成12）	赤熊浩一
管理部長		統括調査員	鈴木孝之
専門調査員兼経理課長（平成10）	関野栄一	統括調査員（平成11）	石井伸明
副部長兼経理課長（平成11）	関野栄一	主任調査員（平成11）	黒坂祐二
副部長（平成12）	関野栄一	主任調査員（平成10）	新屋雅明
庶務課長（平成10・11）	金子 隆	主席調査員（調査第三担当）（平成11）	今井 宏
主席（庶務担当）（平成12）	阿部正浩	主席調査員（調査第五担当）（平成11）	小野美代子
主査（平成10・11）	田中裕二	主席調査員（調査第三担当）（平成12）	小野美代子
主席（施設担当）（平成12）	野中廣幸	統括調査員（平成10）	小野美代子
主任（平成10・11）	江田和美	統括調査員（平成11）	利根川章彦
主席（経理担当）（平成12）	江田和美	統括調査員（平成11）	若松良一
主任	福田昭美	統括調査員（平成11）	細田 勝
主任	腰塚雄二	主任調査員（平成11・12）	吉田 稔
主任	菊池 久	主任調査員（平成12）	大谷 徹
主任	長滝美智子	主任調査員（平成11）	村田章人
調査部長（平成10）	谷井 彪	主任調査員（平成11）	田中広明
調査部長（平成11）	増田逸朗	主任調査員（平成12）	君島勝秀
調査部長（平成12）	高橋一夫	主任調査員（平成12）	山本 靖
調査部副部長（平成10・11）	水村孝行	主任調査員	福田 聖
		主任調査員（平成11）	岩田明広
		主任調査員（平成11）	渡辺清志

(2) 整理・報告書刊行(平成12・13・14・15年度)

理事長(平成12・13)	中野健一	主任	福田昭美
理事長(平成14・15)	桐川卓雄	主任	腰塚雄二
副理事長	飯塚誠一郎	主任	菊池 久
常務理事兼管理部長(平成12)	広木 卓	調査部	
常務理事兼管理部長(平成13・14)	大館 健	調査部長(平成12・13・14)	高橋一夫
常務理事兼管理部長(平成15)	中村英樹	調査部長(平成15)	宮崎朝雄
管理部		調査副部長(平成12)	石岡憲雄
管理部副部長(平成12)	関野栄一	資料副部長(平成12)	鈴木敏昭
管理幹(平成13・14)	持田紀男	調査部副部長(平成13・14・15)	坂野和信
管理部副部長(平成15)	村田健二	主席調査員(資料整理担当)	磯崎 一
主席(庶務担当)(平成12)	阿部正浩	統括調査員(平成15)	富田和夫
主席(施設担当)(平成12)	野中廣幸	統括調査員(平成14・15)	吉田 稔
主席(経理担当)(平成12)	江田和美	統括調査員(平成15)	大谷 徹
主席(平成15)	田中由夫	主任調査員	田中広明
主任(平成13・14・15)	江田和美	主任調査員(平成15)	山本 靖
主任	長滝美智子	主任調査員(平成13)	吉田 稔

Ⅱ 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

北島遺跡は熊谷市大字上川上字天神森上317-61他に位置する。遺跡の現在の地理的環境は埼玉県北部の中核都市を形成する熊谷市街から、北東に約3kmの郊外にあたる。遺跡周辺は県北部の穀倉地帯となり、広大な田園風景が展開している。

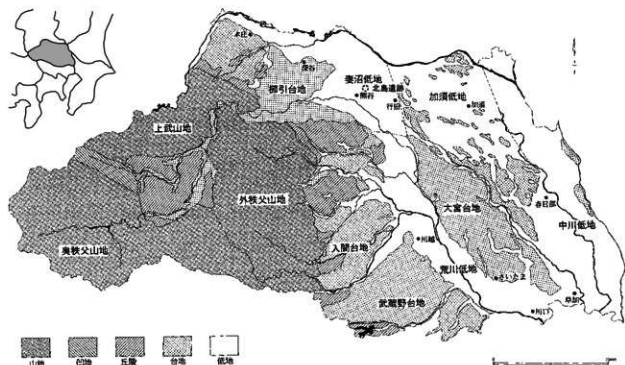
付近には国道17号熊谷バイパス、国道125号、国道140号、国道407号などが交わり、交通の要衝でもある。また、最寄りの駅は、JR熊谷駅であるが、秩父地域と県東部を結ぶ秩父鉄道も乗り入れている。尚、遺跡は県立熊谷スポーツ文化公園敷地内およびその周辺域にまたがり、広大な範囲を有している。

遺跡の立地する地形は、おおまかに見れば熊谷市及び妻沼町を挟む利根川と荒川のほぼ中間地点にあたる。秩父山系に端を発し、埼玉県北部を東流する荒川が形成する熊谷新扇状地の末端部にあたる。いわゆる扇状地末端部に特有の湧水点及び伏流水が見られ、中小河川が発達し周辺部に多くの井戸が見

られる。遺跡の東方には妻沼低地が広がり、各所に河川が形成した帯状の自然堤防と後背湿地が点在している。

荒川が形成する熊谷扇状地には多くの支流が分岐しているが、この中小河川水系の中では熊谷市街中央部にあたる星溪園を湧水点とし、東流する星川に属している（現在は忍川に流れ込んでいる）。遺跡はこの星川左岸の東西方向に延びる自然堤防のひとつに立地している。

熊谷扇状地に起点を持つ中小の河川は、これより東へ向かうに従って利根川の氾濫堆積作用による影響を受けて、向きを南東方向へ変えている。現在では遺跡周辺は東西方向に延びる自然堤防上に築かれた集落とその間に営まれている広大な水田地帯からなり、比較的平坦な地形である。しかし、古代以前には自然堤防と沖積低地面との比高差が大きく、かなり起伏に富んだ地形をなしていたと考えられる。



第1図 埼玉県の地形



第2図 熊谷市周辺の地形分類図

2. 歴史的環境

本遺跡を中心に埼玉県北部地域の通時代状況と全県域の弥生時代の状況に分けて記述する。

熊谷市周辺での旧石器から縄文時代の遺跡は極めて少なく旧石器時代の遺跡としては櫛挽台地上の龍原裏遺跡などが知られているに過ぎない。縄文時代に入ると櫛挽台地上及び妻沼低地上にも遺跡が進出してくる。妻沼低地上の寺東遺跡では、前期関山式土器が出土している。櫛挽台地上の三ヶ尻遺跡群内の林遺跡で前期黒浜期の集落が発見されている。また、三ヶ尻天王遺跡では、中期から後期にかけての遺構が検出されている。平成14年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書三ヶ尻遺跡Ⅲでは、縄文時代中期後半から後期初頭にかけての良好な集落が検出され、報告されている。妻沼低地においては、後期から遺跡が進出してくる。寺東遺跡で称名寺式の土器埋設土壌が検出されたほか石田遺跡などが知られている。報告書が刊行された池上遺跡及び、現在整理中の諏訪木遺跡などでは、後期から晩期にかけての遺構及び包含層が発見されている。諏訪木遺跡では、後期加曾利B式期の土器集中遺構が検出され、出土した土器も中部日本的要素が窺え注目される遺跡である。このように縄文時代後期から沖積低地の自然堤防上へ生活の拠点を展開していった状況が窺える。

弥生時代に入ると縄文時代の遺跡立地を踏襲する形で自然堤防上の遺跡が多く発見されるようになる。北島遺跡では、前期末の土壌が検出され、後期にかけて遺構が展開している。三ヶ尻上古遺跡、横間栗遺跡などでは、再葬墓が検出されている。また、前中西遺跡では本報告と並行する弥生時代中期後半を含み後期まで継続する集落跡が発見された。隣接する深谷市上敷敷遺跡では県内初の遠賀川式土器が出土した他、妻沼町飯塚・飯塚南遺跡、行田市池上・小敷田遺跡などで中期後半の再葬墓及び集落跡が発見された。後期では、東沢遺跡、行田市池守遺跡、小敷田遺跡 から吉ヶ谷式土器が出土している他、弥藤吾新田遺跡では南関東系の弥生町式土器が

出土している。

古墳時代に入ると、墳丘は台地および低地の自然堤防上の微高地に形成され、集落は台地部ばかりでなく低地部の自然堤防上などに積極的に進出する傾向が窺える。また低地部の遺構検出が増加したことで木製品等の遺物の出土も増えている。集落としては、東沢遺跡、天神東遺跡、中条遺跡群、一本木前遺跡、行田市弥藤吾新田遺跡、池上・池守遺跡、小敷田遺跡などがある。このうち東沢遺跡と小敷田遺跡からは多量の木製品が出土している。また、平成14年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書一本木前遺跡Ⅳでは、翡翠製の勾玉等を主体部に副葬した方形周溝墓群の報告がなされている。古墳群としては、櫛挽台地上の別府古墳群、龍原裏古墳群、三ヶ尻古墳群、熊谷新扇状地上の玉井古墳群、広瀬古墳群、坪井古墳群、石原古墳群、肥塚古墳群、荒川右岸の村岡古墳群、妻沼低地上の中条古墳群、上之古墳群などが形成されている。この内、肥塚古墳群では、河原石乱石積と角閃石安山岩切組積の2種類の胴張型横穴式石室をもつ古墳が確認されている。また、中条古墳群内の鎧塚古墳は、帆立貝式前方後円墳で、須恵器高坏型器台等を伴う墓前祭祀2ヶ所が確認されている。

古代に入ると遺跡規模の拡大と官衙関連施設を想定させるような特定集落遺跡が発見されている。西別府廃寺は幡羅郡の郡寺として想定されている。最近では、深谷市の幡羅遺跡で総柱の倉庫群が発見され、幡羅郡衙の正倉庫と考えられている。また、行田市小敷田遺跡では、7世紀末から8世紀初頭にかかる出挙木簡等が出土した他、池上遺跡では9世紀代の企画性のある掘立建物跡群が検出されている。尚、本遺跡に併行する古代の集落として諏訪木遺跡がある。諏訪木遺跡では、河川脇の祭祀関連遺構が検出された他、区画性のある集落と大型掘立建物跡が発見され特殊な様相を示している。

平安時代末から中世に入ると、武蔵七党や在地武



第3図 周辺の遺跡

第1表 北島遺跡周辺の遺跡地名表

1 北島遺跡	8 上之古墳群	15 一本木前遺跡	22 成田氏館跡
2 池上遺跡	9 村岡古墳群	16 諏訪木遺跡	23 熊谷氏館跡
3 小敷田遺跡	10 別府古墳群	17 寺東遺跡	24 久下氏館跡
4 大塚古墳	11 龍原裏古墳群	18 東沢遺跡	25 市田氏館跡
5 女塚古墳群	12 広瀬古墳群	19 天神東遺跡	26 中条氏館跡
6 玉井古墳群	13 坪井古墳群	20 天神遺跡	27 箱田氏館跡
7 肥塚古墳群	14 石原古墳群	21 弥生新田遺跡	28

土団の館跡が群在するようになる。中条氏館跡、成田氏館跡、熊谷氏館跡、市田氏館跡、久下氏館跡などが中小の河川流域に錯居している。

前年度報告の弥生時代中期後半の集落跡に続き、本報告では弥生時代中期後半の水田跡を掲載している。北島遺跡の過去の調査においても、弥生時代前期末から後期にかけての遺構遺物が検出されているが、沖積低地の自然堤防上などに弥生時代の生活痕跡が残され、これらの遺構遺物が発見される機会が増えてきている。

これまで、弥生時代の遺跡は、主に山間部や台地上に見えられてきた。1978年県立さきたま資料館により発掘調査した行田市池上遺跡から、弥生時代中期須和田式土器を出土する集落が発見されたことは、関東地方において、これまでの遺跡の立地条件を覆す出来事であった。以来県北地域を中心として低地部の発掘調査が行われるに従い、弥生時代の遺構・遺物が検出されるようになった。最近では東部中川低地に当たる庄和町須釜遺跡から弥生時代中期中葉の再葬墓群が検出され報告書として刊行されている。この遺跡は、これまで該期の遺跡の空白地域を埋める一大発見となった。したがって、今日該期の生産基盤及び生活基盤についてその立地条件を根本的に見直さなければならない状況にきている。

県内における前期の遺跡は、松久丘陵末端部に当たる美里町如来堂C遺跡、櫛挽台地末端部に当たる岡部町四十坂遺跡、上武山系の神流川に面する神泉村下阿久原平遺跡などの他に、低地部自然堤防上の遺跡として、岡部町桶詰遺跡、深谷市上敷免遺跡、堀東遺跡、熊谷市北島遺跡などがある。何れも包含

層か再葬墓群として発見され、住居跡は検出されていない。尚、四十坂遺跡については、最新の調査報告書の中で中期中葉まで継続することが判明した。

中期に入ると遺跡が増加すると伴にその分布範囲も拡大する。遺跡の分布は主に児玉・松久丘陵を中心とする地域、越辺川兩岸の比企・岩殿丘陵及び入間台地を中心とする地域、県北部小山川水系及び熊谷扇状地上に立地する地域、大宮台地を中心とする地域などがある。また、秩父地域は、信州地方と強い関係を示すものの南東北地方の土器が搬入されるなど、複雑な状況を示している。

児玉地域では、神川町前組・羽根倉遺跡、児玉町雷電下遺跡、飯玉東遺跡、本庄市今井条里遺跡、大久保山遺跡があり、再葬墓、土壙等が検出されている。松久丘陵地域では、美里町村後遺跡、神明ヶ谷戸遺跡、寄居町土平遺跡などの集落跡が発見されている他、中期終末の美里町河輪神社境内遺跡、南東北系の壺を出土した石神遺跡などが知られている。また最近調査した岡部町大寄遺跡からは中期中葉の筒形土器が出土している。

小山川及びこれに併行して流れる福川水系の自然堤防上には、中期中葉の再葬墓群と、地点が離れるが、それに後続する時期の住居跡が検出された深谷市上敷免遺跡が有名である。また、深谷市堀東遺跡、清水上遺跡、明戸東遺跡、入子状の小形土器を伴う再葬墓群として有名な熊谷市横間栗遺跡などが櫛挽台地線縁下の東西方向に延びる自然堤防上に立地している。妻沼町飯塚・飯塚南遺跡では、中葉の再葬墓及び住居跡が検出されている。熊谷新扇状地上に立地する遺跡は、扇頂部に熊谷市三ヶ尻上古遺跡、



遺跡名一覧

- | | | | |
|-------------|------------|-------------|-------------|
| 1 北島遺跡 | 13 如来堂C遺跡 | 25 一本木前遺跡 | 37 丸山遺跡 |
| 2 今井条里遺跡 | 14 用土平遺跡 | 26 三ヶ尻上古遺跡 | 38 岩鼻遺跡 |
| 3 前組・羽根倉遺跡 | 15 神明ヶ谷戸遺跡 | 27 天神遺跡 | 39 登戸新田遺跡 |
| 4 真鏡寺後遺跡 | 16 四十坂遺跡 | 28 前中西遺跡 | 40 雉子山遺跡 |
| 5 生野山・古ヶ谷遺跡 | 17 樋詰遺跡 | 29 平戸遺跡 | 41 附川遺跡 |
| 6 雷電下遺跡 | 18 堀東遺跡 | 30 諏訪木遺跡 | 42 根平遺跡 |
| 7 飯玉東遺跡 | 19 上敷免遺跡 | 31 池上・池上西遺跡 | 43 駒堀遺跡 |
| 8 大久保山遺跡 | 20 明戸東遺跡 | 32 古宮遺跡 | 44 大西・代正寺遺跡 |
| 9 村後遺跡 | 21 清水上遺跡 | 33 小敷田遺跡 | 45 附島遺跡 |
| 10 大奇遺跡 | 22 飯塚遺跡 | 34 袋・台遺跡 | |
| 11 石神遺跡 | 23 飯塚南遺跡 | 35 大野田西遺跡 | |
| 12 河輪神社境内遺跡 | 24 横間渠遺跡 | 36 吉ヶ谷遺跡 | |



第4図 周辺の遺跡(弥生時代)

1:100000

5km

北側末端部に一本木前遺跡、その他、平戸遺跡、多量の磨製石礫が出土した諏訪木遺跡がある。集落跡としては、星川及び忍川流域沿いに、再葬墓から土器棺墓、木棺墓、土坑墓、方形周溝墓までの墓制がそろい、中期中葉から後期初頭まで継続する集落を検出した、熊谷市前中西遺跡。河川を区切る形の環濠を持ち、県内最古の方形周溝墓を伴う、行田市から熊谷市にまたがる池上・小敷田遺跡のほか、最近の調査で翡翠の勾玉が出土した古宮遺跡などがある。これらの集落は本報告の北島遺跡も含めて中期中葉から後期前半の時期におさまる。また、集落の分布が近接距離乃至は隣接した自然堤防上に立地すると考えられることから、広域的な集落を形成していたものと想定される。これらの集落からは東北地方南部、北陸、信州、南関東など各地域からの搬入品及び影響を受けて製作された土器が出土している。

一方荒川右岸の比企・岩殿丘陵地域では、大里町円山遺跡、船木遺跡、吉見町大行山遺跡、東松山市大西・代正寺遺跡等があり方形周溝墓を伴う。また、大西・代正寺遺跡では、宮ノ台式土器を出土する集落跡、方形周溝墓及び土器棺墓を主体とする墓域が検出されている。入間台地北端部越辺川右岸の自然堤防上（半島状の低台地）に形成された坂戸市附島遺跡は、宮ノ台式を伴う方形周溝墓が検出され大規模な集落が想定されている。また、朝霞市向山遺跡では、中期の袋状鉄斧が出土している。

大宮台地地域では北端部の埋没台地に接する自然堤防上に、竜見町式土器を出土した吹上町袋・台遺跡がある。南部地域では、大宮台地東部の岩槻市に遺跡の纏まりがあり、方形周溝墓が検出された南遺跡、住居跡が検出された掛貝塚遺跡、馬込遺跡、西原遺跡、他に平林寺遺跡などがある。この他、旧大宮市御蔵山中遺跡、大和田本村・本村北遺跡、旧与野市諏訪坂遺跡、田浦和市東裏遺跡、明花向遺跡、松木遺跡、上野田西台遺跡、大北遺跡、川口市戸塚上台遺跡、小谷場台遺跡などがある。小形の環濠集落が2箇所併存する特徴が見出せる。

秩父地域では、皆野町栗谷瀬遺跡、秩父市下ッ原遺跡、柳田遺跡、大沼遺跡、事上遺跡、藪遺跡、宮地遺跡、橋立岩陰遺跡、小鹿野町井上遺跡、荒川村姥原遺跡などがある。この内、事上遺跡では、東北系の鉢形土器が出土している。

後期の遺跡は、低地部で減少し台地部で増加する傾向にある。児玉地域では、樽式土器を出土した児玉町真鏡寺後遺跡、飯玉東遺跡、神川町前組・羽根倉遺跡、吉ヶ谷式土器を伴って出土する、本庄市生野山遺跡、大久保山遺跡、児玉町塩谷下大塚遺跡などがある。松久丘陵地域では、美里町羽黒山遺跡がある。熊谷扇状地土上では、熊谷市天神遺跡で樽式系土器が出土している他、小敷田遺跡では吉ヶ谷式土器が出土している。また、前中西遺跡では後期初頭の土器をセットで出土した住居跡が検出された。

荒川右岸の比企・岩殿丘陵地域では、標式遺跡である東松山市吉ヶ谷遺跡をはじめ、鎌子山遺跡、附川遺跡、根平遺跡、駒堀遺跡、嵐山町大野田西遺跡、櫛描文系土器を出土する岩鼻遺跡などがある。

大宮台地地域では、北部に鴻巣市登戸新田遺跡がある他、南部に遺跡が集中している。環濠集落として知られる、岩槻市木曾良遺跡、旧与野市中里前原遺跡などの他に、大宮公園内遺跡、井沼方遺跡、馬場北遺跡、川口市木曾呂遺跡などがある。

弥生時代を通して遺跡の立地を見た場合、低地部に形成される遺跡は、県西部地域及び北部地域に偏る傾向がある。しかし中川の自然堤防上に形成された、庄和町須釜遺跡及び春日部市谷原新田遺跡など東部低地でも遺跡が発見されはじめた。特に須釜遺跡は、下総台地や栃木県方面との結びつきが強く且つ、東北地方及び西関東地域の様相を持つ土器も検出されるなど注目される遺跡である。本報告で報告する水田跡は、弥生時代中期における遺構としては県内初の調査事例である。今回の沖積低地での大規模集落及び水田跡の発見を起点として、今後沖積地域での発掘調査及び遺跡発見の増加も予想され、該期の新たな知見が得られるものと考えられる。

Ⅲ 遺跡の概要

北島遺跡第17地点は、メインスタジアム建設に伴う発掘調査であった。また、第20地点は、公園用地北側外周道路建設に伴う発掘調査であった。今回の調査で検出された遺構は、弥生時代中期から中世にかけて重層して遺構が検出されたが、屋内競技場建設に伴う第19地点の調査のように高い密度で堅穴住居跡等の遺構が検出される事はなかった。これは、第19地点が東西方向に流れる2本の河川に挟まれた自然堤防上にあたるのに対し、第17・20両地点とも河川対岸の氾濫原または低地部にあたるためと考えられる。

まず、地理的状況であるが、荒川新扇状地と妻沼低地との境界域にあたり、扇状地形の伏流水上昇によって発生する湧水点を起源とする、中小の河川がよく発達している。北島遺跡周辺でも現存する小河川が東西方向に数多く認められる。また、これまでの調査から遺跡を東西に貫く形で蛇行して流れていた埋没河川が2本確認されている。これらの河川の自然堤防上に生活関連遺構が密集して築かれていた。また、周辺低地部に展開する耕作地と一体化することにより労働力の集約化が図られると同時に、豊富な水量を供給する河川からの水利施設の構築によって灌漑農耕への好条件を提供していたものと考えられる。従前の発掘調査においても各時代の水路関係や、条里関係、道路関係の溝が縦横に開削されている状況が認められ、灌漑設備の拡充が図られている状況が裏付けられている。

今回の発掘調査においても第17・18地点のように弥生時代中期から連綿として水田跡が検出された他、微高地部分では畝跡なども検出された。このような耕作関連遺構はさらに北島遺跡周辺部で広範囲に検出されるものと考えられる。また周辺部に帯状に連なる自然堤防上には集落域または、墓域としての遺構が検出されるものと考えられる。

このように、豊富な水量を統制する水利施設を完

備することによって、周辺部に広がる広大な河川の氾濫原や後背湿地を耕作地に転換し、豊富な生産基盤を背景として、各時代に大規模な集落跡が築かれていったものと考えられる。

ここで、これまでの北島遺跡の発掘調査について概要を記し、改めて遺跡全体の状況を把握しておきたい。なお、北島遺跡は現在の埼玉県立熊谷スポーツ文化公園内のほぼ全域に亘る広大な範囲を有し、これまでに21の地点を数える発掘調査が行なわれている。

北島遺跡第1地点は、蛇行する河川跡にかかる部分と自然堤防部分からなり、堤防上に平安時代の掘立柱建物跡を伴う集落跡が検出されている。

北島遺跡第2地点は、自然堤防上にあたり、奈良・平安時代的大型掘立柱建物跡を伴う集落跡が検出されている。また、弥生時代中期の土器が出土している。

北島遺跡第3地点は、自然堤防上にあり、奈良・平安時代の集落跡及び、多数の溝が検出されている。

北島遺跡第4地点は西側が河川跡にあたり、東側は自然堤防上にあたる。古墳時代後期から奈良・平安時代の集落跡で掘立柱建物跡を伴っている。

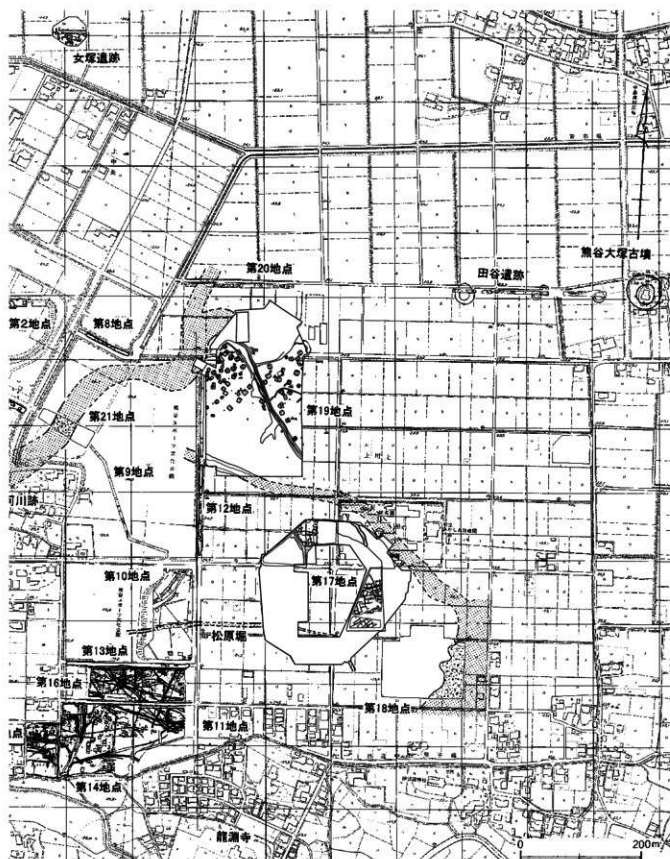
北島遺跡第5地点は自然堤防上にあり、古墳時代後期から奈良・平安時代の集落跡と2条の併走する大きな溝が検出されている。

北島遺跡第6地点は自然堤防上にあるが、調査区西端は河川堆積状の地形を示していた。奈良・平安時代の掘立柱建物跡を伴う集落跡が検出されている。

北島遺跡第7地点は南側が埋没河川流路にあたり、北側が自然堤防部にあたる。古墳時代前期及び後期の遺物を出土するが、中心は、奈良・平安時代的大型掘立柱建物跡を伴う集落跡である。

北島遺跡第8地点は自然堤防上の末端部にあたり、奈良・平安時代の掘立柱建物跡を伴う住居跡が散在して検出された。





第5図 北島遺跡のこれまでの調査区

北島遺跡第9地点は自然堤防間の微低地にあたり、トレンチ状の発掘調査の結果、住居跡4軒と溝多数が検出された。また西側は埋没河川が縦断していた。

北島遺跡第10地点は自然堤防上の微低地にあたり、調査区北側は2条の併走する大きな溝があり、中央部を横断する溝を境に南側に平安時代の掘立柱建物跡を伴う集落跡が検出されている。

北島遺跡第12地点は今回報告する第19地点に接している。弥生時代中期の遺物が出土した他、古墳時代前期から奈良・平安時代の集落跡が検出されている。

北島遺跡第13地点は第10地点及び第16地点と接している。自然堤防上の微低地にあたり、第10地点から続く平安時代の掘立柱建物跡と溝及び中世の板碑を伴う土壌が検出されている。

北島遺跡第14・15・16地点は調整池建設関連の発掘調査で、自然堤防上にあたるが調査区内で遺構の密度及び性格に相違がある。弥生時代前期末から中期にかけての再葬墓関連の遺構が検出されている。また、奈良・平安時代の掘立柱建物跡を伴う集落と数多くの溝が検出された。

北島遺跡第17地点は北側に埋没河川があり、その南側にある細長い自然堤防を経て、後背湿地が続く。自然堤防上には古墳時代前期の住居跡及び畠作遺構、奈良・平安時代の大規模掘立柱建物跡を伴う集落跡が検出されている。後背湿地部は、弥生時代中期以降連綿として水田が築かれている。

北島遺跡第18地点は後背湿地部にあたり、上層の水田跡下は沼沢地となっていた。

北島遺跡第19地点は東西方向に流れる2本の河川に挟まれた帯状の自然堤防上にあたり、弥生時代中期後半の集落跡、古墳時代前期の集落跡と墓域、古墳時代後期の古墳跡、古代の官衙施設を伴う集落跡、中・近世の遺構など、連綿として集落域または、墓域として高い密度で遺構が築かれている。

北島遺跡第20地点は調査区西側に埋没河川が縦断し、東側は自然堤防上にあたる。古墳時代前期の竪穴住居跡及び畠作跡の上層に奈良・平安時代の掘立柱建物跡を伴う集落が検出された。

北島遺跡第21地点は第3地点と第9地点の間に位置している。調査区の中央部を埋没河川が縦断している。両側の自然堤防部分からは、古墳時代から奈良・平安時代にかけての溝及び土壌が検出されている。

また、2002年に熊谷市教育委員会によって発掘調査が実施された。この熊谷スポーツ文化公園北側外周道路建設部分の発掘調査では、遺跡北辺の自然堤防上に立地し、古墳時代前期の竪穴住居跡、奈良・平安時代の竪穴住居跡、畠作跡、近世の土壌、井戸、溝等が検出された。

このように、周辺遺跡も含めて北島遺跡には自然堤防上に連綿として各時代の集落跡乃至は墓域が点在している状況が窺える。また、主に自然堤防部から低地部への移行部分で、居住域や墓域以外の場所では、古墳時代前期以降畠作が行われた状況も認められる。さらに、20地点のように洪水など河川による多量の氾濫堆積土により微高地化して、後世に集落区域や畠作区域に土地の利用状況が変化した事例も認められる。本報告にあたる第17地点のように後背湿地を主体とした低地部または河川の氾濫原では、水田跡が検出される可能性が濃厚であり、耕地面積も時代の経過と共に広がりがつづける。

北島遺跡及びその周辺地域の状況を通時的に眺めれば、弥生時代中期を開始期として灌漑水田の導入による生産域の確立と居住域が形成され、古墳時代前期以降畠作の導入と治水・灌漑設備の拡充によって可耕地の積極的開発且つ、拡大が図られてきた状況が看取される。また、生産基盤の拡充に伴い集落規模の拡大と集住化もいっそう進んだものと考えられる。

IV 第17地点の調査

1. 第17地点の概要

第17地点の調査は、屋内競技場施設建設に伴う第19地点の南東側80mに位置している。メインスタジアム建設に伴う発掘調査では、スタンド等の構造物建設部分を調査の主体とし、中央のフィールド部分を除外したため楕円形の調査区となっている。

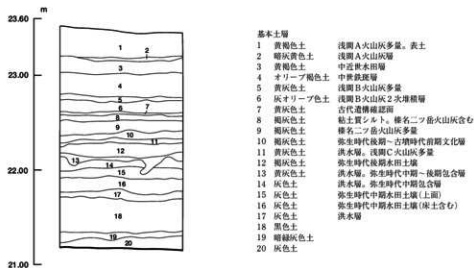
道路の立地は、北西側に位置する第19地点と東流する河川跡によって区切れ、右岸に延びる細長い自然堤防部分と、南東側第18地点で検出された沼沢地に向かって、低湿地へ移行する部分からなる。但し、調査区南側で近世に築かれた松原堀より南側は緩やかな微高地が所在し、この部分には古墳時代前期の堅穴住居跡を中心とする生活遺構が散漫ではあるが分布している。また、調査区全体では、標高は西側から東側に向かって緩やかに傾斜しているが、調査区内でも浅い谷が入り込み微小な標高差が認められる。

調査区内の基準土層については、20層からなり、標高23.60mを測る原表土から、1層である近・現代の耕作土の下に、第3・4層とした中世水田層が形成されている。第6層は天仁元年に降灰した浅間B火山灰層となり2次堆積層であるが鍵層となる。この下の第7層が奈良・平安時代の文化層となる。第8層には古墳時代後期初頭6世紀代以降に降灰した榛名二ツ岳火山灰層が、また、第9層には古墳時代初

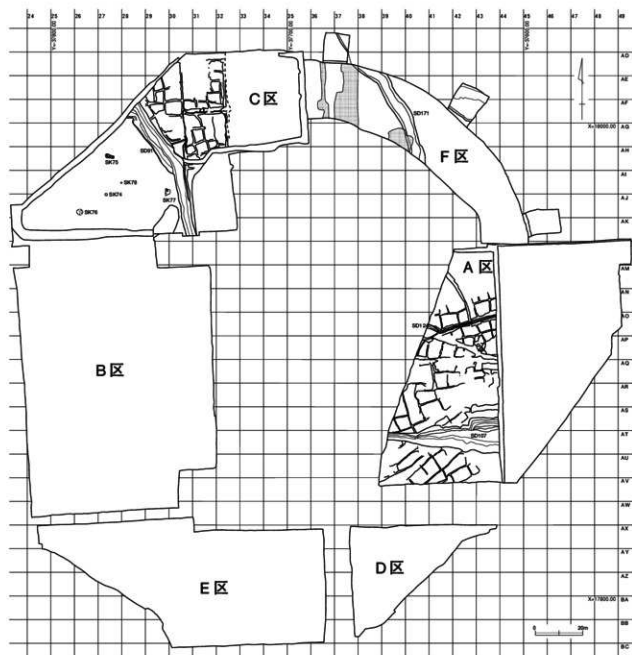
頭乃至は前期に降灰した浅間C火山灰層が堆積している。第10層から第12層にかけては弥生時代後期の文化層及び水田層が形成されている。第13層から第16層にかけては弥生時代中期の文化層及び水田層が形成されている。

第17地点において検出された遺構は、弥生時代中期後半から近世に及ぶが、本報告では、弥生時代中期後半に限って掲載する。

検出された遺構は、土壌5基、溝4条、河川跡1本、水田跡2箇所であった。遺構の分布状況は、調査区北西側C区で土壌が纏まって検出された。検出された土壌は、何れも第91号溝の西側に位置していた。また、遺構プランの不明瞭なものが多く、遺物も出土していない。溝はF区で検出されたものは、第19地点から繋がる水路と考えられる。C区で検出された溝は、形状がF区の溝と類似し、第19地点南端を東流する河川跡から分岐する溝と考えられる。A区南側を東流する溝は古墳時代後期に大きく開削された溝であるが基底部が当該期に属すると考えられるもので、C区の溝に接続するものと思われる。A区北側を屈曲して走行する溝は水田跡に伴う支水路と考えられる。水田跡はA区西半部及び、C区中央部分に検出された。



第6図 第17地点基本土層図



第7図 第17地点遺構全体図

2. 弥生時代中期の遺構と遺物

(1) 土坑

第74号土坑 (第8図)

C区調査区西寄り、AI・AJ-27グリッドに検出された。単独で検出された。平面形態は円形で、規模は径1.1m、深さ0.15mで浅い皿状の掘り込みであった。主軸方位は不明であった。覆土には炭化物が少量含まれていた。遺物は出土しなかった。

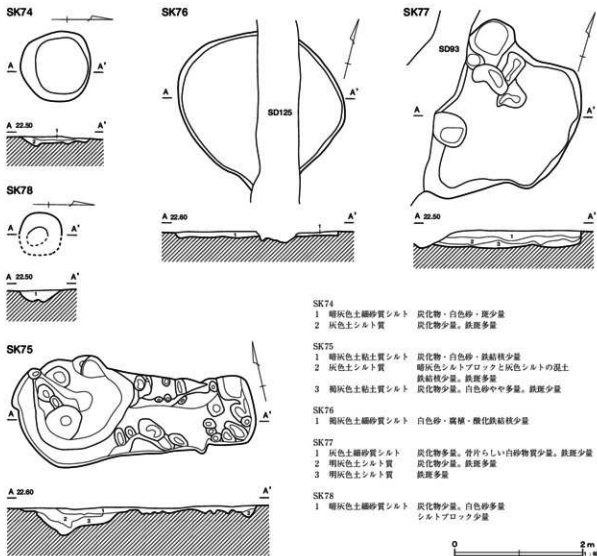
第75号土坑 (第8図)

C区調査区西寄り、AH-27グリッドに検出された。単独で検出された。平面形態は不整形であった。規模は長軸3.7m、短軸1.3m、深さ0.45mであった。掘り込みは西側に円形のやや深い落ち込みがあり、東側に長方形に張り出す浅い落ち込みが付いていた。底面はビット状の凹凸が多く認められた。主軸方位はN-75°-Wであった。覆土には炭化物が少量含まれていた。遺物は出土しなかった。

あり、東側に長方形に張り出す浅い落ち込みが付いていた。底面はビット状の凹凸が多く認められた。主軸方位はN-75°-Wであった。覆土には炭化物が少量含まれていた。遺物は出土しなかった。

第76号土坑 (第8図)

C区調査区西寄り、AJ-26グリッドに検出された。遺構の中央を第125号溝によって切られていた。平面形態は円形で、規模は長径2.7m、短径2.5m、深さ0.1mの浅い皿状の掘り込みであった。主軸方位は不明であった。遺物は出土しなかった。



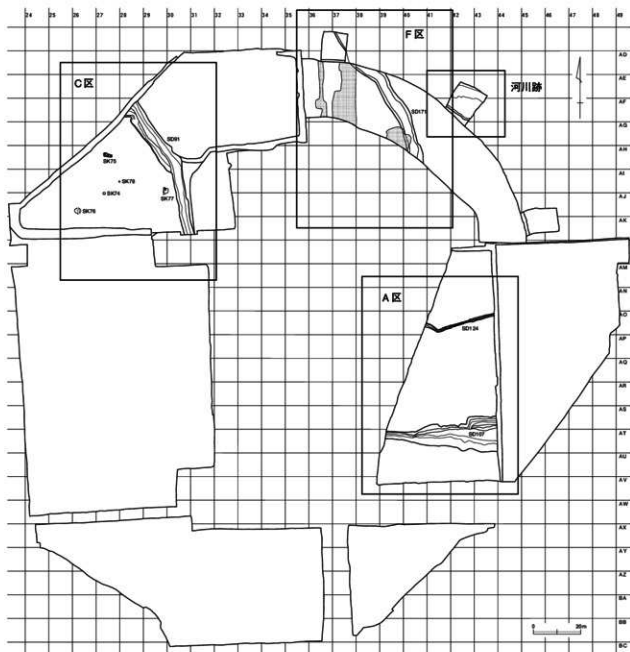
第8図 土坑

第77号土壌（第8図）

C区調査区中央、AI・AJ-29グリッドに検出された。西側を第93号溝によって切られていた。単独で検出された。平面形態は不整形であった。規模は長軸2.7m、短軸2.0m、深さ0.25mであった。掘り込みは北側及び西側に小穴を伴い箱型を呈していた。主軸方位は $N-8^{\circ}-E$ であった。覆土には炭化物が多量に含まれていた。遺物は出土しなかった。

第78号土壌（第8図）

C区調査区西寄り、AI-27グリッドに検出された。単独で検出された。平面形態は円形であった。規模は径0.65m、深さ0.2mであった。掘り込みは皿状を呈していた。主軸方位は不明であった。覆土には炭化物が少量含まれていた。遺物は出土しなかった。



第9図 第17地点溝区割図

(2) 溝

第91号溝 (第10・11・12図)

C区中央、A F～A K-28～31グリッドに検出された。本跡は、北西側に位置する第19地点南端を東流する河川跡(SD7)から南側に分岐する溝と考えられる。溝幅及び形状、覆土の堆積状況から、第19地点北側中央から南東方向に直線的に走行する水路と同様の役割を果たす溝と考えられる。また、本跡の東側には該期の小区画水田が検出されている。本跡は調査区中央でくの字状に屈曲して南下する溝で、走行方向はN-37°-WからN-11°-Wに方向を換えて走行していた。溝断面の形状は逆台形を呈していた。規模は上幅4.5m、下幅1.5m、深さ1.5mであった。覆土は、最上層の3層には榛名二ツ岳火山灰を含む帯状堆積が認められ、中位の第11層には浅間C火山灰層が堆積していた。また、第14層にV字状の堆積が認められることから本跡を掘り直している可能性がある。第15・16層には洪水起源の細砂層が堆積しているが、草本質の植物が含まれていることから流水速度は比較的緩やかであったと考えられる。また、最下層の第16層からは土器・石器等の遺物が出土した。

出土遺物は、1は長頸甕である。口縁部の一部と底部を欠損している。口縁部は朝顔形に開き、単口縁である。また、口唇部がやや段状にふくらみ、端部は尖っている。頸部はやや強く窄まり、胴部は下膨れ状に強く張り出している。頸部に7本一単位の櫛歯状工具による波状文を3段施文している。また、施文範囲の上下一部分にも同一工具を波状に押し当てた痕跡が認められるが磨り消されている。施文範囲より上口縁部にかけては、ハケ調整後横位のミガキを施している。胴部は、ハケ調整後縦位のミガキを施している。内面は、頸部まで横位のミガキを施し、胴下半部には横位のハケ調整が認められる。尚、胴部外面には有機物を含む多量の煤が付着している。2は甕で胴下半部以下を欠損する。口縁部は、くの字状に屈曲外反し比厚している。頸部は、棒状

工具による平行沈線で区画している。胴部上半は、棒状工具を2本束ねて連続山形文を施文し、単沈線で区画した下段に部分的に切れた山形文を施文している。尚頸部外面に煤が付着している。3は甕または、台付甕胴部である。ヘラ描沈線でコの字重ね文を施文している。

4は、小型の打製石斧である。小礫の裏面を打割して素材を取り出し、表裏面の縁辺部に剥離を加えて形状を整えている。両側縁部に浅い挟り込みが入る。刃部断面はノミ形を呈す。長さ5.9cm、幅4.0cm、厚さ1.6cm、重さ46.1gで、石質は黒色頁岩である。

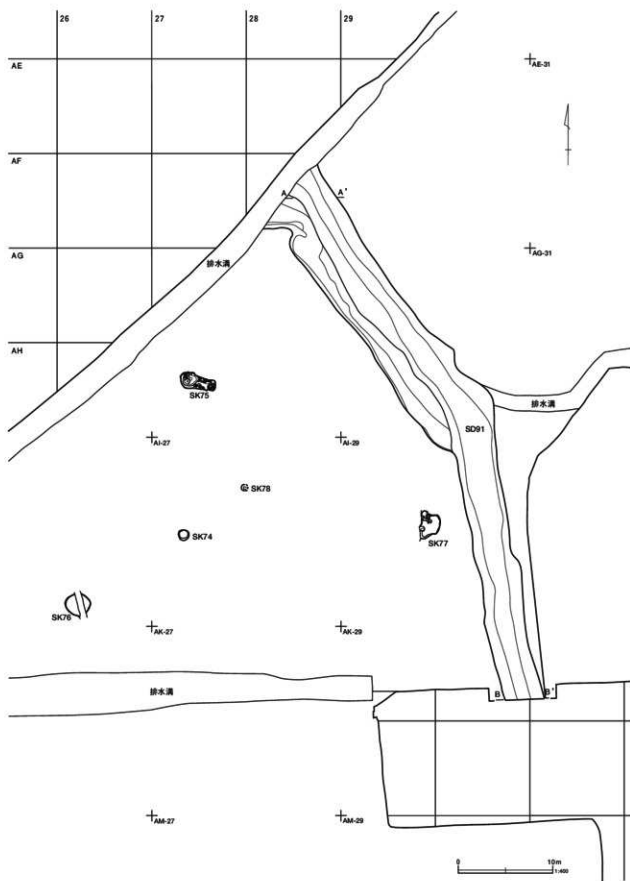
第107号溝 (第13・15図)

A調査区南側、A S・A T-39～43グリッドに検出された。調査所見では古墳時代後期に開削され、洪水等の影響によって溝の形状が大きく変わったものとされている。しかし、調査区西側の状況については、溝の形状及び基底面のレベル、覆土の性状から該期の溝の可能性が十分ありえると判断し掲載した。また、本跡の西側調査区外の状況については、C区第91号溝に接続するものと考えられる。直線的に延びる溝で、走行方向はN-90°-Eであった。溝断面の形状は西側では逆台形を呈し、東側では、基底面が検出されなかったがV字状の二段掘り込みであった。覆土下位には洪水起源のシルト質細砂層が厚く堆積していた。規模は西側で幅4.6m、深さ0.6m、東側で幅14.8m、掘削深度2.1mであった。

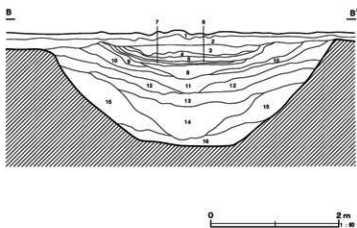
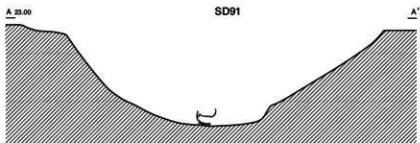
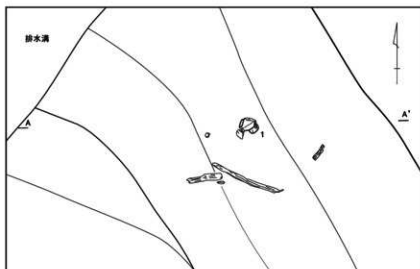
遺物は出土しなかった。

第124号溝 (第13・15図)

A区中央、A O-40～43グリッドに検出された。本跡はA区で検出された弥生時代中期後半の水田跡に関連する溝である。本跡の両側には、該期の小区画水田が平行して築かれていた。また、本跡から各区画(坪)に水口が取り付けいていた。また、西側一部では、大畦が南側に平行して取り付けいていた。このような状況から本跡は、各区画(坪)に水を供給する支水路の役割を果たしていたものと考えられる。



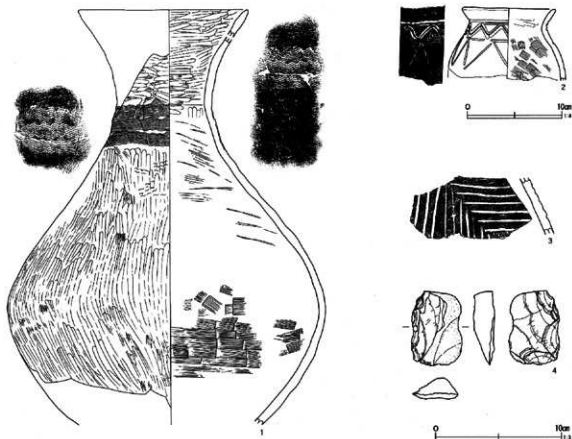
第10图 C区溝



SD91

- 1 灰褐色土シルト質礫砂 鉄屑集積
 - 2 灰色土粘土質シルト マンガン産集積
 - 3 暗灰色土粘土質シルト F A 火山灰粒子少量。有機質含む
 - 4 灰白色土粘土質シルト 黒色有機質ウミナ含む
 - 5 黒色土礫砂質シルト 黒色有機質層
 - 6 灰色シルト質 灰色シルトと礫砂質シルトの混土
 - 7 暗灰色土粘土質シルト 暗灰色粘土質シルトと灰白色シルトの混土
 - 8 灰色土粘土質シルト 海浜のよいシルト草本根含む
 - 9 灰色土粘土質シルト 灰色粘土質シルトと灰白色シルトの混土
 - 10 暗灰色土粘土質シルト 灰色シルトブロック多量
 - 11 暗灰色土粘土質シルト 有機質土。泥水多量。木製品少量
 - 12 暗灰色土シルト質粘土 青灰色シルト質粘土ブロック多量
 - 13 灰色土シルト質粘土 草本根多量
 - 14 暗灰色土シルト質粘土 海浜のよいシルト質粘土。草本根少量
 - 15 青灰色土礫砂質シルト 地山礫砂の崩落土多量
 - 16 暗灰色土粘土質シルト 地山礫砂少量。草本根多量
- 昆虫遺体少量
赤生や暗土器・木製品少量

第11図 第91号溝遺物出土微細図・土層断面図



第12図 第91号溝出土遺物

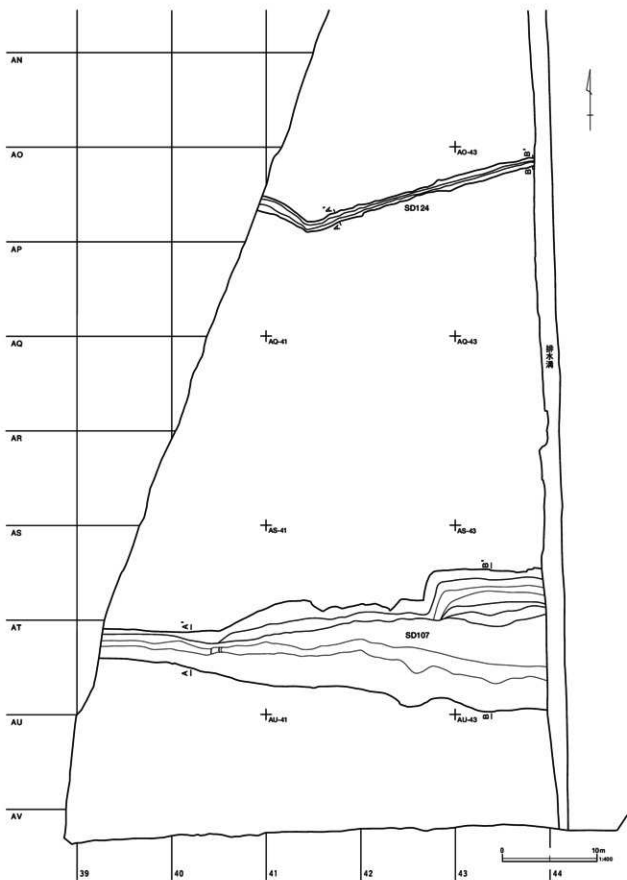
本跡は西側でくの字状に屈曲してその後直線的に延びる溝である。走行方向は $N-119^{\circ}-E$ から、 $N-73^{\circ}-E$ へ方向を換えている。溝断面の形状は皿状を呈していた。規模は幅1.0m、深さ0.18mであった。覆土は第3層から土器細片が出土し、第4層には炭化物が堆積していた。図示できる遺物は出土しなかった。

第171号溝（第14・16図）

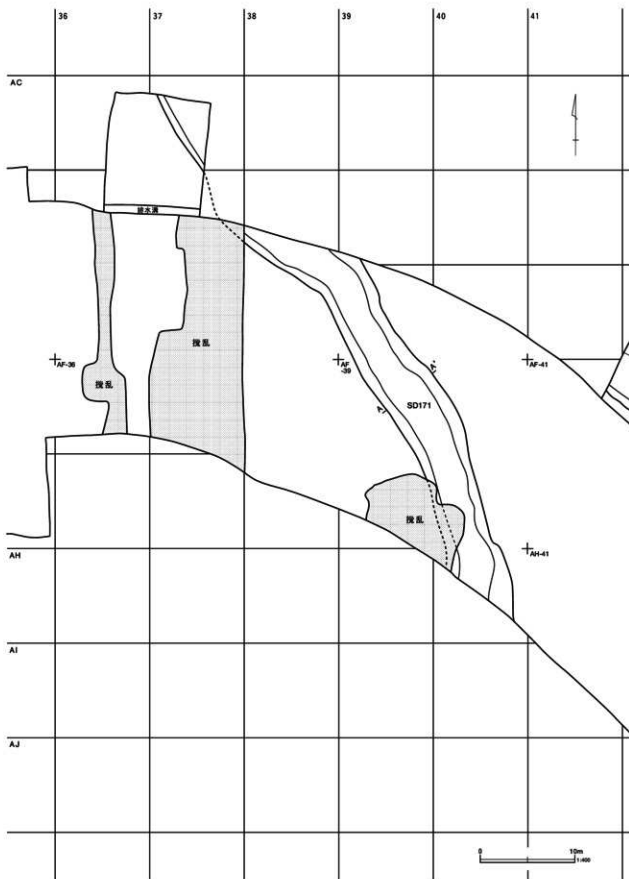
F区西側、AC～AH-37～40グリッドに検出された。本跡は北西側に位置する第19地点を南北に横断する水路に接続する溝と考えられる。また、本跡と第19地点南端を東流する河川跡（SD7）は北側調査区外で交差しているものと考えられる。こ

の交差点については、雨水管理設工事に伴う立会い調査で水路が河川を切っている状況が確認された。したがって、本跡が水路として機能している時点では、河川は何れかの方法で堰き止められていた可能性が高い。

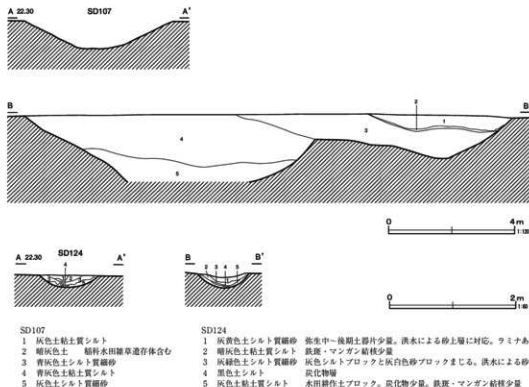
本跡は調査区内を東西方向に走行する後世の溝によって切られていた。やや湾曲する溝で、走行方向は $N-33^{\circ}-W$ であった。溝断面の形状は逆台形を呈していた。規模は幅6.1m、深さ1.2mであった。覆土は灰白色の粘土質シルト層が厚く堆積し、中層に炭化物を含む腐植土の帯状堆積が認められた。遺物は出土しなかった。



第13図 A区満



第14图 F区溝



第15図 第107・124号溝土層断面図



第16図 第171号溝エレベーション図

(3) 河川跡 (第17・18図)

F区の中央北側に照明塔建設部分として張り出した調査区で検出された。本跡は北西側に位置する第19地点南端を東流する河川跡(SD7)の東側下流部分が検出されたものと考えられる。したがって、第19地点において直線的に走行していた河川跡は、調査区外において南側に湾曲して第17地点の検出部分に至ることになる。また、この先は推定ではあ

るが、第18地点で検出された沼沢地に繋がると考えられる。

第171号溝との関係は溝の項で記載したように、第171号溝が本跡を切っている状況が確認されている。但し、本跡からは、包含層遺物として弥生時代中期後半の土器を中心とする遺物が出土すると共に、古墳時代前期の遺物が多量に出土している。ま

た、本跡の堆積土壌から判断して古墳時代前期には、河川としての機能を果していたと考えられる。したがって、第171号溝との関係において説明したように、本跡は弥生時代中期後半の一時期つまり、第171号溝が機能している時期には上流で堰き止められ、洪水等の理由で第171号溝が機能を停止した後、少なくとも古墳時代前期には、本来の河川として復旧されていたものと考えられる。

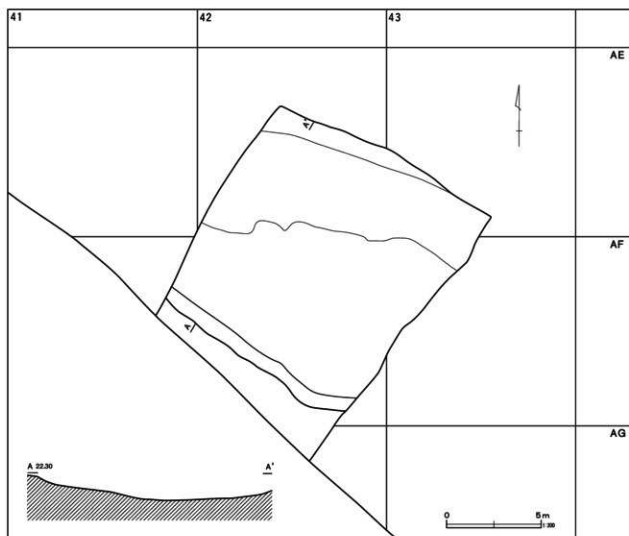
本跡は第17地点北側を湾曲するように流下すると考えられる。溝の走行方向はN-55°-Wであった。溝断面の形状については、川底部分まで掘削深度が到達しなかったため不明であるが河畔部平坦面までは、なだらかな傾斜を呈していたものと考えられる。規模は北岸部分が検出されず不明であるが推定で上幅20m前後であったと考えられる。覆土は、弥生時代中期の遺物層を挟んで上下に粘土質シルトが厚く堆積していた。遺物は包含層から散在して出土した。

出土遺物は、1は直線的に開き口端部が外削ぎ状を呈する、壺口縁部である。口端部に平坦面を持ち、口唇部に原形R L単節縄文を施文している。頸部は無文である。2は直線的に開き口端部が外削ぎ状を呈する、壺口縁部である。口端部に僅かに平坦面を持ち、口唇部以下を、原形無節R縄文で施文している。3は壺頸部である。ヘラ描波状線3条で連続山形文を施文している。4・5・6は壺頸部である。ヘラ描平行線文を施文し、4は幅広で浅く、5・6は多条である。また、6は地文に原形不明の縄文を施文している。7は壺胴部である。ヘラ描平行線文2条で区画し、区画内に波状文を充填している。また、地文に原形R L単節縄文を浅く粗雑に施文している。8は壺頸部である。櫛歯状工具による縦位条痕下に列点文で区画している。9は壺頸部である。無文帯を棒状工具による2条の列点文で区画し、下段に原形L R単節縄文を施文している。10は壺頸部である。ヘラ描平行波状線2条で区画し、区画内を原形L R単節縄文で充填して帯縄文としている。帯縄文以

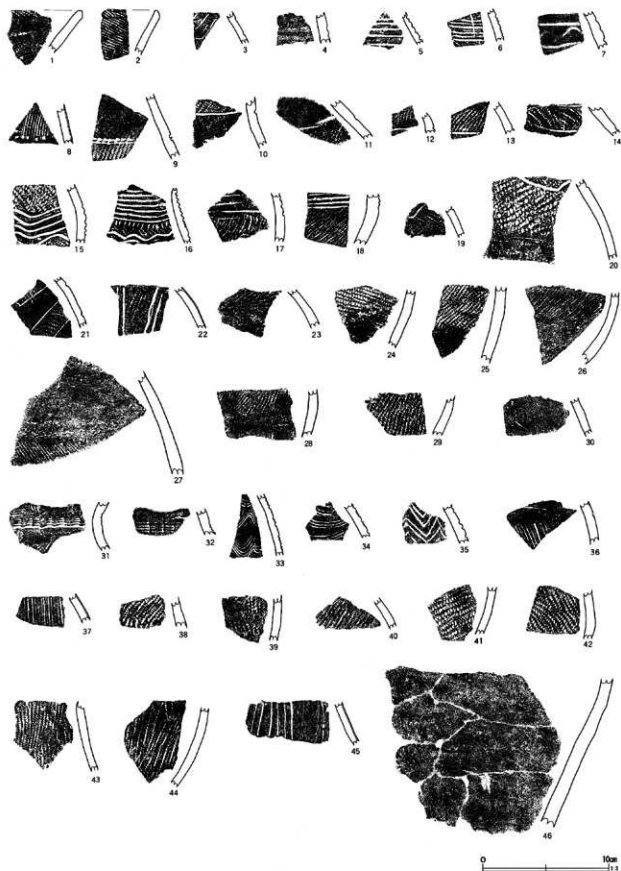
下はハケ調整が認められる。また、内面にもハケ調整が認められる。11から13は壺頸部から胴部破片である。ヘラ描平行波状線間に原形L R単節縄文を充填している。14は、壺胴部上半である。ヘラ描波状線間に原形R L単節縄文を粗雑に充填している。15は壺胴部である。多条のヘラ描波状文の上下に原形複節R L Rまたは、0段多条3段R L | r r r | を充填していると考えられる。16は壺頸部である。地文に原形R L単節縄文を施文し、多条のヘラ描平行線文を施文している。平行線文下には、列点文を施文し、やや間隔を空けてヘラ描波状文を施文している。17・18は壺胴部である。多条のヘラ描平行線文下には、原形L R単節縄文を施文している。19は壺胴部である。ヘラ描の区画文内に、原形R L単節縄文を充填している。20は壺胴部である。ヘラ描による弧線状のモチーフに原形L R縄文を施文している。21は壺胴部である。ヘラ描波状線による三角文を施文し、原形R L単節縄文を充填している。22は壺胴部である。ヘラ描波状線による重四角文を施文し、区画間を原形R L単節縄文で充填している。23は壺胴部である。地文に原形L R単節縄文を粗雑に施文している。24は壺胴部である。地文に原形R L単節縄文を施文し、下段を丁寧に磨いている。25は壺胴部である。地文に原形L R単節縄文を施文している。26は壺胴部である。地文に原形付加条1種L | R R | + Rを施文している。27は壺胴部である。無文帯下にS字状結節文を3条施文し、下段に原形R L単節縄文を施文している。28は壺胴部である。地文に原形L R単節縄文を施文している。29は壺胴部である。地文に原形L R単節縄文を施文している。30は壺胴部上半である。無文帯部分の破片である。31は壺頸部である。頸部区画に4本一単位櫛歯状工具による縦位条痕文を粗雑に施文し、その直下に波状文を施文した痕跡が認められる。やや間隔を空けて原形L R単節縄文を施文している。32は壺頸部である。4本一単位櫛歯状工具による縦位条痕文を施文している。33は壺胴部であ

る。ハケ調整後6本一単位櫛歯状工具による波状文を重層させている。34は甕胴部である。3本一単位櫛歯状工具による弧線文を施文している。35は甕胴部である。ヘラ描沈線による多条の連続山形文を施文している。36は甕胴部である。櫛歯状工具による条痕文を施文している。37は甕胴部である。櫛歯状工具による縦位条痕文を施文している。38は甕胴部である。地文に原体L R 単節縄文を施文している。39は甕胴部である。地文に原体R L 単節縄文を粗雑に施文している。40は甕胴部である。

地文に原体L R 単節縄文を施文している。41は甕胴部である。地文に原体L R 単節縄文を施文している。42は甕胴部である。地文に原体R L 単節縄文を施文している。43は甕または、壺胴部上半である。地文に原体L R 単節縄文を施文している。44は甕胴部である。地文に原体付加条1種L |RR| + Rを施文している。45は甕胴部である。束線具による縦位懸垂文または、コの字重ね文を施文している。46は、甕胴下半部である。無文で横位のナデ調整が行われている。



第17図 F区河川跡



第18図 河川跡出土遺物

(4) 水田跡

A区及びC区において検出された。検出された水田跡の立地は、第19地点北側を頂点として東西方向に帯状に延びる自然堤防から、南東方向に向かって緩やかな傾斜を示して低地部に移行する部分にあたる。また、第17地点南側E区付近では標高に若干の高まりが認められ、古墳時代前期には一時的に居住域となっていた。第17地点の東側に位置する第18地点では、古代の水田面の下層は沼沢地となっていたことが判明している。これらの状況を総合的に解釈すれば、第19地点南端部河川跡以南から北西-南東方向に向かって緩やかに傾斜する幅の広い谷地形に沿って水田が形成されている状況が窺える。また、この谷地形の北縁に第19地点から続く水路及び接続する第171号溝、南縁に第19地点南端から分岐する第91号溝及び、接続する第107号溝が取り付いていると考えられる。この水田跡及び水路の下流は第18地点の沼沢地へ繋がっていると考えられる。但し、A区で検出された小区画水田跡とC区で検出された小区画水田跡では、区画の方法に相違が認められる。A区は、地形傾斜方向に沿って東西方向に直線的に畦を構築し、それを南北方向に区切っている状況が認められる。一方C区は、第91号溝の東側に方形の大区画畦畔を構築してこの区画内をさらに小区画に区分している状況が認められる。この区画方法の相違が地形状況の違いによるものなのか、時期的相違によるものか、または、ほかの、要因が含まれるのかに関しては結論を得ていない。

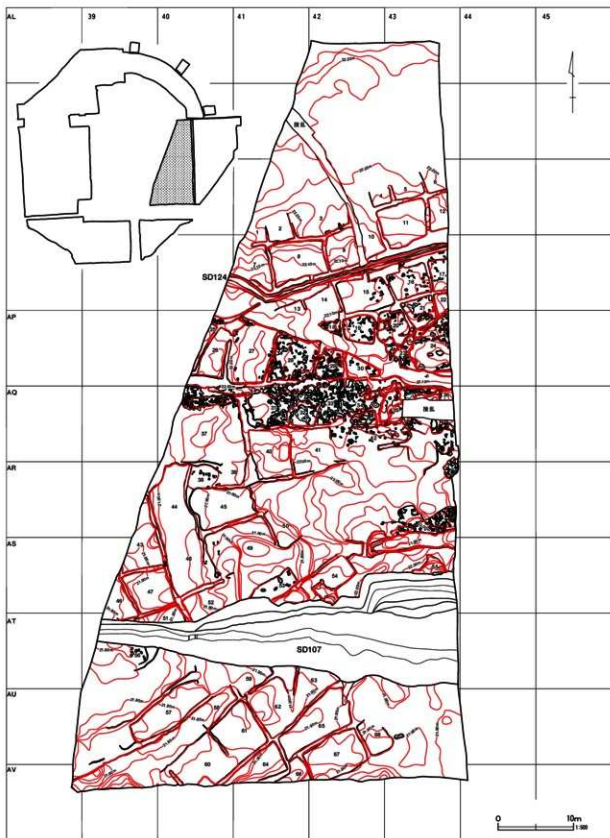
A区水田跡（第19～39区）

第17地点東側で検出された。水田面の検出標高は21.8mから22.2mの範囲であった。水田面検出の層位的状況は基本土層中の第15層及び第16層にあたる。基本土層第11層に古墳時代初頭乃至は中期に降灰したとされている、浅間C火山灰層が堆積していることから時期比定の鍵層になる。この層中及び下層にあたる第11・12層は、弥生時代後期か

ら終末期の遺物包含層及び水田面となっている。さらに下層の第13層はシルト質細砂層でいわゆる洪水層である。よって検出された弥生中期後半の水田跡はこの洪水層によって覆われた状況であった。

検出された水田跡は、北東方向から南東方向に向かって緩やかに傾斜する地形に沿って畦畔が構築されていた。検出された区画（坪）は合計で68区画であった。中央部付近は、洪水による攪拌によって生じたと考えられる田面の著しい凹凸と共に、畦畔を消失している個所が多く認められる。畦畔による区画状況は、北側では、第124号溝に平行する形で1から17の方形の小区画が並列して検出された。水口は8・14・16が第124号溝に面して取り付け、11・13・15は東側に取り付いている。またこれに平行する区画が18から24に認められるが、これと併せて25から30の区画は北西南東方向に直線的に延びる大畦によって斜めに分断された状況を呈していた。この大畦を境として以南の水田区画はAQ-43グリッドに位置する36区画に向かって放射状に畦畔を構築している状況が看取される。これらの東西方向の直線的な畦畔を南北に弧を描くような形で区切って小区画としている。水口の明確なものは26から30にかけて、東西方向に畦畔中央よりに取り付いている。また、40・44についても西側中央部分に取り付いている。このような、蜘蛛の巣状の区画配置のため外縁部はやや大きな区画となり45では、38.5m²、61では32.4m²を占め、逆に中心部に近い35は、10.6m²、42は、10.1m²と小型になっている。

各畦畔の状況は幅20cm前後で、高さ5cm前後であるが、洪水等の影響により削平・消失した部分も多く認められる。また大畦は、幅2.2m、高さ0.15mで幅広の平坦面を形成している。この畦畔上のAP-43グリッドでは、弥生時代中期後半の薨4分の1個体分の破片が張り付いた状態で出土した。また、この遺物の他に本水田跡の時期を比定できうる遺物は出土していない。



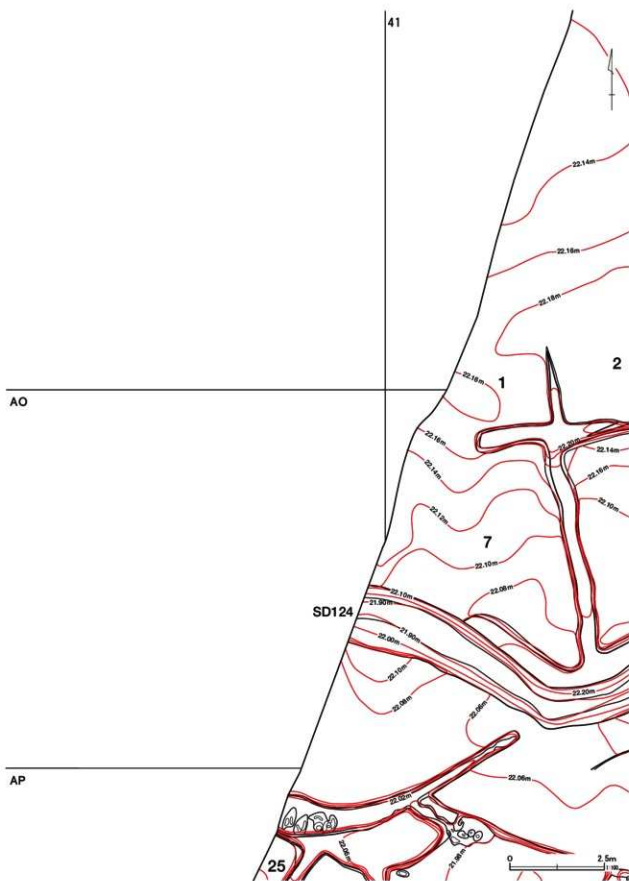
第19图 A区水田跡等高线图



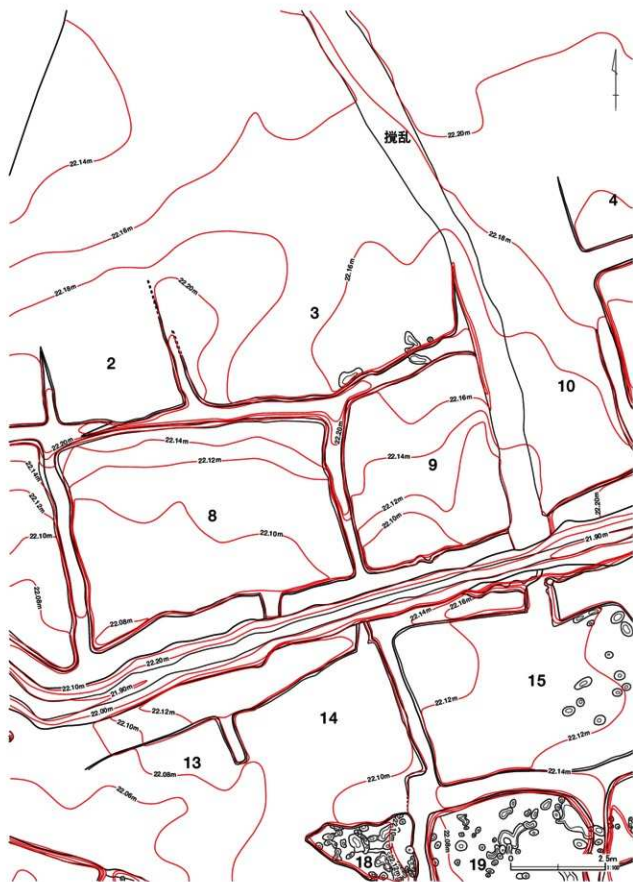
第20図 A区水田跡遺構全体図



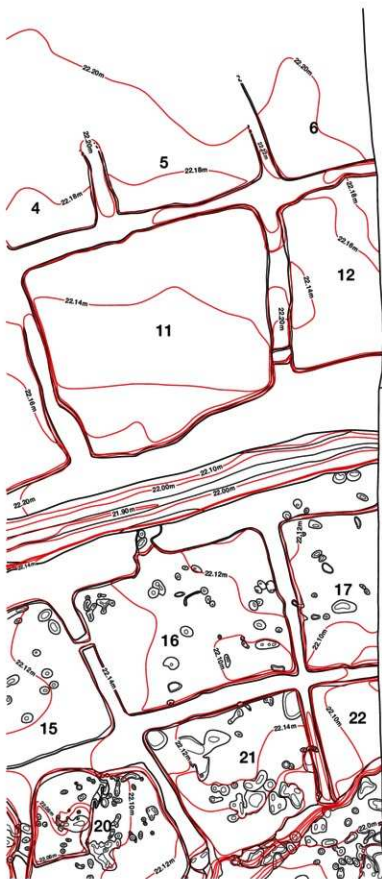
第21图 A区水田迹区制图



第22図 A区水田跡 (1)



第23图 A区水田迹(2)



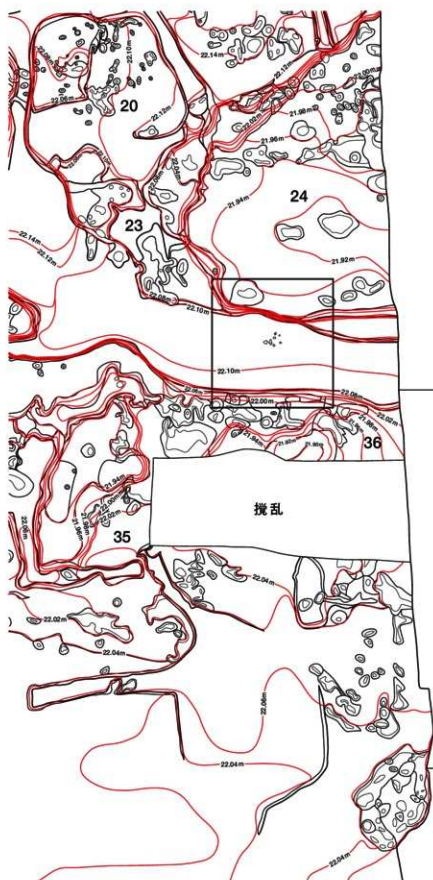
第24図 A区水田跡 (3)



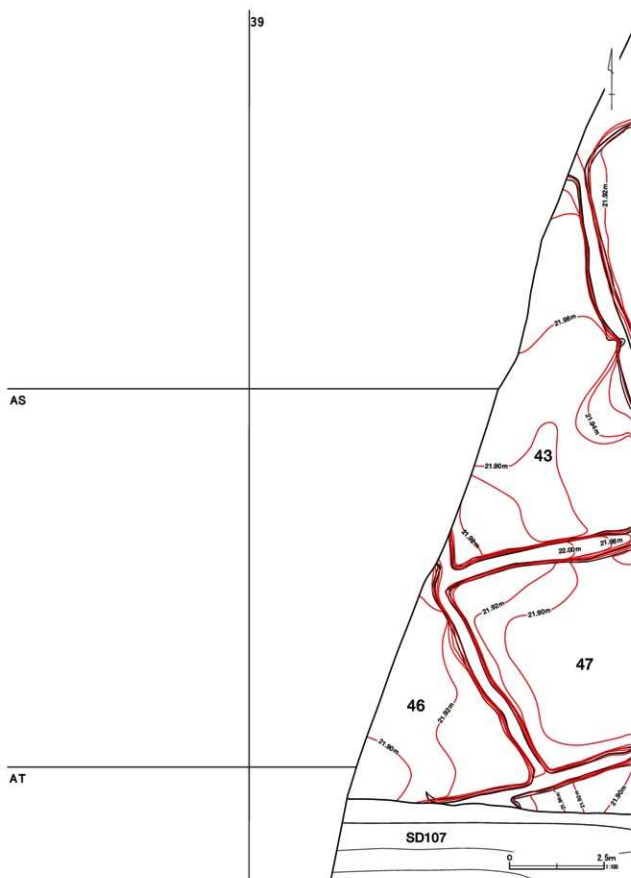
第25图 A区水田跡(4)



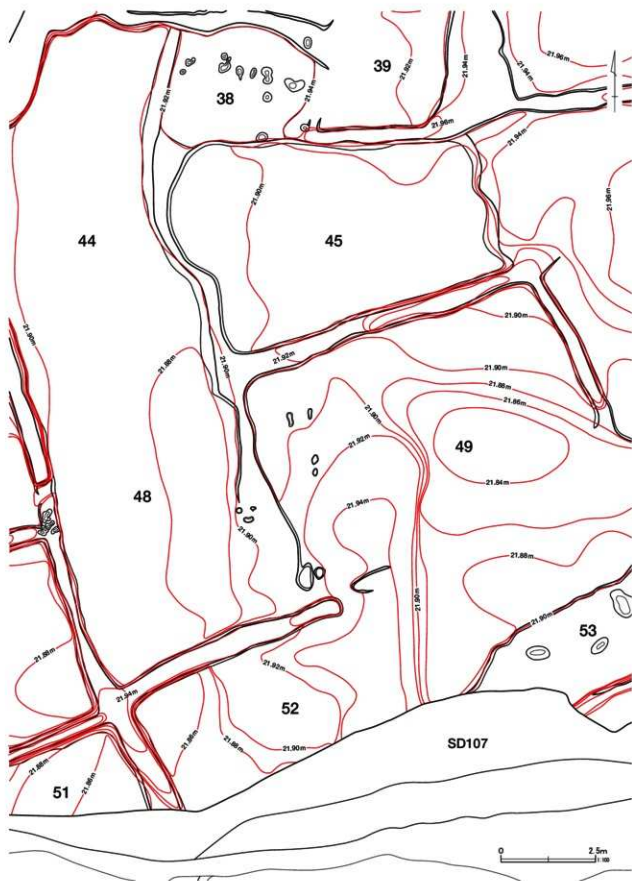
第26図 A区水田跡 (5)



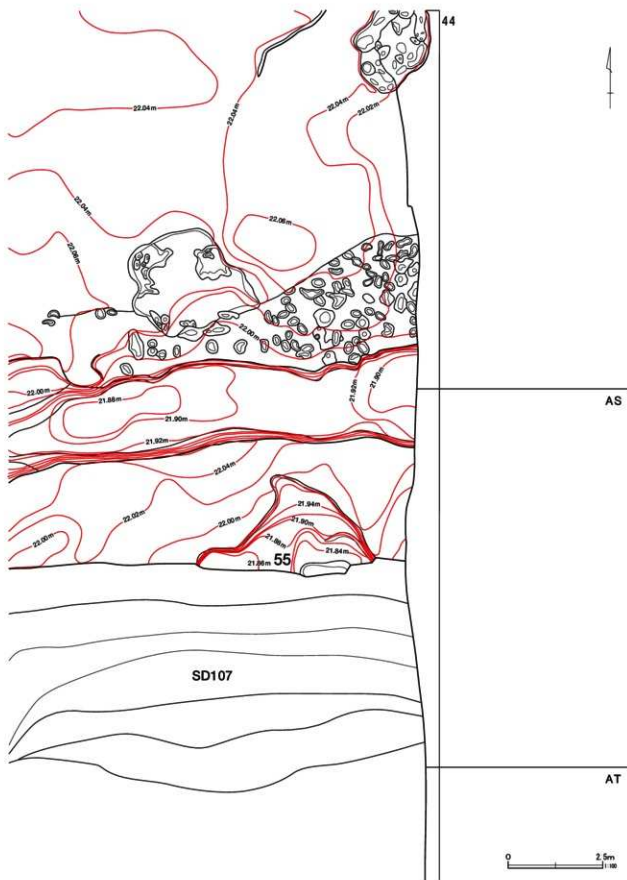
第27図 A区水田跡(6)



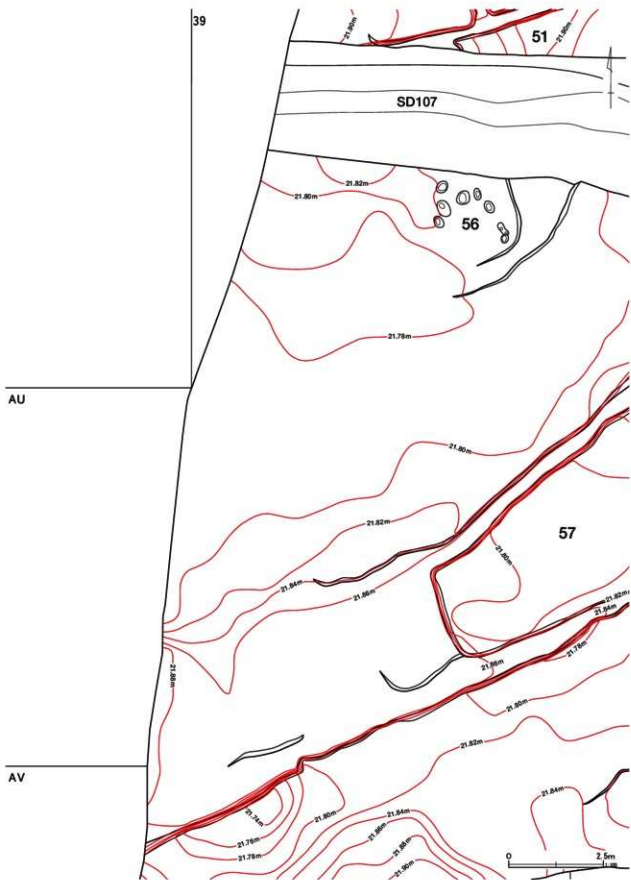
第28図 A区水田跡 (7)



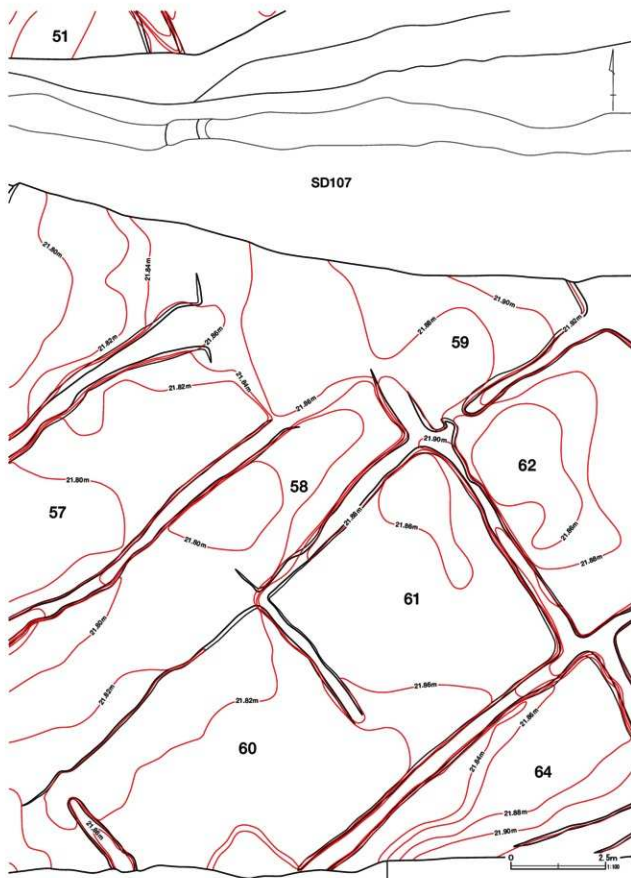
第29図 A区水田跡 (B)



第31图 A区水田跡(10)



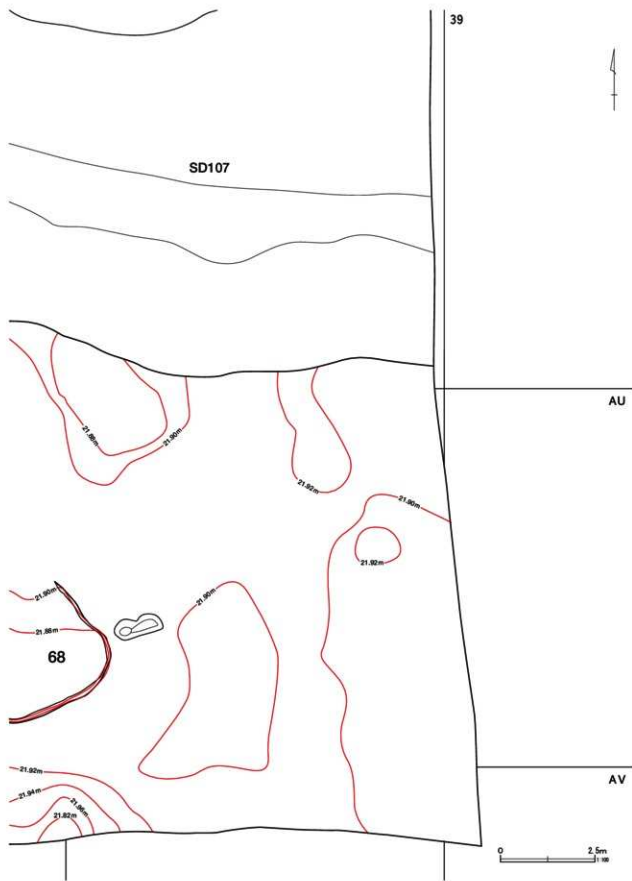
第32図 A区水田跡 (11)



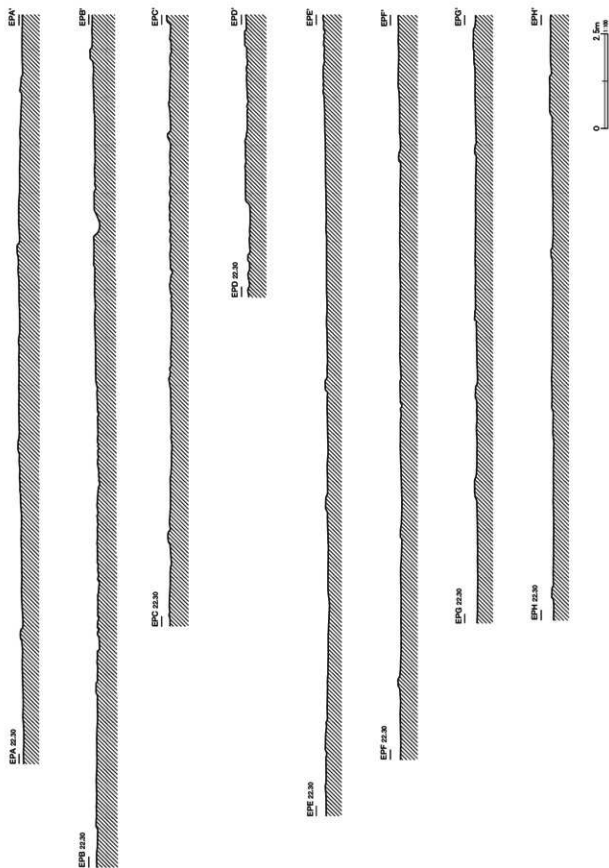
第33图 A区水田跡(12)



第34图 A区水田跡 (13)



第35图 A区水田跡(14)



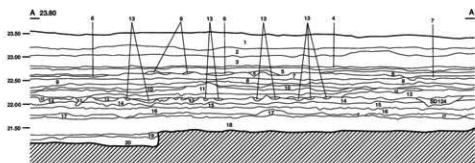
第36図 A区水田跡エlevation図

第2表 A区水田跡計測表(1)

水田番号	形 状	主軸方位	長 辺	短 辺	面 積	標 高	備 考
1	—	N-80°-E	—	—	—	22.2	
2	長方形	N-80°-E	(4.5)	(3.3)	(14.9)	22.2	
3	長方形	N-72°-E	(7.1)	(4.3)	(30.5)	22.2	
4	長方形	N-76°-E	(4.2)	(2.4)	(10.1)	22.2	
5	長方形	N-76°-E	(4.3)	(3.8)	(16.3)	22.2	
6	—	N-76°-E	—	—	—	22.2	
7	—	N-75°-E	—	—	—	22.1	
8	長方形	N-75°-E	7.0	4.0	32.7	22.1	
9	平行四辺形	N-68°-E	(4.7)	(3.4)	(16.5)	22.1	
10	平行四辺形	N-68°-E	(4.5)	(2.8)	(11.0)	22.1	
11	平行四辺形	N-75°-E	6.2	4.7	29.4	22.2	
12	—	N-75°-E	—	—	—	22.2	
13	三角形	N-67°-E	(4.5)	(3.0)	(6.0)	22.1	
14	台 形	N-67°-E	(4.1)	(3.0)	(13.6)	22.1	
15	平行四辺形	N-74°-E	6.8	3.8	26.0	22.1	
16	長方形	N-74°-E	5.0	3.4	17.0	22.1	
17	—	N-82°-E	—	—	—	22.1	
18	三角形	N-84°-E	3.3	2.3	3.2	22.1	
19	台 形	N-88°-E	3.4	2.4	11.9	22.1	
20	台 形	N-73°-E	(3.8)	(3.0)	(13.4)	22.1	
21	台 形	N-73°-E	(4.2)	(3.0)	(12.3)	22.1	
22	台 形	N-73°-E	(3.0)	(1.6)	(3.6)	22.1	
23	三角形	N-101°-E	(2.8)	(2.8)	(4.5)	22.0	
24	—	N-133°-E	—	—	—	21.9	
25	—	N-99°-E	—	—	—	22.0	
26	台 形	N-99°-E	6.8	1.4	12.9	22.0	
27	台 形	N-99°-E	8.4	4.0	38.5	22.0	
28	台 形	N-105°-E	6.6	5.8	31.2	22.0	
29	台 形	N-97°-E	3.9	2.5	11.7	22.0	
30	三角形	N-99°-E	4.9	2.9	8.8	22.0	
31	台 形	N-103°-E	(7.6)	(5.0)	(35.0)	22.0	
32	平行四辺形	N-103°-E	(5.5)	(2.4)	(15.1)	22.0	
33	平行四辺形	N-103°-E	(4.9)	(1.4)	(10.3)	22.0	
34	平行四辺形	N-104°-E	(5.4)	(5.8)	(33.4)	22.0	
35	平行四辺形	N-116°-E	(4.2)	(2.8)	(10.6)	22.0	
36	—	N-116°-E	—	—	—	22.0	
37	台 形	N-84°-E	(10.1)	(6.0)	(72.5)	21.9	
38	平行四辺形	N-93°-E	(3.7)	(2.0)	(8.5)	21.9	
39	平行四辺形	N-93°-E	(2.8)	(2.5)	(7.8)	21.9	
40	平行四辺形	N-84°-E	6.6	4.5	31.0	22.0	
41	台 形	N-84°-E	(5.9)	(4.5)	(25.4)	22.0	
42	台 形	N-84°-E	(4.3)	(2.6)	(10.1)	22.1	
43	長方形	N-76°-E	(9.1)	(5.2)	(47.3)	21.9	
44	不整形	N-79°-E	(12.2)	(4.7)	(54.4)	21.9	
45	台 形	N-71°-E	7.0	3.6	38.5	21.9	
46	三角形	N-70°-E	(5.4)	(4.6)	(14.0)	21.9	
47	台 形	N-70°-E	5.7	4.6	28.9	21.9	
48	台 形	N-70°-E	(4.8)	(3.1)	(19.3)	21.9	
49	長方形	N-63°-E	(8.1)	(4.3)	(46.6)	21.8	
50	方 形	N-63°-E	(5.4)	(5.4)	(29.2)	21.9	
51	三角形	N-62°-E	6.8	2.3	7.8	21.9	
52	長方形	N-62°-E	(4.9)	(3.0)	(14.7)	21.9	
53	不整形	N-57°-E	6.7	2.1	12.0	21.8	

第3表 A区水田跡計測表(2)

水田番号	形状	主軸方位	長 辺	短 辺	面 積	標 高	備 考
54	長方形	N-57°-E	(7.0)	(3.0)	(21.0)	22.0	
55	方 形	N-46°-E	(3.8)	(3.8)	(14.4)	21.9	
56	—	N-63°-E	—	—	—	21.8	
57	長方形	N-62°-E	(11.1)	(2.3)	(35.9)	21.8	
58	台 形	N-62°-E	(5.8)	(1.7)	(12.8)	21.8	
59	長方形	N-62°-E	(5.1)	(2.5)	(14.8)	21.9	
60	長方形	N-62°-E	(6.7)	(6.1)	(40.9)	21.8	
61	平行四辺形	N-62°-E	(6.2)	(5.1)	(32.4)	21.9	
62	平行四辺形	N-62°-E	(6.2)	(5.1)	(31.6)	21.9	
63	長方形	N-62°-E	(5.9)	(5.2)	(30.7)	21.9	
64	—	N-60°-E	—	—	—	21.8	
65	台 形	N-56°-E	(10.6)	(3.0)	(39.7)	21.9	
66	—	N-58°-E	—	—	—	21.9	
67	長方形	N-58°-E	(7.5)	(4.4)	(38.0)	21.9	
68	台 形	N-58°-E	(4.2)	(3.1)	(14.0)	21.9	

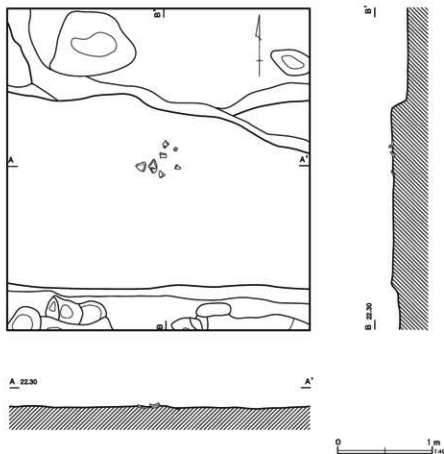


A区水田跡基本土層

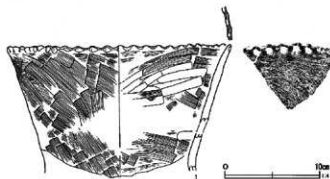
- 1 黄褐色土シルト質礫砂 現代耕作土。浅間A火山灰多量
- 2 暗灰褐色土シルト質礫砂 底鉄層有り。中近世耕作土
- 3 黄褐色土シルト質礫砂 鉄分豊富。中近世耕作土
- 4 サリブ褐色土シルト質礫砂 中世底鉄層(床土)
- 5 黄褐色土シルト質礫砂 浅間B火山灰多量
- 6 灰サリブ色土火山灰色 浅間B火山灰純層(二次堆積)
- 7 黄褐色土粘土質シルト 平安時代耕作土炭化物・鉄分豊富
- 8 暗灰色土粘土質シルト 古代床土。底鉄層。マンガング結核多量。標名二ツ岳火山灰多量
- 9 暗灰色土シルト質火山灰 古墳時代耕作土。炭化物少量。鉄分豊富。標名二ツ岳火山灰多量
- 10 暗灰色土シルト質礫砂 洪水層。弥生時代前期～古墳時代前期包含層
- 11 暗灰色土粘土質シルト 弥生時代後期水田耕作土。鉄分豊富。マンガング結核多量。浅間C火山灰多量
- 12 灰色土粘土質シルト 弥生時代後期水田床土。底鉄層マンガング結核多量
- 13 黄褐色土シルト質礫砂 洪水層。弥生時代中期～後期包含層
- 14 灰色土礫砂 弥生時代中期包含層。鉄分豊富。マンガング結核少量
- 15 灰色土シルト質粘土 弥生時代中期水田耕作土。遺物少量。炭化物多量。工作痕有り
- 16 灰色土シルト質粘土 弥生時代中期水田床土。炭酸鉄結核少量
- 17 灰色土粘土質シルト 均質。(洪水層)
- 18 黒色土粘土 均質。炭化物少量。微塵光土塊
- 19 暗緑灰色土粘土 均質。炭酸鉄結核少量
- 20 灰色土粘土 均質。鉄分豊富

0 1:80 2m

第37図 A区水田跡基本土層図



第38図 A区水田跡出土遺物微細図



第39図 A区水田跡出土遺物

出土遺物は、1は甕である。下半部を欠損している。口縁部の形状は、直線的に緩やかに外反して立ち上がり、胴部に向かってやや窄まる。胴部で弱い張り出しを持ち底部に向かって強く窄まる器形を呈するものと考えられる。口端部は、指頭による交互押捺で爪形が残っている。外面は、横位に近いハケ調整で胴部にかけて徐々に縦位方向のハケ調整を施

している。使用工具は、目が深く細かなものを使用している。内面は横位のハケ調整が粗雑に施されている。焼成は良好でやや赤味がかった褐色をていしている。また、胎土には、チャート質の細砂礫が多く含まれ、北島遺跡特有の胎土とは異なる。本土器の胎土に比較的近いものは、荒川右岸の松山丘陵周辺部に求められる。

C区水田跡（第40～49図）

第17地点北西側で検出された。調査区範囲内でも第91号溝以東に検出された。遺構残存状況が極めて悪く東側半分は上層堆積土の圧縮及び遺構の攪乱等によって検出不能であった。また、第91号溝西側については該期の土壌が検出されていることから水田域から外れている可能性も考えられる。

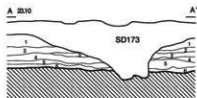
水田面の検出標高は22.4mから22.0mの範囲であった。水田面検出の層位的状況は基本土層中の第6層にあたる。基本土層第1層に古墳時代初頭乃至は中期以降に降灰したとされている、浅間C火山灰層が堆積していることから時期比定の鍵層になる。この下層にあたる第4層は、弥生時代後期から終末期の遺物包含層及び水田面となっている。さらに下層の第5層はシルト質細砂層でいわゆる洪水層である。したがって、出された弥生中期後半の水田跡はこの洪水層によって覆われた状況であった。

検出された水田跡は、北から南に向かって僅かに傾斜する地形に沿って畦畔が構築されていた。検出された区画（坪）は合計で39区画であった。畦畔

の遺存状況は極めて悪くほとんどが畦畔構築土下に行けるプリント部分が検出された。また、上層堆積土の土圧及び遺構の攪乱によって、田面に不均一なアンジュレーションが生じている。

畦畔による区画状況は、AD-30グリッド中央から南側に直線的に延びる畦畔とAD-32グリッド中央よりから南側に直線的に延びる畦畔で東西方向を大きく区画している。また、1・2・4・6区画南側を東西方向に直線的に延びる畦畔と、23・24・25区画南側を東西方向に直線的に延びる畦畔は南北方向の大区画を構成している。この大区画内部に1から6の小区画でひとまとまり、14から25の小区画でひとまとまり、26から32の小区画でひとまとまりを構成している。水口は7区画で東側中央に検出された他は検出されなかった。大区画の面積は300m²から340m²前後と推定される。また、各小区画では、大型のもので9区画の36.8m²、最も小型のもので24区画の1.6m²がある。

各畦畔の状況は幅20cm前後で、高さは不明であった。出土遺物はなかった。



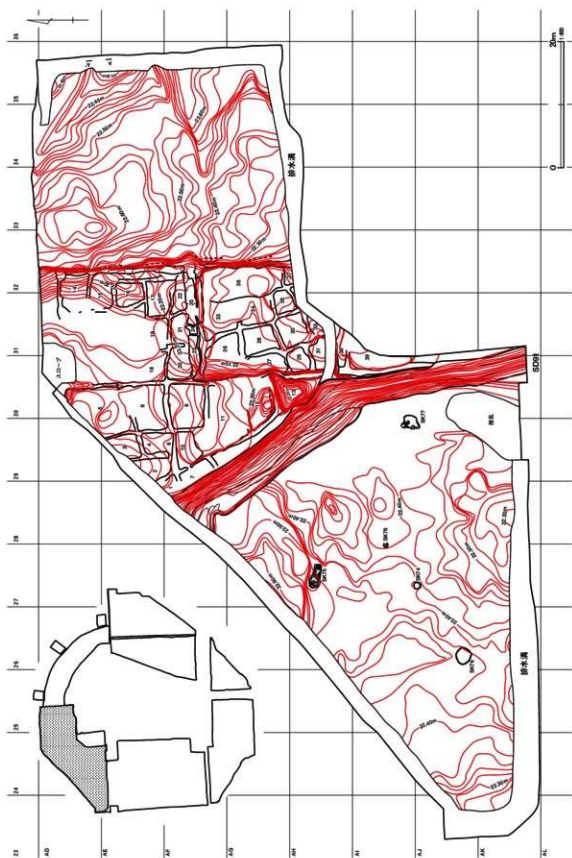
C区水田跡基本土層

- 1 暗灰色シルト
- 2 黄灰色シルト
- 3 黄褐色シルト
- 4 暗灰色シルト
- 5 青灰色シルト質細砂
- 6 暗灰色粘土質シルト
- 7 灰色粘土質シルト

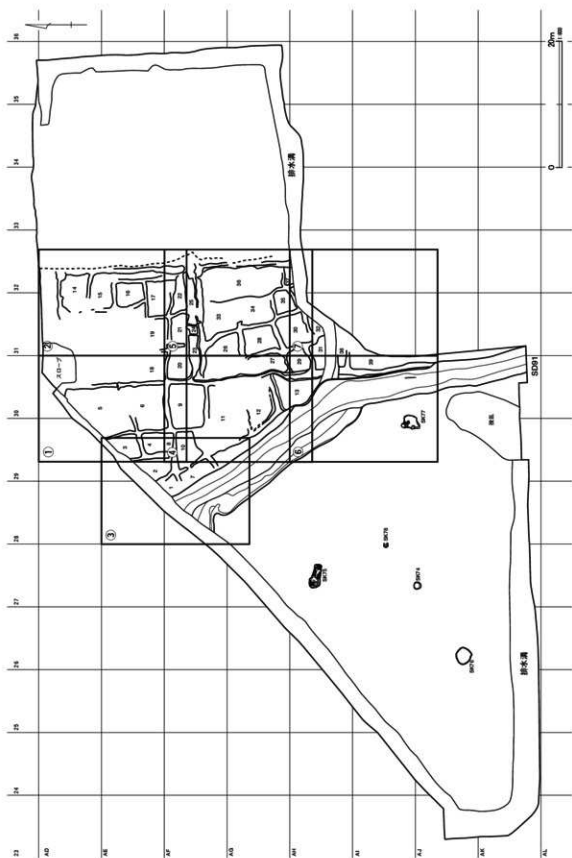
As-C区に属する。鉄結核少量。マンガン結核少量
 質細砂 弥生後期～As-C以前期の洪水砂
 質細砂 2層の黄褐色したものか？
 弥生後期の粘土？ 炭化物多量
 弥生中期の洪水砂？
 弥生中期の粘土？ 炭化物多量
 鉄屑多量



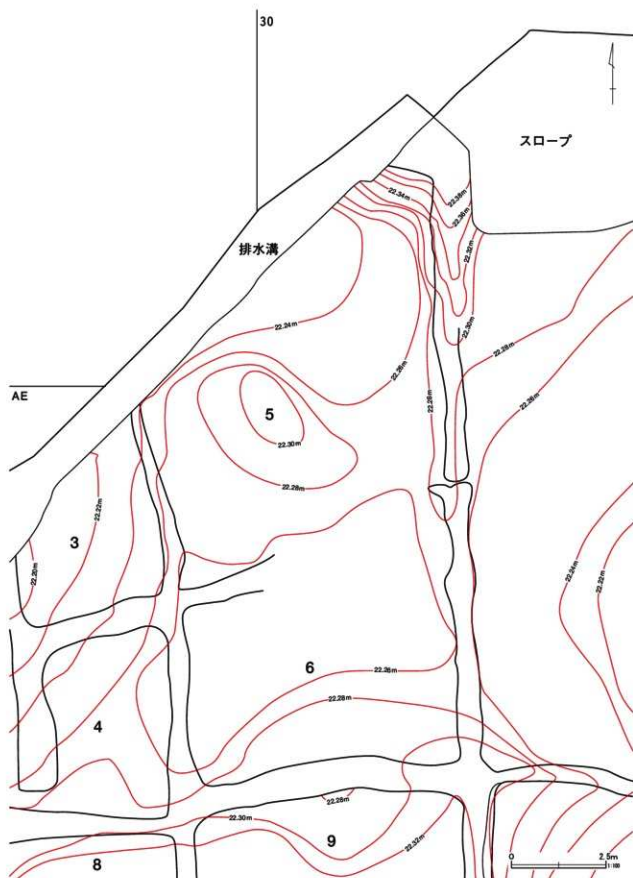
第40図 C区水田跡基本土層図



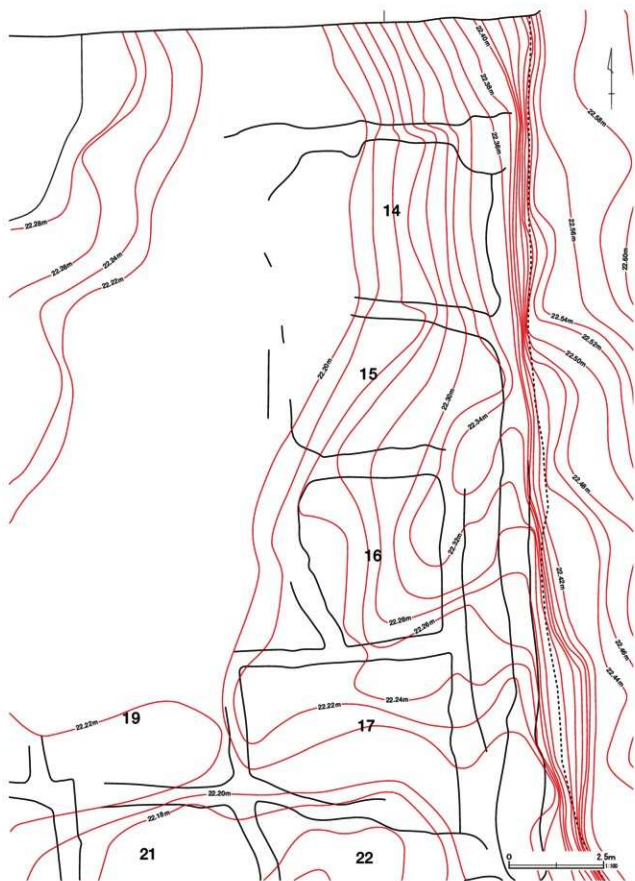
第41图 C区水田跡等高线图

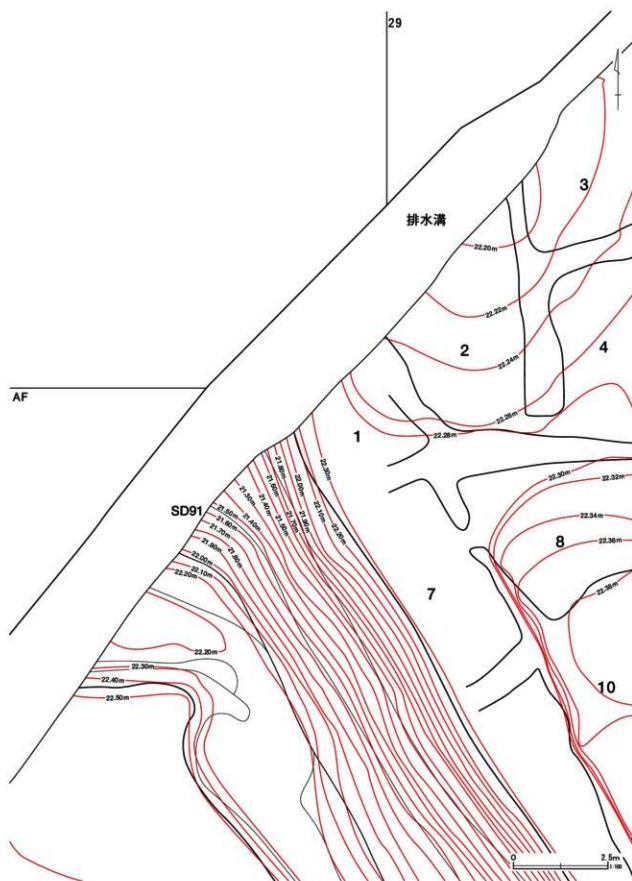


第42图 C区水田跡区割图

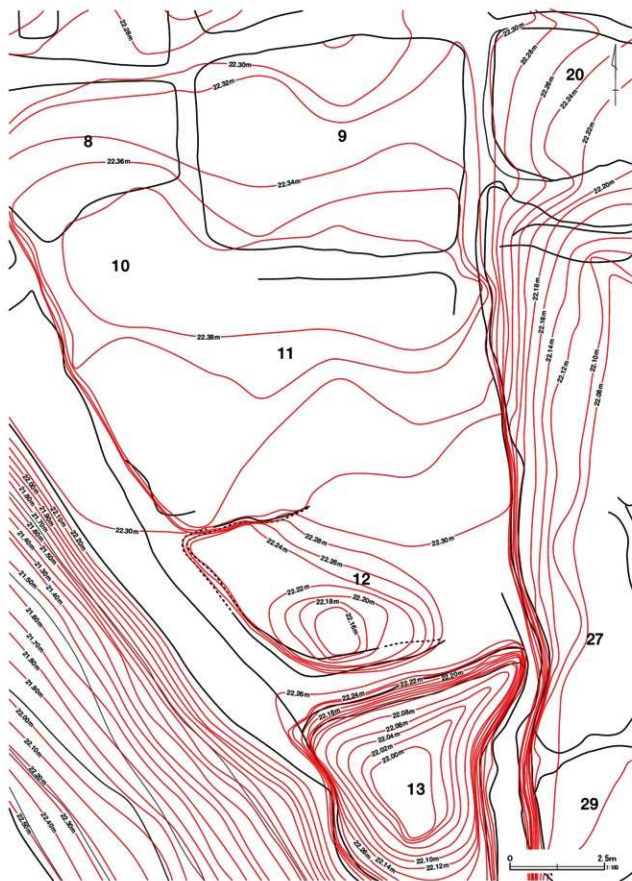


第43図 C区水田跡 (1)

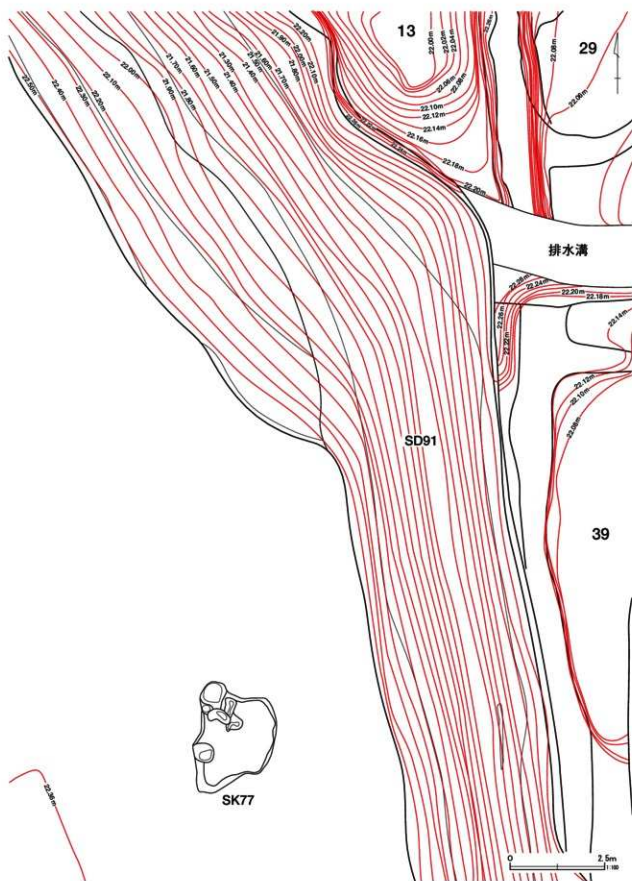




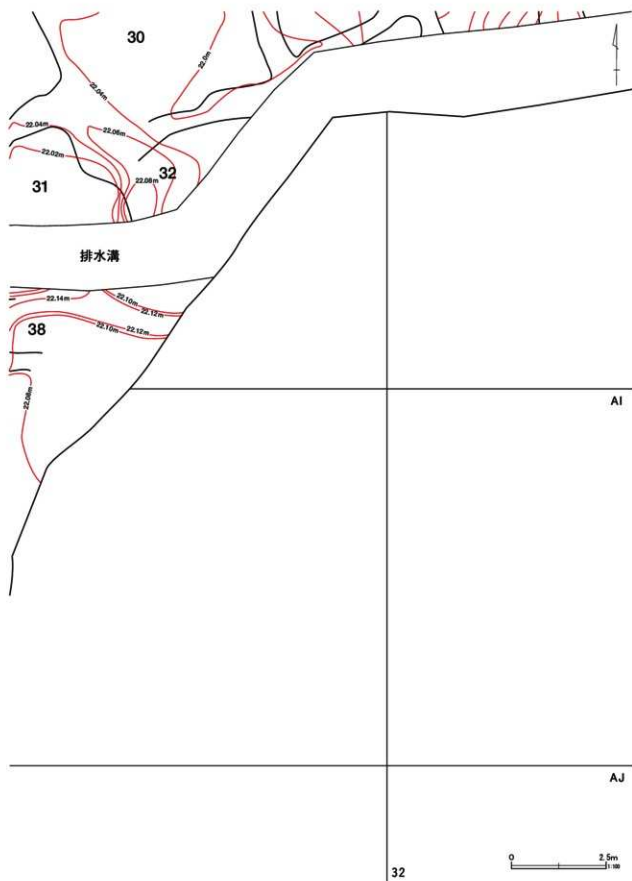
第45图 C区水田跡 (3)



第46図 C区水田跡 (4)



第48图 C区水田跡 (6)



第49図 C区水田跡 (7)

第4表 C区水田跡計測表

水田番号	形 状	主軸方位	長 辺	短 辺	面 積	標 高	備 考
1	—	N-29°-W	—	—	—	22.3	
2	—	N-13°-W	—	—	—	22.2	
3	—	N-14°-W	—	—	—	22.2	
4	台 形	N-5°-W	4.9	3.0	15.8	22.3	
5	—	N-12°-W	—	—	—	22.3	
6	台 形	N-6°-W	(7.2)	(4.5)	(39.4)	22.3	
7	—	N-28°-W	—	—	—	22.4	
8	不整形	N-11°-W	5.7	2.4	15.8	22.3	
9	長方形	N-3°-W	7.0	5.1	36.8	22.3	
10	平行四辺形	N-11°-W	(3.7)	(2.5)	(9.5)	22.4	
11	台 形	N-8°-W	(9.8)	(4.9)	(47.0)	22.3	
12	台 形	N-10°-W	(7.8)	(4.2)	(26.6)	22.2	
13	不整形	N-10°-W	7.8	4.2	23.2	22.0	
14	長方形	N-3°-W	(5.7)	(3.6)	(22.7)	22.2	
15	不整形	N-4°-W	(5.6)	(3.3)	(19.8)	22.2	
16	台 形	N-4°-W	(4.3)	(2.4)	(15.1)	22.3	
17	台 形	N-4°-W	(5.4)	(2.7)	(19.4)	22.3	
18	長方形	N-1°-W	(4.5)	(2.6)	(13.3)	22.3	
19	長方形	N-2°-W	(4.7)	(3.0)	(14.1)	22.2	
20	台 形	N-3°-W	(4.9)	(2.3)	(15.5)	22.3	
21	台 形	N-2°-W	(4.0)	(2.2)	(9.2)	22.2	
22	台 形	N-0°-W	5.7	1.0	9.1	22.2	
23	不整形	N-3°-W	6.5	0.9	6.9	22.2	
24	台 形	N-2°-W	1.5	1.2	1.6	22.2	
25	不整形	N-0°-W	(7.6)	(1.4)	(8.4)	22.1	
26	台 形	N-11°-W	(6.5)	(5.6)	(31.2)	22.1	
27	不整形	N-10°-W	(7.0)	(2.9)	(13.7)	22.1	
28	台 形	N-11°-W	5.4	4.2	20.2	22.1	
29	不整形	N-10°-W	3.0	2.2	10.4	22.1	
30	平行四辺形	N-11°-W	(4.6)	(4.3)	(18.9)	22.0	
31	不整形	N-10°-W	5.0	1.4	7.8	22.0	
32	—	N-11°-W	—	—	—	22.0	
33	台 形	N-11°-W	(6.0)	(5.2)	(25.8)	22.0	
34	長方形	N-11°-W	(5.2)	(3.4)	(19.6)	22.0	
35	台 形	N-11°-W	3.2	2.1	9.9	22.0	
36	台 形	N-6°-W	12.5	2.8	56.1	22.0	
37	—	N-6°-W	—	—	—	22.1	
38	—	N-1°-W	—	—	—	22.1	
39	—	N-1°-W	—	—	—	22.1	

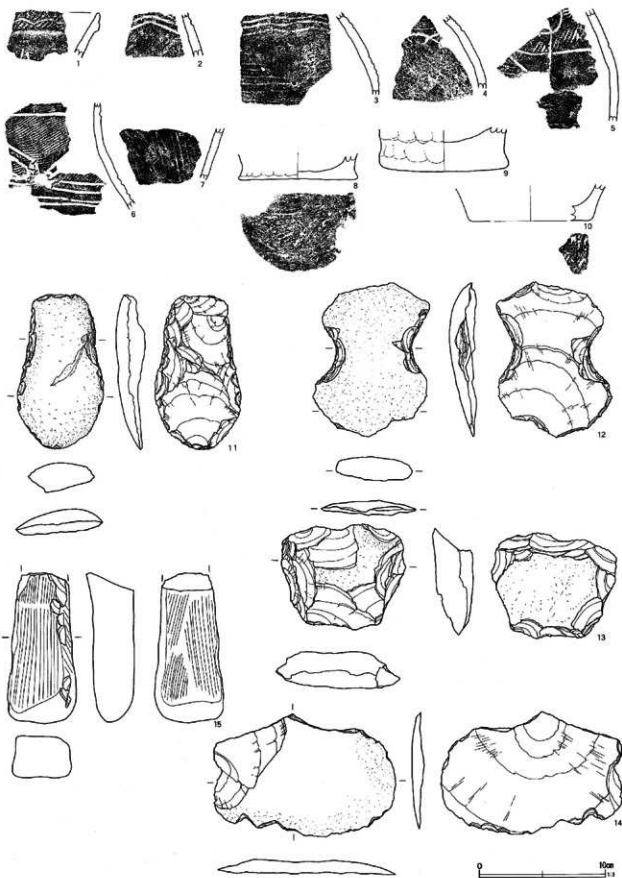
(5) 遺構外（グリッド）出土遺物（第50図）

掲載した遺物は、時期の異なる遺構覆土中乃至は遺構に伴わず単独で出土したものである。このうち、1は、C区に位置する古墳時代前期の溝から出土した。また2、3はC区弥生土層分布域に近い古代の土壌覆土中から出土した。10の土器底部は水田跡から出土した。17の打製石斧はC区で検出された古代の溝から出土している。この他の遺物は遺構外から単独で出土した。

1は壺口縁部である。直接的に外反して立ち上がる複合口縁である。口縁部に原体L R単節縄文を施文し、ヘラ描沈線による波状文を施文している。2は壺胴上半部である。ヘラ描沈線による連続山形文を施文している。3は壺胴部である。ヘラ描沈線により多条の波状文と平行線文を施文している。4は壺胴部である。櫛歯状工具による直線文下、ヘラ描沈線による弧線文を重ねて施文している。5は壺胴部である。ヘラ描沈線による平行線文と上下交互の結紐文を施文していると考えられる。区画内を原体L R単節縄文で充填している。焼成良好で褐色を呈し、胎土に片岩と白色細砂礫を多量に含み北島遺跡特有の胎土とは異なる。6は壺胴上半部である。無文帯を挟むヘラ描平行線文下に地文原体0段多条L |rrr|を施文している。この地文下に三角連繫文を施文し、下段に平行線文を施文している。胎土に多量の片岩を含み、古相を示す土器である。7は壺胴部である。斜位の条痕文を施文している。8・9・10は底部である。

11は短冊形の打製石斧である。扁平の礫の表面

を打割し、主に裏面から剥離を加えて形状を整えている。鈕帯部は表裏両面から細かい剥離を加えて浅い挟り込みを入れている。刃部は打割面を利用し曲刃としている。また、使用による剥離が認められる。長さ12.1cm、幅6.8cm、厚さ2.3cm、重さ208.1gで、石材は黒色頁岩である。12は分銅形の打製石斧である。扁平の礫の表面を打割して素材薄片を取り出し、縁辺部に剥離を加えて形状を整えている。鈕帯部は両側縁から細かい剥離を加えて大きく挟り込みを入れている。鈕帯部は摩滅している。刃部は打割面を利用し、曲刃としている。また、使用により剥離摩滅している。長さ11.8cm、幅9.0cm、厚さ1.9cm、重さ221.1gで、石材はホルンフェルスである。13は、台形状を呈する打製石斧である。扁平の礫を用い縁辺部に剥離を加えて形状を整えている。鈕帯部にはやや細かな剥離が加えられている。刃部は裏面から剥離が加えられ直線刃である。長さ8.4cm、幅9.8cm、厚さ2.9cm、重さ307.7gで、石材はホルンフェルスである。14は大型の剥片石器である。扁平の礫の表面を打割して素材剥片を取り出している。上端部は欠損している可能性がある。側縁部には浅い挟り込みが入る。刃部はゆるい曲線刃であるが、使用により剥離摩滅している。長さ9.2cm、幅14.0cm、厚さ0.9cm、重さ191.2gで、石材は砂岩である。15は砥石である。柱状の礫の表裏面に研磨痕が認められる。また、側縁部の一部に敲打痕が認められる。長さ11.8cm、幅5.3cm、厚さ3.2cm、重さ378.2gで、石材は砂岩である。



第50図 遺構外（グリッド）出土遺物

V 第20地点の調査

1. 第20地点の概要

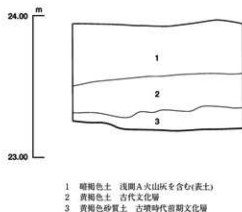
第20地点の調査は、今回の発掘調査の中で最も北側に位置している。公園用地外周道路の建設工事の為東西方向に長く調査区が設定されている。

遺跡の立地は、南側に位置する第19地点とは、河川跡によって区切られ、対岸の細長い自然堤防上にあたる。但し、調査区西側は、かつての蛇行する河川の氾濫原に位置し、古墳時代前期以前に河川の氾濫堆積により大部分が埋没しているが、一部で小河川が横断していた。また、東側は第19地点を東流する河川の蛇行部分に向かって標高を緩やかに下げ、浅い谷地形を形成していた。

調査区内の基準土層は、3層からなり、標高23.90mを測る原表土から、1層である近・現代の耕作土の下に、天仁元年に降灰した浅間B火山灰層を挟んだ奈良・平安時代の文化層が堆積している。奈良・平安時代文化層の下には、古墳時代前期の文化層が堆積していた。標高23.30m前後の遺構確認面では、調査区の西側と東側で遺構の性格に相違が認められた。調査区西側では、南北方向に横断する河川とその氾濫原によって遺構は希薄であった。中央部は、最も標高が高く、堅穴住居跡を中心とする居住区域であった。調査区の東側は、畠作跡が連続して検出された。この古墳時代前期の文化層の下は、砂質シルト層を主体とした、河川による氾濫堆積土が厚く堆積していた。

このように、古墳時代前期以前までは、河川の氾濫原であった部分が、氾濫土の急速な堆積により微高地化し、古墳時代前期に入って、小規模ながら居住域の進出と畠作を主体とした生産域に利用されるようになった。さらに、自然堤防が発達した古代においては、遺構が密集する集落域へと変化していった状況が窺える。

第20地点において検出された遺構は、古墳時代前期の堅穴住居跡が4軒、土壇は可能性のあるもの



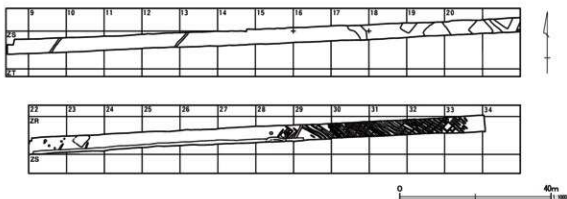
第51図 第20地点基本土層図

が2基、溝9条、小穴9基、畠作跡一箇所であった。この他に、河川が1条南北方向に横断していた。

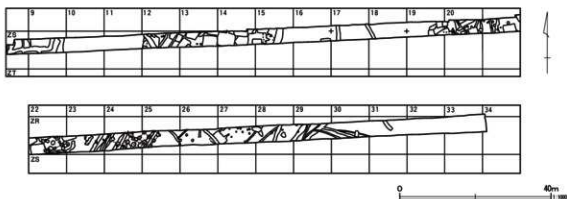
遺構の分布状況は、調査区中央部分に散在して分布している。溝は、調査区全体にまばらに配置され、走行方向が畠の畝と平行する状況が窺える。小穴は、居住域に纏まりを見せる部分が認められ、配置状況から建物施設等が想定される。畠作跡は、上下に重複して軸を直行させる畝状の溝が連続して検出された。

古代の遺構は、堅穴住居跡が41軒、掘立柱建物跡4棟、土壇19基、井戸跡1基、溝35条、小穴51基、水田跡一箇所であった。但し、井戸及び溝の中には中世に降るものが含まれている。

遺構の分布状況は、調査区西側を南北に横断する埋没河川の西側において、榛名二ツ岳火山灰層に覆われた水田跡が検出された。この埋没河川の東側には、二箇所の纏まりを持って住居跡群が検出された。何れも重複が著しい。また、東側の住居跡群内に1棟、隣接して3棟の掘立柱建物跡が重複して検出された。井戸跡は、東側堅穴住居跡群内に位置し、土壇も各住居跡群周辺部に纏まっている。小穴は、各住居跡群の東側で纏まって検出された。溝は、住居跡群の間及び東側で纏まって検出され、走行方向が掘立柱建物跡に平行する状況が窺える。



第52図 第20地点下層遺構配置図

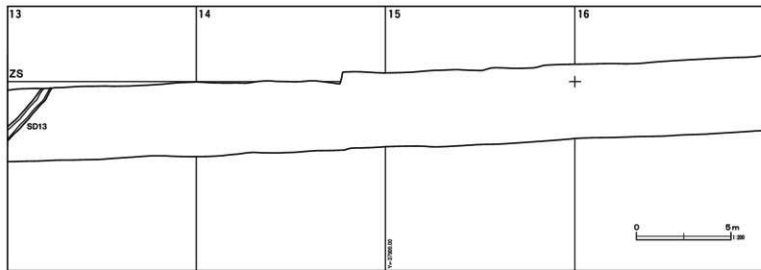
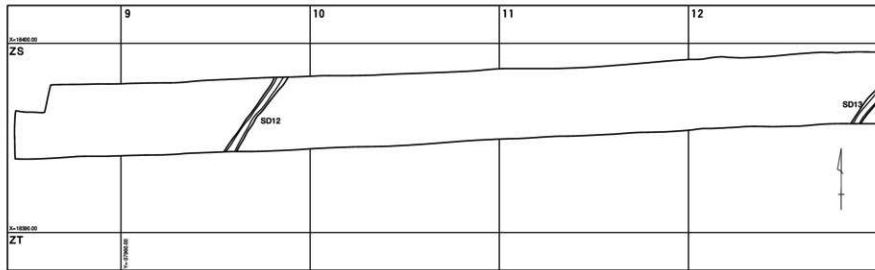


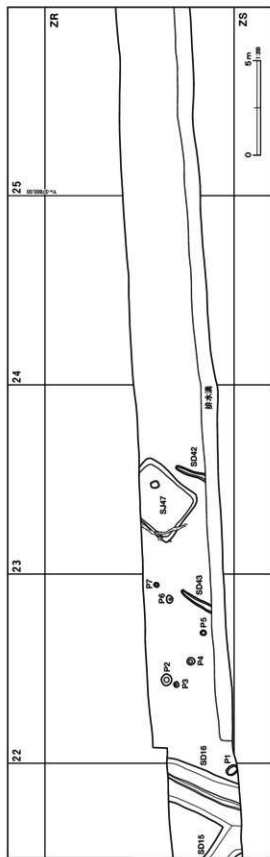
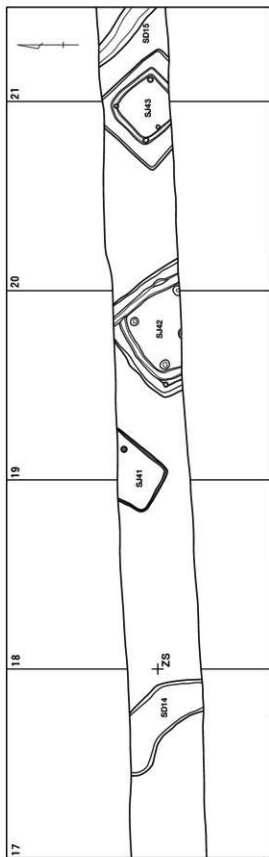
第53図 第20地点上層遺構配置図

第5表 第20地点遺構番号新旧対応表

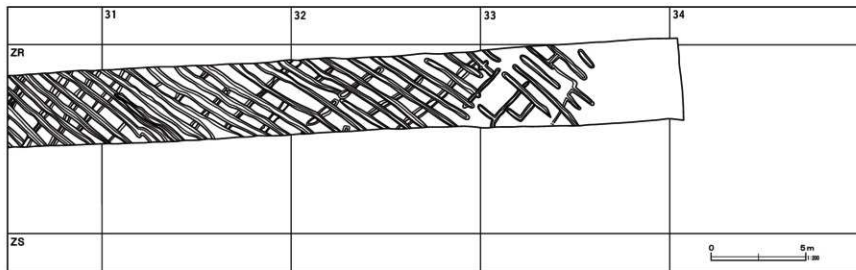
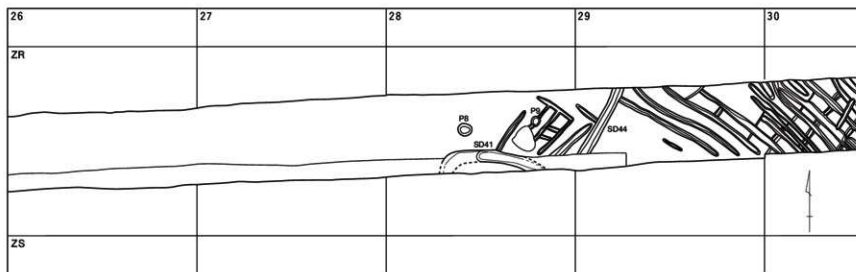
	旧	新		旧	新
1	ZR22 Pit1	Pit20-21	21	ZR27 Pit9	Pit48
2	ZR22 Pit2	Pit22	22	ZR28 Pit1	SK15
3	ZR22 Pit3	Pit19	23	ZR28 Pit2	Pit49
4	ZR22 Pit4	Pit18	24	ZR29 Pit1	Pit50
5	ZR23 Pit1	SK5	25	SB1 Pit1	SB2 Pit1
6	ZR24 Pit1	Pit31	26	SB1 Pit2	SB1 Pit1
7	ZR24 Pit2	Pit32	27	SB1 Pit3	SB2 Pit7
8	ZR24 Pit3	Pit33	28	SB1 Pit4	SB2 Pit1
9	ZR26 Pit1	Pit37	29	SB1 Pit5	SB2 Pit2
10	ZR26 Pit2	Pit36	30	SB2 Pit1	SB2 Pit6
11	ZR26 Pit3	Pit34	31	SB2 Pit2	SB2 Pit4
12	ZR26 Pit4	Pit35	32	SB3 Pit3	SB1 Pit2
13	ZR27 Pit1	Pit44	33	SB3 Pit4	SB3 Pit3
14	ZR27 Pit2	Pit39	34	SB3 Pit5	SB3 Pit4
15	ZR27 Pit3	Pit41	35	SB3 Pit6	SB3 Pit5
16	ZR27 Pit4	Pit44	36	SK5	SB1 Pit3
17	ZR27 Pit5	Pit40	37	SK6	SB3 Pit2
18	ZR27 Pit6	Pit45	38	SK15	SB1 Pit4
19	ZR27 Pit7	Pit46	39	下層C-15 Pit1	Pit1
20	ZR27 Pit8	Pit47	40	下層ZR28 Pit3	Pit8

第54圖 下附遺構全体圖 (1)





第55図 下層遺構全体図 (2)



第56図 下關遺構全体図 (3)

2. 古墳時代の遺構と遺物

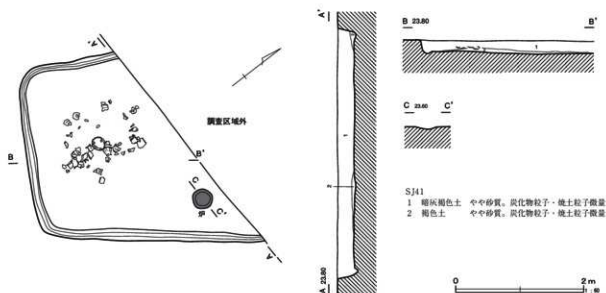
(1) 竪穴住居跡

第41号住居跡（第57・58図）

調査区のはほぼ中央ZR・ZS-18・19グリッドに検出された。北西コーナー部分は調査区外であった。

平面形態は隅丸方形で、規模は残存長軸3.45m、短軸2.9m、深さ0.3mである。主軸方位はN-36°-Eを指す。床面は平坦で南東コーナー付近に炉跡が構築されていた。柱穴は検出されなかった。壁周溝は断面U字形を呈し全周していた。遺物の出土状態は中央やや西側の床面直上から纏まって出土した。

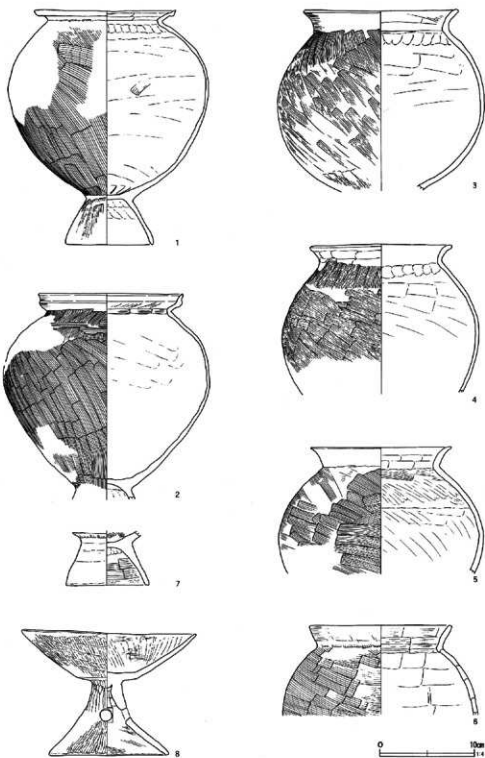
出土遺物は、1が口縁部の立ち上がりが浅いS字状口縁台付甕、2は口縁部がしっかりした立ち上がりを示すS字状口縁台付甕で、肩部に懸横線を施文している。3・4・5は口縁部が外反する台付甕で、胴部が球胴形を呈する。何れも脚部を欠損している。6は直立口縁を呈する台付甕である。胴下半以下を欠損する。7は台付甕脚部である。8は高坏で、直線的に開く坏部に末広がりの脚部が付く。脚部には、円形の透穴が3孔設けられている。



第57図 第41号住居跡

第6表 第41号住居跡出土遺物観察表（第58図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師台付甕	15.0	24.5	9.3	ADH	Ⅱ	橙色	50	S字口縁
2	土師台付甕	15.3			AEH	Ⅰ	にぶい黄橙色	60	S字口縁 脚部欠損
3	土師台付甕	16.3			EH	Ⅱ	にぶい黄橙色	50	単口縁
4	土師台付甕	15.0			BH	Ⅱ	にぶい橙色	40	単口縁上半分
5	土師台付甕	14.8			EH	Ⅱ	橙色	15	単口縁
6	土師台付甕	15.0			AH	Ⅰ	にぶい橙色	20	単口縁 胴部外面丁寧なハケ調整
7	土師台付甕			8.8	AEH	Ⅱ	橙色	10	脚部
8	土師高坏	18.5	13.0	12.6	EH	Ⅱ	にぶい橙色	60	脚部円形孔3箇所

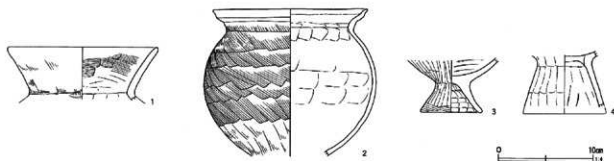


第58図 第41号住居跡出土遺物

平面形態は方形で、規模は長軸5.80m、残存短軸4.4m、深さ0.35mである。主軸方位はN-38°-Wを指す。床面は平坦で中央部分に竈跡が構築されていた。柱穴はP1・P2・P3の3本が検出され、調査区外に想定される1本を含めて4本柱穴になると考えられる。壁周溝は断面幅広のU字形を呈し、壁から離れて全周していた。周溝の検出状態から拉

出土遺物は、1は口縁部が直線的に外反して立ち上がる単口縁の壺である。口縁部以下を欠損している。2は頸部がやや長いS字状口縁台付甕で、胴部は球胴形を呈し脚部を欠損している。3は高坏で、坏部の一部を欠損しているがやや内湾する形状を呈すると考えられる。脚部は直線的に開き短い。4は台付甕脚部である。





第60図 第42号住居跡出土遺物

第7表 第42号住居跡出土遺物観察表 (第60図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師壺	(16.0)			AEH	II	にぶい黄橙色	5%未満	口縁部 内外面ハケ調整
2	土師台付甕	16.4			AH	II	にぶい黄橙色	30	S字口縁 脚部欠損 外面ハケ調整
3	土師高坏			6.4	EH	I	にぶい橙色	20	内面工具ナデ
4	土師台付甕				DE	II	にぶい赤褐色	5%未満	短脚の高坏 脚部

第43号住居跡 (第61・62図)

調査区のほぼ中央ZR・ZS-20・21グリッドに検出された。北・南コーナー部分は調査区外であった。

平面形態は方形で、規模は長軸5.1m、短軸4.5m、深さ0.4mである。主軸方位はN-47°-Eを指す。床面は平坦であった。炉跡は検出されなかった。柱穴は4本検出されたが、P1・P3・P4と調査区外の4本で主柱穴を構成すると考えられる。壁周溝は断面浅いU字形を呈し主柱穴間を全周していた。土層断面の状況から拡張住居跡または、ベッド状遺構の可能性がある。遺物の出土状態は壁周溝及び内側で散在して出土した。

出土遺物は、1は高坏である。直線的に外反する坏部に末広りの脚部が付いている。脚部は円形の透穴が3孔設けられている。また、坏部と脚部の間に小孔が開けられている。2は高坏脚部である。円形の透穴が3孔2段に設けられている。3は高坏脚部である。円形の透穴が4孔付くと考えられる。また、脚部と坏部の間に小孔が設けられている。4も3と同様の高坏脚部である。5は台付甕製作途中で高坏に転用した土器である。胴部下半の接合部で成形を止め内面を丁寧に磨いて坏部としている。6は

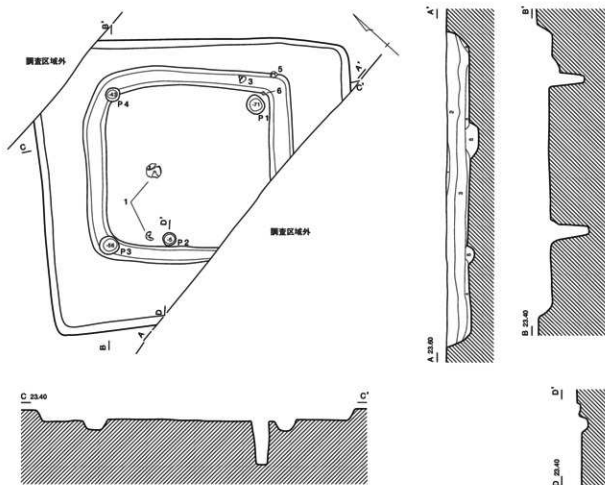
小形の無頸壺である。胴部上半と底部付近に刺突列が廻っている。

第47号住居跡 (第63・64図)

調査区の中央やや東よりZR-23グリッドに検出された。北東コーナー部分は調査区外であった。

平面形態は隅丸方形で、規模は長軸3.55m、短軸2.9m、深さ0.15mである。主軸方位はN-40°-Eを指す。床面は凹凸があり壁の立ち上がりが不明瞭であった。炉跡は検出されなかった。中央やや東より楕円形を呈する小穴が検出された。壁周溝は検出されなかった。遺物の出土状態は覆土から散在して出土した。

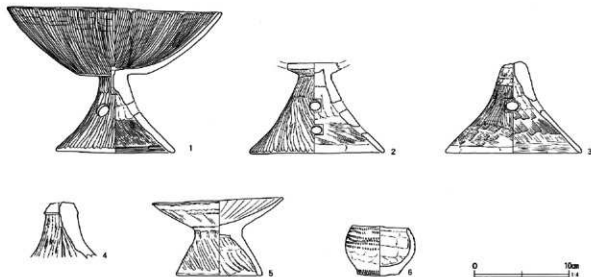
出土遺物は、1は壺口縁部である。外反する口縁端部に凹線を廻らせている。2はS字口縁台付甕で胴下半部を欠損している。口縁部は、やや外反して立ち上がる。頸部に無横線を施文している。3は小形台付甕脚部である。丁寧な調整が施されている。4は高坏脚部である。円形の透穴が3孔付く。また、脚部と坏部の間に盲孔が設けられている。5は埴である。小片のため全体の器形を判断することができないが、口縁部が直線的に外反し胴部が大きく張り出す器形を呈すると考えられる。



SJ43

- 1 黄褐色土 粘質。炭化物粒子微量。黒褐色土ブロック微量
- 2 暗褐色土 粘質。炭化物粒子含む。焼土粒子微量。3層より暗い
- 3 暗褐色土 やや砂質。炭化物粒子含む。焼土粒子微量。2層より明るい
- 4 褐色土 やや砂質。炭化物粒子多量。焼土粒子微量。黒褐色粘質土ブロック含む
- 5 暗褐色土 やや砂質。炭化物粒子微量

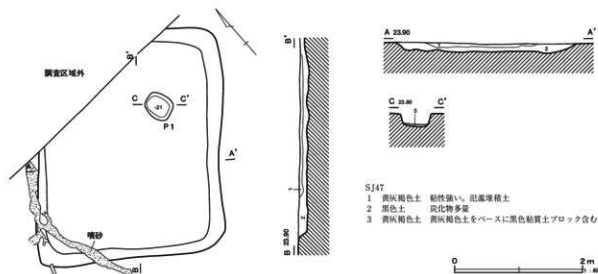
第61図 第43号住居跡



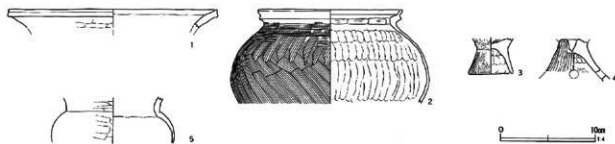
第62図 第43号住居跡出土遺物

第8表 第43号住居跡出土遺物観察表 (第62図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師高坏	22.6	15.2	12.6	CH	I	灰白色	90	脚部に円形の透孔3孔有り 坏部と脚部の中心に焼成前の円形小孔有り
2	土師高坏		14.4		EH	I	にぶい赤褐色	40	脚部 2段の円形透孔が3カ所に有り
3	土師高坏		14.4		AD	I	にぶい橙色	30	脚部 表裏両面にハケ調整有り 側面に円形の透孔3孔有り
4	土師高坏				DH	II	にぶい橙色	5	脚部
5	土師高坏	13.9	7.9	9.1	DEH	II	にぶい赤褐色	90	台付寛転用の高坏
6	無頭壺	6.0	5.3	4.4	AEH	II	橙色	90	ミニチュア 上半部と底部に工具刺突列有り



第63図 第47号住居跡



第64図 第47号住居跡出土遺物

第9表 第47号住居跡出土遺物観察表 (第64図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師壺	22.0			ADE	II	にぶい橙色	5%未満	壺口縁部 口端部に凹線有り
2	土師台付壺	(15.2)			AEH	II	にぶい橙色	15	S字口縁 櫛歯6本1単位
3	土師台付壺			4.8	ADE	II	にぶい橙色	5	小型の台付寛脚部 外面縦位ハケ調整 脚部内部指頭ナデ
4	土師高坏				AH	I	灰黄色	5	脚部 円形の透孔3孔有り 坏部中央に盲孔有り
5	土師埴				ADE	II	にぶい黄橙色	5%未満	表面頸部横ミガキ 胴部ヘラナデ

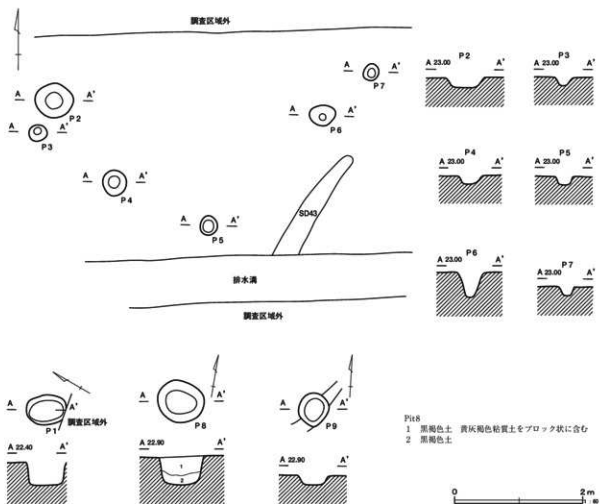
(2) 小穴 (第65図)

調査区中央やや東寄り ZR・ZS-21グリッドに 1 基、ZR-22グリッドに 6 基、ZR-28グリッドに 2 基検出された。何れの小穴からも遺物の出土はなかった。

P-1は楕円形を呈し、長径0.65m、短径0.5m、深さ0.4mであった。P-2からP-7までは、Z R-22グリッドに據まって検出された。各小穴の

検出配置状況から南西・北東方向に軸を持つ建物跡の可能性はある。それぞれの小穴は円形を呈し、径0.25mから0.6m前後、深さ0.15mから0.4m前後であった。

P-8は、円形を呈し、長径0.8m、短径0.7m、深さ0.45mであった。P-9は、円形を呈し、径0.5m、深さ0.15mであった。



第65圖 小穴

(3) 溝

調査区全体に散在して検出された。各溝間の距離は一定していないが、溝の走行方向は調査区東側で検出された畠跡の畝の走行方向に近い状況を示している。

第12号溝 (第66図)

調査区西寄り、ZS-9グリッドに検出された。直線的に延びる溝で、走行方向はN-35°-Eであった。溝断面の形状は台形を呈し、幅0.6m、深さ0.15mであった。

第13号溝 (第66図)

調査区西寄り、ZS-12・13グリッドに検出された。第12号溝と同じく直線的に延び、走行方向はN-40°-Eであった。溝の断面形状は台形を呈し、幅0.6m、深さ0.2mであった。

第14号溝 (第66図)

調査区西寄り、ZR・ZS-17グリッドに検出された。クランク状に蛇行した溝であった。走行方向はN-36°-Wであった。溝断面の形状は浅い台形を呈し、幅2.1m、深さ0.2mであった。

第15号溝 (第66・68図)

調査区中央、ZR・ZS-21グリッドに検出された。第16号溝に切られていた。直線的に延びる溝で、走行方向はN-49°-Wであった。溝断面の形状は台形を呈し、幅1.1m、深さ0.4mであった。第2層層中に榛名二ツ岳火山灰をブロック状に含んでいた。遺物は高坏脚部が出土した。

出土遺物は、1は高坏脚部である。やや膨らみを持った柱状脚で脚部と坏部の間に穿孔が設けられている。

第16号溝 (第66・68図)

調査区中央、ZR・ZS-21・22グリッドに検出された。第15号溝を切っていた。直線的に延びる溝で、走行方向はN-26°-Eであった。溝断面の形状は台形を呈しているが、土層断面観察から葉研状の溝を掘り直している。幅は2.35m、深さ0.6mであった。遺物は折返口縁の壺が出土した。

出土遺物は、2は折り返し口縁の壺破片である。小片の為、器形全体を復元することは困難である。

第41号溝 (第67図)

調査区東寄り、ZR-28グリッドに検出された。調査区南端で弧を描くような形で検出された。走行方向はN-83°-Wであった。溝断面の形状は台形を呈し、幅0.75m、深さ0.3mであった。

第42号溝 (第67図)

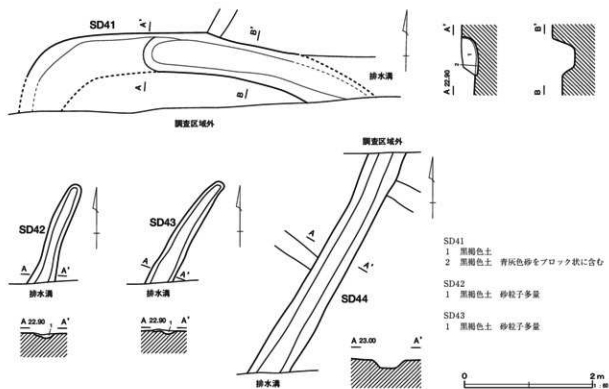
調査区東寄り、ZR-23グリッドに検出され調査区内で切れていた。直線的に延びる溝で、走行方向はN-20°-Eであった。溝断面の形状は浅いU字形を呈し、幅0.4m、深さ0.1mであった。

第43号溝 (第67図)

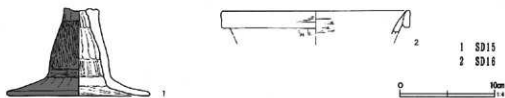
調査区中央、ZR-22グリッドに検出された。第42号溝と同様の形態をとる。直線的に延びる溝で、走行方向はN-29°-Eであった。溝断面の形状は浅いU字形を呈し、幅0.4m、深さ0.05mであった。

第44号溝 (第67図)

調査区東寄り、ZR-29グリッドに検出された。本溝の東側に畠跡が検出された。直線的に延びる溝で、走行方向はN-29°-Eであった。溝断面の形状は台形を呈し、幅0.6m、深さ0.15mであった。



第67図 溝 (2)



第68図 溝出土遺物

第10表 溝跡出土遺物観察表 (第68図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師高坏	15.0			AH	II	にぶい橙色	25	SD15 脚部 外面赤彩
2	土師壺	(20.0)			E	I	にぶい黄橙色	5%未満	SD16 貼付折り返し口縁

(4) 畝跡

調査区東側、Z R-28~33グリッドにかけて検出された。本跡は、古代の遺構検出面下に確認された。同一基盤層上に古墳時代前期の竪穴住居跡、溝等が検出されている。畝跡が検出された地点の地形は、南東方向に向かってわずかに傾斜する地形であった。本跡西側端部は、Z R-28グリッド中央付近にあり、古墳時代前期の竪穴住居跡は西側に50m離れて位置している。また、第44号溝は、その西側に畝跡が僅かに延びるものの、主要部分の西側区画溝としての機能を果していると考えられる。畝跡東端部分から東側は、地形傾斜がやや強くなり、第19地点北側を東に蛇行して流下する河川の氾濫原に至るものと考えられる。この部分では遺構は検出されていない。

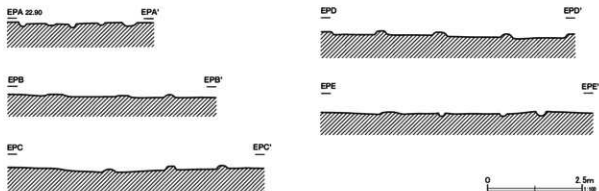
遺構は、確認時点で北東-南西方向に細長く延びる畝頭（盛土）と、北西-南東方向に細長く延びる畝間（溝）が交差した状態で連続して検出された。発掘調査時の所見及び土層断面の状況から、これらの交差した盛土と溝との関係は、遺構構築時の時間差として捉えることが賢明であると判断される。したがって、盛土を主体とする遺構を第1面の畝跡とし、溝を主体とし盛土の下位にある遺構を第2面の畝跡として分離することとする。

第1面畝跡（第69・71・72図）

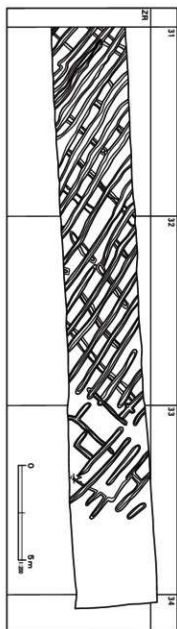
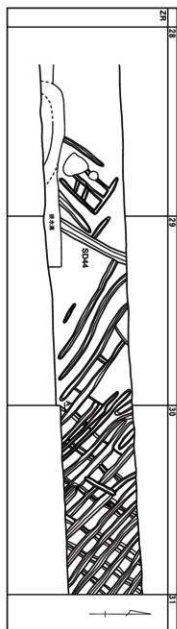
調査区東側Z R-28~33グリッドにかけて検出された。第2面の畝間状の溝と比較するとやや疎に検出された。また、遺構は主に盛土とし検出されたが東側5条は、溝状遺構であった。盛土の走行方向は、N-31°-EからN-50°-Eの範囲であった。盛土の幅は最小で0.2m、最大で0.6mであった。盛土の長さは最短で0.6m、最長で4.8mであった。各畝間の幅は、0.4mから1.4m、平均1mであった。畝頭との比高差は0.1m程度で蒲針状を呈していた。盛土上及び畝間には、耕作痕等は認められなかった。尚、遺構検出範囲からの遺物の出土はなかった。

第2面畝跡（第73・74・75図）

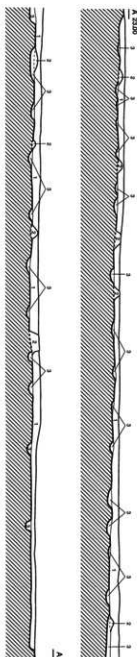
調査区東側Z R-28~33グリッドにかけて検出された。第1面の畝頭状の盛土と比較するとやや密に検出された。また、遺構は主に溝として検出された。溝の走行方向は、N-48°-WからN-60°-Wの範囲であった。溝幅は最小で0.2m、最大で0.5mであった。盛土の長さは最短で0.7m、最長で6.8mで大部分が南北調査区外に続いていた。各畝間の幅は、0.2mから0.7m、平均0.4mであった。平坦面との比高差は0.1m程度でU字形を呈していた。平坦面及び溝内には、耕作痕等は認められなかった。尚、遺構検出範囲からの遺物の出土はなかった。



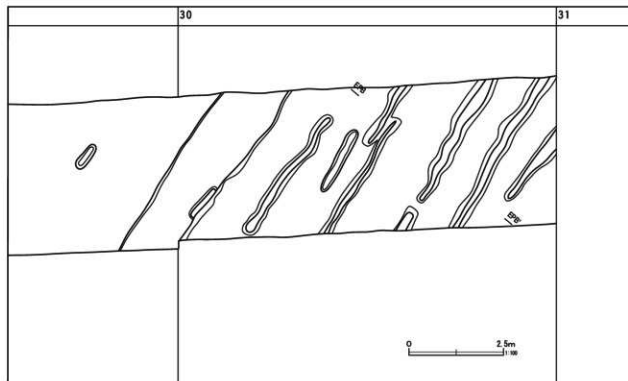
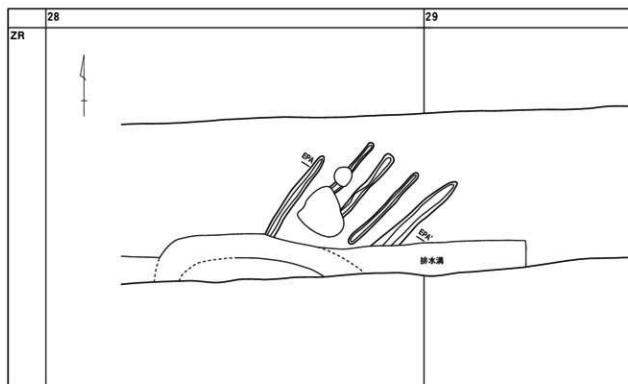
第69図 第1面畝跡エレベーション図



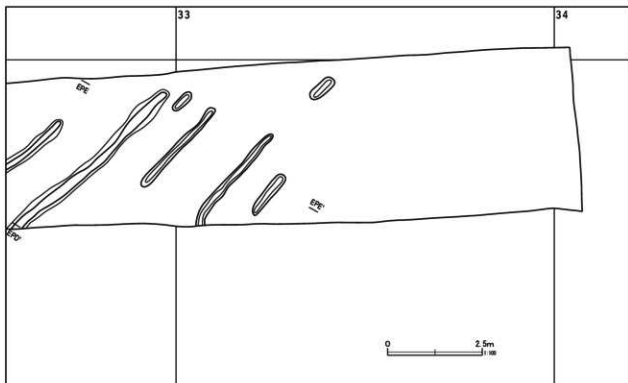
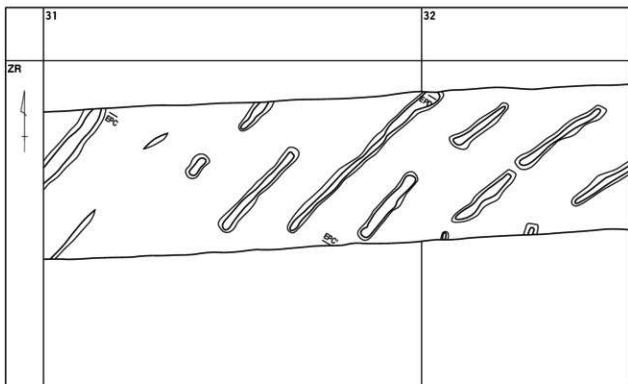
- 1 黄褐色土 粘質 (強)
 2 黄褐色土 砂質
 3 黄褐色土 C土層に欠ける



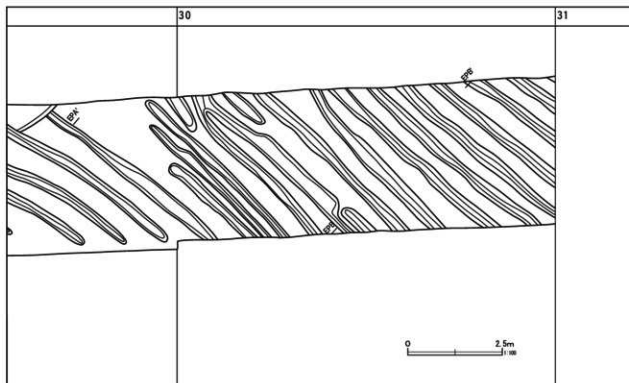
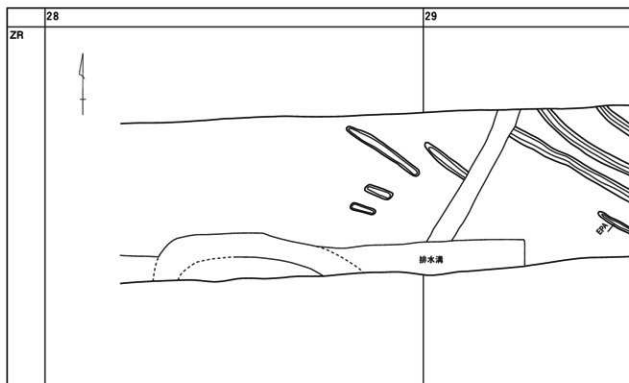
第70図 畠跡遺構全体図・土層断面図



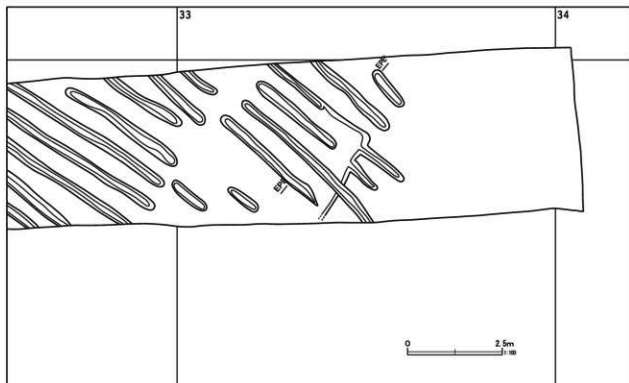
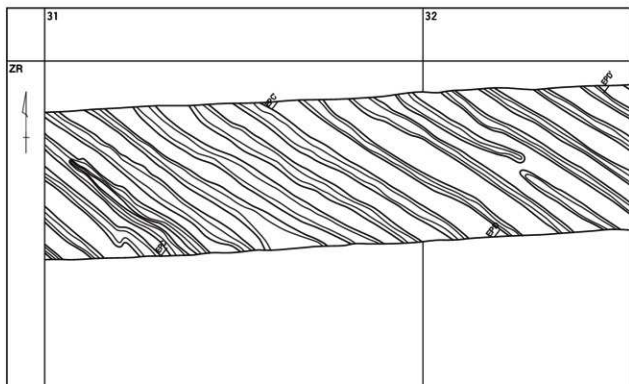
第71図 第1面畠跡(1)



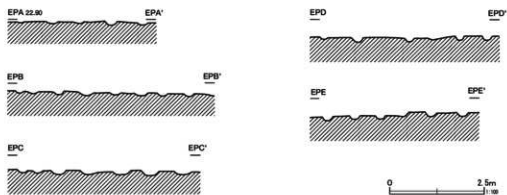
第72网 第1面畠跡 (2)



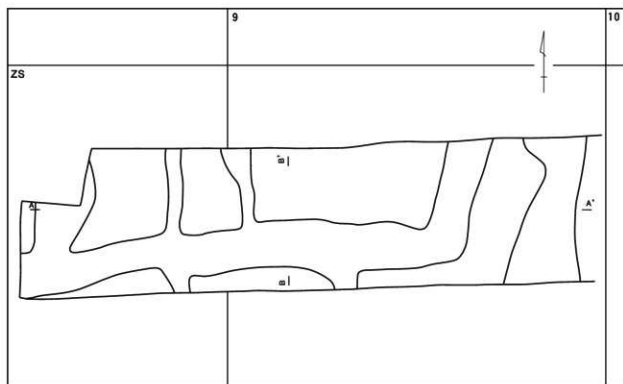
第73図 第2面晶跡 (1)



第74図 第2面晶跡 (2)



第75図 第2面畠跡エレベーション図



第76図 水田跡

(5) 水田跡 (第76図)

調査区西側 ZS-8・9 グリッドに検出された。本跡は、河川跡西側に位置し、古墳時代の6世紀初頭に降灰したとされる、榛名二ツ岳火山灰に被覆されていた。

遺構の遺存状況は非常に悪く畦畔部分の高まりはほとんど検出できず、畦畔のプリント部分が帯状に検出された。遺構全体から見た畦畔の検出状況は、東西方向に延びる幅1.3mの大畦を9m間隔で同一幅

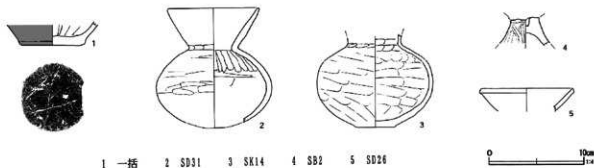
の大畦が南北に取り付いて区画している。この区画の内側に幅0.4mの小畦が南北方向に2本延び、小区画を構成している。この小区画は東西幅が、西側から2m、1.4m、5mの順で不規則に区画されている。東西方向の大畦の南側には、ほぼ4mの等間隔で幅0.4mの小畦が南北方向に取り付いている。遺物は遺構検出面から出土しなかった。また、本跡の下層には遺構は検出されなかった。

(6) 遺構外(グリッド)出土遺物(第77図)

時期の異なる遺構または、グリッドから出土した古墳時代前期の遺物を掲載した。

1は、壺底部である。器面外面が赤彩されている。また、底部に木葉痕が付いている。2は、埴である。底部を欠損している。口縁部は、直線的に外反して立ち上がる。胴部は、大きく張り出している。器面全体は丁寧に磨かれているが摩滅が著しい。3は、

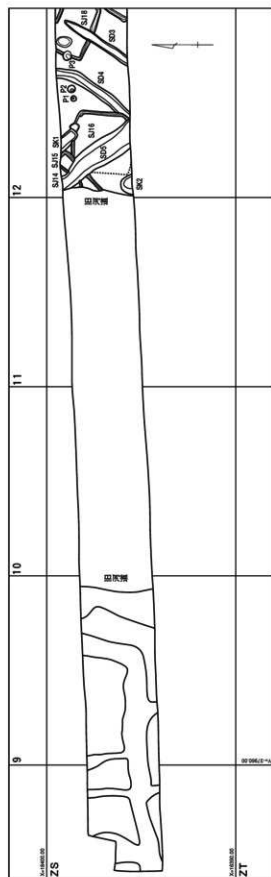
埴である。口縁部を欠損しているが、直線的に外反して立ち上がる形状を呈すると考えられる。胴部は大きく張り出し底部は平底である。4は、高坏である。脚部の上部のみ残存している。坏部と脚部の間に盲孔があいている。5は、器台口縁部である。小片のため全体器形を想定できないが、丁寧にミガキが施されている。



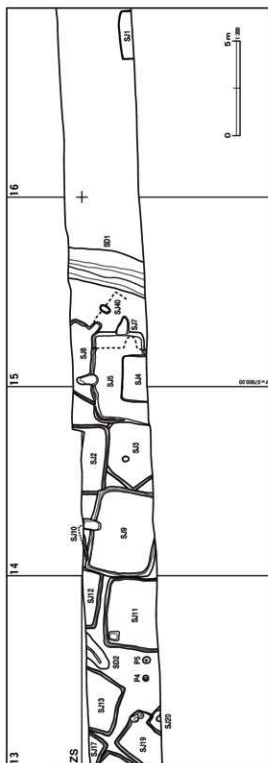
第77図 遺構外(グリッド)出土遺物

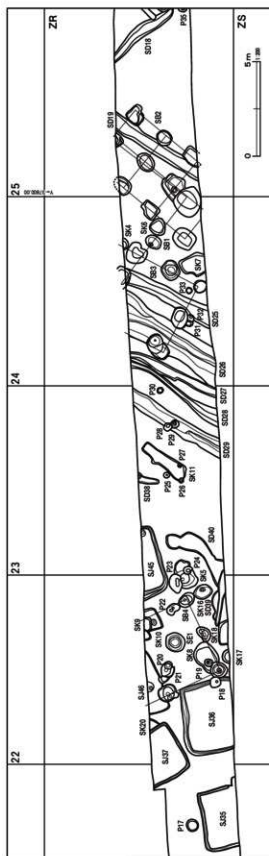
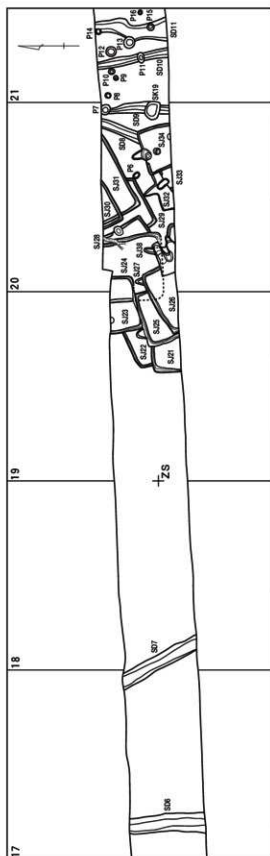
第11表 遺構外(グリッド)出土遺物観察表 (第77図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師壺			7.0	DE	Ⅱ	褐灰色	5%未満	一括 底部 外面赤彩 底部木葉痕
2	土師埴	9.7			AEH	Ⅱ	橙色	30	SD31
3	土師埴			4.0	H	Ⅱ	にぶい橙色	30	SK14
4	土師高坏				H	I	にぶい黄橙色	5%未満	SB2 脚部 外面縦位ミガキ 盲孔有り
5	土師器台	(10.0)			DE	I	にぶい黄橙色	5%未満	SD26 口縁部 内外面丁寧にミガキ

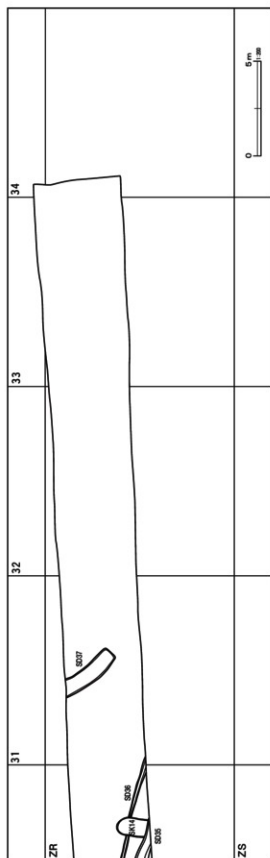
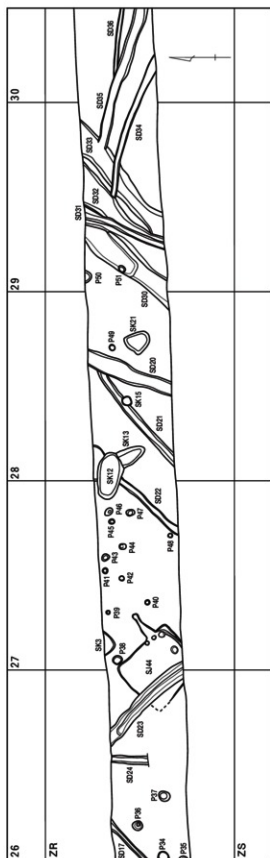


第78図 上層遺構全体図(1)





第79図 上層遺構全体図 (2)



第80図 上層遺構全体図 (3)

3. 古代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

東西に延びる細長い調査区の中で大きく二つのまとまりを持って検出された。第一住居跡群は調査区西寄り河川跡東側で、Z S-12~15グリッドにかけて19軒纏まって検出された。この住居跡群の東側限界部分には第1号溝が走行している。第二住居跡群はZ S・Z R-19~23グリッドにかけて19軒纏まって検出された。この住居跡群の中央部分には小穴群が纏まって検出された。これらの住居跡群のまとまりの他にZ R-24・25グリッドに検出された掘立柱建物跡群を挟んで、Z R-26・27グリッドに1軒のみ単独で検出された。

第1号住居跡 (第81図)

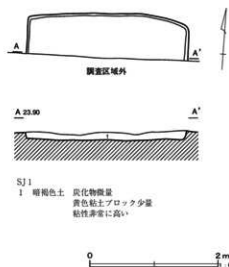
調査区中央やや西寄りZ S-16グリッドに検出された。遺構の大部分は南側調査区外であった。

平面形態は方形を呈すると考えられ、規模は長軸2.56m、残存短軸0.75m、深さ0.25mである。主軸方位は不明であった。床面は平坦で、カマドは調査区内では検出されなかった。また、柱穴及び壁周溝も検出されなかった。遺物は出土しなかった。

第2号住居跡 (第82・83図)

調査区西寄りZ R・Z S-14グリッドに検出された。遺構の大部分は北側調査区外であった。また、第3号住居跡を切り、第9号住居跡に切られていた。平面形態は方形で、規模は長軸3.65m、残存短軸1.4m、深さ0.15mである。主軸方位は不明であった。床面は平坦で、柱穴は検出されなかった。また、カマドも調査区内には検出されなかった。壁周溝は断面U字形を呈し、全周していた。遺物は覆土から散在して出土した。

出土遺物は、1は須恵器杯、2は小ぶりの土師器有段口縁杯、4・5は土師器内溝杯、3・6・7は浅身の土師器杯である。8は須恵器蓋、9は須恵器碗である。10は甕口縁部で、この他に11の土鉢がある。

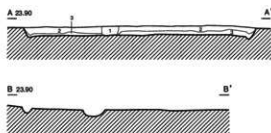


第81図 第1号住居跡

第3号住居跡 (第82・83図)

調査区西寄りZ S-14グリッドに検出された。南東コーナー部分は調査区外であった。また、第2・5・9号住居跡に切られていた。平面形態は方形で、規模は残存長軸3.5m、残存短軸2.95m、深さ0.1mである。主軸方位は不明であった。床面は平坦で、中央やや北西寄りに柱穴が一本検出された。カマドは、調査区内には検出されなかった。壁周溝は断面U字形を呈し、全周していた。遺物は覆土から散在して出土した。

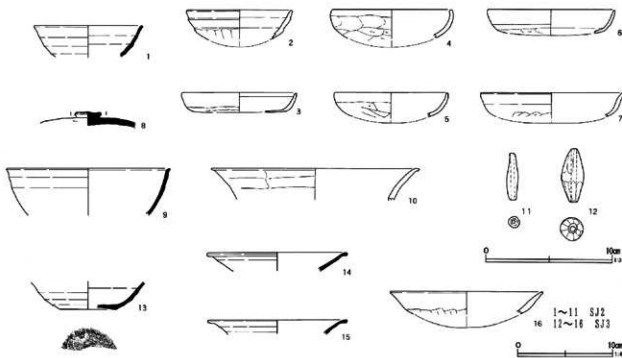
出土遺物は、13は須恵器杯、14・15は須恵器皿である。13は底部回転系切り後未調整である。16は土師器皿である。この他に12の土鉢がある。



- SJ2
- 1 暗褐色土 焼土・炭化物少量
砂少量。粘性低い
 - 2 灰褐色土 焼土・炭化物多量
粘性は低い
 - 3 淡灰褐色土 焼土・炭化物微量
灰層若干有り
粘性低い



第82図 第2・3号住居跡



第83図 第2・3号住居跡出土遺物

第12表 第2・3号住居跡出土遺物観察表（第83図）

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	須恵坏	(11.2)	3.4		EF	Ⅱ	灰白色	15	SJ2 南北企 軽量感がある
2	土師坏	(11.0)	3.2		DE	Ⅱ	淡褐色	10	SJ2 有段口縁坏
3	土師坏	(12.0)	2.1		CDE	I	橙色	10	SJ2
4	土師坏	(12.6)	3.1		BDE	Ⅱ	にぶい橙色	15	SJ2 内湾坏 調整痕は不明瞭
5	土師坏	(12.0)	2.6		H	I	明赤褐色	5	SJ2 内湾坏
6	土師坏	(13.4)	2.6		H	Ⅱ	にぶい赤褐色	5	SJ2
7	土師坏	(15.0)			AH	Ⅱ	橙色	5	SJ2
8	須恵壺				F	Ⅱ	灰色	25	SJ2 南北企
9	須恵碗	(17.2)	5.0		EF	Ⅱ	暗青灰色	10	SJ2 南北企
10	土師壺	(22.0)			AE	Ⅱ	赤黒色	5%未満	SJ2 外反口縁
11	土 鍾				DEH	Ⅱ	にぶい赤褐色	100	SJ2 長さ3.7cm 最大径0.9cm 孔径0.25cm 重さ3.3g
12	土 鍾				ADE	I	橙色	90	SJ3 長さ4.2cm 最大径1.8cm 孔径0.4cm 重さ12.0g
13	須恵坏		3.0	(6.0)	E	Ⅱ	暗青灰色	30	SJ3 末野 底部B0手法
14	須恵皿	(14.4)	2.0		EI	I	灰色	8	SJ3 末野
15	須恵皿	(14.6)	1.5		CI	Ⅱ	青灰色	10	SJ3 末野
16	土師皿	(16.0)	2.4		BDE	I	橙色	10	SJ3

第4号住居跡（第84・85図）

調査区西寄りZS-14・15グリッドに検出された。遺構の大部分は南側調査区外であった。また、第5号住居跡を切っていた。平面形態は方形で、規模は長軸2.45m、残存短軸1.4m、深さ0.45mである。主軸方位は不明であった。床面は平坦で、柱穴は検出されなかった。また、カマドも調査区内には検出されなかった。壁周溝は検出されなかった。遺物は覆土から散在して出土した。出土遺物には、本住居跡を含めて第5・7号住居跡一括遺物として取り上げられたものがある。

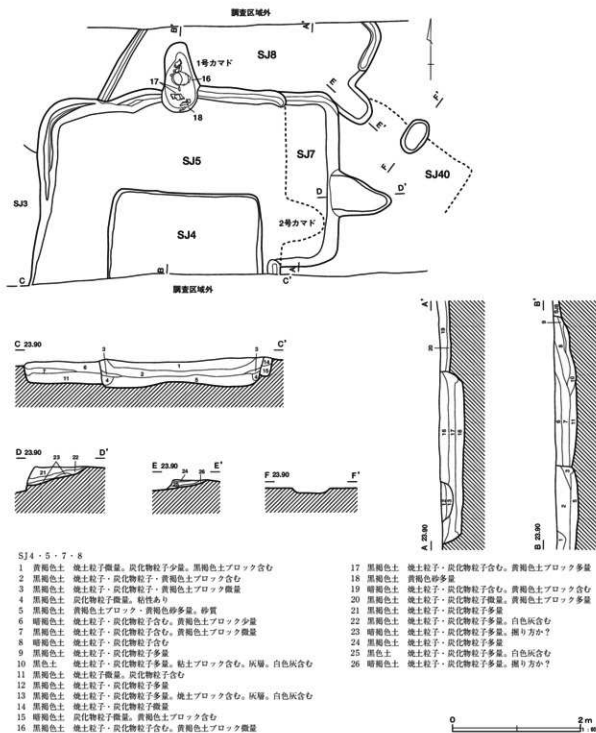
出土遺物は、1は土師器内湾坏、2は土師器小型台付甕下半部、3は土師器小型台付甕脚部である。また、4・5号住居跡一括遺物として4の浅身の土師器坏、5・6の須恵器坏、7の須恵器甕がある。

第5号住居跡（第84・86図）

調査区西寄りZS-14・15グリッドに検出された。遺構の南辺部分は南側調査区外であった。第4号住居跡に切られていた。また、第7・8号住居跡を切っていた。平面形態は方形で、規模は長軸4.05m、残存短軸2.9m、深さ0.35mである。主軸

方位はN-90°-E及びN-2°-Wであった。床面は平坦で、柱穴は検出されなかった。カマドは、付け替えを含めて2基あった。1号カマドは北壁中央に取り付けられ、袖は検出されなかった。燃焼部は壁周溝ライン上にある。2号カマドは、第7号住居跡精査中に土層断面上で認定されたもので1号カマドより古く造られていたものと考えられる。カマドの形状等は不明であった。壁周溝は断面U字形を呈し、部分的に検出された。遺物は、1号カマドから土師器壺、甕が纏まって出土した。

出土遺物は、1は深身の須恵器坏、2から7は須恵器坏で5・6は底部回転糸切り後未調整であるが、7は回転糸切り後周辺へ削りである。8は須恵器模倣の土師器坏で、外側面に指頭によるナデ調整を行っている。9・10は土師器内湾坏で10は小ぶりである。11は土師器有稜坏、12は外側面指頭によるナデ調整の土師器坏である。13は土師器暗文坏である。13は放射暗文が施文されている。14は土師器暗文皿である。15は須恵器甕口縁部、16・18は土師器甕である。17は土師器甕または、甕である。19は須恵器大甕の頸部破片である。

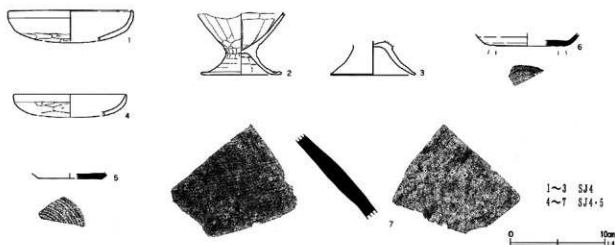


SJ4・5・7・8

- 1 黄褐色土 焼土粒子微量。炭化物粒子少量。黒褐色土ブロック含む
- 2 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・黄褐色土ブロック含む
- 3 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・黄褐色土ブロック微量
- 4 黒褐色土 炭化物粒子微量。粘性あり
- 5 黒褐色土 黄褐色土ブロック・黄褐色土砂多量。砂質
- 6 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子含む。黄褐色土ブロック少量
- 7 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子含む。黄褐色土ブロック微量
- 8 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子含む
- 9 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子多量
- 10 黒色土 焼土粒子・炭化物粒子多量。粘土ブロック含む。灰層。白色灰含む
- 11 黒褐色土 焼土粒子微量。炭化物粒子含む
- 12 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子多量
- 13 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子多量。焼土ブロック含む。灰層。白色灰含む
- 14 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子微量
- 15 暗褐色土 炭化物粒子微量。黄褐色土ブロック含む
- 16 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子含む。黄褐色土ブロック微量

- 17 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子含む。黄褐色土ブロック多量
- 18 黒褐色土 黄褐色土砂多量
- 19 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子含む。黄褐色土ブロック含む
- 20 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子微量。黄褐色土ブロック多量
- 21 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子多量
- 22 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子多量。白色灰含む
- 23 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子多量。囲り方か?
- 24 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子多量
- 25 黒色土 焼土粒子・炭化物粒子多量。白色灰含む
- 26 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子多量。囲り方か?

第84図 第4・5・7・8・40号住居跡



第85図 第4号住居跡出土遺物

第13表 第4号住居跡出土遺物観察表 (第85図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師杯	(12.8)	3.3		DE	I	橙色	10	SJ4 内湾坏
2	土師台付甕			8.6	DK	II	にぶい赤褐色	10	SJ4
3	土師台付甕			(9.0)	ABDE	II	灰褐色	70	SJ4 外面に黒色物付着
4	土師杯	(12.0)	3.6		A	II	にぶい褐色	5	SJ4・5 内湾坏
5	須恵杯		0.7	(6.6)	I	III	灰色	20	SJ4・5 末野 底部B0手法
6	須恵杯		1.4	(6.6)	EF	II	青灰色	10	SJ4・5 南比金 底部B3b手法
7	須恵甕				E	II	暗灰色		SJ4・5 産地不明 表面自然蝕

第7号住居跡 (第84・87図)

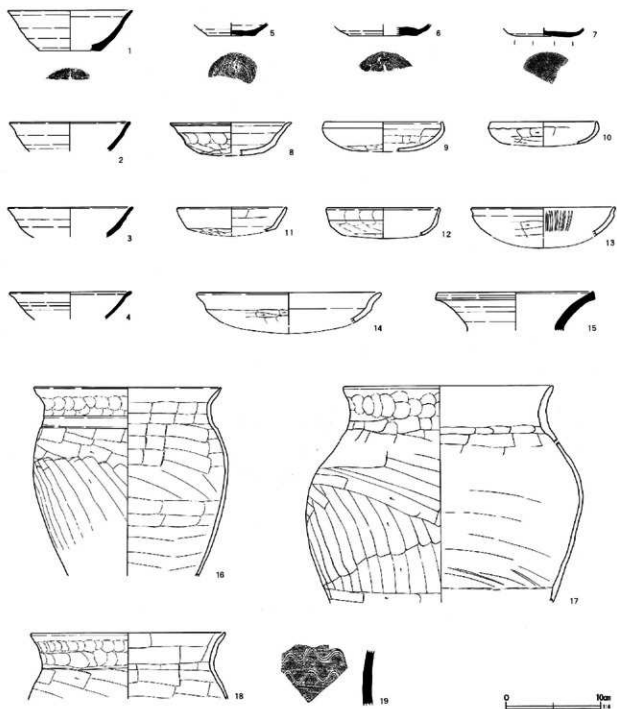
調査区西寄りZS-15グリッドに検出された。遺構の大部分は、第5号住居跡に切られていた。平面形態は方形で、規模は残存長軸0.85m、短軸2.75m、深さ0.4mである。主軸方位はN-90°-Eであった。床面は平坦で、柱穴は検出されなかった。カマドは、東壁ほぼ中央に検出された。袖及び焚口は検出されなかった。燃焼部は壁外に張り出している。壁周溝は北壁部分にのみ検出された。遺物は覆土から散在して出土した。

出土遺物は、1は土師器小型台付甕である。2から18は4・5・7号住居跡一括出土遺物である。2・3・4は須恵器坏で、底部は何れも回転糸切り後未調整である。5は土師器有稜坏、6から10は土師器内湾坏、11・12は土師器暗文皿である。13は土師器小型甕または、小型台付甕。14は土師器小型台付甕15・16は土師器甕である。また、17・18は土鉢である。

第8号住居跡 (第84・88図)

調査区西寄りZR・ZS-14・15グリッドに検出された。北西コーナー部分は調査区外であった。また、第5・7号住居跡に切れ、第40号住居跡を切っていた。平面形態は方形で、規模は残存長軸1.65m、残存短軸1.4m、深さ0.15mである。主軸方位はN-56°-Wであった。床面は平坦で、柱穴は検出されなかった。カマドは、東壁に検出され、袖は検出されなかった。燃焼部は壁外に張り出している。壁周溝は断面U字形を呈し全周していた。遺物は覆土から散在して出土した。

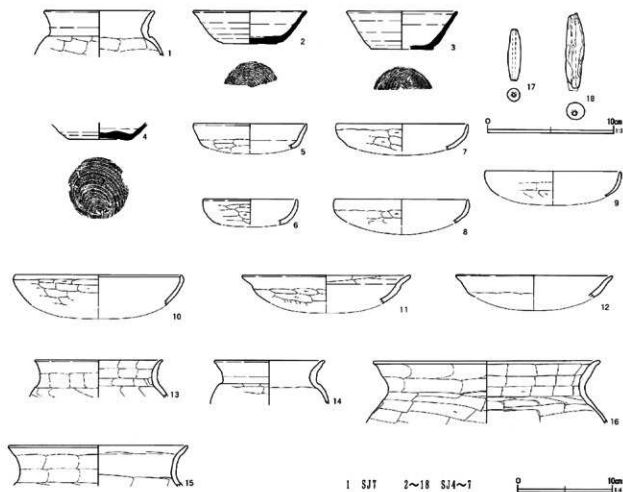
出土遺物は、1は土師器内湾坏、2は浅身の土師器坏である。3・4は須恵器坏で、3の底部は回転糸切り後周辺ヘラ削り、4は回転糸切り後未調整である。5は土師器暗文坏である。6は須恵器長頸瓶である。胴部が屈曲している。7は土師器甕底部である。



第86図 第5号住居跡出土遺物

第14表 第5号住居跡出土遺物観察表 (第86図)

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	須恵坏	(13.0)	4.3	(6.4)	ABEI	Ⅲ	明褐色	25	末野 底部B0手法 やや器面風化
2	須恵坏	(12.6)	3.1		CF	I	暗青灰色	10	南比企
3	須恵坏	(13.0)	3.2		EF	Ⅱ	青灰色	10	南比企 口縁部内側やや摩滅
4	須恵坏	(12.8)	2.9		ACEI	Ⅱ	明褐色	20	末野 酸化焼成されて赤茶けている
5	須恵坏		1.9	3.2	E	Ⅱ	灰色	55	末野 底部B0手法
6	須恵坏		1.2	(7.1)	CEF	Ⅱ	にぶい褐色	45	南比企 底部B0手法
7	須恵坏		0.9	6.0	EF	Ⅱ	灰色	40	南比企 底部B3b手法
8	土師坏	(12.8)	3.5		AD	Ⅱ	赤褐色	25	
9	土師坏	(12.4)	3.2		AD	I	にぶい橙色	15	内湾坏
10	土師坏	(11.2)	2.6		H	Ⅱ	橙色	10	内湾坏
11	土師坏	(11.6)	2.6		DH	Ⅱ	にぶい褐色	5	有稜坏
12	土師坏	(12.1)	3.0		AD	Ⅱ	にぶい褐色	5	有稜坏
13	土師暗文坏	(15.2)	3.1		H	Ⅱ	橙色	5	
14	土師暗文皿	(19.6)	3.3		DH	I	にぶい褐色	5	
15	須恵壺	(16.4)			EF	Ⅱ	灰白色	10	南比企
16	土師甕	20.0			DH	Ⅱ	にぶい褐色	50	頸部有段
17	土師壺	(22.2)			AH	Ⅱ	橙色	30	
18	土師甕	20.6			DH	I	橙色	10	カマド
19	須恵甕				E	Ⅱ	暗青灰色		産地不明



第87図 第4～7・7号住居跡出土遺物

第15表 第4～7・7号住居跡出土遺物観察表 (第87図)

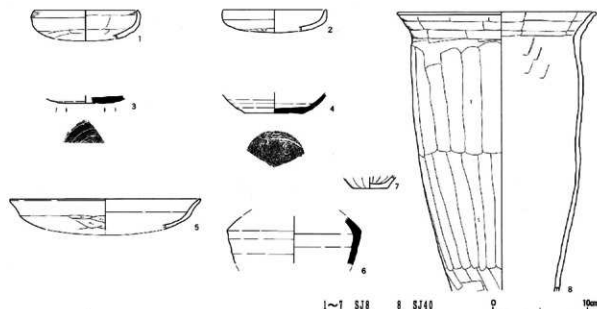
番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	土師小型台付甕	(11.7)			DE	Ⅱ	にぶい黄褐色	5	SJ7
2	須恵坏	(11.8)	3.5	(5.7)	CEF	Ⅱ	灰色	35	SJ4～7 南比金 底部B0手法
3	須恵坏	(11.6)	4.1	(6.6)	I	Ⅱ	灰白色	25	SJ4～7 末野か 底部B0手法 やや表面風化
4	須恵坏		1.8	6.5	CEF	Ⅱ	にぶい黄褐色	70	SJ4～7 南比金 底部B0手法
5	土師坏	(12.1)	2.7		DH	Ⅱ	にぶい褐色	5	SJ4～7 有椀坏
6	土師坏	(10.1)	2.8		H	Ⅱ	明赤褐色	5	SJ4～7 内湾坏
7	土師坏	(14.1)	2.7		DE	Ⅱ	にぶい褐色	5	SJ4～7 内湾坏
8	土師坏	(14.3)	3.7		H	Ⅱ	褐色	5	SJ4～7 内湾坏
9	土師坏	(14.4)	2.7		H	Ⅱ	にぶい褐色	5	SJ4～7 内湾坏
10	土師坏	(17.8)	3.3		H	Ⅱ	にぶい褐色	5	SJ4～7 内湾坏
11	土師暗文皿	(17.8)	2.0		DH	I	褐色	10	SJ4～7
12	土師暗文皿	(16.4)	2.2		DE	Ⅱ	褐色	5	SJ4～7 器面風化
13	土師台付甕	(13.5)			DE	Ⅱ	にぶい赤褐色	5	SJ4～7
14	土師台付甕	(11.6)			D	Ⅱ	灰白色	5	SJ4～7
15	土師壺	(18.9)			DE	Ⅱ	にぶい褐色	5	SJ4～7
16	土師壺	(24.0)			AG	Ⅱ	にぶい褐色	5	SJ4～7
17	土鍾								SJ4～7 重さ3.9g 長さ4.1cm 最大径1.1cm 孔径0.3cm
18	土鍾								SJ4～7 重さ13.1g 長さ5.9cm 最大径1.5cm 孔径0.3cm

第40号住居跡 (第84・88図)

調査区西寄り Z S - 15 グリッドに検出された。住居跡の掘り込みは不明でカマドのみ検出された。第7・8号住居跡に切られていた。平面形態は不明である。主軸方位は推定で N - 43° - E であった。床面は平坦で、柱穴は検出されなかった。カマドは、

焚口もしくは燃焼部のみ検出された。袖は検出されなかった。壁周溝は検出されなかった。遺物はカマドから土師器甕が出土した。

出土遺物は、8 は土師器長胴甕である。底部を欠損している。



第88図 第8・40号住居跡出土遺物

第16表 第8号・40号住居跡出土遺物観察表 (第88図)

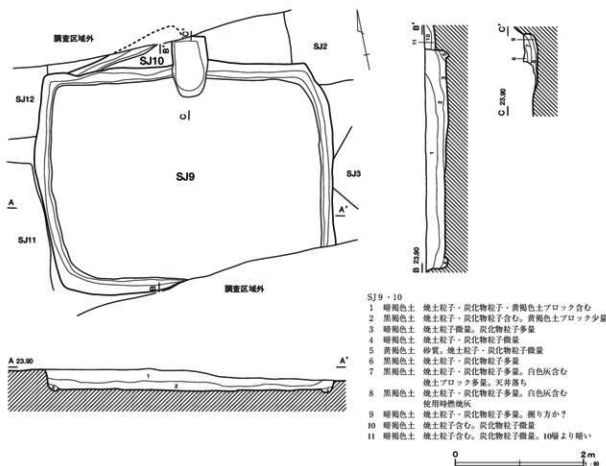
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師環	(11.0)	3.1		H	Ⅱ	にぶい橙色	10	SJ8 内溝環
2	土師環	(11.0)	2.3		DE	Ⅱ	にぶい赤褐色	10	SJ8 内溝環
3	須恵環		0.8	(6.0)	EF	Ⅱ	灰色	25	SJ8 南比金 底部B3b手法
4	須恵環		2.2	6.3	EI	Ⅱ	灰色	35	SJ8 末野 底部B0手法
5	土師崎文皿	(20.2)	3.2		DH	Ⅱ	にぶい橙色	5	SJ8
6	須恵長頸瓶					Ⅱ	灰色	15	SJ8 湖西
7	土師甕			4.0	E	I	にぶい赤褐色	5	SJ8
8	土師甕	21.3			ADHK	Ⅱ	橙色	80	SJ40 カマド

第9号住居跡 (第89・90図)

調査区西寄りZS-14グリッドに検出された。南東コーナー部分は調査区外であった。また、第2・3・10・12号住居跡を切っていた。平面形態は方形で、規模は長軸4.75m、短軸3.55m、深さ0.4mである。主軸方位はN-13°-Eであった。床面は平坦で、柱穴は検出されなかった。カマドは、北壁中央に検出された。袖は検出されなかった。燃

焼部は壁周溝ライン上に位置している。壁周溝は断面U字形を呈し全周していた。遺物は覆土から纏まって出土した。

出土遺物は、1は土師器有段口縁環、2は深身の土師器環、3・4・5は土師器有稜環である。6から13は須恵器環で9・10は回転系切り後周辺ヘラ削りて他は回転系切り後未調整である。14・15は須恵器碗、16・17・18・19は須恵器高台碗である。



第89図 第9・10号住居跡

20・21は須恵器皿である。22・23・24は土師器
 甕口縁部、25は土師器甕底部である。26は須恵器
 甕口縁部である。また、27の凝灰岩製の砥石が出
 土した。

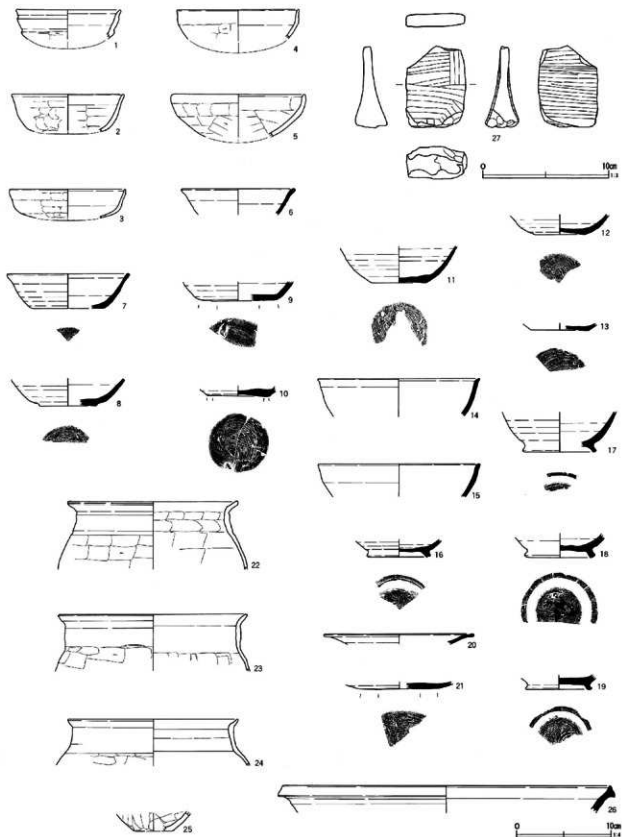
第10号住居跡（第89図）

調査区西寄り ZS-14グリッドに検出された。住

居跡の大部分は第9号住居跡に切られていた。平面
 形態は不明であった。また規模も不明であった。床
 面は平坦で、柱穴及びカマドは検出されなかった。
 壁周溝は断面U字形を呈し部分的に検出された。遺
 物は出土しなかった。

第17表 第9号住居跡出土遺物観察表（第90図）

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	土師坏	(11.0)	4.2		AD	I	橙色	5	有段口縁
2	土師坏	(11.8)	4.0		A	II	褐灰色	5	
3	土師坏	(12.0)	3.1		AD	I	にぶい赤褐色	10	有稜坏
4	土師坏	(12.8)	3.2		D	I	にぶい橙色	5%未満	有稜坏
5	土師坏	(13.8)	4.6		ACD	I	にぶい橙色	15	有稜坏
6	須恵坏	(11.8)	2.8		EF	II	灰色	15	南比企 カマド 口唇部摩滅している
7	須恵坏	(12.8)	3.7	(7.6)	EI	II	灰色	30	末野 底部B0手法 内部鉄分付着
8	須恵坏		3.0	(6.0)	CEI	II	暗青灰色	25	末野 底部B0手法
9	須恵坏		2.0	(8.0)	EF	II	灰オリーブ色	25	南比企 底部B3b手法
10	須恵坏		1.1	6.4	EI	II	黄灰色	90	末野 底部B3b手法
11	須恵坏		3.9	5.7	CEI	II	灰色	40	末野 底部B0手法
12	須恵坏		2.2	5.2	EI	II	灰色	25	末野 底部B0手法
13	須恵坏		0.8	(6.0)	EI	II	灰色	25	末野 底部B0手法
14	須恵碗	(17.0)	3.0		EF	I	灰色	5	南比企 口唇部内面やや摩滅している
15	須恵碗	(17.0)	3.5		EF	II	灰色	5	南比企 口唇部内面摩滅している
16	須恵高台碗		1.9	(6.8)	CEI	II	灰色	30	末野 底部B0手法 高台接地面6.0cm
17	須恵高台碗		4.3	(7.8)	CEI	II	灰色	10	末野 底部B0手法 高台接地面7.1cm
18	須恵高台碗		2.6	7.5	CEF	II	灰色	65	南比企 底部B0手法 底部墨書あり 高台接地面6.5cm
19	須恵高台碗		1.6	7.1	E	II	暗青灰色	45	南比企 カマド 底部B0手法 高台接地面6.9cm
20	須恵皿	(15.8)	1.1		EI	II	灰色	10	末野
21	須恵皿		0.8	(8.0)	EI	II	灰白色	20	末野 カマド 底部B3b手法
22	土師甕	18.0			DE	II	赤色	10	
23	土師甕	(20.0)			ADE	I	にぶい赤褐色	5	カマド
24	土師甕	(18.0)			DH	II	にぶい褐色	5	
25	土師甕			(4.0)	H	II	にぶい黄褐色	5	
26	須恵甕	(34.6)			E	I	灰色	5%未満	産地不明
27	砥石								凝灰岩 長さ6.4cm 幅4.7cm 厚さ0.8cm 重さ62.4g



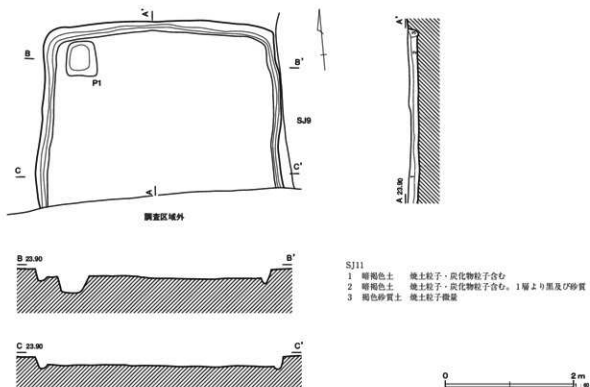
第90図 第9号住居跡出土遺物

第11号住居跡（第91・92図）

調査区西寄り Z S - 13 グリッドに検出された。南壁側は調査区外であった。また、第9号住居跡に接していた。平面形態は方形で、規模は長軸3.8m、残存短軸2.75m、深さ0.2mである。主軸方位は不明であった。床面は平坦で、柱穴は検出されなかった。北西コーナー付近に貯蔵穴と考えられる方形の

小穴が検出された。カマドは検出されなかった。壁周溝は断面U字形を呈し全周していた。遺物は覆土から散在して出土した。

出土遺物は、1は須恵器坏で底部は回転糸切り後未調整である。2・3は須恵器高台碗である。4は土師器甕である。



第91図 第11号住居跡



第92図 第11号住居跡出土遺物

第18表 第11号住居跡出土遺物観察表（第92図）

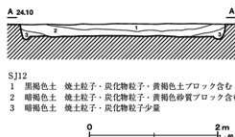
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵坏		0.9	6.4	EF	II	黄灰色	90	南比企 底部B0手法
2	須恵高台碗		1.0	(6.0)	EI	II	灰黄色	20	末野 底部B0手法 高台接地面5.8cm
3	須恵高台碗		1.9	6.4	CEI	III	灰白色	45	末野 底部B0手法 高台接地面6.2cm
4	土師甕	(19.4)			ADE	II	橙色	5	

第12号住居跡（第93・94図）

調査区西寄りZ S-13・14グリッドに検出された。住居跡の大部分は北側調査区外であった。また、第9号住居跡に切られていた。平面形態は方形で、規模は長軸3.0m、残存短軸1.1m、深さ0.25mである。主軸方位は不明であった。床面は平坦で、柱穴

は検出されなかった。カマドは、調査区内には検出されなかった。壁周溝は断面U字形を呈し全周していた。遺物は覆土から散在して出土した。

出土遺物は、1は土師器有段口縁環、2は土師器内湾環である。3は須恵器環または碗で、底部は回転糸切り後周辺ヘラ削りされている。



第93図 第12号住居跡



第94図 第12号住居跡出土遺物

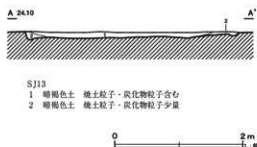
第19表 第12号住居跡出土遺物観察表（第94図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師環	(14.0)	3.1		AE	Ⅱ	にぶい褐色	5	有段口縁環 蓋模倣 内外面黒色化
2	土師環	(13.8)	2.9		DE	Ⅱ	にぶい褐色	5	内湾環
3	須恵環(碗?)		2.2	(7.2)	EF	Ⅱ	青灰色	30	南北比 底部B3b手法 外面鉄分付着

第13号住居跡（第95図）

調査区西寄りZ S-13グリッドに検出された。北壁部分は調査区外であった。また、第17号住居跡と接していた。平面形態は方形で、規模は長軸2.8m、残存短軸2.2m、深さ0.1mである。主軸方

位は不明であった。床面は平坦で、柱穴は検出されなかった。カマドは、調査区内には検出されなかった。壁周溝は断面U字形を呈し全周していた。遺物は出土しなかった。



第95図 第13号住居跡

第14号住居跡 (第96図)

調査区西寄り河川跡東側ZS-12グリッドに検出された。住居跡の大部分は調査区外であった。第5号溝に切られていた。また、第15号住居跡を切っていた。平面形態は方形を呈すると考えられる。規模は、残存長軸1.4m、残存短軸0.45m、深さ0.2mである。主軸方位は不明であった。床面は平坦で、柱穴は検出されなかった。カマドは、調査区内には検出されなかった。壁周溝は断面U字形を呈し全周していた。遺物は出土しなかった。

第15号住居跡 (第96・97图)

調査区西寄り河川跡東側ZS-12グリッドに検出された。堅穴住居跡の大部分は、北側調査区外であった。また、第14号住居跡及び第5号溝に切れ、16号住居跡及び第1号土壌を切っていた。平面形態は方形を呈すると考えられる。規模は残存長軸2.85m、残存短軸0.8m、深さ0.25mである。主軸方位は不明であった。床面は平坦で、柱穴は検出されなかった。カマドは、調査区内には検出されな

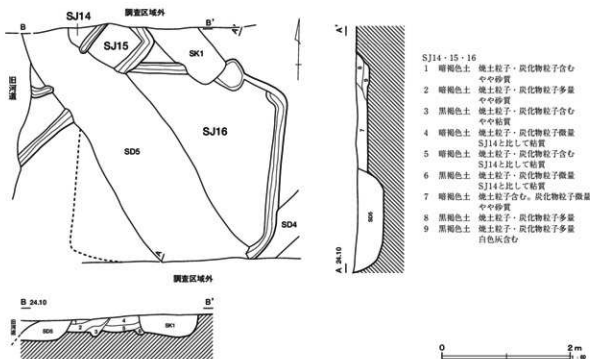
った。壁周溝は断面U字形を呈し全周していた。遺物は覆土から散在して出土した。

出土遺物は、1は須恵器坏で、底部は回転糸切り後周辺回転ヘラ削りである。

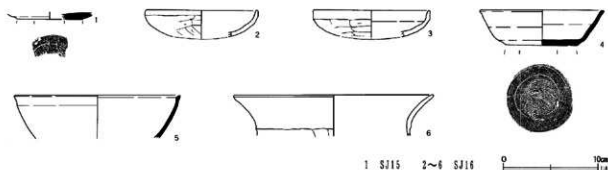
第16号住居跡 (第96・97図)

調査区西寄りZS-12グリッドに検出された。南西コーナー部分は検出されなかった。また、第15号住居跡、第1号土城、第4・5号溝に切られていた。平面形態は方形で、規模は長軸2.7m、残存短軸2.45m、深さ0.2mである。主軸方位はN-7°-Eであった。床面は平坦で、柱穴は検出されなかった。カマドは、北壁東寄りに検出された。袖は検出されなかった。燃焼部は壁ライン上に位置している。壁周溝は断面U字形を呈し北東側を中心として検出された。遺物は覆土から散在して出土した。

出土遺物は、2は土師器内湾坏、3は浅身の土師器有稜坏である。4は須恵器坏で、底部は回転糸切り後周辺ヘラ削りである。5は須恵器碗である。6は土師器甕である。



第96图 第14·15·16号住居跡



第97図 第15・16号住居跡出土遺物

第20表 第15・16号住居跡出土遺物観察表 (第97図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵坏		0.8	(7.0)	EF	Ⅱ	灰色	20	SJ15 南北企 底部B3b手法
2	土師坏	(12.0)	2.8		EH	Ⅱ	にぶい橙色	10	SJ16 内湾坏
3	土師坏	(12.2)	2.8		H	Ⅱ	にぶい橙色	10	SJ16 有様坏
4	須恵坏	13.0	3.8	7.4	CEF	Ⅱ	灰色	65	SJ16 南北企 底部B3b手法
5	須恵碗	(17.4)	4.6		EF	Ⅱ	灰色	18	SJ16 南北企
6	土師甕	(21.2)			DE	Ⅱ	にぶい橙色	5	SJ16

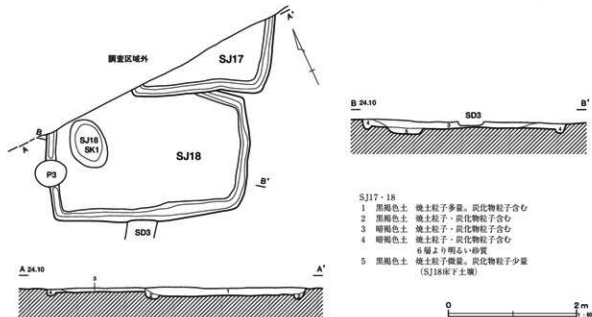
第17号住居跡 (第98図)

調査区西寄りZS-12・13グリッドに検出された。住居跡の大部分は北側調査区外であった。また、第18号住居跡を切っていた。平面形態は方形を呈すると考えられ、規模は長軸2.15m、残存短軸1.2m、深さ0.15mである。主軸方位は不明であった。床面は平坦で、柱穴は検出されなかった。カマドは、調査区内には検出されなかった。壁周溝は断

面U字形を呈し全周していた。遺物は出土しなかった。

第18号住居跡 (第98・99図)

調査区西寄りZS-12・13グリッドに検出された。北西コーナー部分は北側調査区外であった。また、第17号住居跡及びグリッドP-3に切られ、第3号溝は覆土上層を通過していた。平面形態は方形で、規模は長軸3.25m、短軸1.9m、深さ0.15mで



第98図 第17・18号住居跡

SJ17・18

- 1 黒褐色土 焼土粒子多量。炭化物粒子含む
- 2 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子含む
- 3 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子含む
- 4 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子含む
- 5 黒褐色土 6層より明るい砂質
焼土粒子微量。炭化物粒子少量
(SJ18床下土壌)

ある。主軸方位は不明であった。床面は平坦で、柱穴は検出されなかった。カマドは、調査区内には検出されなかった。壁周溝は断面U字形を呈し全周していた。住居跡西側で床下土壌が検出された。形態

は楕円形を呈し長径0.8m、短径0.6m、深さ0.1mであった。遺物は1点のみ出土した。

出土遺物は、1は灰軸陶器長頸瓶である。胴部のみの細片である。



第99図 第18・19号住居跡出土遺物

第21表 第18・19号住居跡出土遺物観察表 (第99図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	灰軸陶器長頸瓶				L	I	灰白色	5	SJ18
2	須恵坏	(13.4)	2.9		EF	II	青灰色	10	SJ19 南比企 口縁部内面擦痕有り

第19号住居跡 (第99・100図)

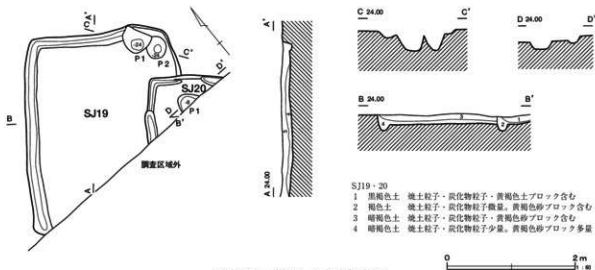
調査区西寄り ZS-12・13グリッドに検出された。南東コーナー部分は南側調査区外であった。第20号住居跡に切られていた。平面形態は方形で、規模は長軸3.1m、短軸2.45m、深さ0.15mである。主軸方位は不明であった。床面は平坦で、北東コーナーで2本の柱穴が検出された。P-1は不整形で形0.4m、深さ0.24m、P-2は、円形で径0.35m、深さ0.24mであった。カマドは、調査区内には検出されなかった。壁周溝は断面U字形を呈しほぼ全周していた。遺物は1点のみ出土した。

出土遺物は、2は須恵器坏で、口縁部内面は研磨

され摩滅している。

第20号住居跡 (第101図)

調査区西寄り ZS-13グリッドに検出された。住居跡の大部分は南側調査区外であった。また、第19号住居跡を切っていた。平面形態は方形を呈すると考えられる。規模は残存長軸1.15m、残存短軸0.95m、深さ0.15mである。主軸方位は不明であった。床面は平坦で、中央に掘り込みの浅い小穴が検出された。カマドは、調査区内では検出されなかった。壁周溝は断面U字形を呈し全周していた。遺物は出土しなかった。



第100図 第19・20号住居跡

- SJ19・20
 1 黄褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・黄褐色土ブロック含む
 2 褐色土 焼土粒子・炭化物粒子微量、黄褐色砂ブロック含む
 3 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・黄褐色砂ブロック含む
 4 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量、黄褐色砂ブロック多量

第21号住居跡（第101・102図）

調査区中央ZR・ZS-19グリッドに検出された。南壁側は南側調査区外であった。また、第25号住居跡に切られ、第22号住居跡を切っていた。平面形態は方形を呈すると考えられ、規模は残存長軸1.85m、残存短軸1.55m、深さ0.15mである。主軸方位は不明であった。床面は平坦で、柱穴は検出されなかった。カマドは、調査区内には検出されなかった。壁周溝は断面U字形を呈し全周していた。遺物は覆土から散在して出土した。

出土遺物は、1から3は土師器内湾坏である。4・5は須恵器坏で、5の底部は回転糸切り後未調整である。底部に線刻が認められる。

第22号住居跡（第101・102図）

調査区中央ZR-19グリッドに検出された。遺構の大部分は、第21・23・25号住居跡に切られていた。平面形態は方形を呈すると考えられ、規模は残存長軸2.1m、残存短軸1.0m、深さ0.05mである。主軸方位は不明であった。床面は平坦で、柱穴は検出されなかった。カマドは、調査区内には検出されなかった。壁周溝は断面U字形を呈し全周していた。遺物は土師器台付甕が出土した。

出土遺物は、6は土師器台付甕である。口縁部のみの破片でコの字状を呈す。

第23号住居跡（第101図）

調査区中央ZR-19・20グリッドに検出された。北壁部分は北側調査区外であった。また、第25号住居跡に切られ、第22・24号住居跡を切っていた。平面形態は方形で、規模は長軸3.0m、残存短軸1.75m、深さ0.2mである。主軸方位は不明であった。床面は平坦で、柱穴は検出されなかった。カマドは、調査区内には検出されなかった。壁周溝は断面U字形を呈し全周していた。遺物は出土しなかった。

第25号住居跡（第101・102図）

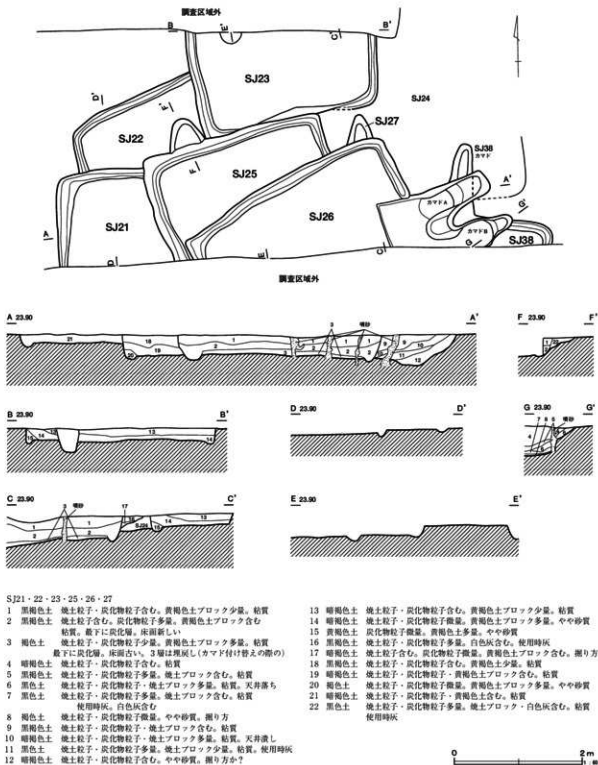
調査区中央ZR・ZS-19・20グリッドに検出された。第26号住居跡に切られ、第21・22・23・24号住居跡を切っていた。平面形態は方形を呈すると考えられ、規模は長軸2.95m、残存短軸1.75m、深さ0.20mである。主軸方位はN-15°-Wであった。床面は平坦で、柱穴は検出されなかった。カマドは、北壁西寄りに検出された。袖は検出されなかった。燃焼部は壁外に張り出している。壁周溝は断面U字形を呈し全周していた。遺物は覆土から散在して出土した。

出土遺物は、7は須恵器坏、8は須恵器碗である。

第26号住居跡（第101・102図）

調査区中央ZR・ZS-19・20グリッドに検出された。住居跡南壁側は南側調査区外であった。また、第25・27・38号住居跡を切っていた。平面形態は方形を呈すると考えられ、規模は長軸3.5m、残存短軸1.9m、深さ0.35mである。主軸方位はN-70°-Eであった。床面は平坦で、柱穴は検出されなかった。カマドは、東壁に2基併設されて検出された。カマドAは、方形の焚口で、燃焼部は、壁外に張り出していた。このカマドAを造り替えてカマドBを構築していた。右袖は造り付けで、燃焼部は壁外に張り出していた。壁周溝は断面U字形を呈し全周していた。遺物はカマド及びその周囲から纏まって出土した。

出土遺物は、9・10は須恵器坏である。11は土師器暗文坏である。12・13は土師器甕である。14は土師器甕底部である。



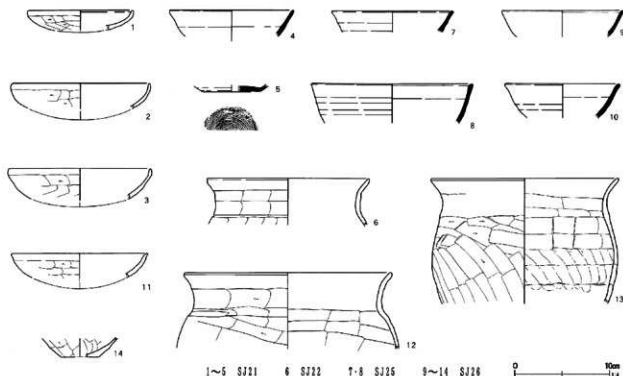
第101図 第21・22・23・25・26・27・38号住居跡

第27号住居跡（第101図）

調査区中央Z R-20グリッドに検出された。遺構のほとんどを第26号住居跡に切られ、カマドのみの検出に留まった。平面形態は不明で、主軸方位は推定N-4°-Wであった。カマドは、燃焼部のみ残存していた。遺物は出土しなかった。

第38号住居跡（第101図）

調査区中央Z R・Z S-20グリッドに検出された。カマドのみの検出に留まり、遺構の大部分は第26号住居跡に切られ、それ以外の部分は南側調査区外にあった。平面形態等は不明であった。カマドは、北側と東側に検出された。北側は煙道部分のみ検出された。東側は燃焼部の一部を検出した。遺物は出土しなかった。



第102図 第21・22・25・26号住居跡出土遺物

第22表 第21・22・25・26号住居跡出土遺物観察表（第102図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師杯	(11.2)	2.1		DH	Ⅱ	にぶい黄橙色	10	SJ21 カマド 内湾杯
2	土師杯	(14.8)	2.7		H	Ⅱ	にぶい橙色	5	SJ21 内湾杯
3	土師杯	(15.0)	3.3		DE	Ⅱ	にぶい褐色	10	SJ21 内湾杯
4	須恵杯	(13.0)	3.3		EF	Ⅱ	青灰色	10	SJ21 南比企
5	須恵杯		0.7	(6.0)	EF	Ⅱ	灰オリーブ色	50	SJ21 南比企 底部B0手法 底部線刻有り
6	土師台付甕	(17.2)			AEH	Ⅱ	橙色	5	SJ22
7	須恵杯	(12.6)	2.3		CF	Ⅱ	灰色	8	SJ25 南比企
8	須恵杯	(17.0)	4.2		CEF	Ⅱ	暗青灰色	15	SJ25 南比企
9	須恵杯	(12.6)	2.8		EI	Ⅱ	明オリーブ灰色	15	SJ26 カマドA 末野 器面風化している
10	須恵杯	(12.0)	3.7		EF	I	灰色	15	SJ26 南比企 白色針状物質を大量に含む
11	土師暗文杯	(14.4)	2.7		AH	Ⅱ	橙色	5	SJ26
12	土師甕	(22.1)			ADH	Ⅱ	橙色	5	SJ26
13	土師甕	(20.0)			DGH	Ⅱ	にぶい黄褐色	10	SJ26 カマドB
14	土師甕			(4.0)	AE	Ⅱ	灰褐色	5	SJ26 カマドB

第24号住居跡（第103・104図）

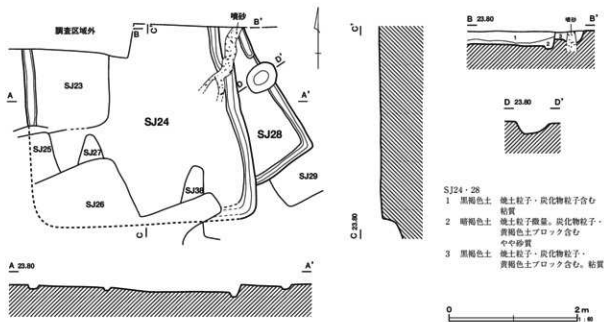
調査区中央ZR・ZS-20グリッドに検出された。北壁側は北側調査区外であった。また、第23・25・26・27・38号住居跡に切られ、第28号住居跡を切っていた。平面形態は方形で、規模は長軸3.35m、残存短軸3.1m、深さ0.2mである。主軸方位は不明であった。床面は平坦で、柱穴は検出されなかった。カマドは、調査区内には検出されなかった。壁周溝は断面U字形を呈し全周していたと考えられる。遺物は覆土から散在して出土した。

出土遺物は、1は土師器有稜環、2は土師器内湾環である。3は須恵器環で、外側面に墨書が認められる。4は須恵器環である。5は須恵器蓋である。

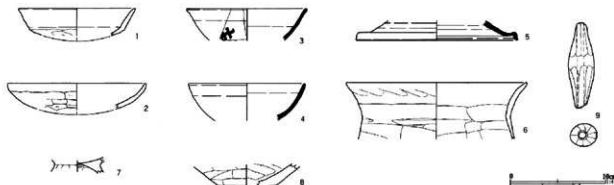
6は土師器甕で、7は土師器台付甕脚部である。8は土師器壺底部である。9は、土錘である。

第28号住居跡（第103図）

調査区中央ZR-20グリッドに検出された。北西コーナー部分は北側調査区外であった。また、第24号住居跡に切られ、第29号住居跡を切っていた。平面形態は方形を呈すると考えられ、規模は残存長軸2.95m、残存短軸1.05m、深さ0.05mである。主軸方位はN-62°-Eであった。床面は平坦で、柱穴は検出されなかった。カマドは、東壁に検出された。袖は検出されなかった。燃烧部は壁周溝ラインに位置していた。壁周溝は断面U字形を呈し遺構残存部分で全周していた。遺物は出土しなかった。



第103図 第24・28号住居跡



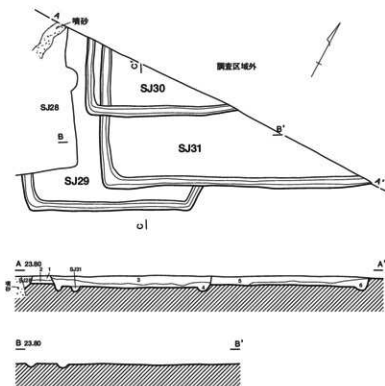
第104 第24号住居跡出土遺物

第23表 第24号住居跡出土遺物観察表（第104図）

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	土師坏	(12.4)	3.0		ADE	Ⅱ	にぶい橙色	5	有残坏
2	土師坏	(14.7)	2.8		AE	Ⅱ	にぶい黄橙色	10	内湾坏
3	須恵坏	(12.6)	3.4		EI	Ⅱ	灰色	10	末野 外面に墨書「吉」カ
4	須恵坏	(12.2)	4.0		CF	I	青灰色	15	南北比
5	須恵蓋	(17.0)	2.1		EF	Ⅱ	青灰色	10	南北比
6	土師甕	(19.1)			DEH	Ⅱ	明赤褐色	5	
7	土師台付甕				AD	Ⅱ	にぶい赤褐色	5	
8	土師壺			(6.0)	AH	Ⅱ	にぶい黄橙色	5	
9	土 鍾					I	にぶい黄橙色	100	最大長6.7cm 最大幅2.1cm 孔径0.5cm 重さ22.2g

第29号住居跡（第105図）

調査区中央ZR-20グリッドに検出された。竪穴住居跡の北壁側は北側調査区外であった。また、第28・30・31号住居跡に切られていた。平面形態は方形で、規模は残存長軸2.8m、残存短軸2.8m、深さ0.15mである。主軸方位は不明であった。床面は平坦で、柱穴は検出されなかった。カマドは、調査区内では検出されなかった。壁周溝は断面U字形を呈し遺構残存部分で全周していた。遺物は出土しなかった。



第105図 第29・30・31号住居跡

第30号住居跡（第105・106図）

調査区中央ZR-20グリッドに検出された。竪穴住居跡の大部分は北側調査区外であった。また、第29・31号住居跡を切っていた。平面形態は方形で、規模は残存長軸2.35m、残存短軸1.2m、深さ0.2mである。主軸方位は不明であった。床面は平坦で、柱穴は検出されなかった。カマドは、調査区内では検出されなかった。壁周溝は断面U字形を呈し遺構残存部分で全周していた。遺物は覆土から散在して出土した。



SJ29・30・31

- 1 黒褐色土 焼土粒子微量、炭化物粒子少量
黄褐色土ブロック少量
- 2 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・
黄褐色土ブロック含む
- 3 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子含む
黄褐色土ブロック少量、粘質
焼土粒子微量、炭化物粒子少量
- 4 暗褐色土 焼土粒子微量、炭化物粒子少量
黄褐色土ブロック少量、粘質
焼土粒子・炭化物粒子含む
- 5 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・
黄褐色土ブロック少量、粘質
- 6 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・
黄褐色土ブロック含む、やや砂質

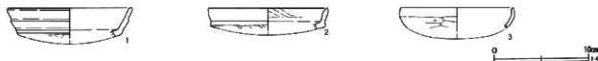


出土遺物は、1は土師器有段口縁環、2は浅身の土師器有稜環である。3は土師器内湾環である。

第31号住居跡（第105図）

調査区中央ZR-20グリッドに検出された。北東コーナー部分は北側調査区外であった。また、第30号住居跡に切られ、第29号住居跡を切っていた。

平面形態は方形で、規模は残存長軸4.25m、残存短軸2.3m、深さ0.15mである。主軸方位は不明であった。床面は平坦で、柱穴は検出されなかった。カマドは、調査区内では検出されなかった。壁周溝は断面U字形を呈し遺構残存部分で全周していた。遺物は出土しなかった。



第106図 第30号住居跡出土遺物

第24表 第30号住居跡出土遺物観察表（第106図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師環	13.2	3.2		DE	II	黒褐色	5	有段口縁環
2	土師環	(12.6)	2.3		D	II	赤褐色	5	有稜環
3	土師環	(12.0)	2.2		H	II	にぶい褐色	5	内湾環

第32号住居跡（第107・109図）

調査区中央ZR・ZS-20グリッドに検出された。南壁側は南側調査区外であった。また、第33・34号住居跡に切られていた。平面形態は方形で、規模は残存長軸2.05m、残存短軸1.15m、深さ0.1mである。主軸方位はN-23°-Wであった。床面は平坦で、柱穴は検出されなかった。カマドは、北壁中央に検出された。袖は検出されなかった。燃焼部は床面と同一レベルにあり壁外に張り出している。壁周溝は検出されなかった。遺物は覆土から散在して出土したが、第32・33号住居跡一括遺物として取り上げられたものがある。

出土遺物は、1は土師器内湾環である。

第33号住居跡（第107・109図）

調査区中央ZS-20グリッドに検出された。住居跡の大部分は南側調査区外であった。また、第34号住居跡に切られ、第32号住居跡を切っていた。平面形態は方形を呈すると思われる、規模は残存長軸1.35m、残存短軸0.7m、深さ0.1mである。主軸方位はN-41°-Wであった。床面は平坦で、柱穴は検出されなかった。カマドは、北壁に検出された。

袖は検出されなかった。燃焼部は壁外に張り出している。壁周溝は断面U字形を呈しカマドの両脇に検出された。遺物はカマド内及びその周囲から散在して出土した。

出土遺物は、2はカマド内から出土した土師器甕である。3から12までは、第32・33号住居跡一括遺物である。3・4は、須恵器坏身模倣の土師器有稜環である。5は、土師器有段口縁環である。6・7・8は土師器内湾環である。9は大ぶりの土師器暗文皿で、放射暗文が施文されている。10は、土師器甕である。11は土師器甕底部である。12は土師器壺口縁部である。

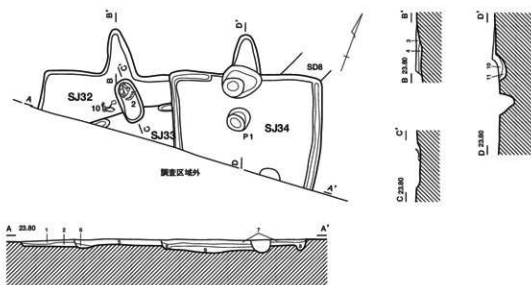
第34号住居跡（第107・109図）

調査区中央ZR・ZS-20グリッドに検出された。南壁側は南側調査区外であった。また、第32・33号住居跡及び第8号溝を切っていた。平面形態は方形で、規模は長軸2.4m、残存短軸1.75m、深さ0.2mである。主軸方位はN-21°-Wであった。床面は平坦で、中央に小穴が1基検出された。P-1は円形を呈し、深さ0.25mであった。カマドは、北壁中央に検出された。袖は検出されなかった。焚

口の掘り込みは円形で燃焼部は壁外に張り出している。壁周溝は断面U字形を呈し北壁部分で一部途切

れていた。遺物は土師器暗文皿が出土した。

出土遺物は、13は盤状の土師器暗文皿である。



SJ32・33・34

- 1 黒褐色土 やや粘質。焼土粒子・炭化物粒子含む
- 2 黒褐色土 やや粘質。焼土粒子少量。炭化物粒子微量
黄褐色砂ブロック含む
- 3 黒褐色土 やや粘質。焼土粒子・炭化物粒子多量。白色灰わずかに含む
- 4 黒褐色土 やや粘質。焼土粒子・炭化物粒子含む。カマド掘り方か?
- 5 黒褐色土 やや粘質。焼土粒子・炭化物粒子含む
- 6 黒褐色土 やや粘質。焼土粒子・炭化物粒子少量。黄褐色砂ブロック含む
- 7 黒褐色土 粘質。焼土粒子・炭化物粒子含む

- 8 褐色土 粘質。焼土粒子微量。炭化物粒子少量。黄褐色砂ブロック含む
- 9 褐色土 やや粘質。焼土粒子・炭化物粒子微量。黄褐色砂ブロック含む
掘り方
- 10 黒褐色土 粘質。焼土粒子・炭化物粒子多量。白色灰含む。カマド使用面
- 11 黒褐色土 やや粘質。焼土粒子・炭化物粒子・黄褐色砂ブロック含む
掘り方か?

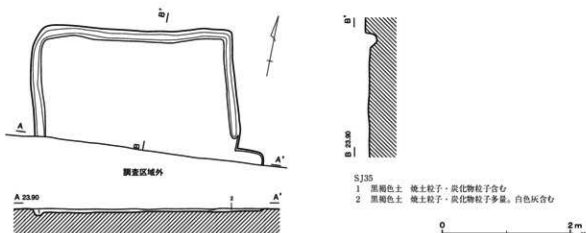
0 2m

第107図 第32・33・34号住居跡

第35号住居跡 (第108・109図)

調査区中央ZR・ZS-21グリッドに検出された。南壁側は南側調査区外であった。平面形態は方形で、規模は長軸3.25m、残存短軸2.05m、深さ0.05mである。主軸方位はN-79°-Eであった。床面は平坦

で、柱穴は検出されなかった。カマドは、東壁に検出された。袖は検出されなかった。燃焼部は床面と同一レベルで壁外に張り出している。壁周溝は断面U字形を呈し全周していた。遺物は土師器環が出土した。出土遺物は、14は土師器内溝環である。

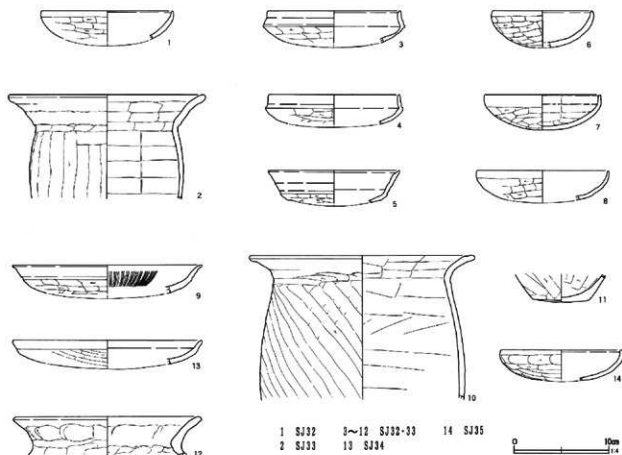


第108図 第35号住居跡

SJ35

- 1 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子含む
- 2 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子多量。白色灰含む

0 2m



第109図 第32・33・34・35号住居跡出土遺物

第25表 第32・33・34・35号住居跡出土遺物観察表 (第109図)

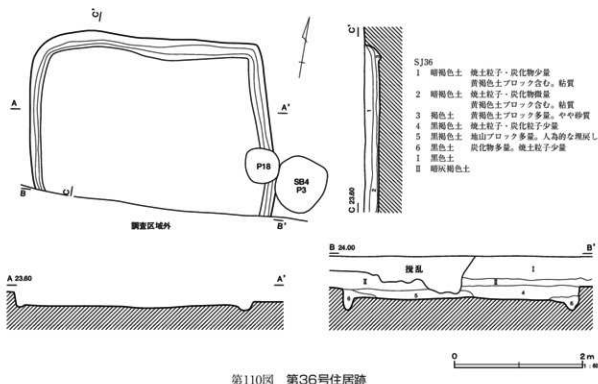
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師環	(14.0)	3.1		ADH	Ⅱ	にぶい橙色	10	SJ32 内湾环
2	土師甕	(20.8)			DH	Ⅱ	にぶい赤褐色	10	SJ33 カマド
3	土師環	(14.0)	3.4		EH	Ⅱ	にぶい赤褐色	10	SJ32・33 坏身模倣 内外面黑色化
4	土師環	(13.8)	3.1		H	Ⅱ	褐色	5	SJ32・33 坏身模倣
5	土師環	13.9	3.4		DH	Ⅱ	橙色	10	SJ32・33 有段口縁坏
6	土師環	10.9	4.0		EH	Ⅱ	にぶい黄橙色	30	SJ32・33 内湾环
7	土師環	(12.5)	3.8		DH	I	橙色	50	SJ32・33 内湾环
8	土師環	(14.0)	3.2		EH	Ⅱ	橙色	10	SJ32・33 内湾环
9	土師暗文皿	(20.0)	3.0		DE	I	にぶい赤褐色	10	SJ32・33 放射暗文
10	土師甕	(24.0)		6.0	AGH	Ⅱ	にぶい褐色	15	SJ32・33
11	土師甕				AE	Ⅱ	にぶい褐色	60	SJ32・33
12	土師壺	(20.0)			AH	Ⅱ	にぶい黄褐色	5	SJ32・33
13	土師暗文皿	(20.0)	2.5		AD	I	明赤褐色	5	SJ34
14	土師環	(13.0)	3.3		DH	Ⅱ	橙色	20	SJ35 内湾环

第36号住居跡（第110・111図）

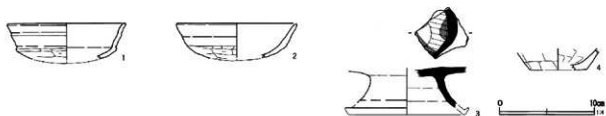
調査区中央ZR-22グリッドに検出された。南壁側は南側調査区外であった。また、第4号掘立柱建物跡及びグリッド小穴P-18に切られていた。平面形態は方形で、規模は長軸3.8m、残存短軸2.7m、深さ0.1mである。主軸方位は不明であった。床面は平坦で、柱穴は検出されなかった。カマドは、調

査区内には検出されなかった。壁周溝は断面U字形を呈し全周していた。遺物は覆土から散在して出土した。

出土遺物は、1・2は土師器有段口縁坏である。3は須恵器脚付盤で、坏部内面に研磨による磨耗が認められ転用碗の可能性もある。4は土師器甕底部である。



第110図 第36号住居跡



第111図 第36号住居跡出土遺物

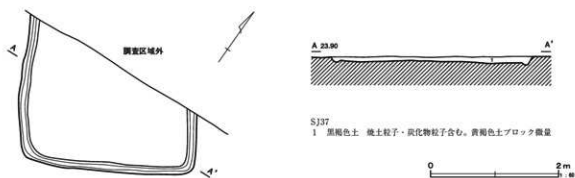
第26表 第36号住居跡出土遺物観察表（第111図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師坏	(12.5)	3.8		ADE	Ⅱ	明赤褐色	15	有段口縁 内外面黒色化
2	土師坏	(12.8)	3.7		H	Ⅱ	にぶい褐色	10	有段口縁
3	須恵器脚付盤				EF	I	灰色	10	南北比 転用碗か
4	土師甕			(6.0)	AH	Ⅱ	にぶい赤褐色	5	

第37号住居跡（第112図）

調査区中央ZR-21・22グリッドに検出された。北壁側は北側調査区外であった。また、第20号土壌を切っていた。平面形態は方形で、規模は長軸2.8m、残存短軸2.15m、深さ0.1mである。主軸方

位は不明であった。床面は平坦で、柱穴は検出されなかった。カマドは、調査区内には検出されなかった。壁周溝は断面U字形を呈し全周していた。遺物は出土しなかった。



第112図 第37号住居跡

第44号住居跡（第113・114図）

調査区東寄りZR-26・27グリッドに検出された。南東コーナー部分は調査区外であった。また、第23号溝に切られていた。平面形態は方形で、規模は長軸3.65m、短軸3.05m、深さ0.2mである。主軸方位はN-48°-Eであった。床面は平坦で、柱穴は東壁際に検出された。円形を呈し、深さ0.16mであった。カマドは、北壁東寄りに検出された。袖は検出されなかったが、袖補強材を据えたと

考えられる浅い円形の小穴が検出された。焚口に小穴が掘り込まれ、燃焼部は壁外に張り出している。また、細長い煙道が付いている。壁周溝は断面U字形を呈し東壁側のみ検出された。遺物は、カマド焚口及びその周囲から出土した。

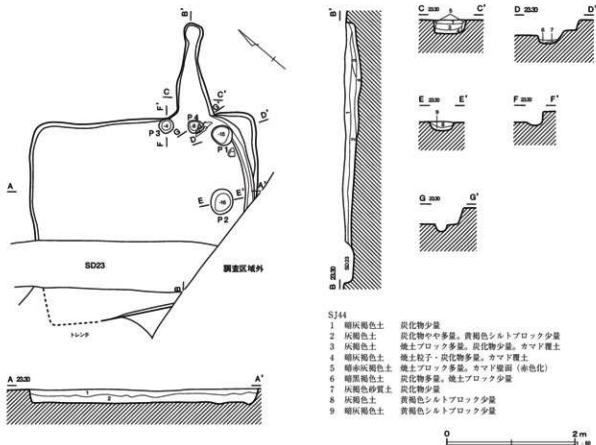
出土遺物は、1・2は須恵器で、2の底部は、回転糸切り後未調整で黒痕がある。3は土師器内湾坏である。4は浅身の土師器坏である。



第113図 第44号住居跡出土遺物

第27表 第44号住居跡出土遺物観察表（第113図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵坏	(13.4)	3.4		EF	II	青灰色	5	南比企
2	須恵坏		0.7	(7.4)	EF	II	青灰色	25	南比企 カマド 底部B0手法 底部黒書有り
3	土師坏	(13.3)	2.9		DE	II	橙色	5	内湾坏
4	土師坏	(13.6)	2.9		AD	II	にぶい橙色	5	カマド



第114図 第44号住居跡

第45号住居跡 (第115・116図)

調査区中央 ZR-22・23グリッドに検出された。遺構の大部分は北側調査区外であった。平面形態は方形で、規模は長軸3.6m、残存短軸1.4m、深さ0.2mである。主軸方位は不明であった。床面は平坦で、柱穴は東壁際に1基検出された。円形を呈し、深さ0.13mであった。カマドは、調査区内には検出されなかった。壁周溝は断面U字形を呈し全周していた。遺物は南東コーナー寄りに纏まって出土した。

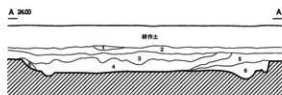
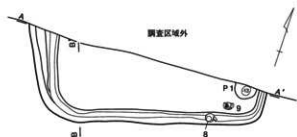
出土遺物は、1から4は須恵器環である。何れの底部も回転系切り後未調整である。5は土師器有稜環である。6は浅身の土師器環である。7は須恵器蓋で、返り部分が付かない。8・9は須恵器碗で、底部は回転系切り後周辺ヘラ削りである。10から

13は土師器甕である。

第46号住居跡 (第117・118図)

調査区中央 ZR-22グリッドに検出された。住居跡の大部分は北側調査区外であった。また、第4号掘立柱建物跡及びグリッド小穴21に切られていた。平面形態は方形を呈すると考えられ、規模は残存長軸3.2m、残存短軸1.1m、深さ0.25mである。主軸方位は不明であった。床面は平坦で、中央に小穴が1基検出された。円形の掘り込みで、深さ0.5mであった。カマドは、調査区内には検出されなかった。壁周溝は検出されなかった。遺物は覆土から散らして出土した。

出土遺物は、1は土師器有段口縁環である。2は土師器内湾環である。

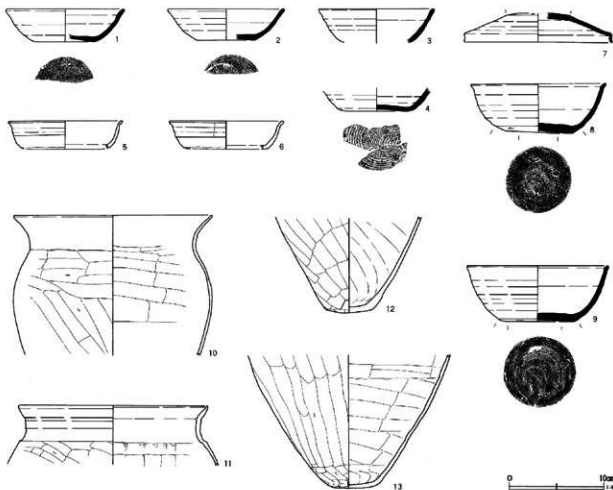


SJ45

- 1 住居埋没後の自然堆積層。炭化物多量
- 2 住居埋没後の自然堆積層
- 3 黒褐色土 炭化物粒子・焼土粒子微量（自然堆積層）
- 4 黒褐色土 炭化物粒子・焼土粒子少量
- 5 暗褐色土 炭化物多量。人為的な埋戻し層
- 6 炭化物層



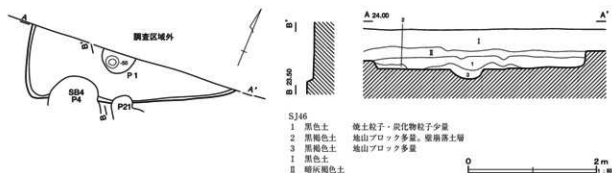
第115図 第45号住居跡



第116図 第45号住居跡出土遺物

第28表 第45号住居跡出土遺物観察表（第116図）

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	須恵坏	(12.4)	3.5	(6.2)	CF	Ⅱ	青灰色	45	南比企 底部B0手法
2	須恵坏	(12.2)	3.3	(6.1)	CEF	Ⅱ	青灰色	35	南比企 底部B0手法
3	須恵坏	(12.0)	3.6		CF	Ⅱ	灰色	20	南比企 口唇端部やや摩滅している
4	須恵坏	(11.2)	2.5	6.6	CEF	Ⅱ	灰色	40	南比企 底部B0手法
5	土師坏	(12.1)	3.0		DE	I	にぶい褐色	5	有稜坏
6	土師坏	(12.1)	3.0		DH	I	にぶい褐色	10	
7	須恵蓋	(15.4)			F	Ⅱ	暗青灰色	20	南比企
8	須恵碗	14.1	5.3	7.2	CEF	Ⅱ	青灰色	90	南比企 底部B3d手法
9	須恵碗	14.8	5.9	7.6	CEF	Ⅱ	青灰色	95	南比企 底部B3d手法 内面鉄分付着
10	土師甕	(21.0)			ADH	I	にぶい黄褐色	10	
11	土師甕	(20.0)			DH	Ⅱ	灰黄褐色	5	
12	土師甕			5.0	AH	Ⅱ	にぶい赤褐色	5	
13	土師甕			5.0	ADH	Ⅱ	にぶい赤褐色	10	外面煤付着



第117図 第46号住居跡



第118図 第46号住居跡出土遺物

第29表 第46号住居跡出土遺物観察表（第118図）

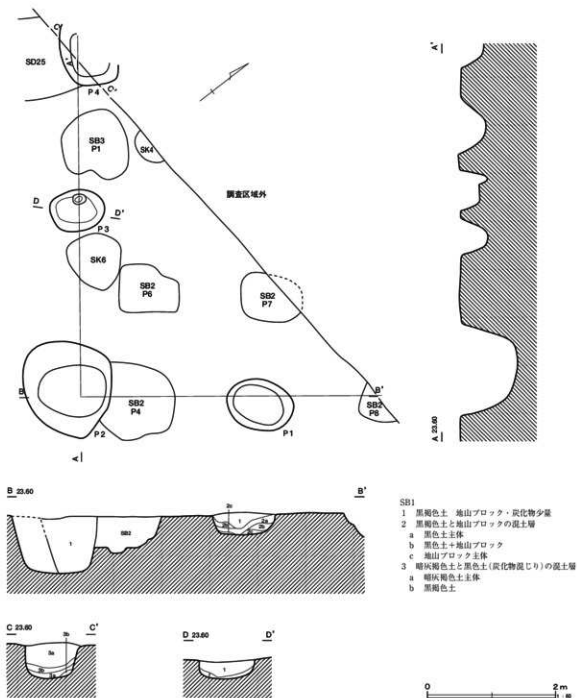
番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	土師坏	(13.5)	3.4		DEH	Ⅲ	にぶい黄褐色	10	有段口縁坏
2	土師坏	(13.0)	3.0		EH	Ⅱ	灰黄色	10	内湾坏

(2) 掘立柱建物跡

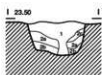
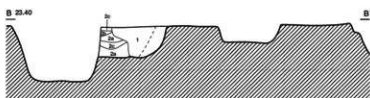
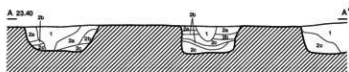
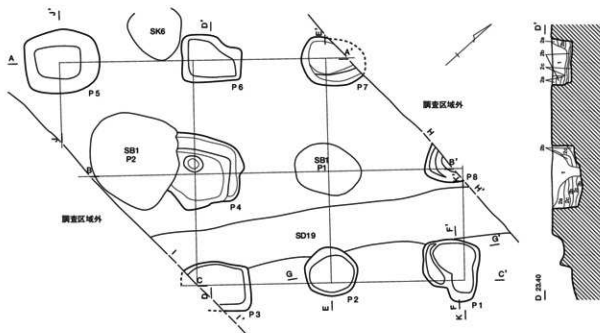
第1号掘立柱建物跡 (第119・123図)

調査区東寄り ZR-24・25グリッドに検出された。北東側柱穴列は調査区外にあった。また、第2号掘立柱建物跡及び第25号溝を切っていた。遺構検出範囲では、2×2間以上の側柱建物跡の可能性はある。主軸方位は、N-53°-Wを指す。規模

は桁行残存長5.6m、梁行残存長4.7mであった。柱間は、桁行2.8m、梁行2.8m等間となる。柱筋は概ね通っている。柱穴は、楕円形を呈し、長径0.9m～1.5m、短径0.65m～1.4m、深さ0.25m～0.9mであった。柱穴は、コーナー部分の掘り込みが深くなる特徴がある。覆土は、版築状の交互堆積が認めら



第119図 第1号掘立柱建物跡



- SB2
 1 黒褐色土 柱抜き取り痕
 2 黒褐色土と地山ブロックの混土層
 a 黒色土主体
 b 黒色土+地山ブロック
 c 地山ブロック主体



第120図 第2号掘立柱建物跡

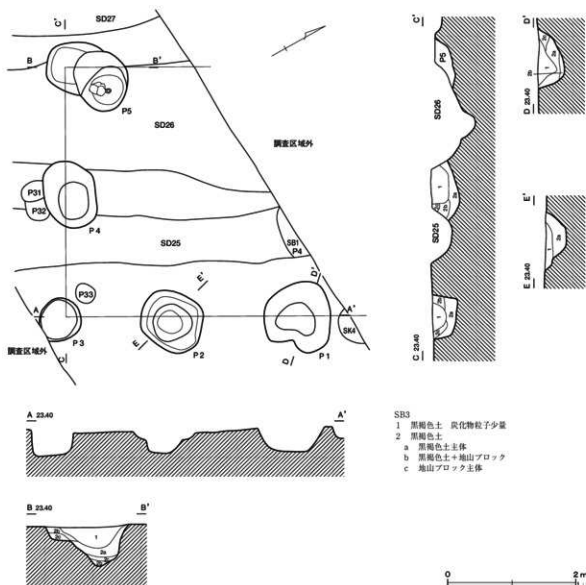
出土遺物は、1は土師器有稜坏である。2は内湾気味の土師器坏、3は土師器暗文坏で、放射暗文を施文している。4は土師器壺底部、5は土師器壺である。

第2号掘立柱建物跡 (第120・123図)

調査区東寄りZR-24・25グリッドに検出された。北東・南西側コーナーは調査区外にあった。また、第1号掘立柱建物跡に切られ、第19号溝を切っていた。遺構検出範囲では、2×3間の竪柱建物跡であった。主軸方位は、N-42°-Eを指す。規

模は桁行推定長6.4m、梁行推定長3.5mであった。柱間は、桁行2.1m、梁行1.75m等間となる。柱筋は概ね通っている。柱穴は、楕円形及び隅丸方形を呈し、長径0.85m～1.2m、短径0.75～1.0m、深さ0.35m～0.55mであった。柱穴は、コーナー部分の掘り込みが大きくなる特徴がある。覆土は、版築状の交互堆積及び柱穴抜き取り痕が認められた。遺物はP-1から6の土師器杯が、P-2から7の土師器杯、P-3から8・9の土師器杯及び10の須恵器フラスコ形瓶が出土した。

出土遺物は、6は土師器有稜坏である。7・8・9は土師器有段口縁坏、10は須恵器フラスコ形瓶である。



第121図 第3号掘立柱建物跡

第3号掘立柱建物跡 (第121・123図)

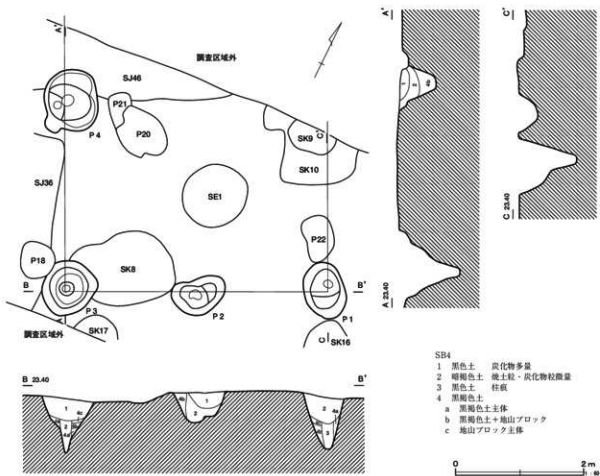
調査区東寄りZR-24グリッドに検出された。北側柱穴列は調査区外にあった。また、第25・26号溝及びグリッド小穴31・32を切っていた。遺構検出範囲では、 2×2 間以上の掘立柱建物跡の可能性がある。主軸方位は、 $N-29^{\circ}-E$ を指す。規模は桁行残存長4.5m、梁行残存長4.0mであった。柱間は、桁行1.75m、梁行2.0m等間となり、梁行が桁行を上回る。柱筋は概ね通っている。柱穴は、円形を呈し、長径0.7m～1.3m、短径0.65m～1.0m、深さ0.35m～0.65mであった。このうち、P-5は、据え替えが認められる。覆土は、版築状の交互堆積及び一部柱材の抜き取り痕が認められた。遺物はP-4から11の土師器が、P-5から12・13の土師器、14の土師器壺が出土した。

出土遺物は、11・12は土師器有段口縁環である。13は土師器内湾環である。14は土師器壺である。

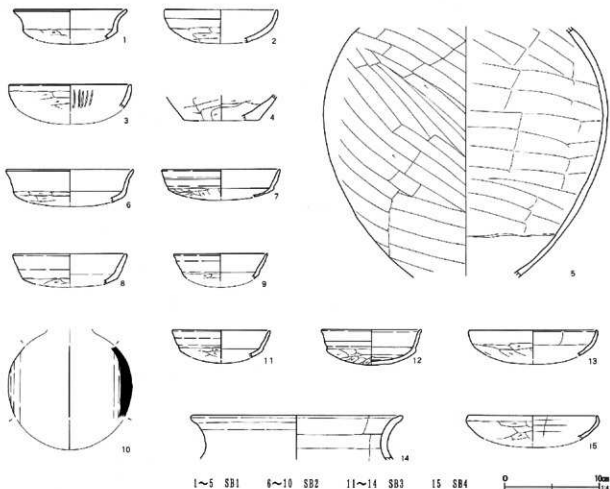
第4号掘立柱建物跡 (第122・123図)

調査区東寄りZR-22グリッドに検出された。北側柱穴列は調査区外にあった。また、第46号住居跡及び第8号土壇を切っていた。また、グリッド小穴18に切られていた。遺構検出範囲では、 2×2 間以上の掘立柱建物跡の可能性がある。主軸方位は、 $N-24^{\circ}-W$ を指す。規模は桁行残存長4.2m、梁行残存長4.2mであった。柱間は、桁行3.0m、梁行2.1m等間となる。柱筋は概ね通っている。柱穴は、円形を呈し、長径0.85m～0.95m、短径0.5m～0.9m、深さ0.5m～0.9mであった。柱穴は、コーナー部分の掘り込みが深くなる特徴がある。覆土は、版築状の交互堆積が認められ、P-1・3で柱痕が確認された。遺物はP-1から15の土師器が出土した。

出土遺物は、15は土師器内湾環である。



第122図 第4号掘立柱建物跡



第123図 掘立柱建物跡出土遺物

第30表 掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第123図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師環	(12.0)	3.2		EH	Ⅲ	にぶい黄橙色	10	SB1 Pit1 有稜環 赤彩痕跡有り
2	土師環	(12.0)	3.5		AH	Ⅱ	にぶい橙色	5	SB1 Pit2 内湾環
3	土師暗文環	(13.0)	2.6		DH	I	橙色	5	SB1 Pit2 放射暗文
4	土師甕			8.0	AD	Ⅱ	にぶい褐色	5	SB1 Pit3
5	土師壺				DE	Ⅱ	灰黄色	30	SB1 Pit3
6	土師環	(13.5)	3.5		DE	Ⅲ	浅黄橙色	10	SB2 Pit1 有稜環
7	土師環	(12.5)	3.0		AEH	Ⅱ	明赤褐色	15	SB2 Pit2 有段口縁環 内外面黒色化
8	土師環	(12.0)	3.3		DH	Ⅱ	にぶい黄褐色	5	SB2 Pit3 有段口縁環 内面黒色研磨
9	土師環	(10.0)	3.2		DH	Ⅱ	にぶい黄褐色	5	SB2 Pit3 有段口縁環
10	須恵フラスコ瓶				E	I	灰白色	5	SB2 Pit3 東海 残存部器表は全て回転ヘラケズリが施される
11	土師環	(10.4)	3.0		ADH	Ⅱ	橙色	5	SB3 Pit4 有段口縁環
12	土師環	10.6	3.8		AD	I	明赤褐色	95	SB3 Pit5 有段口縁環
13	土師環	(13.7)	2.7		AH	Ⅱ	にぶい褐色	10	SB3 Pit5 内湾環
14	土師壺	(22.5)			ADE	Ⅱ	灰褐色	5	SB3 Pit5
15	土師環	(13.7)	2.6		DH	Ⅱ	にぶい橙色	5	SB4 Pit1 内湾環

(3) 土壌

第1号土壌 (第124・126図)

調査区西寄り、ZS-12グリッドに検出された。遺構の北側部分は調査区外であった。また、第15・16号住居跡を切っていた。平面形態は長方形で、規模は残存長軸1.35m、短軸0.65m、深さ0.35mで箱型の掘り込みであった。主軸方位はN-40°-Wであった。覆土には炭化物が多量に含まれていた。遺物は、覆土中から土師器坏類・須恵器坏類・壺、砥石等が纏まって出土した。

出土遺物は、1・2は、浅身の土師器内湾坏、3は、土師器有稜坏、4は浅身の土師器坏である。5から8は、須恵器坏で、何れの底部も回転糸切り後周辺ヘラ削りである。9・10は、須恵器壺である。11は、凝灰岩製の砥石で欠損している。

第2号土壌 (第124図)

調査区西寄り、ZS-12グリッドに検出された。遺構の南側部分は調査区外であった。平面形態は円形を呈すると考えられる。規模は径1.05m、深さ0.35mの皿状の掘り込みであった。主軸方位は不明であった。遺物は出土しなかった。

第3号土壌 (第124図)

調査区東寄り、ZR-27グリッドに検出された。遺構の北側部分は調査区外であった。平面形態は隅丸方形を呈すると考えられる。規模は残存長軸1.3m、残存短軸1.05m、深さ0.25mで箱型の掘り込みであった。主軸方位はN-56°-Eであった。覆土には焼土と炭化物が含まれていた。遺物は出土しなかった。

第4号土壌 (第124図)

調査区東寄り、ZR-24グリッドに検出された。遺構の北側部分は調査区外であった。平面形態は円形を呈すると考えられる。規模は径0.6m、深さ0.4mで柱穴状の掘り込みであった。主軸方位は不明であった。覆土には炭化物が含まれていた。遺物は出土しなかった。

第5号土壌 (第124図)

調査区中央、ZR-22・23グリッドに検出された。第4号掘立柱建物跡東脇に位置していた。また、グリッド小穴23・24に切られていた。平面形態は不整形で2段の掘り込みを呈している。規模は長軸1.6m、残存短軸1.0m、深さ0.6mで柱穴状の掘り込みであった。主軸方位は不明であった。遺物は出土しなかった。

第6号土壌 (第124・126図)

調査区東寄り、ZR-24グリッドに検出された。第1・2号掘立柱建物跡間に位置していた。平面形態は不整形で、規模は長軸0.9m、短軸0.85m、深さ0.5mで箱型の掘り込みであった。主軸方位は不明であった。

出土遺物は、I2の土師器有稜坏が出土した。

第7号土壌 (第124図)

調査区東寄り、ZR-24グリッドに検出された。遺構の一部は南側調査区外であった。平面形態は不整形で、規模は残存長軸1.4m、短軸1.25m、深さ0.25mで浅い皿状の掘り込みであった。主軸方位はN-15°-Wであった。遺物は出土しなかった。

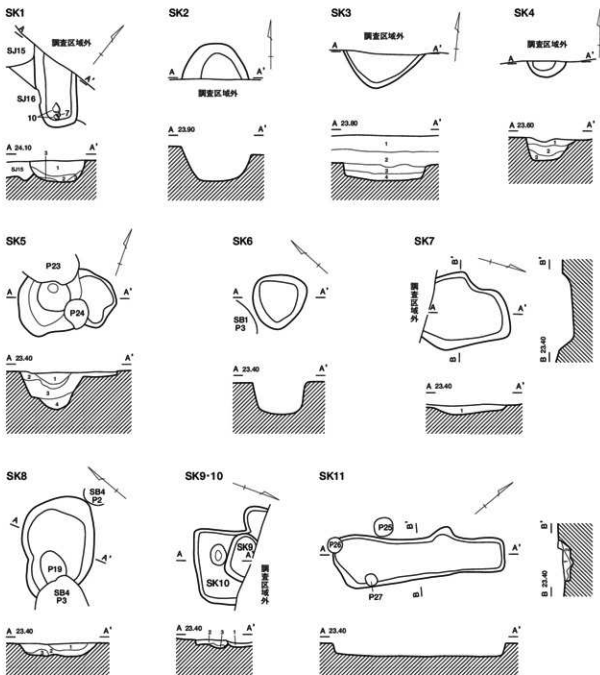
第8号土壌 (第124図)

調査区中央、ZR-22グリッドに検出された。第4号掘立柱建物跡内に位置し、同掘立柱建物跡P-3に切られていた。平面形態は楕円形で、規模は残存長軸1.35m、短軸1.15m、深さ0.25mで皿状の掘り込みであった。主軸方位はN-50°-Eであった。覆土には炭化物が多量に含まれていた。遺物は、覆土中から土師器坏・碗・甕が纏まって出土した。

出土遺物は、13・14は、土師器有段口縁坏、15・16は、土師器碗、17・18は土師器甕である。

第9号土壌 (第124図)

調査区中央、ZR-22グリッドに検出された。遺構の北側部分は調査区外であった。第4号掘立柱建物跡柱穴線上に位置し、また、第10号土壌を切っていた。平面形態は楕円形を呈すると考えられ、規



SK1
1 暗褐色土 焼土粒子微量。炭化物粒子含む
2 暗褐色土 焼土粒子含む。炭化物粒子多量
3 褐色土 焼土粒子微量。炭化物粒子微量
黄褐色砂ブロック多量

SK3
1 灰褐色土 耕作土
2 暗灰褐色土 炭化物・焼土粒子少量
(遺物も含む)
3 暗褐色土 黄褐色シルトブロック多量
4 暗灰褐色土 炭化物少量

SK4
1 黒褐色土 炭化物少量
2 黒褐色土層と炭化物層の互層
3 黒褐色土 地山ブロック多量

SK5
1 黒色土 炭化物多量
2 暗褐色土 地山ブロック多量
3 黒褐色土 地山ブロック少量
4 黒褐色土 地山粒子少量

SK7
1 明褐色土 地山ブロック多量

SK8
1 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒微量
2 黒色土 炭化物多量
3 黒褐色土 炭化物・地山ブロック少量

SK9・10
1 黒褐色土 地山ブロック多量
2 黒褐色土 炭化物多量
3 黒褐色土 地山ブロック少量

SK11
1 黒褐色土
2 黒褐色土 地山ブロック多量

0 2m

第124図 土壌 (1)

模は長軸0.75m、残存短軸0.4m、深さ0.1mで浅い皿状の掘り込みであった。主軸方位は不明であった。遺物は、出土しなかった。

第10号土壌（第124・126図）

調査区中央、ZR-22グリッドに検出された。遺構の北側は調査区外であった。また、第4号掘立柱建物跡の柱穴線上に位置し、第9号土壌に切られていた。平面形態は不整形で、規模は残存長軸1.70m、残存短軸1.05m、深さ0.15mで浅い箱型の掘り込みであった。主軸方位は不明であった。遺物は、覆土中から第9・10号土壌一括遺物として土師器が出土した。

出土遺物は、19は、土師器有稜環である。

第11号土壌（第124・126図）

調査区東寄り、ZR-23グリッドに検出された。第29号溝西側に位置していた。また、グリッド小穴26・27に切られていた。平面形態は長方形で、規模は長軸2.75m、短軸0.85m、深さ0.2mで箱型の掘り込みであった。主軸方位はN-40°-Eであった。覆土はブロック状堆積を示していた。遺物は、覆土中から土師器壺が出土した。

出土遺物は、22は、土師器壺底部である。

第12号土壌（第125図）

調査区東寄り、ZR-27・28グリッドに検出された。第13号土壌及び第22号溝を切っていた。平面形態は楕円形で、規模は長軸2.5m、短軸1.4m、深さ0.4mで皿状の掘り込みであった。主軸方位はN-82°-Eであった。遺物は出土しなかった。

第13号土壌（第125図）

調査区東寄り、ZR-28グリッドに検出された。第12号土壌に切られていた。平面形態は楕円形で、規模は残存長軸1.45m、短軸0.9m、深さ0.25mで皿状の掘り込みであった。主軸方位はN-29°-Wであった。遺物は出土しなかった。

第14号土壌（第125図）

調査区東寄り、ZR-30グリッドに検出された。第36号溝を切っていた。また、第35号溝に切られ

ていた。平面形態は楕円形で、規模は残存長軸1.6m、短軸0.95m、深さ0.1mで、箱型の掘り込みであった。主軸方位はN-7°-Eであった。遺物は、覆土中から第77図2の古墳時代土師器甕が出土したが、出土状況から流れ込みと考えられる。

第15号土壌（第125図）

調査区東寄り、ZR-28グリッドに検出された。第21号溝を切っていた。平面形態は円形で、規模は径0.55m、深さ0.35mで箱型の掘り込みであった。主軸方位は不明であった。遺物は出土しなかった。

第16号土壌（第125図）

調査区西寄り、ZR-22グリッドに検出された。第4号掘立柱建物跡南側に位置していた。平面形態は楕円形で、規模は長軸1.0m、短軸0.75m、深さ0.15mで浅い皿状の掘り込みであった。主軸方位はN-23°-Wであった。覆土には炭化物が帯状に堆積していた。遺物は出土しなかった。

第17号土壌（第125図）

調査区中央、ZR-22グリッドに検出された。遺構の南側部分は調査区外であった。また、第4号掘立柱建物跡南側に位置していた。平面形態は円形を呈すると考えられる。規模は径0.8m、深さ0.25mで箱型の掘り込みであった。主軸方位は不明であった。覆土には炭化物と焼土が多量に含まれていた。遺物は出土しなかった。

第18号土壌（第125・126図）

調査区中央、ZR-22グリッドに検出された。遺構の南側部分は調査区外であった。また、第4号掘立柱建物跡南側に位置していた。平面形態は長方形を呈すると考えられる。規模は長軸1.3m、短軸0.5m、深さ0.2mで箱型の掘り込みであった。主軸方位はN-87°-Eであった。覆土には炭化物が多量に含まれていた。遺物は、覆土中から土師器環類・須恵器環類が出土した。

出土遺物は、20は土師器有段口縁環、21は、土師器有稜環である。

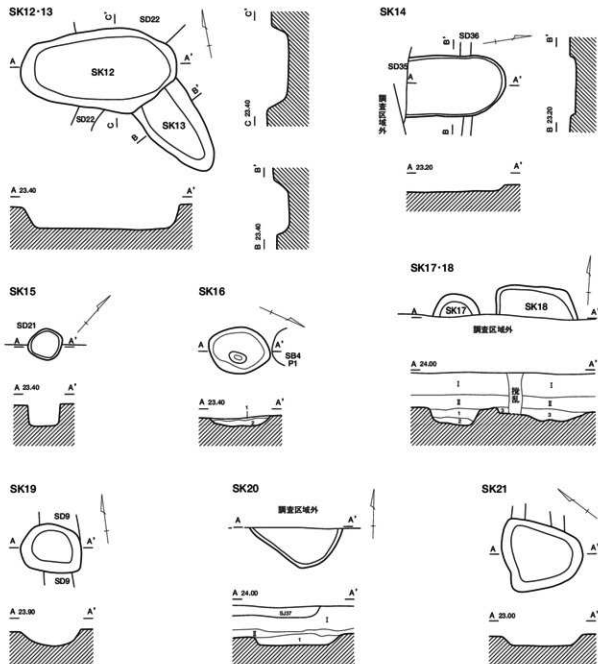
第19号土壙（第125図）

調査区中央、Z R-20グリッドに検出された。第34号住居跡東側に位置していた。また、第9号溝を切っていた。平面形態は楕円形で、規模は長軸0.95m、短軸0.8m、深さ0.25mで皿状の掘り込み

であった。主軸方位はN-83°-Wであった。遺物は出土しなかった。

第20号土壙（第125図）

調査区中央、Z R-22グリッドに検出された。遺構の北側は調査区外にあった。また、第37号住



SK16
I 灰化物層
II 黒褐色土 地山ブロック少量

SK17・18
I 黒色土
II 暗灰褐色土
III 黒色土 灰化物多量。焼土粒子微量
IV 暗灰褐色土
V 黒色土 灰化物多量。焼土粒子少量

SK20
I 黒色土
II 暗灰褐色土
III 黒色土 地山ブロック多量。焼土粒子・灰化物粒子少量

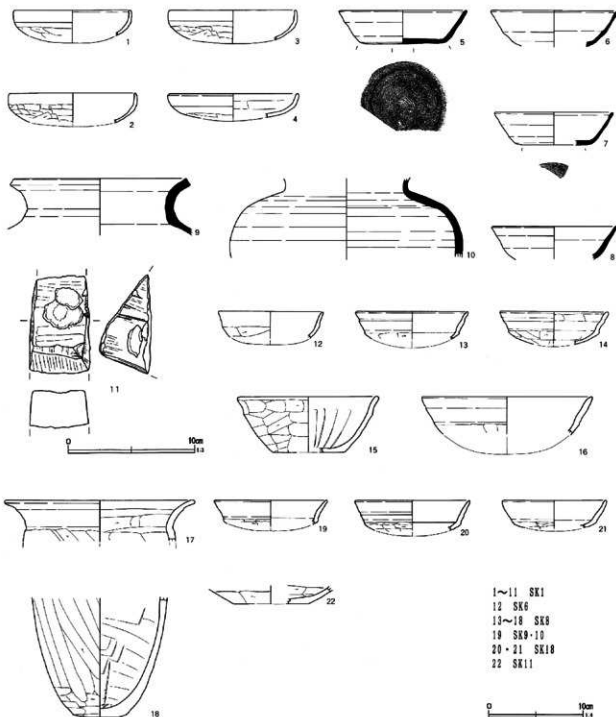
第125図 土壙 (2)

0 2m

居跡の下層に位置していた。平面形態は楕円形を呈すると考えられる。規模は残存長軸1.1m、残存短軸0.95m、深さ0.2mで皿状の掘り込みであった。主軸方位はN-52°-Wであった。覆土には焼土及び炭化物が含まれていた。遺物は出土しなかった。

第21号土壇（第125図）

調査区東寄り、ZR-28グリッドに検出された。第20号溝と第30号溝の間に位置していた。平面形態は不整形で、規模は長軸1.25m、短軸1.0m、深さ0.2mで浅い皿状の掘り込みであった。主軸方位はN-37°-Wであった。遺物は出土しなかった。



第126図 土壇出土遺物

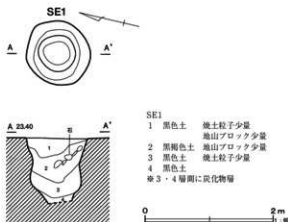
第31表 土壌出土遺物観察表 (第126図)

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	土師環	(12.2)	2.7		H	II	にぶい褐色	10	SK1 内湾环
2	土師環	(14.5)	2.5		DH	II	橙色	10	SK1 内湾环
3	土師環	(13.4)	3.2		AH	II	にぶい褐色	10	SK1 有稜环
4	土師環	(13.6)	2.6		AD	II	橙色	15	SK1
5	須恵環	(13.3)	3.6	9.2	CEF	II	灰色	45	SK1 南北企 底部B3b手法
6	須恵環	(13.2)	3.8		EF	II	灰黄色	15	SK1 南北企 底部B3d手法
7	須恵環	(12.4)	3.5	(6.6)	EF	II	青灰色	5	SK1 南北企 底部B3b手法
8	須恵環	(13.0)	3.5		CI	II	灰白色	10	SK1 末野 外面摩滅
9	須恵壺	(19.0)			E	I	緑灰色	20	SK1 末野か
10	須恵壺				CEF	II	灰色	45	SK1 南北企
11	砥石								SK1 凝灰岩 長さ7.7cm 幅4.7cm 厚さ4.0cm 重さ169.3g
12	土師環	(11.0)	2.8		AH	II	にぶい橙色	10	SK6 有稜环
13	土師環	(11.9)	3.0		DE	II	橙色	10	SK8 有段口縁环
14	土師環	(11.4)	3.7		AD	II	橙色	20	SK8 有段口縁环
15	土師碗	(15.0)	6.0	7.6	AE	II	にぶい褐色	30	SK8
16	土師碗	(18.0)	4.0		DH	II	黄灰色	5	SK8 内外面黒色化
17	土師甕	(20.1)			DEH	II	にぶい褐色	5	SK8
18	土師甕			(5.0)	DH	II	灰黄褐色	5	SK8
19	土師環	(12.0)	2.5		AD	II	明赤褐色	5	SK9-10 有稜环
20	土師環	(12.0)	3.2		AE	II	にぶい赤褐色	15	SK18 有段口縁环
21	土師環	(11.1)	2.9		AD	II	橙色	5	SK18 有稜环
22	土師壺			(8.0)	ADH	II	灰黄色	5	SK11

(4) 井戸跡

第1号井戸跡 (第127図)

調査区中央、Z R-22グリッドに検出された。第4号掘立柱建物跡内に位置していた。平面形態は円形で、規模は径1.05m、深さ0.95m以上であった。主軸方位は不明であった。掘り込みは筒形で側壁部分は崩落が認められる。また、覆土上層に大型の礫が放り込まれた状態で出土した。遺物は出土しなかった。



第127図 第1号井戸跡

(5) 小穴

第1号小穴 (第128図)

調査区西寄り、Z S-12グリッドに検出された。
第2号小穴と並んでいた。平面形態は円形で、規模は径0.25m、深さ0.2mであった。遺物は出土しなかった。

第2号小穴 (第128図)

調査区西寄り、Z S-12グリッドに検出された。
第1号小穴と並んでいた。平面形態は円形で、規模は径0.35m、深さ0.2mであった。遺物は出土しなかった。

第3号小穴 (第128図)

調査区西寄り、Z S-12グリッドに検出された。
第18号住居跡を切っていた。平面形態は円形で、規模は径0.5m、深さ0.45mであった。遺物は出土しなかった。

第4号小穴 (第128図)

調査区西寄り、Z S-13グリッドに検出された。
第5号小穴と並んでいた。平面形態は円形で、規模は径0.3m、深さ0.25mであった。遺物は出土しなかった。

第5号小穴 (第128図)

調査区西寄り、Z S-13グリッドに検出された。
第4号小穴と並んでいた。平面形態は円形で、規模は径0.35m、深さ0.3mであった。遺物は出土しなかった。

第6号小穴 (第128図)

調査区中央、Z R-20グリッドに検出された。第29号住居跡南側に位置していた。平面形態は円形で、規模は長径0.4m、短径0.3m、深さ0.15mであった。遺物は出土しなかった。

第7号小穴 (第128図)

調査区中央、Z R-20グリッドに検出された。第9号溝を切っていた。平面形態は円形で、規模は径0.6m、深さ0.35mであった。遺物は出土しなかった。

第8号小穴 (第128図)

調査区中央、Z R-21グリッドに検出された。本

跡から第17号小穴までは小範囲に纏まって検出された。平面形態は円形で、規模は径0.3m、深さ0.15mであった。遺物は出土しなかった。

第9号小穴 (第128図)

調査区中央、Z R-21グリッドに検出された。第10号小穴と並んでいた。平面形態は円形で、規模は径0.25m、深さ0.25mであった。遺物は出土しなかった。

第10号小穴 (第128図)

調査区西寄り、Z S-12グリッドに検出された。第2号小穴と並んでいた。平面形態は円形で、規模は径0.25m、深さ0.2mであった。遺物は出土しなかった。

第11号小穴 (第128図)

調査区中央、Z R-21グリッドに検出された。第10号溝を切っていた。平面形態は楕円形で、規模は長径0.6m、短径0.35m、深さ0.4mであった。遺物は出土しなかった。

第12号小穴 (第128図)

調査区中央、Z R-21グリッドに検出された。第10号溝と第11号溝の間に位置していた。平面形態は円形で、規模は径0.55m、深さ0.3mであった。遺物は出土しなかった。

第13号小穴 (第128図)

調査区中央、Z R-21グリッドに検出された。第11号溝を切っていた。平面形態は円形で、規模は径0.6m、深さ0.35mであった。遺物は出土しなかった。

第14号小穴 (第128図)

調査区中央、Z R-21グリッドに検出された。第11号溝を切っていた。平面形態は円形で、規模は径0.3m、深さ0.2mであった。遺物は出土しなかった。

第15号小穴 (第128図)

調査区中央、Z R-21グリッドに検出された。第11号溝を切っていた。平面形態は円形で、規模は径0.4m、深さ0.5mであった。遺物は出土しなかった。

第16号小穴 (第128図)

調査区中央、Z R-21グリッドに検出された。第11号溝と第35号住居跡の間に位置していた。平面形態は円形で、規模は径0.25m、深さ0.25mであった。遺物は出土しなかった。

第17号小穴 (第128図)

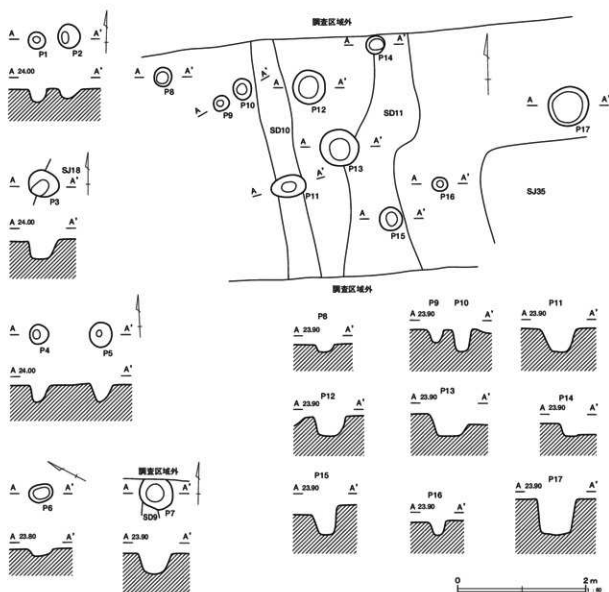
調査区中央、Z R-21グリッドに検出された。第35号住居跡北側に位置していた。平面形態は円形で、規模は径0.65m、深さ0.55mであった。遺物は出土しなかった。

第18号小穴 (第129図)

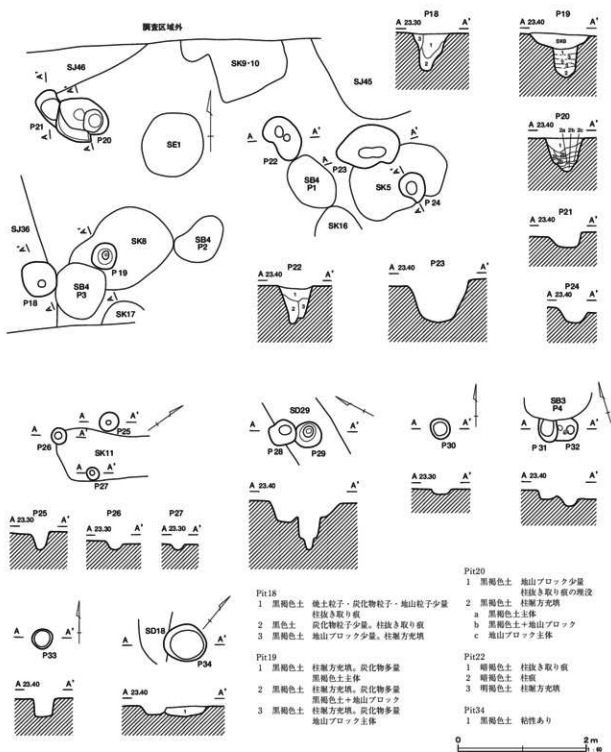
調査区中央、Z R-22グリッドに検出された。本跡を含めて第24号小穴までは、第4号掘立柱建物跡周辺部に纏まって検出された。平面形態は円形で、規模は径0.6m、深さ0.6mであった。遺物は出土しなかった。

第19号小穴 (第129図)

調査区中央、Z R-22グリッドに検出された。第8号土壇を切っていた。平面形態は円形で、規模は径0.45m、深さ0.7mで覆土は版築上の堆積が認め



第128図 小穴 (1)



第129図 小穴 (2)

られた。遺物は出土しなかった。

第20号小穴（第129図）

調査区中央、Z R-22グリッドに検出された。第46号住居跡南側に位置していた。平面形態は円形で、規模は径0.85m、深さ0.55mであった。遺物は出土しなかった。

第21号小穴（第129図）

調査区中央、Z R-22グリッドに検出された。第46号住居跡を切っていた。また、第20号小穴に切られていた。平面形態は円形で、規模は径0.45m、深さ0.25mであった。遺物は出土しなかった。

第22号小穴（第129図）

調査区中央、Z R-22グリッドに検出された。第4号掘立柱建物跡P-1北側に位置していた。平面形態は楕円形で、規模は長径0.75m、短径0.45m、深さ0.6mであった。また、柱痕が検出された。遺物は出土しなかった。

第23号小穴（第129図）

調査区中央、Z R-22グリッドに検出された。第5号土壌を切っていた。平面形態は楕円形で、規模は長径1.0m、短径0.7m、深さ0.6mであった。遺物は出土しなかった。

第24号小穴（第129図）

調査区中央、Z R-23グリッドに検出された。第5号土壌を切っていた。平面形態は円形で、規模は径0.5m、深さ0.25mであった。遺物は出土しなかった。

第25号小穴（第129図）

調査区東寄り、Z R-23グリッドに検出された。第11号土壌西側に位置していた。平面形態は円形で、規模は径0.3m、深さ0.3mであった。遺物は出土しなかった。

第26号小穴（第129図）

調査区東寄り、Z R-23グリッドに検出された。第11号土壌を切っていた。平面形態は円形で、規模は径0.25m、深さ0.15mであった。遺物は出土しなかった。

第27号小穴（第129図）

調査区東寄り、Z R-23グリッドに検出された。

第11号土壌を切っていた。平面形態は円形で、規模は径0.25m、深さ0.1mであった。遺物は出土しなかった。

第28号小穴（第129図）

調査区東寄り、Z R-23グリッドに検出された。第29号溝を切っていた。また第29号小穴と並んでいた。平面形態は円形で、規模は径0.4m、深さ0.35mであった。遺物は出土しなかった。

第29号小穴（第129図）

調査区東寄り、Z R-23グリッドに検出された。第29号溝を切っていた。また、第28号小穴と並んでいた。平面形態は円形で、規模は径0.4m、深さ0.75mであった。遺物は出土しなかった。

第30号小穴（第129図）

調査区東寄り、Z R-23グリッドに検出された。第28号溝と第29号溝の間に位置していた。平面形態は円形で、規模は径0.3m、深さ0.1mであった。遺物は出土しなかった。

第31号小穴（第129図）

調査区東寄り、Z R-24グリッドに検出された。第3号掘立柱建物跡P-4に切られていた。また、第32号小穴を切っていた。平面形態は円形で、規模は径0.35m、深さ0.3mであった。遺物は出土しなかった。

第32号小穴（第129図）

調査区東寄り、Z R-24グリッドに検出された。第4号掘立柱建物跡P-4及び第31号小穴に切られていた。平面形態は円形で、規模は径0.35m、深さ0.25mであった。遺物は出土しなかった。

第33号小穴（第129図）

調査区東寄り、Z R-24グリッドに検出された。第3号掘立柱建物跡P-3北側に位置していた。平面形態は円形で、規模は径0.3m、深さ0.3mであった。遺物は出土しなかった。

第34号小穴（第129図）

調査区東寄り、Z R-25・26グリッドに検出さ

れた。第17号溝南側に位置していた。平面形態は円形で、規模は径0.7m、深さ0.15mであった。遺物は出土しなかった。

第35号小穴（第130図）

調査区東寄り、Z R - 25・26グリッドに検出された。第34号小穴南側に位置していた。平面形態は円形で、規模は径0.5m、深さ0.3mであった。遺物は出土しなかった。

第36号小穴（第130図）

調査区東寄り、Z R - 26グリッドに検出された。第17号溝南側に位置していた。平面形態は円形で、規模は径0.5m、深さ0.25mであった。遺物は出土しなかった。

第37号小穴（第130図）

調査区東寄り、Z R - 26グリッドに検出された。第36号小穴南東側に位置していた。平面形態は円形で、規模は径0.65m、深さ0.25mであった。遺物は出土しなかった。

第38号小穴（第130図）

調査区東寄り、Z R - 27グリッドに検出された。本跡を含めて第48号小穴まで、小範囲に纏まって検出された。また、第44号住居跡北側に位置していた。平面形態は円形で、規模は径0.5m、深さ0.15mであった。遺物は出土しなかった。

第39号小穴（第130図）

調査区東寄り、Z R - 27グリッドに検出された。第3号土塹東側に位置していた。平面形態は円形で、規模は径0.2m、深さ0.15mであった。遺物は出土しなかった。

第40号小穴（第130図）

調査区東寄り、Z R - 27グリッドに検出された。第44号住居跡東側に位置していた。平面形態は円形で、規模は径0.25m、深さ0.1mであった。遺物は出土しなかった。

第41号小穴（第130図）

調査区東寄り、Z R - 27グリッドに検出された。第43号小穴と並んでいた。平面形態は円形で、規

模は径0.3m、深さ0.1mであった。遺物は出土しなかった。

第42号小穴（第130図）

調査区東寄り、Z R - 27グリッドに検出された。第41号小穴南側に位置していた。平面形態は円形で、規模は径0.25m、深さ0.1mであった。遺物は出土しなかった。

第43号小穴（第130図）

調査区東寄り、Z R - 27グリッドに検出された。第41号小穴と並んでいた。平面形態は円形で、規模は径0.45m、深さ0.1mであった。遺物は出土しなかった。

第44号小穴（第130図）

調査区東寄り、Z R - 27グリッドに検出された。第43号小穴南側に位置していた。平面形態は円形で、規模は径0.35m、深さ0.15mであった。覆土から柱根が検出された。

第45号小穴（第130図）

調査区東寄り、Z R - 27グリッドに検出された。第46号小穴と並んでいた。平面形態は円形で、規模は径0.3m、深さ0.1mであった。遺物は出土しなかった。

第46号小穴（第130図）

調査区東寄り、Z R - 25・26グリッドに検出された。第34号小穴南側に位置していた。平面形態は円形で、規模は径0.5m、深さ0.3mであった。遺物は出土しなかった。

第47号小穴（第130図）

調査区東寄り、Z R - 27グリッドに検出された。第46号小穴南側に位置していた。平面形態は楕円形で、規模は長径0.5m、短径0.35m、深さ0.1mであった。遺物は出土しなかった。

第48号小穴（第130図）

調査区東寄り、Z R - 27グリッドに検出された。第22号溝西側に位置していた。平面形態は円形で、規模は径0.25m、深さ0.1mであった。遺物は出土しなかった。

第49号小穴 (第130回)

調査区東寄り、Z R-28グリッドに検出された。第20号溝東側に位置していた。平面形態は円形で、規模は径0.3m、深さ0.1mであった。遺物は出土しなかった。

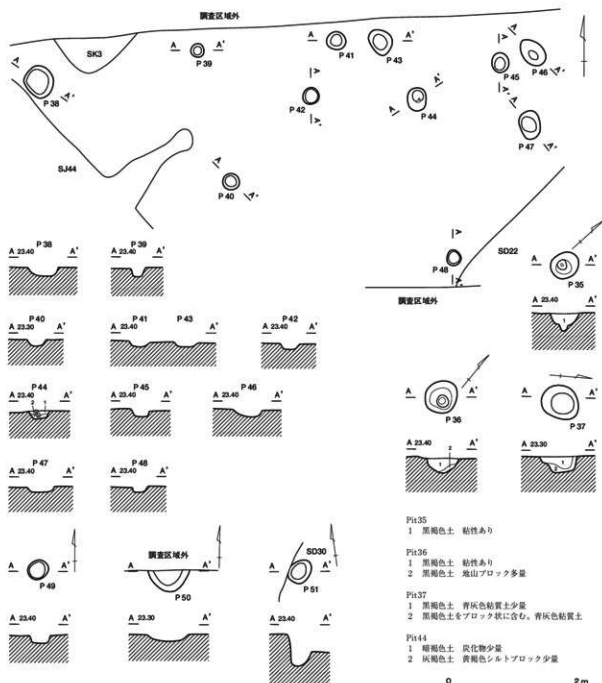
第50号小穴 (第130回)

調査区東寄り、Z R-29グリッドに検出された。遺構の北側は調査区外であった。また、第30号溝

西側に位置していた。平面形態は円形を呈すると考えられる。規模は径0.7m、深さ0.1mであった。遺物は出土しなかった。

第51号小穴 (第130回)

調査区東寄り、Z R-29グリッドに検出された。第30号溝を切っていた。平面形態は円形で、規模は径0.45m、深さ0.35mであった。遺物は出土しなかった。



第130图 小穴(3)

(6) 溝

第1号溝 (第131・132・136図)

調査区西寄り、Z R・Z S-15グリッドに検出された。直線的に延びる溝で、走行方向はN-11°-Eであった。溝断面の形状は逆台形状を呈し、二段掘り込みであった。規模は幅1.95m、深さ0.65mであった。遺物は、覆土中から土師器坏類、碗、甕、須恵器坏類、フラスコ形瓶、甕が出土した。

出土遺物は、1は土師器内湾坏である。2は口径が闊く土師器坏である。3から8は、須恵器坏である。5・6・8の底部は回転糸切り後周辺ヘラ削りであるが、他は、回転糸切り後未調整である。9は土師器碗である。10は須恵器蓋である。11は須恵器高台碗である。12は須恵器フラスコ形瓶である。13は土師器壺、14は土師器甕である。15・16・17は須恵器甕口縁部である。19は須恵器甕胴部、18・20・21は須恵器大甕である。

第2号溝 (第131図)

調査区西寄り、Z S-13グリッドに検出された。やや湾曲する溝で、南側は立ち上がり、北側は調査区外に続いていた。走行方向はN-46°-Eであった。溝断面の形状はV字形を呈していた。規模は幅0.9m、深さ0.25mであった。遺物は出土しなかった。

第3号溝 (第131図)

調査区西寄り、Z S-12グリッドに検出された。直線的に延びる溝で、第18号住居跡を切って立ち上がっていた。走行方向はN-32°-Eであった。溝断面の形状は浅い皿状を呈していた。規模は幅0.5m、深さ0.1mであった。遺物は出土しなかった。

第4号溝 (第131図)

調査区西寄り、Z S-12グリッドに検出された。第16号住居跡を切り第5号溝に切られていた。湾曲する溝で、走行方向はN-34°-Eであった。溝断面の形状は皿状を呈していた。規模は幅0.65m、深さ0.2mであった。遺物は出土しなかった。

第5号溝 (第131図)

調査区西寄り、Z S-12グリッドに検出された。

第14・15・16号住居跡を切っていた。直線的に延びる溝で、走行方向はN-37°-Wであった。溝断面の形状は逆台形状を呈していた。規模は幅1.03m、深さ0.45mであった。遺物は出土しなかった。

第6号溝 (第133図)

調査区西寄り、Z R・Z S-17グリッドに検出された。直線的に延びる溝で、走行方向はN-1°-Wであった。溝断面の形状は逆台形状を呈していた。規模は幅1.1m、深さ0.4mであった。遺物は出土しなかった。

第7号溝 (第133図)

調査区西寄り、Z R・Z S-17・18グリッドに検出された。直線的に延びる溝で、走行方向はN-28°-Wであった。溝断面の形状は浅い皿状を呈していた。規模は幅0.85m、深さ0.15mであった。遺物は出土しなかった。

第8号溝 (第133図)

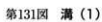
調査区中央、Z R・Z S-20グリッドに検出された。第34号住居跡に切られていた。直線的に延びる溝で、走行方向はN-24°-Eであった。溝断面の形状は皿状を呈していた。規模は幅0.55m、深さ0.3mであった。遺物は出土しなかった。

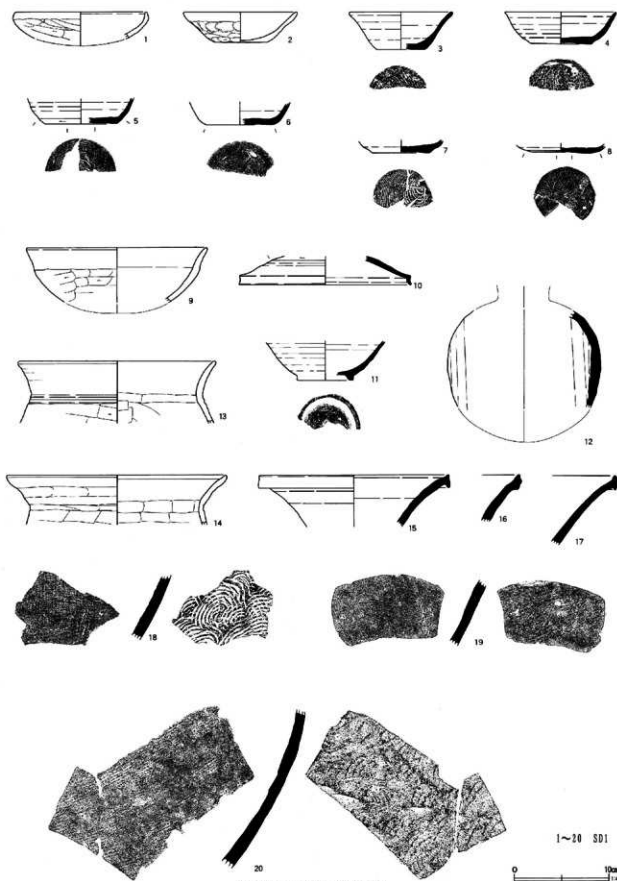
第9号溝 (第133図)

調査区中央、Z R・Z S-20・21グリッドに検出された。第19号土壇及びグリッド小穴7に切られていた。直線的に延びる溝で、走行方向はN-1°-Wであった。溝断面の形状は皿形を呈していた。覆土に炭化物及び焼土が含まれていた。規模は幅0.6m、深さ0.2mであった。遺物は出土しなかった。

第10号溝 (第133・136図)

調査区中央、Z R・Z S-21グリッドに検出された。グリッド小穴11に切られていた。直線的に延びる溝で、走行方向はN-11°-Wであった。溝断面の形状は逆台形状を呈していた。規模は幅0.55m、深さ0.2mであった。遺物は、覆土中から





第132図 満出土遺物 (1)

第32表 溝出土遺物観察表(1) (第132図)

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	土師環	(14.0)	2.9		A	Ⅱ	にぶい黄褐色	10	SD1 内溝環
2	土師環	12.0	3.2	5.7	A	Ⅱ	にぶい褐色	40	SD1
3	須恵環	(10.9)	(4.0)		EI	Ⅲ	褐色	30	SD1 末野 底部B0手法
4	須恵環	(11.7)	3.4	6.5	EI	Ⅱ	灰色	40	SD1 末野 底部B0手法
5	須恵環		2.8	(7.6)	CF	Ⅱ	灰白色	45	SD1 南比企 底部B3d手法
6	須恵環		2.4	(7.0)	EI	Ⅱ	灰白色	45	SD1 末野 底部B3b手法
7	須恵環		1.4	6.2	E	Ⅱ	灰色	60	SD1 群馬か 底部B0手法
8	須恵環		1.0	6.0	EF	Ⅱ	灰黄褐色	50	SD1 南比企 底部B3d手法
9	土師碗	(19.0)	5.9		DH	Ⅱ	褐色	10	SD1
10	須恵蓋	(18.0)	3.0		F	Ⅱ	青灰色	10	SD1 南比企
11	須恵高台碗		4.2	(6.0)	EI	Ⅱ	灰色	50	SD1 末野 底部B0手法 高台接地面5.8cm
12	須恵アスコ瓶				EL	I	灰色	10	SD1 東海
13	土師壺	(20.8)			EH	Ⅱ	にぶい黄褐色	5	SD1
14	土師甕	(23.3)			DH	Ⅱ	褐色	5	SD1
15	須恵甕	(20.0)			EF	I	暗青灰色	15	SD1 南比企
16	須恵甕	(30.0)			EI	I	青灰色		SD1 末野
17	須恵甕				CEF	Ⅱ	灰白色		SD1 南比企
18	須恵大甕				E	Ⅱ	灰褐色		SD1 群馬か
19	須恵甕				CEF	Ⅱ	灰色		SD1 南比企
20	須恵大甕				E	Ⅱ	灰色		SD1 群馬か

土師器環が出土した。

出土遺物は、22は土師器有段口縁環である。

第11号溝 (第133図)

調査区中央、Z R・Z S-21グリッドに検出された。第10号住居跡に並んで位置していた。クランク状に曲がる溝で、走行方向はN-3°-Wであった。溝断面の形状は逆台形状を呈していた。規模は幅1.3m、深さ0.25mであった。遺物は出土しなかった。

第17号溝 (第134図)

調査区東寄り、Z R・Z S-25・26グリッドに検出された。第18号溝を切って立ち上がっていた。直線的に延びる溝で、走行方向はN-47°-Eであった。溝断面の形状は皿状を呈していた。規模は幅0.4m、深さ0.25mであった。遺物は出土しなかった。

第18号溝 (第134図)

調査区東寄り、Z R・Z S-25グリッドに検出された。第17号溝に切れその先で立ち上がっていた。直線的に延びる溝で、走行方向はN-40°-W

であった。溝断面の形状はU字形を呈していた。規模は幅0.7m、深さ0.25mであった。遺物は出土しなかった。

第19号溝 (第134図)

調査区東寄り、Z R-25グリッドに検出された。第2号掘立柱建物跡に切られていた。直線的に延びる溝で、走行方向はN-31°-Eであった。溝断面の形状は皿状を呈していた。規模は幅0.8m、深さ0.25mであった。遺物は出土しなかった。

第20号溝 (第134図)

調査区東寄り、Z R-28グリッドに検出された。第21号溝を切っていた。直線的に延びる溝で、走行方向はN-20°-Eであった。溝断面の形状は皿状を呈していた。覆土に浅間A火山灰が含まれていた。規模は幅1.0m、深さ0.15mであった。遺物は出土しなかった。

第21号溝 (第134図)

調査区東寄り、Z R-28グリッドに検出された。第20号溝及び第15号土壌に切られていた。直線的に延びる溝で、走行方向はN-50°-Eであった。

あった。溝断面の形状は逆台形状を呈し、二段掘り込みであった。規模は幅0.8m、深さ0.25mであった。遺物は出土しなかった。

第24号溝 (第135図)

調査区東寄り、Z R-26グリッドに検出された。南側をトレンチで壊されていた。直線的に延びる溝で、走行方向はN-4°-Eであった。溝断面の形状はU字状を呈していた。規模は幅0.45m、深さ0.2mであった。遺物は出土しなかった。

第25号溝 (第135・136図)

調査区東寄り、Z R-24グリッドに検出された。本跡を含めて第29号溝までは併走する溝であった。また、第3号掘立柱建物跡P-4及びグリッド小穴32に切られていた。直線的に延びる溝で、走行方向はN-29°-Eであった。溝断面の形状は逆台形状であった。規模は幅1.1m、深さ0.25mであった。遺物は、覆土中から土師器坏類、鉢、甕、須恵器長頸瓶が出土した。

出土遺物は、23・24は土師器有段口縁坏である。25・26は土師器有稜坏である。27は土師器内湾坏である。28は土師器暗文坏で、放射暗文が施文されている。29は、土師器鉢である。30は土師器甕である。31は須恵器長頸瓶底部である。

第26号溝 (第135・136図)

調査区東寄り、Z R-24グリッドに検出された。第3号掘立柱建物跡P-5に切られていた。直線的に延びる溝で、走行方向はN-30°-Eであった。溝断面の形状は逆台形状を呈し、二段掘り込みであった。規模は幅1.9m、深さ0.7mであった。遺物は、覆土中から土師器坏類、甕、甕、須恵器坏類、高台碗、長頸瓶、甕が出土した。

出土遺物は、32は土師器坏、33は土師器内湾坏である。34・35は須恵器坏で、何れの底部も回転糸切り後未調整である。36は、須恵器坏で、回転糸切り後周辺ヘラ削りである。37は須恵器高台碗である。38は土師器甕口縁部である。39は土師器甕である。40・41は須恵器長頸瓶である。42・43

は須恵器甕である。

第27号溝 (第135図)

調査区東寄り、Z R-23・24グリッドに検出された。やや湾曲する溝で、走行方向はN-28°-Eであった。溝断面の形状はU字形を呈していた。規模は幅0.6m、深さ0.2mであった。遺物は出土しなかった。

第28号溝 (第135・136図)

調査区東寄り、Z R-23・24グリッドに検出された。クランク状に蛇行する溝で、走行方向はN-38°-Eであった。溝断面の形状は逆台形状を呈していた。規模は幅0.85m、深さ0.25mであった。遺物は、覆土中から土師器坏、須恵器坏が出土した。

出土遺物は、44は、土師器暗文坏で放射暗文が施文されている。45・46は須恵器坏で45の底部はヘラ切りヘラ調整、46の底部は回転糸切り後未調整である。

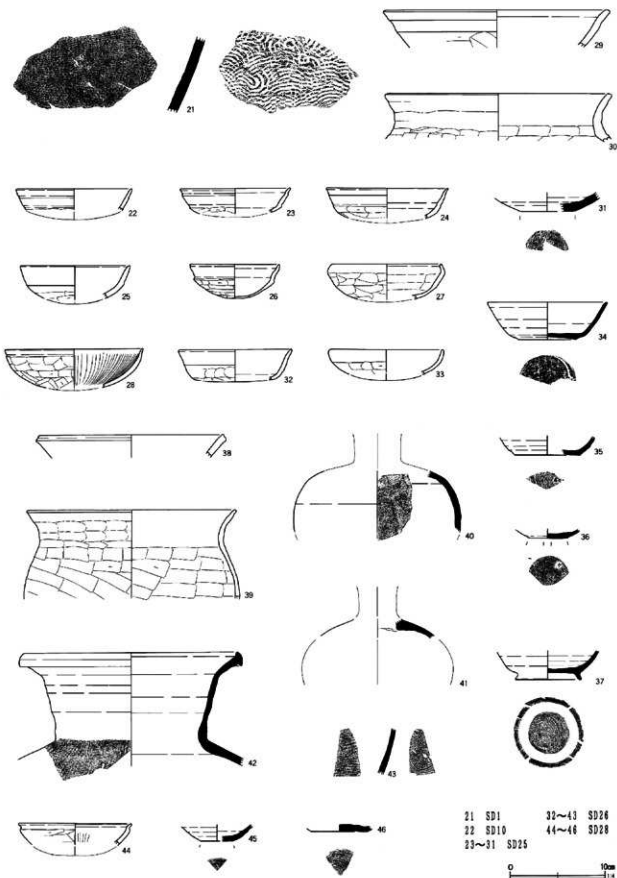
第29号溝 (第135・139図)

調査区東寄り、Z R-23グリッドに検出された。グリッド第28・29号小穴に切られていた。直線的に延びる溝で、走行方向はN-34°-Eであった。溝断面の形状は逆台形状を呈し、一部二段掘り込みであった。規模は幅0.9m、深さ0.4mであった。遺物は、覆土中から土師器坏類、甕、甕、甕、須恵器提瓶が出土した。

出土遺物は、47が須恵器坏身模倣の土師器坏である。48は土師器有段口縁坏、49は土師器内湾坏である。50は、土師器甕、51は土師器甕底部、52は土師器甕底部である。53は須恵器提瓶で把手は欠損している。

第30号溝 (第137・139図)

調査区東寄り、Z R-28・29グリッドに検出された。本跡を含めて第32・33号溝は併走する溝であった。また、第32号溝を切り第31号溝に切られていた。直線的に延びる溝で、走行方向はN-42°-Eであった。溝断面の形状は皿状を呈し、一部二段掘り込みであった。規模は幅1.3m、深さ



第136図 溝出土遺物 (2)

第33表 満出土遺物観察表(2) (第136図)

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色 調	残存率	備 考
21	須恵大甕				E	Ⅱ	褐灰色		SD1 群馬か
22	土師環	(12.2)	2.3		AH	Ⅱ	橙色	5	SD10 有段口縁坏
23	土師環	(11.6)	2.7		AD	I	褐色	10	SD25 有段口縁坏
24	土師環	12.8	3.2		AD	Ⅱ	淡褐色	5	SD25 有段口縁坏
25	土師環	(11.6)	4.0		ACD	I	褐色	5	SD25 有段口縁坏
26	土師環	9.4	3.8	8.4	AE	Ⅱ	にぶい黄褐色	95	SD25 有段口縁坏
27	土師環	11.6	3.8		D	I	褐色	10	SD25 内湾坏
28	土師暗文坏	(14.6)	4.4		D	Ⅱ	浅黄褐色	15	SD25 放射暗文
29	土師鉢	(24.0)			H	Ⅱ	にぶい褐色	5	SD25
30	土師壺	(24.0)			EH	Ⅱ	褐色	5	SD25
31	須恵長頸瓶			(5.8)	E	Ⅱ	灰オリーブ色	15	SD25 湖西 底部B3b手法 内部に自然軸付着
32	土師環	(12.0)	3.3		DH	Ⅱ	にぶい褐色	5	SD26
33	土師環	(12.2)	2.7		EH	Ⅱ	にぶい褐色	10	SD26 内湾坏
34	須恵坏	(12.6)	4.0	6.0	CI	Ⅱ	灰色	30	SD26 末野 底部B0手法 器面著しく風化
35	須恵坏		2.1	(7.0)	CEF	Ⅱ	灰色	20	SD26 南比企 底部B0手法
36	須恵坏		1.0	4.0		Ⅱ	灰色	25	SD26 湖西 底部B3b手法 内面に自然軸付着
37	須恵高台碗		3.1	7.0	EI	Ⅱ	灰色	55	SD26 末野 底部B0手法 高台接地面6.8cm
38	土師壺	(19.4)			EH	Ⅱ	にぶい褐色	5%未満	SD26
39	土師甕	(22.1)			AH	Ⅱ	にぶい褐色	5	SD26
40	須恵長頸瓶				EF	I	暗青灰色	10	SD26 南比企
41	須恵長頸瓶				EF	I	灰色	40	SD26 南比企
42	須恵甕	(22.4)			EF	Ⅱ	暗青灰色	30	SD26 南比企
43	須恵甕					Ⅱ	褐灰色		SD26 湖西
44	土師暗文坏	(12.0)	2.3		AD	I	褐色	5	SD28 放射暗文
45	須恵坏		1.8	(3.4)		Ⅱ	青灰色	25	SD28 湖西 底部A2b手法 底部線刻有り
46	須恵坏		7.0	6.0	CF	Ⅱ	にぶい黄褐色	5	SD28 南比企 底部B0手法

0.2mであった。遺物は、覆土中から須恵器坏が出土した。

出土遺物は、54は須恵器坏で底部は回転系切り後周辺へラ削りで黒痕があった。

第31号溝 (第137図)

調査区東寄り、Z R-29グリッドに検出された。第30・32号溝を切っている。直線的に延びる溝で、走行方向はN-22°-Eであった。溝断面の形状はU字形を呈していた。規模は幅0.4m、深さ0.4mであった。遺物は出土しなかった。

第32号溝 (第137図)

調査区東寄り、Z R-29グリッドに検出された。第30・31号溝に切られていた。直線的に延びる溝で、走行方向はN-47°-Eであった。溝断面の形状は皿状を呈していた。規模は幅1.15m、深さ

0.2mであった。遺物は出土しなかった。

第33号溝 (第137図)

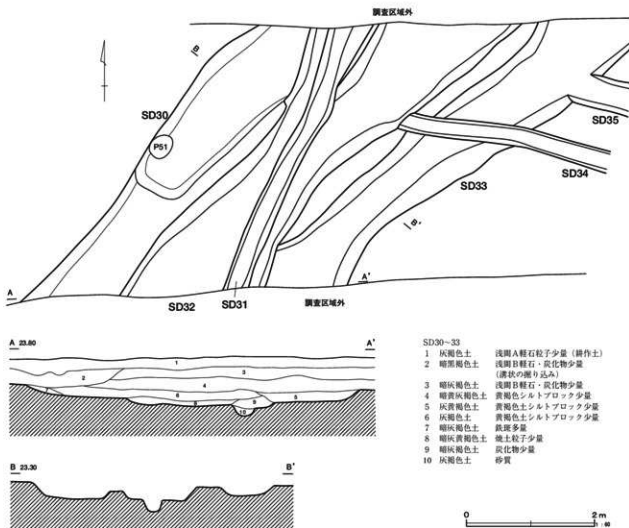
調査区東寄り、Z R-29グリッドに検出された。第31・32・34号溝に切られていた。直線的に延びる溝で、走行方向はN-49°-Eであった。溝断面の形状は皿状を呈していた。規模は幅1.95m、深さ0.15mであった。遺物は出土しなかった。

第34号溝 (第137・138図)

調査区東寄り、Z R-29・30グリッドに検出された。第33号溝を切り第32号溝に接続していた。湾曲する溝で、走行方向はN-49°-Wであった。溝断面の形状は箱型を呈していた。規模は幅0.5m、深さ0.15mであった。遺物は出土しなかった。

第35号溝 (第137・138図)

調査区東寄り、Z R-29・30グリッドに検出され



第137図 溝 (5)

た。第36号溝を切り第33号溝に接続していた。湾曲する溝で、走行方向は $N-72^{\circ}-W$ であった。溝断面の形状は箱型を呈していた。規模は幅0.7m、深さ0.25mであった。遺物は出土しなかった。

第36号溝 (第138図)

調査区東寄り、ZR-30・31グリッドに検出された。第14号土壌及び第35号溝に切られていた。湾曲する溝で、走行方向は $N-80^{\circ}-W$ であった。溝断面の形状は皿状を呈していた。規模は幅0.3m、深さ0.05mであった。遺物は出土しなかった。

第37号溝 (第138図)

調査区東寄り、ZR-31グリッドに検出された。

東側で立ち上がっていた。湾曲する溝で、走行方向は $N-39^{\circ}-W$ であった。溝断面の形状は箱型を呈していた。規模は幅0.9m、深さ0.25mであった。遺物は出土しなかった。

第38号溝 (第138図)

調査区東寄り、ZR-23グリッドに検出された。第11号土壌北側に位置していた。また、南側は立ち上がっていた。直線的に延びる溝で、走行方向は $N-10^{\circ}-E$ であった。溝断面の形状はU字形を呈していた。規模は幅0.5m、深さ0.45mであった。遺物は出土しなかった。

第39号溝 (第138・139図)

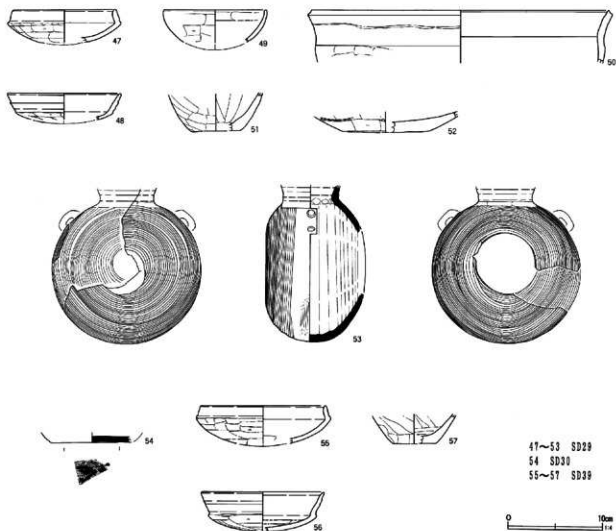
調査区東寄り、Z R-22・23グリッドに検出された。第4号掘立柱建物跡南側に位置し、第40号溝を切っていた。直線的に延びる溝で、走行方向はN-82°-Wであった。溝断面の形状は箱型を呈していた。規模は幅0.4m、深さ0.5mであった。遺物は覆土中から、土師器坏類、甕が出土した。

出土遺物は、55は須恵器坏身模倣の土師器坏である。56は土師器有段口縁坏である。57は土師器

甕底部である。

第40号溝 (第138図)

調査区東寄り、Z R-22・23グリッドに検出された。第5号土壇南側に位置し、第39号溝に切られていた。湾曲する溝で、北側部分で立ち上がっていた。走行方向はN-56°-Eであった。溝断面の形状は浅い皿状を呈していた。規模は幅1.0m、深さ0.05mであった。遺物は出土しなかった。



第139図 溝出土遺物 (3)

第34表 溝出土遺物観察表(3) (第139図)

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色 調	残存率	備 考
47	土師坏	(10.6)	4.5		AD	Ⅱ	浅黄橙色	10	SD29 坏身模倣
48	土師坏	(12.0)	2.8		AD	Ⅱ	にぶい橙色	5	SD29 有段口縁坏
49	土師坏	(10.8)	3.4		AD	Ⅱ	にぶい橙色	5	SD29 内湾坏
50	土師甕	(32.0)			AE	Ⅱ	にぶい橙色	5	SD29
51	土師甕			(5.2)	AEH	Ⅱ	明赤褐色	5	SD29
52	土師壺			(9.0)	ADE	Ⅱ	にぶい橙色	5	SD29
53	須恵提瓶		16.5		EI	Ⅱ	灰色	80	SD29 末野
54	須恵坏				EF	Ⅱ	灰色	5%未満	SD30 南比企 底部B3b手法 底部墨書有り
55	土師坏	(13.3)	4.3		AD	I	にぶい橙色	15	SD39 坏身模倣
56	土師坏	(12.8)	4.2		AD	I	赤橙色	10	SD39 有段口縁坏
57	土師甕			(4.6)	DE	Ⅱ	黒褐色	5	SD39

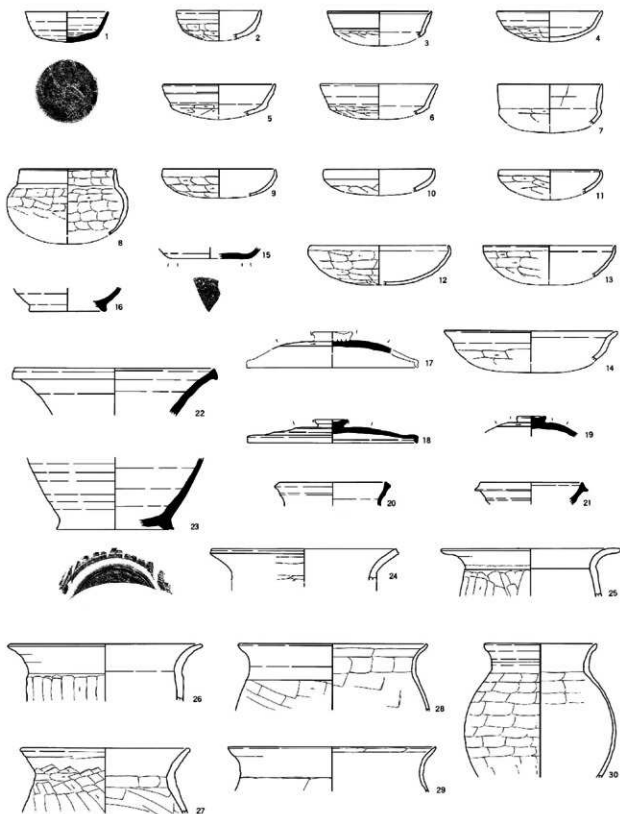
(7) 遺構外(グリッド) 出土遺物 (第140・141図)

時期の異なる遺構または、グリッドから出土した古墳時代後期から古代にかけての遺物を掲載した。

遺物の出土状況は、第15号溝から出土した遺物については、第35号住居跡周辺に纏まる第二住居跡集中群に位置している。Z S-14・15グリッド出土遺物は、第一住居跡集中群に位置している。また、Z R・Z S-20・21・22・23グリッド出土遺物は第二住居跡集中群に位置する。Z R-24グリッド出土遺物は、掘立柱建物跡及び溝集中群に位置している。したがって、これらの遺構外(グリッド)出土遺物も、何れかの遺構に帰属する可能性が高い。

1は、須恵器坏である。底部はヘラ切りヘラ調整である。2から6は、土師器有段口縁坏である。2はやや小ぶりである。7は、土師器有段口縁坏である。8は、土師器小型壺である。9から12は、土師器内湾坏である。13は、土師器暗文坏である。14は、土師器暗文皿である。15は、須恵器坏で、底部は

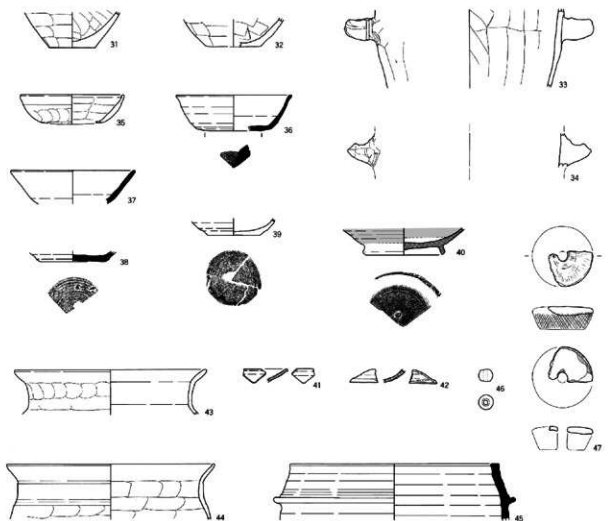
回転糸切り後周辺ヘラ削りである。16は、須恵器高台坏である。17・18・19は、須恵器壺である。20は須恵器壺口縁部、21は須恵器長頸瓶口縁部である。22は須恵器壺、23は、須恵器甕である。24から30は土師器甕である。31・32は土師器甕底部である。33・34は、土師器把手付甕である。35は土師器坏である。36・37・38は、須恵器坏で、36は回転糸切り後周辺ヘラ削り、38は回転糸切り後未調整である。39はロクロ土師器坏である。底部は回転糸切り後未調整である。40は、灰釉陶器高台碗である。41は、灰釉陶器高台皿である。42は、灰釉陶器高台碗である。何れも小片のため全体の形状は不明である。43・44は、土師器甕でコの字状口縁を呈す。45は、羽釜である。焼成は堅緻である。46は、凝灰岩製の丸玉である。47は、滑石製の紡錘車である。欠損後再加工を施している。また、側面に斜格子目状の線刻が認められる。



8・24・27 SD15
 10・13・20・25 ZR-210
 3・19 ZR-220
 1・7・12・15～17・21・23・26・30 ZR-240
 5 ZR-280
 14 ZS-240
 6 ZS-210
 11 ZS-236
 2・4・9・18・22・28・29 一括

0 10cm
1/4

第140図 遺構外（グリッド）出土遺物（1）



36 SD41 32・34 ZR-210 46・47 ZR-230 37・43・44 一括
 41 ZR-150 31・33・40 ZR-220 35・38・39・42・45 ZR-240



第141図 遺構外（グリッド）出土遺物（2）

第35表 遺構外(グリッド)出土遺物観察表(第140・141図)

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	須恵坏	8.7	3.3	6.4	EI	Ⅱ	灰白色	90	ZR-24G 末野 底部A1a手法
2	土師坏	(9.0)	3.1		AD	Ⅱ	橙色	20	一括 有段口縁坏
3	土師坏	(11.0)	2.8		DH	Ⅱ	褐色	5	ZR-22G 有段口縁坏 内外面黒色化
4	土師坏	(11.2)	3.3		AEH	Ⅱ	にぶい黄褐色	30	一括 有段口縁坏
5	土師坏	(12.0)	3.4		EH	Ⅱ	にぶい褐色	5	ZR-28G 有段口縁坏
6	土師坏	(12.5)	3.4		DE	Ⅱ	暗灰黄色	15	ZS-21G 有段口縁坏 内外面黒色化
7	土師坏	(11.0)	4.3		ADE	Ⅱ	明赤褐色	10	ZR-24G 有段口縁坏
8	土師小型壺	(10.2)	7.0		H	Ⅱ	にぶい褐色	15	SD15
9	土師坏	(12.0)	2.9		AE	Ⅱ	にぶい褐色	10	一括 内湾坏
10	土師坏	(11.6)	2.4		ADH	Ⅱ	褐色	10	ZR-21G 内湾坏
11	土師坏	(10.7)	2.5		DE	Ⅱ	明褐色	10	ZS-23G 内湾坏
12	土師坏	(14.8)	4.2		AH	Ⅱ	褐色	20	ZR-24G 内湾坏
13	土師暗文坏	(14.0)	3.4		AH	Ⅱ	にぶい褐色	10	ZR-21G
14	土師暗文皿	(18.4)	3.2		DH	Ⅱ	褐色	5	ZS-24G
15	須恵壺		1.2	(8.4)	EI	Ⅱ	灰白色	10	ZR-24G 末野 底部B3b手法
16	須恵高台坏		2.5	(8.0)	EI	Ⅱ	灰色	15	ZR-24G 末野
17	須恵蓋		0.9		EF	I	赤灰色		ZR-24G 南比企
18	須恵蓋	(17.8)	2.5		EF	Ⅱ	灰色	50	一括 南比企
19	須恵蓋		2.1		BCI	Ⅱ	灰白色	60	ZR-22G 末野
20	須恵蓋	(11.2)				Ⅱ	黄灰色	5	ZR-21G 湖西
21	須恵長頸瓶	(10.7)				Ⅱ	灰白色	10	ZR-24G 湖西
22	須恵壺	(21.0)			EF	I	灰赤色	10	一括 南比企
23	須恵壺			(12.4)	E	Ⅱ	灰色	20	ZR-24G 底部B0手法 高台接地面12.2cm
24	土師壺	(20.0)			EH	Ⅱ	にぶい褐色	5%未満	SD15 長胴壺 外反口縁
25	土師壺	(19.0)			AEH	Ⅱ	にぶい褐色	5	ZR-21G
26	土師壺	(20.5)			AH	Ⅱ	明赤褐色	5	ZR-24G
27	土師壺	(17.9)			AH	Ⅱ	にぶい赤褐色	5	SD15
28	土師壺	(20.0)			ADH	Ⅱ	にぶい褐色	5	一括
29	土師壺	(22.0)			DE	I	にぶい褐色	5	一括
30	土師壺	(12.0)			AH	Ⅱ	にぶい黄褐色	20	ZR-24G
31	土師壺			5.0	AH	Ⅱ	にぶい赤褐色	5	ZR-22G
32	土師壺			(6.0)	H	Ⅱ	にぶい赤褐色	5	ZR-21G
33	土師瓶				H	I	にぶい黄褐色	5	ZR-22G
34	土師瓶				EH	Ⅱ	にぶい赤褐色	5	ZR-21G
35	土師坏	(11.0)	3.0		AE	Ⅱ	にぶい黄褐色	20	ZR-24G
36	須恵坏	(12.2)	3.8	(6.0)	CEF	Ⅱ	灰色	15	SD41 南比企 底部B3b手法 墨痕有り
37	須恵坏	(13.0)	3.6		EI	Ⅱ	灰色	12	一括 末野産
38	須恵坏		1.1	(6.7)	F	Ⅱ	灰色	30	ZR-24G 南比企 底部B0手法
39	口土師坏		1.8	5.4	A	Ⅲ	灰黄褐色	90	ZR-24G 底部B0手法
40	灰釉高台碗		2.8	(8.8)		I	灰白色	20	ZR-22G 底部B0手法 高台接地面8.2cm
41	灰釉高台皿				L	I	灰白色	5	ZR-15G
42	灰釉高台碗				L	I	灰白色	5	ZR-24G
43	土師壺	(20.3)			AE	Ⅱ	褐色	5	一括
44	土師壺	(22.0)			DGH	Ⅱ	にぶい褐色	5	一括
45	須恵羽釜	(22.1)			AH	I	にぶい褐色	5	ZR-24G
46	丸玉								ZR-23G 凝灰岩 重さ1.9g 外径1.1cm
47	紡錘車							15	ZR-23G 直径(上面)4.8cm 孔径0.8cm 残存厚0.7cm 重さ8.20g

V 付編

1. 第19地点出土の自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

出土骨の同定

本報告書に掲載する同定資料は弥生時代中期に属する資料に限定した。他の時代に関する資料は別途掲載する予定である。また、当該期資料に限定したため分析結果の報告について、記載文章及び表を一部改編している。

1. 試料

試料は、弥生時代、古墳時代前期、古代の遺構などから出土した、人骨1～12および動物遺体1～13の番号が付された計25試料である。これらの標本類は、20～30%メタノール溶液で保存されていた。なお、試料の詳細は結果とともに表示する。

2. 分析方法

試料を20～30%のメタノール溶液から取り出し、水洗して試料に付着した泥分を除去する。その後、標本を補強するために、4倍に希釈したバインダー17に漬け、自然乾燥させる。また、一部の試料については、一般工作用接着剤を用いて接合する。これらの処理を施した後、試料を肉眼およびルーペで観察し、その形態的特徴から、種類および部位の特定を行う。なお、同定および解析には、金子浩昌先生に協力をお願いし、署名原稿として結果を頂いた。

3. 結果および考察

北島遺跡の人及びその他の獣骨

金子浩昌

今回、検出された分類群は、ヒト、イヌ、ニホンジカ、イノシシの計5種類である（表1）。各試料の同定結果を表3に示す。また、出土した人骨歯牙の計測値を表2に示す。以下、各試料の結果を記載する。

(1) 各試料の産状

・人骨1

ヒトの下顎骨である。破片となっていたが、一部欠損する程度まで修復できる。左右第1切歯と第2切歯を欠くが、左右とも犬歯から第2大臼歯まで植立する。第3大臼歯は、左側が萌出後脱落しており、右側が未萌出である。歯が全体的に小さく、咬耗が弱く、20歳代後半の女性と推測される。

・人骨2

ヒトの下顎歯牙である。左第1小臼歯と左第2大臼歯が確認される。第2大臼歯のみ計測することが可能である。この臼歯は、やや小さく、また咬耗がエナメル質のみにとどまることから、20歳前後の女性と推定される。この他、破損した臼歯片があるが、同一個体の可能性がある。

表1 検出分類群の一覧

脊椎動物門	Phylum Vertebrata
哺乳類	Class Mammalia
サル目 (霊長目)	Order primates
ヒト科	Family Hominidae
ヒト	<i>Homo sapiens</i>
ネコ目 (食肉目)	Order Carnivora
イヌ科	Family Canidae
イヌ	<i>Canis familiaris</i>
シカ科	Family Cervidae
ニホンジカ	<i>Cervus nippon centralis</i>
イノシシ科	Family Suidae
イノシシ	<i>Sus scrofa</i>

・動物遺体1

ニホンジカとイノシシが検出される。ニホンジカは、鹿角片3点(分岐部、角幹部先端、および焼けた破片)、腰椎、寛骨、恥骨、上肢骨、下肢骨が確認される。四肢骨片は骨端のみが残されていた。また、中手骨の近位骨端片は、骨体部を骨器として使った残片と考えられる。

イノシシでは、側頭骨、後頭骨、下顎歯牙、頸椎、上肢骨、種子骨が検出される。側頭骨および後頭骨は成獣個体と考えられる。側頭骨は、小さく切断した断片であり、頭蓋を割った痕跡がみられる。鋭い切り口であることから金属器で切断されたと推測される。脳髓の抽出のためと思われる。左右下顎第三後臼歯は、ほぼ同サイズである。しかし、咬耗度が異なり、別個体と考えられる。それぞれは、左が萌出初期であることから3歳、右が完全萌出であることから4歳ないし5歳と推定される。なお、この他に検出される頸椎弓や四肢骨も成獣個体であるが、右肩甲骨のみ若獣と考えられる。

・動物遺体2

イヌ、ニホンジカ、イノシシが検出される。イヌは、今回同定を行った標本の中で唯一検出される。寛骨の腸骨部分破損骨片である。小型のイヌとみられる。

ニホンジカでは、鹿角、頭骨、下顎骨、頸椎、腰椎、寛骨、恥骨、上肢骨、下肢骨がみられる。大半

表2 出土人骨歯牙計測値

試料	部 位	計測箇所	右						左						その他計測値		
			M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3
人骨1	下顎骨	近遠心径	—	10.53	10.70	6.72	6.74	6.91	—	—	—	—	—	—	—	—	30.11
		頬舌径	—	9.88	10.86	8.31	8.05	7.41	—	—	—	—	—	—	—	—	28.66
人骨2	下顎歯牙	近遠心径	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	29.87
		頬舌径	—	—	—	—	—	—	—	—	—	×	—	—	—	10.39	—
																	オトガイ高； 骨体高(オトガイ孔位置) 下顎幅

凡例) I: 切歯 C: 犬歯 P: 小臼歯 M: 大臼歯 (永久歯を大文字で、乳歯を小文字で表記) ○: 未計測 ×: 計測不可 —: 遺失/未明出

表3 骨同定結果(1)

出土遺構	時期	試料番号	種別	分類	性別	部分	成熟	数量	計測値	年齢性別	備考
第325号住居跡	弥生	人骨1	は乳歯	ヒト	左	下顎歯牙	一部欠	1	別表記載	20歳代後半女性	左右ともC-M ₂ まで植立
		人骨2	は乳歯	ヒト	左	下顎歯牙	全	1	別表記載	20歳前後女性	

凡例) I: 切歯 C: 犬歯 P: 小臼歯 M: 大臼歯 (永久歯を大文字で、乳歯を小文字で表記) B: 幅 Bp: 近位端幅 Bd: 遠位端幅 Da: 遠位端前後径 BT: (上腕骨) 滑車幅 GL: 最大長

の標本が破片となっているが、指骨である基節骨のみ完存する。大半の標本は、成獣骨と思われる。ただし、左中手骨と右脛骨前面破片のみ若獣とみられる。また、環椎と頸椎はやや小さく、雌個体を推測させる。角座骨部分は大きく、成獣で角幹部を切り取った残片である。幹部端は凹凸面で、すり切りなどの切断面をみない。頭骨は左側頭骨から後頭骨を残す標本で、左右不明である。頭頂部を削り抜くように切り、かつ半截されており、削り抜きは切断面からみて丁寧な加工であったことがわかる。動物遺体1で検出されたイノシシ頭蓋の切断と同様な加工である。下顎骨は雄個体で、3歳ないし4歳とみられる。四肢骨には、若重成獣、成獣個体がみられ、また雌雄が含まれる。中でも肩甲骨、橈側手根骨、大腿骨で骨端部の保存される標本、踵骨などは雄獣である。

イノシシは、左右の上顎第三後臼歯が検出される。おそらくは同一個体と考えられる。最後部咬頭まで穿孔しており、4歳ないし5歳以上とみられる。

・動物遺体3

ニホンジカの右上腕骨である。遠位端部のみが検出されている。雄とみられる。

・動物遺体4

ニホンジカの鹿角の分岐部がみられる。

・動物遺体5

ニホンジカの頸椎である。ほぼ完存している。大きく雄と考えられる。

・動物遺体6

ニホンジカの右上腕骨である。遠位端部が検出されている。雄と考えられる。

・動物遺体7

ニホンジカの右上腕骨である。遠位端部が検出されている。やはり雄と考えられる。

・動物遺体8

ニホンジカの右上腕骨である。遠位端部が検出されている。動物遺体6および7と異なり、雌と考えられる。

・動物遺体9

ニホンジカの鹿角、胸椎、左上腕骨、中心+第4足根骨、中手/中足骨が検出される。この内、左上腕骨が雄、中心+第4足根骨が雌のものと考えられる。

・動物遺体10

ニホンジカの踵骨が検出される。完存する。雌と考えられる。

・動物遺体11

ニホンジカの右下顎骨である。本標本は、動物遺体2の右下顎骨と同じ大きさであり、咬耗度もほとんど変わらない。第2前臼歯から第3後臼歯までが植立する。

表3 骨同定結果(2)

出上遺構	時期	試料番号	種類	分類群	左右	部位	部分	数値	計測値	年齢性別	備考
弥生前期周南	弥生	動物遺体1	哺乳類	ニホンジカ		鹿角	分枝部	1			
				ニホンジカ	右	鹿角	先端部	1			切痕有
				ニホンジカ		鹿角	破片	1			
				ニホンジカ		鹿角	一部欠	1			
				ニホンジカ		腰椎	椎弓部片	1			
				ニホンジカ	右	腰椎	破片	1			
				ニホンジカ	右	寛骨	破片	1			
				ニホンジカ	右	恥骨	骨体	1			
				ニホンジカ		肩甲骨		3			
				ニホンジカ	左	肩甲骨	遠位端	1			骨端のみ
				ニホンジカ	右	上腕骨	遠位端	1	Bd:42±		
				ニホンジカ	右	中手骨	近位端	1			
				ニホンジカ	右	踵骨	遠位端1/2片	1			
				ニホンジカ		中手/中足骨	後面	1			
				ニホンジカ		基節骨	遠位端欠	1			
				ニホンジカ?		不明	破片	1			
				イノシシ	右	側頭骨	破片	1		成獣	切痕有
				イノシシ	左	頭骨	後頭骨	1		成獣	
				イノシシ	右	頭骨	後頭部	1		成獣	
				イノシシ		頭骨	下顎面咬面部	1	B:43.12		
				イノシシ	左	下顎歯牙	M3	1	Gl:35.55	3歳	萌出初期
				イノシシ		下顎歯牙	M3	1	Gl:35.48	4-5歳	完全萌出
				イノシシ	右	頭椎	椎弓部片	1			
				イノシシ	右	肩甲骨	破片	1		若獣	
				イノシシ	右	上腕骨	遠位端片	1	B:22.18		骨端欠
				イノシシ	左	腕骨	遠位端	1	Bp:32.24		
				イノシシ		種子骨	完存	1			
				不明		微細片		多			

凡例) I:切痕 C:大歯 P:小臼歯 M:臼歯 (永久歯を大文字で、乳歯を小文字で表記)

B:幅 Bp:近位端幅 Bd:遠位端幅 Dd:遠位端前後 BT:(上腕骨)滑車幅 GL:最大長

表3 骨同定結果(3)

出土遺物	時間	試料番号	種別	分類群	左右	部位	部分	数量	計測値	年齢性別	備考
弥生前期前期	弥生	動物遺体2	哺乳類	イヌ	右	寛骨	腸骨部	1			小型
				ニホンジカ	左	鹿角	角鹿骨	1			
				ニホンジカ	右	鹿角	角鹿骨	1			
				ニホンジカ	左	頭骨	側頭-後頭骨	1			
				ニホンジカ	右	下顎骨	下顎枝	1		雄3-4歳	
				ニホンジカ	右	下顎骨	破片	1			
				ニホンジカ	右	下顎歯牙	M ₂ 片	1			
				ニホンジカ	右	下顎歯牙	M ₃	1			
				ニホンジカ		頰椎	一部欠	1		雌	
				ニホンジカ		頰椎	一部欠	1		雌	
				ニホンジカ		頰椎	近位端	1	B:40±	雌	
				ニホンジカ	右	寛骨	破片	1	B:25.99	雌	
				ニホンジカ	右	寛骨	臼部	1		雌	
				ニホンジカ	左	恥骨	破片	1		切痕有	
				ニホンジカ	右	肩甲骨	破片	1	B:26.48	雄	
				ニホンジカ	左	機骨	遠位端	1			
				ニホンジカ	左	腕手根骨	完	1	GL:25.94	雄	
				ニホンジカ	左	中手骨	前面	1		若獣	
				ニホンジカ	左	大腿骨	近位端	1			骨端欠
				ニホンジカ	左	大腿骨	遠位端	1		雄	膝部そぎ取る
				ニホンジカ	左	大腿骨	遠位端	1			骨端欠
				ニホンジカ	右	大腿骨	遠位端	1			骨端欠
				ニホンジカ	左	脛骨	近位端	1			骨端外れる
				ニホンジカ	左	脛骨	遠位端	1	Bd:30.5±		骨端外れる
				ニホンジカ	左	脛骨	遠位端	1			
				ニホンジカ	右	脛骨	前面	1		若獣	
				ニホンジカ	右	踵骨	ほぼ完存	1		雄	遠位端切
				ニホンジカ		基節骨	完存	1	GL:50.42		
				ニホンジカ		不明	破片	3			
				イノシシ	左	上顎歯牙	M ₂	1		4-5歳以上	
				イノシシ	右	上顎歯牙	M ₃	1		4-5歳以上	
				イノシシ		上顎骨	遠位端	9			他破片有
				不明		破片		多			

凡例) I:切歯 C:犬歯 P:小臼歯 M:大臼歯 (永久歯を大文字で、乳歯を小文字で表記)

B:幅 Bp:近位端幅 Bd:遠位端幅 Dd:遠位端前後径 BT:(上腕骨)滑車幅 GL:最大長

表3 骨同定結果(4)

出土遺構	時期	試料番号	種類	分類群	左右	部位	部分	数量	計測値	年齢性別	備考
弥生前期	弥生	動物遺体3	ほ乳類	ニホンジカ	右	上腕骨	遠位端	1	BT:40.61 Bd:43±	雄	
	弥生	動物遺体4	ほ乳類	不明		鹿角	分枝部	1			
	弥生	動物遺体5	ほ乳類	ニホンジカ		微細片		多			
	弥生	動物遺体6	ほ乳類	不明		頭椎	ほは完存	1		雄	
	弥生	動物遺体7	ほ乳類	ニホンジカ	右	上腕骨	遠位端	1	BT:42± Bd:44.39	雄	
	弥生	動物遺体8	ほ乳類	不明	右	上腕骨	遠位端	1	Bd:42±	雄	
	弥生	動物遺体9	ほ乳類	ニホンジカ	右	上腕骨	遠位端	1	BT:36.28 Bd:39.41	雌	
	弥生	動物遺体10	ほ乳類	不明		微細片		多			
	弥生	動物遺体11	ほ乳類	ニホンジカ		鹿角	破片	1		切痕有	
	弥生	動物遺体12	ほ乳類	不明		胸椎	一部欠	1			
	弥生	動物遺体13	ほ乳類	不明		胸椎	棘突起	1			
	弥生	動物遺体14	ほ乳類	不明	左	上腕骨	遠位端	1		雄	骨端一部欠
弥生後期	弥生	動物遺体15	ほ乳類	不明	左	上腕骨	遠位端部	1	BT:40.49 Bd:44±	雌	
	弥生	動物遺体16	ほ乳類	不明	左	中心+第4足根骨	ほは完存	1	B:29.28		
	弥生	動物遺体17	ほ乳類	不明		中手/中足骨	骨体	1			
	弥生	動物遺体18	ほ乳類	不明		微細片		多			
弥生後期	弥生	動物遺体19	ほ乳類	ニホンジカ	右	下顎骨	完存	1	GL:80.93	雌	
	弥生	動物遺体20	ほ乳類	ニホンジカ	右	下顎骨	下顎枝欠	1			P ₂₋₄ M ₁ 傾立

凡例) I: 切痕 C: 犬歯 P: 小臼歯 M: 大臼歯 (永久歯を大文字で、乳歯を小文字で表記)

B: 幅 Bp: 近位端幅 Bd: 遠位端幅 Dd: 遠位端前後径 BT: (上腕骨) 滑車幅 GL: 最大長

(2) 出土骨について

・人骨

下顎骨、歯牙、大腿骨が検出されたにすぎない。弥生時代に帰属するとみられる人骨は、20歳前後の女性と20歳代後半の女性と考えられる。特に下顎骨が残された人骨1の標本は、弥生人の計測値と類似する測定値が得られる。

・獣骨について

検出された動物類では、ニホンジカを主として、それにイノシシが加わり、イヌが僅かに含まれる組成であった。全体としてみれば、明らかにシカが多い。ニホンジカは、上腕骨を基準にすると、最小個体数が5個体と推定される。また、イノシシは、大腿骨を基準とすると3個体前後が最小個体数になる。ニホンジカおよびイノシシとも、若獣と成獣を主体としており、幼体骨は含まれていなかった。すべて狩猟の対象であったことが推測される。

関東における弥生期の獣骨の出土例は、本州中部以西に比べると少ない。しかし、群馬県前橋市の新保遺跡では、この時期の多くの獣骨が出土している（金子，1986）。本資料は、少ないながらも新保遺跡に共通した内容を持つことが注目される。新保遺跡では、より山寄りの地形条件を反映して、クマ、オオカミなどの遺体および、骨角製品が多数出土している。本遺跡は、関東平野地帯のしかも低湿地であるところから、獣骨の出土も新保遺跡ほどでないのかも知れないが、今回報告した資料からしても狩猟に力を注ぐ生活のあったことが推測される。

一方、関東南部地域でも、神奈川県逗子市池子遺跡で弥生期から古代、中世に至る獣骨の検出があり、ここでもイノシシよりもニホンジカが多く検出される事例が報告されている（西本・姉崎，1999）。これらと比較すると、ニホンジカの割合は、おそらく北島遺跡の方が多いと思われる。池子遺跡では、イノシシ飼育などが推定されている（西本・姉崎，1999）。しかし、本遺跡では、今回検出資料を見る限り、そうしたことが考え難い。ただし、将来どのような動物遺体が検出されるかにより再検討されることも考えられ、今後注目値する。

引用文献

- 平井 信二，1979，木の事典 第2巻，かなえ書房。
- 龍瀬 良明，1990，自然堤防の諸類型 ―河岸平野と水害―，古今書院，202p。
- 金子 浩昌，1986，新保遺跡出土の脊椎動物遺存体・骨角牙製品，新保遺跡Ⅰ 弥生・古墳時代大溝編 ―関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書 第10集―《本文編》，群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団，108-148。
- 西本 豊弘・姉崎 智子，1999，池子遺跡群の哺乳類遺体，かながわ考古学財団調査報告46 池子遺跡群Ⅹ No.1-A 地点 池子米軍家族住宅建設にともなう調査 第4分冊 別編・自然科学分析編，財団法人かながわ考古学財団，287-296。
- 西中川 駿，1989，古代遺跡出土骨からみた我が国の牛、馬の起源、系統に関する研究―とくに日本在来種との比較―，昭和63年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書。
- バリノ・サーヴェイ株式会社，1998，北島遺跡の古環境変遷，埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第195集 熊谷市北島遺跡Ⅳ 第2分冊，財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団，485-503。

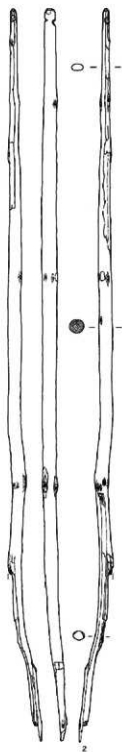
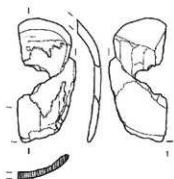
2. 第19地点出土遺物（補遺）

（1）堰周囲出土遺物（第142図）

報告書第286集『北島遺跡』Ⅵにおいて、堰出土遺物に掲載予定であった遺物であるが、図版作成時の手違いで掲載されなかった遺物を本書で掲載した。

1は、皿形の容器または、杓子状の木製品である。半分以上を欠損する。半割材を用い横木取りで割り込みを入れて製作している。端部は、丸く部分的に残るが大部分を欠損している。器面内外面とも研磨、黒色処理を施している。

2は、丸木弓である。出土位置は、堰構築材支保1西側の水路取り付け部分（報告書第286集第304図堰（5）表示の遺物No.45南側2mに位置する棒状の木材）から出土した。推定約半分を欠損する。木の枝の部分を用い小枝を払い落として素材を取り出している。弓筈の部分は、先端部を丸く削り出し、左右両側縁部から切込みを入れて鈕帯部を作り出している。先端部寄りの裏面を薄く削り出して扁平に仕上げている。



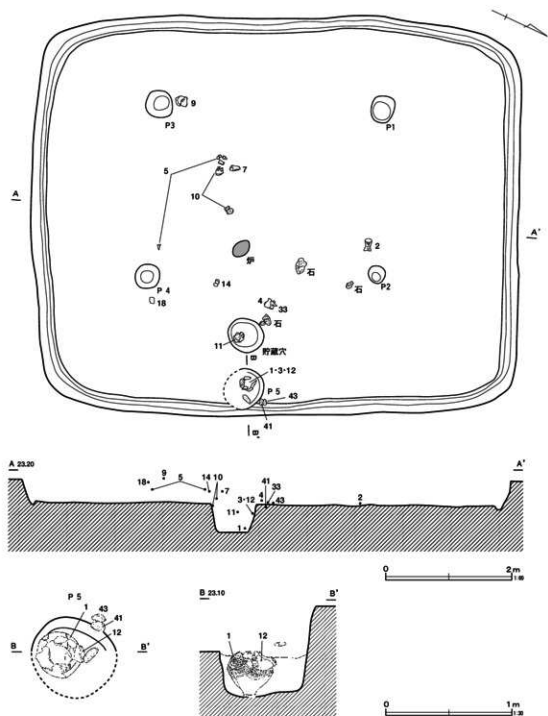
第142図 第19地点堰周囲出土遺物

(2) 竪穴住居跡出土遺物

第317号住居跡 (第143～146図)

報告書第286集「北島遺跡」Ⅵにおいて、掲載した遺物に、新たに接合する遺物及び未整理の遺物が

発見された為、報告書第286集掲載分も含めて、本住居跡出土遺物を再掲載した。また、不明であった遺物の出土状況も判明した為、出土状況図も掲載した。



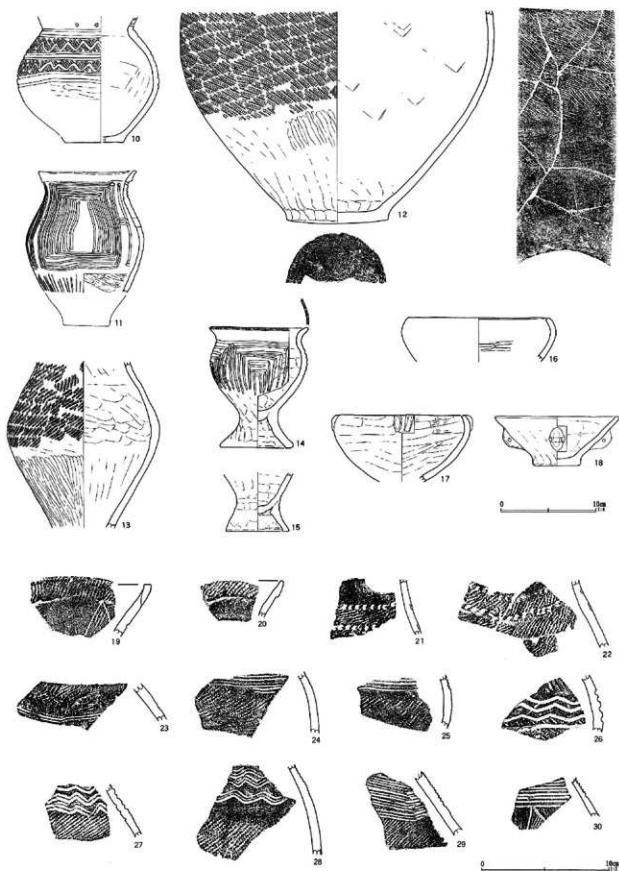
第143図 第317号住居跡遺物出土状況



第144图 第317号住居跡出土遺物 (1)

1は本住居跡埋設土器（土器棺）である。報告書第286集第150図1の壺に、新たに発見された頸部破片が接合した為再実測した。尚、接合した頸部破片は、住居跡一括遺物として取り上げられた中に含まれていた。従って土器棺から分離された状態で床面または、覆土から出土したことになる。頸部は直線的に窄まり細頸長頸を呈す。頸部文様帯は、ヘラ描波状文下に三列の列点文を施文している。ヘラ描波状文部分には、地文にL R単節縄文を施文している。頸部と胴部の境界文様帯は、沈線1条によるクランク状のモチーフを廻らし、文様間に原体L R単節縄文を施文している。また、列点文と段を設けて胴部と区画している。胴部は球胴形に張る器形を呈す。無文帯下に沈線波状文を施文し以下に、胴部文様を描いている。胴部は、フラスコ状モチーフを5単位施文している。このフラスコ文を取り巻くようにして2条沈線による縄文帯を連弧状に廻らしている。連弧状の文様は2段施文されているが、下段は、弧線部を区切って開放している。また、弧線文の上下無文部分には、主文様に沿って沈線を充填している。胴下半部無文部分は、横位及び縦位のミガキがかけられている。胴部中央連弧文下に、焼成後の側面穿孔が1箇所設けられている。縄文施文部分は、赤彩されている。2は床面直上から出土している。受け口状を呈する壺上半部である。口唇部と口縁部は、施文方向を換え、原体無節Lを施文している。頸部は、列点文2条で区画し同一原体による縄文を充填した帯縄文を2段施文している。また下段の列点部には、それぞれ段が設けられている。胴部は、2本一単位棒状工具による波状文下に、同一原体縄文を充填し、下段に平行沈線文を施文している。3は土器棺上部から出土した。無文の壺口縁部である。外面ハケ調整後丁寧なミガキをかけ赤彩している。内面にもハケ調整及びミガキが認められ、部分赤彩されている。4は床面直上から出土した。小型壺である。口縁部は、直線的に立ち上がり頸部のくびれは弱く胴部の張り出しが少ない。無文で、ヘラ状工

具による、ナデ調整が認められる。底面に木葉痕が付く。5は覆土中層から出土した。直線的に開く単口縁の壺である。6は報告書第286集第151図14・15に加えて新たに破片が接合したので再実測した。8及び33と同一個体と考えられる。やや張り出しの強い壺胴部である。ヘラ描平行線文2条に原体L R単節縄文を充填施文している。7は覆土中から出土している。壺頸部である。ヘラ描四線文下に原体L R単節縄文を帯状に施文している。8は覆土上層から出土した壺底部である。6・33と同一個体と考えられる。焼成堅緻で張り出しの強い壺底部である。9は覆土上層から出土した。壺胴下半部である。胴部は実測図中の胴部中央部分で内側に変形しており内面に工具による押さえが認められる。従って本土器は双口壺の可能性が考えられる。胴部最大径部分に細いヘラ描沈線で平行線文を2条施文し、沈線下に原体L R単節縄文を施文している。また、底面に布目圧痕が認められる。10は床面直上から出土した。報告書第286集第150図5の壺胴部に頸部破片が接合した為再実測した。短頸の壺で口縁部を欠損している。頸部に2個一対の焼成前穿孔が認められる。頸部は無文である。胴部は算盤玉状にやや強く張り出す器形を呈する。ヘラ描沈線2条による平行線文を3段施文して区画し、文様間を原体R L単節縄文で充填し波状沈線をその上から施文している。11は、貯蔵穴内から出土した。筒形土器で、底部を欠損している。器形は胴部がやや張り出し屈曲が強い。口縁部は複合口縁で口端部は平坦に面取りが成されている。胴部文様は、重四角文を4単位施文している。施文順位は上下の横線を施文した後縦線を施文している。また、連繫部は最後に施文している。重四角文間に縄文等の充填文は認められない。12は本住居跡埋設土器（土器棺）の蓋として使用されていた土器である。報告書第286集第150図6に掲載した土器であるが、本土器は新たに接合する破片が発見された為再実測した。壺胴下半部である。胴部上部欠損部は、故意の打ち欠きによるものと考えられる。

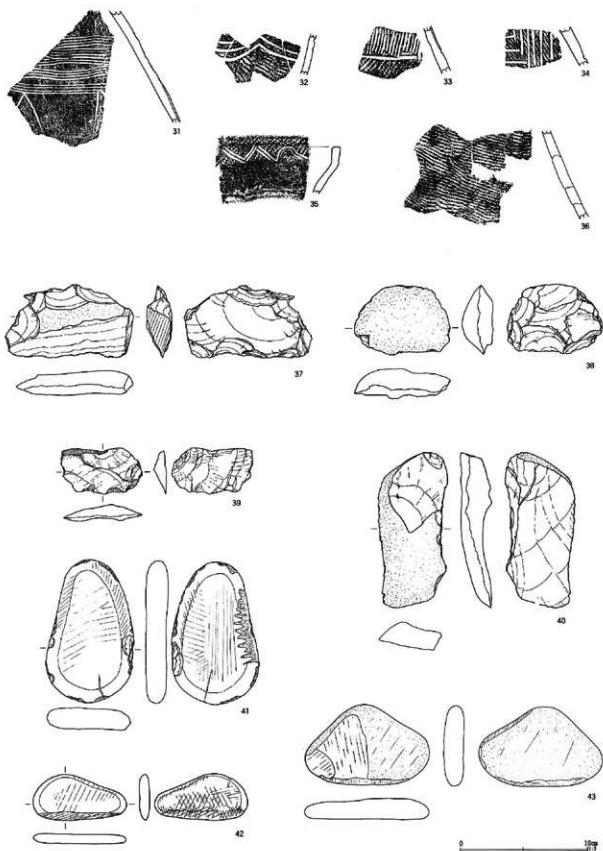


第145图 第317号住居跡出土遺物 (2)

地文は、原体附加条一種RL+R乃至は、撚りの太さの異なる原体を用いたRL単節縄文を胴下半部まで施文している。無文部には、ミガキが認められる。底面は布目圧痕が認められる。13は壺胴部である。胴部の屈曲が強く報告書第286集第339号住居跡出土第200図8の甕に似た器形を呈すると考えられる。地文は無節L縄文を施文し、下半部に粗いミガキが認められる。14は覆土上層から出土した。小型の台付甕である。本土器は報告書第286集第150図7の台付甕胴部に新たに発見された脚部が接合した為再実測した。くの字に外反する口縁に球形の胴部を呈する器形である。口端部は、原体RL単節縄文を施文している。胴部は、コの字重ね文を4単位施文している。胴部と脚部の接合はソケット状を呈している。また、胴部に初痕が付いている。15は台付甕脚部である。胴部と脚部の接合部分はソケット状を呈している。内面は黒色化している。16は、鉢または、高坏である。やや肉厚の内彎する口縁部の内外面に丁寧なミガキが施されている。17は鉢または、高坏である。やや肉厚の内彎する口縁部の内外面に横位のナデ調整が認められる。また、口端部に2個一対の貼り瘤が認められる。18は覆土上層から出土した。器形は鉢形土器または壺である。底部から直線的に開き輪積部分で面取りをして口縁部としている。無文で外面中央に側面穿孔のある貼り瘤が付いている。19は壺口縁部である。口縁部に原体LR単節縄文を施文して、縄文帯を設けている。口縁直下に同一原体縄文を充填する鋸歯文を施文している。20は壺口縁部である。21・22と同一個体をなすと考えられる。複合状を呈し、口縁部に付加条一種LR+Lまたは、撚りの太さが異なる原体を用いたLR単節縄文を施文している。21は壺頸部である。2条の列点文間に付加条一種LR+Lまたは、撚りの太さが異なる原体を用いたLR単節縄文を施文している。22は壺頸部である。2条の列点文及びその下に、付加条一種LR+Lまたは、撚りの太さが異なる原体を用いたLR単節縄文を施文している。23は

壺胴上半部である。地文に原体LR単節縄文を粗雑に施文し、束線具による直線文を施文している。24は壺胴部である。25と同一個体の可能性がある。4本一単位櫛歯状工具直線文下に、原体LR単節縄文を施文している。25は、壺胴部である。4本一単位櫛歯状工具直線文下に、原体LR単節縄文を施文している。26は、壺胴部である。地文原体RL単節縄文施文後に、波状文及び直線文を施文し、施文部分を磨り消している。27は、壺頸部である。2本一単位工具による波状文下に、原体無節多条L | r r r | を充填している。28は壺胴部である。3本一単位櫛歯状工具による波状文3条下に無文帯を設けて原体LR単節縄文を施文している。29は、壺頸部である。5本一単位櫛歯状工具による短斜線文下に、原体LR単節縄文を充填している。30は、壺胴部である。31と同一個体と考えられる。焼成良好で硬質である。4本一単位の櫛歯直線文下に原体LR単節縄文を充填する鋸歯文を施文している。また、縦位のハケ調整が認められる。31は壺胴部である。4本一単位櫛歯状工具による櫛歯直線文4条下に原体LR単節縄文を充填する鋸歯文を施文している。櫛歯直線文の上にも縄文施文が認められる。また、縦位のハケ調整が認められる。32は壺胴部である。ヘラ描弧線文下に原体RL単節縄文を施文している。33は床面直上から出土した。壺胴部である。4本一単位櫛歯状工具による懸垂文をヘラ描沈線で区画して、下段に原体LR単節縄文を施文している。34は、壺胴部である。地文に原体RL単節縄文を施文し、重四角文を施文している。35は壺口縁部である。段状を呈す口縁端部に原体LR単節縄文を施文している。口縁は地文に同一原体縄文を施文し、2本一単位の束線具による連続山形文を施文している。頸部は無文である。36は壺胴上半部である。地文に原体無節多条R | | | | | を施文している。

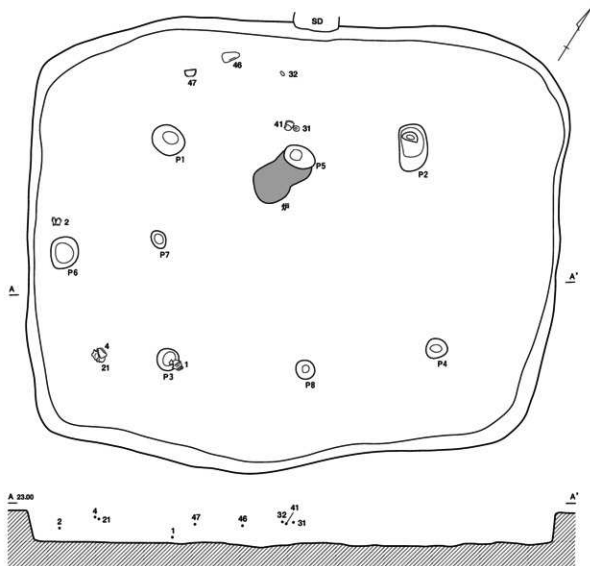
37は横刃型石器である。扁平の礫の表裏両面を打割して素材を取り出し、表裏両面に剥離を加えて形状を整えている。刃部は表面の摂理面及び裏面から



第146图 第317号住居跡出土遺物 (3)

の剥離によって楔状に造り出している。左側縁は表裏両面から剥離を加えて挟り込みを入れている。また、右側縁には研磨痕跡が認められる。長さ5.5cm、幅9.9cm、厚さ2.0cm、重さ137.1gで石材はホルンフェルスである。38は横刃型石器である。円礫を打割して素材を取り出し、裏面に大きく剥離を加えて形状を整えている。刃部は裏面からの粗雑な剥離によって断面ノミ形を呈す。刃部に細かな剥離が認められる。両側縁部は、粗雑な剥離が施されるが明確な挟り込みは認められない。長さ5.5cm、幅7.6cm、厚さ2.4cm、重さ115.6gで、石材はホルンフェルスである。39は刃器である。両側縁部に剥離を加え浅

い挟り込みを入れている。40は縦長の剥片である。円礫の表裏両面を打割して素材を取り出している。両側縁に細かい剥離が認められる。長さ11.7cm、幅4.9cm、厚さ2.4cm、重さ169.5gで、石材はホルンフェルスである。41は埋設土器の脇から出土した。敲打を兼ねる偏平の磨石である。側縁部に線状痕が認められる。42は、偏平の磨石である。縁辺部に擦痕が認められる。43は埋設土器の脇から出土した。磨石である。扁平の礫の側縁部及び表裏両面に擦痕が認められる。長さ6.3cm、幅9.8cm、厚さ1.5cm、重さ135.2gで、石材は砂岩である。



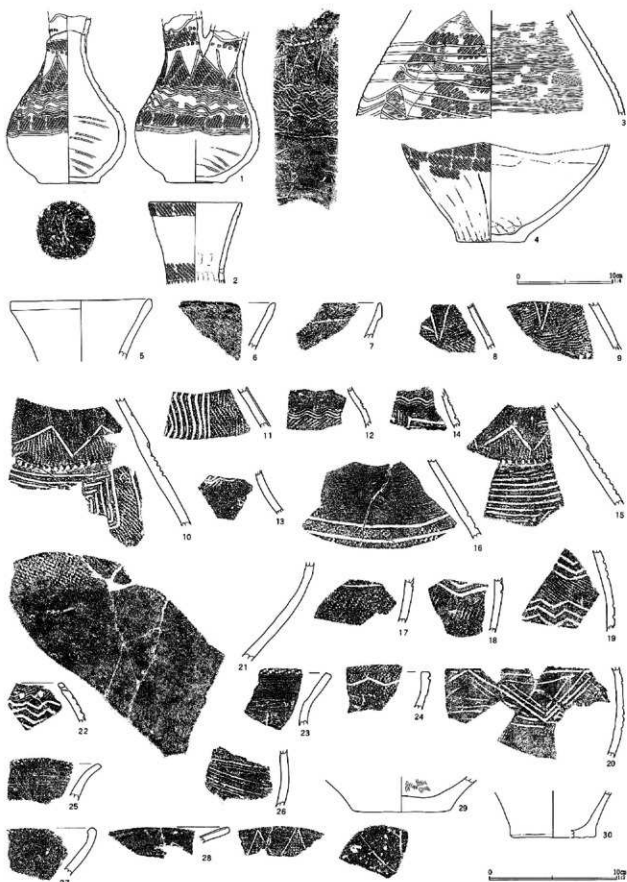
第147図 第318号住居跡遺物出土状況

第318号住居跡（第147～149図）

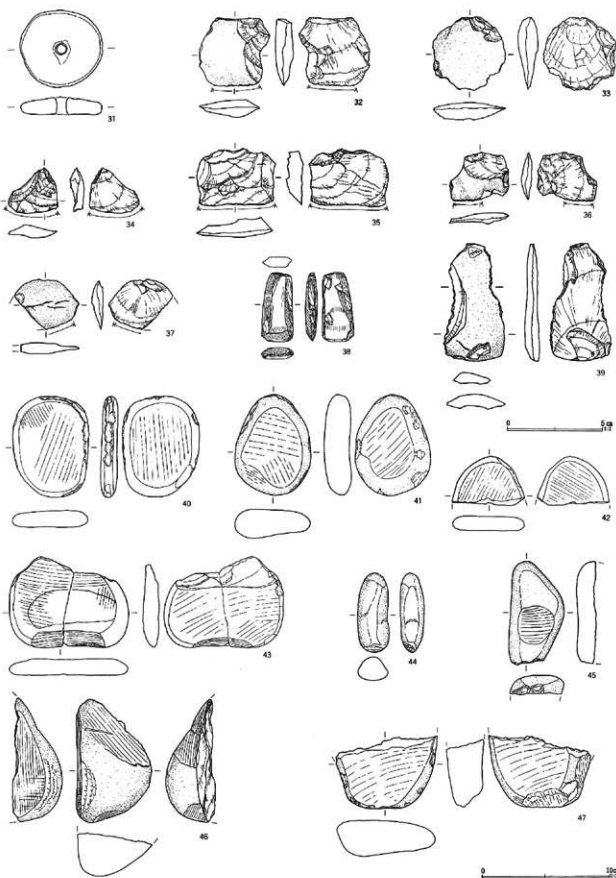
報告書第286集『北島遺跡』Ⅵにおいて、掲載した遺物に、未整理の遺物が発見された為、報告書第286集掲載分も含めて、本住居跡出土遺物を再掲載した。また、不明であった遺物の出土状況も判明した為、出土状況図も掲載した。

1は、双口の壺である。口縁部を欠損している。頸部縄文帯部分で二股に分かれる。図上右側の傾きが大きい。胴部は、やや張り出し楕円形を呈する。頸部文様帯は、列点文2条で区画し原体直前段多条L|R R R|または、無節多条L|r r r|を充填している。下段に無文帯を設け同一原体の縄文を充填した鋸歯文を施文している。鋸歯文下には、2本一単位棒状工具による多条の波状文を施文している。波状文下には、同一原体縄文を施文して2本一単位棒状工具直線文により胴部下端を区画している。内面には、櫛歯状工具によるナデが認められる。底面には栴痕が認められる。2は壺口縁部である。複合状の口縁を呈し、原体複節R L rを施文している。また、頸部は同一原体縄文を帯状に施文し、下段に列点文を施文している。3は、壺胴上半部である。地文に原体L R単節縄文を粗雑に施文し、1本描沈線4条による平行線文を施文している。平行線文下に描かれる連弧文は、開始点が平行線文を切っている。外面及び内面にハケ調整が認められる。4は壺胴下半部である。底部から胴部への影込みがやや強い。胴部最大径以下まで原体R L単節縄文を施文している。5は、無文の壺口縁部である。6は壺口縁部である。やや厚みのある口縁部に、原体R L単節縄文を施文している。7は、複合口縁を呈する無文の壺口縁部である。8・9は、壺頸部である。地文原体L R単節縄文を充填する鋸歯文を施文している。9は、赤彩されている。10は、壺胴上半部である。原体L R単節縄文を充填した鋸歯文下に、段を設けた列点文で胴部と区画している。胴部は、重四角文を施文し、区画間を同一原体の縄文で充填している。11は壺胴部である。重四角文とフラスコ形文の組み

合わせに原体L R単節縄文を充填している。12は、壺頸部である。無文帯下に3本一単位櫛歯状工具による波状文を施文し、下段に原体無節多条L|r r r|を施文している。13は、壺頸部である。原体L R単節縄文施文部分上に重ねて2本一単位工具による波状文を施文している。14は、壺胴部である。原体L R単節縄文施文下に、3本一単位櫛歯状工具による波状文を施文し、段を設けた列点文で胴部と区画している。胴部は、重四角文を描いている。15は、壺頸部から胴部にかけての破片である。原体L R単節縄文を充填した鋸歯文下に、段を設けた列点文で区画している。胴部は、重四角文とフラスコ形文の組み合わせを描いている。16は、壺頸部である。3と同一個体の可能性がある。原体L R単節縄文による帯縄文施文後、縄文帯を平行沈線で区画している。また、無文部にハケ調整が認められる。17は、壺胴部である。平行沈線文下に、原体L R縄文を横位施文している。18は、壺胴部である。波状沈線文2条下に原体L R単節縄文を施文している。19は、壺胴部である。3条の波状沈線文2段施文間に原体R L単節縄文を充填している。縄文部分は、赤彩されている。20は、壺胴部である。重三角文を施文している。21は壺または壺胴下半部である。胴部最大径以下まで原体L R単節縄文を施文している。22は、無頸壺である。口唇部に原体無節Lを施文し、下段に1本描沈線による波状文を施文している。口唇部に2個一対の穿孔が認められる。23は、直線的に外反する壺口縁部である。口端部に原体L R単節縄文を施文し、以下無文としている。24は、受け口状を呈する壺口縁部である。口端部より地文に原体L R単節縄文を施文し、山形沈線を描いている。25は、口縁部が緩やかに外反する甕である。口端部に原体不明縄文を施文し、以下を無文としている。26は、壺胴部である。3本一単位櫛歯状工具による斜線文を施文している。27は、高坏である。内彎する口縁の口唇部を丸めている。内外面赤彩である。28は、強く外反する高坏口縁部である。外面は無文である。内面



第148图 第318号住居跡出土遺物(1)



第149图 第318号住居跡出土遺物 (2)

は、原体LR単節縄文を充填した鋸歯文を施文している。内外面赤彩である。29・30は、底部である。29は、木葉痕が付く。31は、土製の紡錘車である。当初から紡錘車専用として製作されたものである。

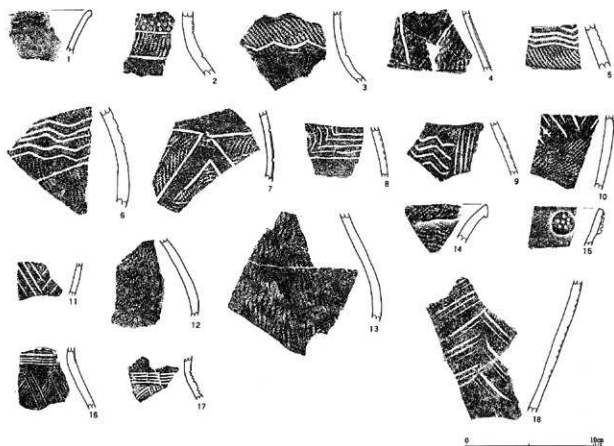
32～37は、刃器である。側縁部に剥離を加え浅い抉り込みを入れている。33以外の刃部には、使用による摩滅及び細かい剥離が認められる。38は、ノミ形石器である。本来は扁平片刃磨製石斧が縦に欠損したものを細加工したものである。全面に丁寧な研磨が認められる。形成剥離が残っている。39は、石鏃未製品である。両側縁部に細かい剥離を加えている。40～43は、偏平の磨石である。40・41は、敲打痕跡が認められる。43は、縁辺部に研磨痕跡が認められる。44は、棒状石器である。先端部が摩滅している。45は、敲石である。先端部に敲打による剥離が認められる。46は、磨石である。欠損している。一面に研磨痕跡が認められる。47は、磨石である。

敲打痕跡と研磨痕跡が認められる。

第361号住居跡（第150図）

報告書第286集「北島遺跡」Ⅵにおいて、掲載した遺物に、未整理の遺物が発見された為、報告書第286集掲載分も含めて、本住居跡出土遺物を再掲載した。

1は、壺口縁部である。口唇部に原体RL単節縄文を施文して赤彩している。縄文施文下は、無文である。2は壺頸部である。円形の竹管状工具による刺突充填の下に、ヘラ描沈線2条で区画し原体LR単節縄文を充填した帯縄文を施文している。3は壺頸部である。ヘラ描山形文間に原体RL単節縄文を充填施文している。4は壺頸部である。ヘラ描の上向き鋸歯文間に原体LR単節縄文を施文している。5は壺胴上半部である。束線具によるヘラ描波状文下に原体RL単節縄文を施文している。6は壺胴部である。束線具によるヘラ描波状文下に原体LR単節縄文を施文している。7は、壺胴部である。三角



第150図 第361号住居跡出土遺物

文を施文している。区画内に原体L R単節縄文を充填している。8は壺胴部である。ヘラ描沈線でフラスコ文と重四角文を施文している。重四角文下に原体不明縄文を施文している。9は壺胴部である。ヘラ描沈線により重四角文を施文している。区画内を波状文で充填している。10は壺胴部である。胴部最大径部分にヘラ描の複合鋸歯文を施文している。鋸歯文下に原体L R単節縄文を施文している。11は壺胴部である。ヘラ描重三角文を施文し区画内に原体L R単節縄文を充填している。12は、壺胴部である。地文に原体オオバコ系縄文を施文している。13は壺胴部である。地文に原体R L単節縄文を施文している。14は緩やかに外反する甕口縁部である。複合状の口縁を呈し、原体L R単節縄文を施文している。15は、甕口縁部である。摩滅しているが口縁部に沈線による山形文を施文し、多孔のボタン状貼付文を貼付している。16は壺頸部である。4本一単位櫛歯状工具による擬似簾状文下に同一工具による斜格子文を施文している。17は、壺胴部である。頸部に4本一単位櫛歯状工具による櫛歯簾状文を施文している。下段に縦羽状文を施文している。18は、壺胴部である。3本一単位櫛歯状工具による縦羽状文を施文している。

(3) 遺構外出土遺物 (第151図)

報告書第286集「北島遺跡」VIにおいて、掲載した遺物に、新たに未整理の遺物が発見された為、報告書に掲載した。

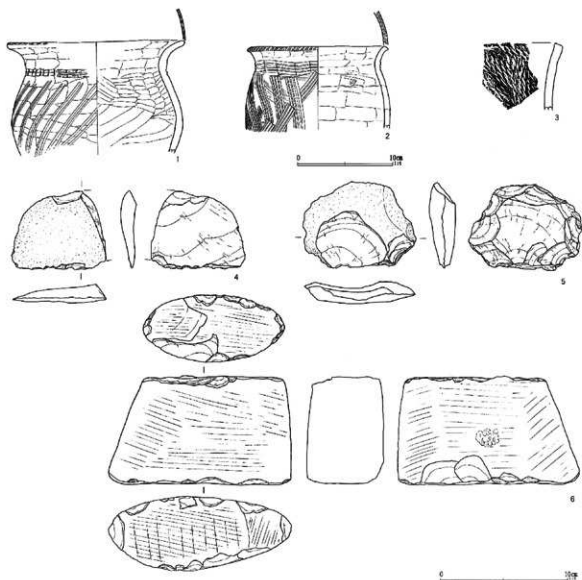
1は古墳時代前期の環濠から出土した。胴部が丸く頸部で強く緩め口縁部が大きく外反する甕上半部である。口端部に原体L R単節縄文を施文し、口縁

部は無文としている。頸部は2本一対の棒状工具を用いて擬似簾状文を施文している。胴部は強い横ナデ成形の後同一工具による短斜線文または、横羽状文を施文している。また、内面に強い横ナデが認められる。2は古墳時代前期の環濠から出土した。胴部の張り出しが弱く頸部が窄まり口縁部に向かって緩やかに外反する甕上半部である。口端部は外削ぎ状に面取りが成され、原体L R単節縄文が施文されている。口縁部は無文で頸部に4本一単位櫛歯状工具による擬似簾状文を施文している。胴部は同一工具により斜格子文を施文している。内外面の一部にハケ調整が認められる。3は僅かに外反する甕口縁部である。口端部は平坦に面取りが成されている。口縁部以下に原体Rの捺糸文を施文している。

4は刃器である。扁平の礫の裏面を打割して素材剥片を取り出し周縁部に細かい剥離を加えて形状を整えている。半分ほどを欠損している。刃部は使用によると考えられる細かい剥離が認められる。長さ6.1cm、幅7.5cm、厚さ1.2cm、重さ64.6gで、石材はホルンフェルスである。5は打製石斧である。扁平の礫の裏面を打割して素材を取り出し周縁部に剥離を加えて形状を整えている。両側縁部は裏面より剥離を加えて浅い挟り込みを入れている。刃部は使用により大きく欠損している。長さ6.8cm、幅8.8cm、厚さ2.1cm、重さ141.3gで、石材は多孔質安山岩である。6は磨石である。扁平の大型礫の両端部を打割し、両側の打割面を研磨面として使用している。底面左端に赤彩顔料が付着している。また、縁辺部は敲打により剥離が生じている。長さ8.5cm、幅14.4cm、厚さ6.0cm、重さ1239.1gで、石材は砂岩である。

第36表 補遺編掲載遺物新旧対応表(1)

報告書286集遺物掲載番号	報告書291集遺物掲載番号	報告書286集遺物掲載番号	報告書291集遺物掲載番号	報告書286集遺物掲載番号	報告書291集遺物掲載番号
317号住居跡150図1	317号住居跡144図1	317号住居跡150図7	317号住居跡145図14	317号住居跡151図13	317号住居跡145図26
317号住居跡150図2	317号住居跡144図2	317号住居跡150図8	317号住居跡145図16	317号住居跡151図14	317号住居跡144図6
317号住居跡150図3	317号住居跡144図3	317号住居跡151図9	317号住居跡145図19	317号住居跡151図15	317号住居跡144図6
317号住居跡150図4	317号住居跡144図4	317号住居跡151図10	317号住居跡145図30	317号住居跡151図16	317号住居跡145図25
317号住居跡150図5	317号住居跡144図11	317号住居跡151図11	317号住居跡145図29	317号住居跡151図17	317号住居跡146図34
317号住居跡150図6	317号住居跡144図12	317号住居跡151図12	317号住居跡145図27	317号住居跡151図18	317号住居跡145図12



第151图 遺構外出土遺物

第37表 補遺編掲載遺物新旧対応表(1)

報告書286集遺物掲載番号	報告書291集遺物掲載番号	報告書286集遺物掲載番号	報告書291集遺物掲載番号	報告書286集遺物掲載番号	報告書291集遺物掲載番号
317号住居跡151図19	317号住居跡145図14	318号住居跡154図15	318号住居跡148図18	318号住居跡155図33	318号住居跡149図37
317号住居跡151図20	317号住居跡146図39	318号住居跡154図16	318号住居跡148図17	318号住居跡155図34	318号住居跡149図36
317号住居跡151図21	317号住居跡146図42	318号住居跡154図17	318号住居跡148図20	318号住居跡155図35	318号住居跡149図34
317号住居跡151図22	317号住居跡146図41	318号住居跡154図18	318号住居跡148図22	318号住居跡155図36	318号住居跡149図42
318号住居跡154図1	318号住居跡148図1	318号住居跡154図19	318号住居跡148図23	318号住居跡155図37	318号住居跡149図40
318号住居跡154図2	318号住居跡148図3	318号住居跡154図20	318号住居跡148図25	318号住居跡155図38	318号住居跡149図43
318号住居跡154図3	318号住居跡148図5	318号住居跡154図21	318号住居跡148図24	318号住居跡155図39	318号住居跡149図41
318号住居跡154図4	318号住居跡148図7	318号住居跡154図22	318号住居跡148図26	318号住居跡155図40	318号住居跡149図44
318号住居跡154図5	318号住居跡148図8	318号住居跡154図23	318号住居跡148図28	318号住居跡155図41	318号住居跡149図45
318号住居跡154図6	318号住居跡148図9	318号住居跡154図24	318号住居跡148図27	318号住居跡155図42	318号住居跡149図46
318号住居跡154図7	318号住居跡148図10	318号住居跡154図25	318号住居跡148図30	318号住居跡155図43	318号住居跡149図47
318号住居跡154図8	318号住居跡148図11	318号住居跡154図26	318号住居跡148図29	361号住居跡233図1	361号住居跡150図1
318号住居跡154図9	318号住居跡148図14	318号住居跡154図27	318号住居跡149図31	361号住居跡233図2	361号住居跡150図18
318号住居跡154図10	318号住居跡148図15	318号住居跡155図28	318号住居跡149図39	361号住居跡233図3	361号住居跡150図7
318号住居跡154図11	318号住居跡148図12	318号住居跡155図29	318号住居跡149図38	361号住居跡233図4	361号住居跡150図12
318号住居跡154図12	318号住居跡148図13	318号住居跡155図30	318号住居跡149図32	361号住居跡233図5	361号住居跡150図15
318号住居跡154図13	318号住居跡148図16	318号住居跡155図31	318号住居跡149図33	361号住居跡233図6	361号住居跡150図17
318号住居跡154図14	318号住居跡148図19	318号住居跡155図32	318号住居跡149図35		

3. 第17地点の自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 北島遺跡の土層とテフラ

1. はじめに

埼玉県北部に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間、八ヶ岳など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）などが多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、水田遺構が複数の層位から検出された熊谷市北島遺跡においても、地質調査を行い土層の層序を記載するとともに、土層断面から採取された試料を対象にテフラ検出分析を行って示標テフラの層位を把握し、遺構の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、17地点A区である。

2. 土層の層序

17地点A区の基本土層断面では、下位より青灰色粘土層（層厚10cm以上、XⅨ層）、灰色粘土層（層厚34cm、XⅧ層）、青灰色シルト層（層厚10cm、XⅦ層）、灰色泥層（層厚12cm、XⅥ層）、暗灰色泥層（層厚11cm、XⅤ層）、青灰色粘土層（層厚4cm、XⅣ層）、黄灰色粘土層（層厚5cm、XⅢ層）、灰色粘土層（層厚10cm、XⅡ層）、暗灰色土粘土層（層厚10cm、XⅠ層）、灰色粘土層（層厚4cm、X層）、若干色調が暗い灰色粘土層（層厚11cm、Ⅸ層）、黄灰色粘土層（層厚17cm、Ⅷ層）、灰色粘質土（層厚14cm、Ⅶ層）、灰白色軽石層（層厚3cm、軽石の最大径3mm）、若干色調が暗い灰色土（層厚8cm、以上Ⅵ層）、褐色土（層厚2cm、Ⅴ層）、灰色シルト層（層厚25cm、Ⅳ層）、灰色シルト質砂層（層厚16cm、Ⅲ層）、灰色シルト層（層厚5cm、Ⅱ層）が認められる（図1）。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

17地点A区の基本土層断面において、基本的に厚さ5cmごとに採取された試料のうち、5cmおきを中心とした26点について、テフラ検出分析を行ってテフラの降灰層準の把握および示標テフラとの同定を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を把握。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。試料27以上の多くの試料から、軽石やスコリアが検出された。なかでも、試料23にはスポンジ状に比較的良好に発泡した灰白色軽石（最大径0.6mm）が少量含まれている。この軽石の班品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その特徴から4世紀中葉*1に浅間火山から噴出した浅間C軽石（As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979）に由来すると考えられる。とくに試料23および22に斜方輝石や単斜輝石が多く含まれていることから、試料23付近（XI層）にAs-Cの降灰層があると考えられる。

試料19には、発泡のあまりよくない白色軽石（最大径0.5mm）が認められる。軽石の班品には、角閃石や斜方輝石が認められる。この軽石は、その特徴および本遺跡とテフラの分布との関係などから、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳洪川テフラ（Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992）に由来すると考えられる。試料21（IX層）から試料17（Ⅲ層）にかけて、角閃石が多く含まれる傾向にあることから、IX層中にHr-FAの降灰層がある可能性が考えられる。したがって、洪水に由来すると考えられる灰色粘土層（X層）の層位は、As-Cの上位でHr-FAの下位にあると考えられる。

軽石層である試料13には、比較的良好に発泡した淡褐色軽石（最大径2.5mm）がとくに多く含まれている。軽石の班品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その特徴から1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B, 新井, 1972）に由来すると考えられる。したがって、VI層下部のテフラ層は、As-Bに同定される可能性が非常に高い。

なお、テフラの同定精度をさらに向上させるためには、テフラ粒子についての屈折率測定などを行うと良い。

4. 考察—水田遺構と示標テフラとの関係について

17地点A区における発掘調査では、XIV層直下から弥生時代中期、X層直下から弥生時代から古墳時代初頭、VI層直下から平安時代とそれぞれ推定される水田遺構が検出されている。また、Ⅲ層からは5世紀から平安時代にかけての遺物が検出されている。

テフラ検出分析の結果、XI層にAs-C、IX層中にHr-FAの降灰層があると推定され、VI層下部のテフラがAs-Bに同定された。この結果から、それぞれの遺構の層位を検討すると、XIV層直下の水田遺構はAs-Cより下位、X層直下の水田遺構はAs-Cより上位でHr-FAの下位、VI層直下の水田遺構はAs-B直下となる。X層直下の水田遺構の年代推定に若干の相違があるようにも思えるが、本遺跡と同様に群馬県域でも比較的多くの遺跡において、As-Cの上位でHr-FAの下位に洪水堆積物が認められており、その直下から水田遺構が検出されている。これらの水田遺構と、X層直下の水田遺構の形態比較などを行って、さらに検討する必要があるのかも知れない。

5. 小結

北島遺跡17地点A区において、地質調査とテフラ検出分析を行った。その結果、下位より浅間C軽石（As-C, 4世紀中葉*1）、榛名榛名二ツ岳洪川テフラ（Hr-FA, 6世紀初頭）、浅間Bテフラ（As-B, 1108年）などに由来する可能性の高いテフラを検出することができた。これらの示標テフラとの層位関係が

ら、本地点において検出された3層準の水田遺構は、下位より各々As-Cより下位、As-Cより上位でHr-FAの下位、As-B直下に層位があると考えられる。

*1 西暦300年前後とする見方もある（友廣，1988など）。

文献

- 新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層，考古学ジャーナル，no.53，p.41-52.
- 荒牧重雄（1968）浅間火山の地質，地団研専報，no.14，p.1-45.
- 町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス，東京大学出版会，276p.
- 坂口 一（1986）榛名二ツ岳起源F A・F P層下の土師器と須恵器，群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井 神社古墳群・荒砥青柳遺跡」，p.103-119.
- 早田 勉（1989）6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害，第四紀研究，27，p.297-312.
- 友廣哲也（1988）古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石，群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」，p.325-336.

表1 17地点A区におけるテフラ検出分析結果

試料	軽石・スコリア		
	量	色 調	最大径
1	+	淡褐	0.7
3	+	淡褐	1.1
5	-	-	-
7	+	淡褐	0.8
9	+	淡褐>暗灰	1.1, 0.6
10	+	淡褐	0.9
11	++	淡褐	2.0
13	++++	淡褐	2.5
15	+	淡褐	0.8
17	-	-	-
18	-	-	-
19	+	白	0.5
21	-	-	-
22	-	-	-
23	+	灰白	0.6
25	-	-	-
27	+	灰	0.4
28	-	-	-
29	-	-	-
31	-	-	-
33	-	-	-
35	-	-	-
37	-	-	-
39	-	-	-
41	-	-	-
43	-	-	-

++++：とくに多い，+++：多い，++：中程度
+：少ない，-：認められない，最大径の単位は，mm.

II. 北島遺跡におけるプラント・オパール分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（ SiO_2 ）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である（杉山，2000）。

2. 試料

試料は、17地点A区から採取された9点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

プラント・オパール抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールをおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10-5g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、タケ亜科は0.48である。

4. 分析結果

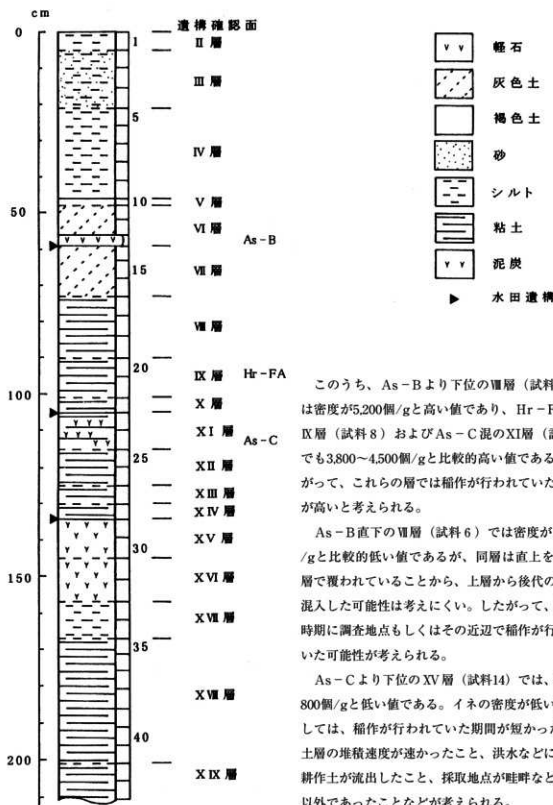
水田跡（稲作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

5. 考察

(1) 水田跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探索を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

17地点A区では、Ⅶ層（試料6）からⅩⅨ層（試料18）までの層準について分析を行った。その結果、Ⅶ層（試料6）、Ⅷ層（試料7）、Ⅸ層（試料8）、ⅩⅠ層（試料10）、ⅩⅤ層（試料14）の各層からイネが検出された。



数字はテフラ分析の試料番号

図1 17地点A区の土層柱状図

このうち、As-Bより下位のⅧ層（試料7）では密度が5,200個/gと高い値であり、Hr-FA混のⅨ層（試料8）およびAs-C混のⅪ層（試料10）でも3,800~4,500個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

As-B直下のⅦ層（試料6）では密度が1,500個/gと比較的低い値であるが、同層は直上をテフラ層で覆われていることから、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

As-Cより下位のⅩⅤ層（試料14）では、密度が800個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったことなどが考えられる。

(2) 堆積環境の推定

ヨシ属は比較的湿ったところに生育し、ススキ属やタケ重科は比較的乾いたところに生育している。

このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境（乾燥・湿潤）を推定することができる。

イネ以外の分類群では、XV層やXVI層などでヨシ属が検出され、部分的にススキ属型やタケ亜科なども検出されたが、いずれも少量である。おもな分類群の推定生産量によると、XV層やXVI層ではヨシ属が優勢となっていることが分かる。

以上のことから、稲作が開始される以前の遺跡周辺は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、As-Cより下位のXV層の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたと推定される。

6. まとめ

プラント・オパール分析の結果、弥生時代～古墳時代初頭の水田遺構が検出された浅間C軽石（As-C、4世紀中葉）混の層からは、イネが多量に検出され、同遺構で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、5世紀から平安時代にかけての遺物が検出されたⅧ層、および榛名二ツ岳洪川テフラ（Hr-FA、6世紀初頭）混のⅨ層でも、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。さらに、平安時代の水田遺構が検出された浅間Bテフラ（As-B、1108年）直下のⅦ層、および弥生時代中期の水田遺構が検出されたXV層でも、稲作が行われていた可能性が認められた。

本遺跡周辺は、稲作が開始される以前はヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、弥生時代中期とされるXV層の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたと推定される。

表1 埼玉県、北畠遺跡におけるプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

地点・試料		17地点A区									
分類群	学名	6	7	8	10	11	14	15	17	18	
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	15	52	38	45		8				
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)		7				23	15			
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type					7				8	
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	7				7	8			8	

推定生産量（単位：kg/m²・cm）

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	0.44	1.54	1.10	1.33		0.22			
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)		0.47				1.42	0.95		
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type					0.09				0.09
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	0.04				0.04	0.04			0.04

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

文献

杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール)。考古学と植物学。同成社, p.189-213.

藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) —数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学, 9, p.15-29.

藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) —プラント・オパール分析による水田址の探査—。考古学と自然科学, 17, p.73-85.

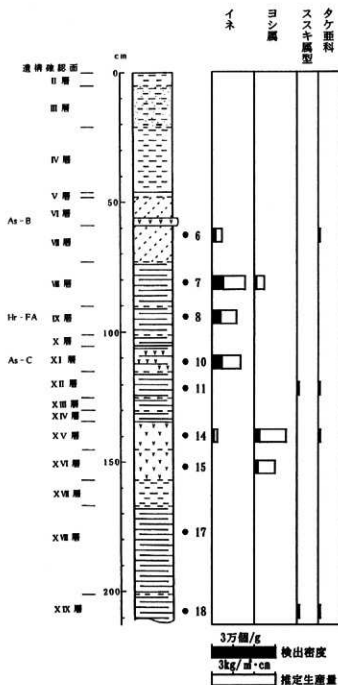


図1 北島遺跡、17地点A区におけるプラント・オパール分析結果

Ⅲ．北島遺跡における花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地堆積物を対象として比較的広域な地域の植生や古環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。なお、乾燥的な環境下の堆積物では、花粉などの植物遺体が分解されて残存しない場合もある。

2. 試料

試料は、17地点A区から採取された18点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、2分間）の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。

花粉の同定は、鳥倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

4. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉29、樹木花粉と草本花粉を含むもの3、草本花粉28、シダ植物胞子2形態の計62である。以下に出現した分類群を記す。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、トウヒ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、マツ属単維管束亜属、スギ、イチイ科－イスガヤ科－ヒノキ科、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、サンショウ属、センダン属、モチノキ属、カエデ属、トチノキ、ブドウ属、トネリコ属、ツツジ科、ニワトコ属－ガマズミ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、バラ科、マメ科

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ホシクサ属、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、キンボウゲ属、アブラナ科、ノブドウ、アカバナ科、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、オオバコ属、オミナエシ科、ゴキツル、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

下位の試料11～18からは、クリ、シイ属、コナラ属アカガシ亜属、イネ科、ヨモギ属などが検出されたが、いずれも少量である。上位の試料1～10からは、比較的多くの花粉が検出された。花粉群集の構成と変遷から、下位よりⅠ帯、Ⅱ帯の花粉分帯が設定され、さらにⅠ帯はa帯とb帯に細分された。以下に、花粉分帯に沿って花粉群集の特徴を記す。

1) Ⅰ帯（試料4～10）

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉では、イネ属型を伴うイネ科が優占し、カヤツリグサ科、ヨモギ属の出現率がやや高い。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、スギなどがやや多く検出され、クワ科－イラクサ科が伴われる。a帯（試料6～10）では、さらにミズアオイ属、オモダカ属、ナデシコ科などの草本花粉とカバノキ属、クマシデ属－アサダ、イチイ科－イスガヤ科－ヒノキ科などの樹木花粉が伴われる。b帯（試料4～5）では、アブラナ科、アカザ科・ヒユ科などの草本花粉やクリが伴われる。

2) Ⅱ帯（試料1～3）

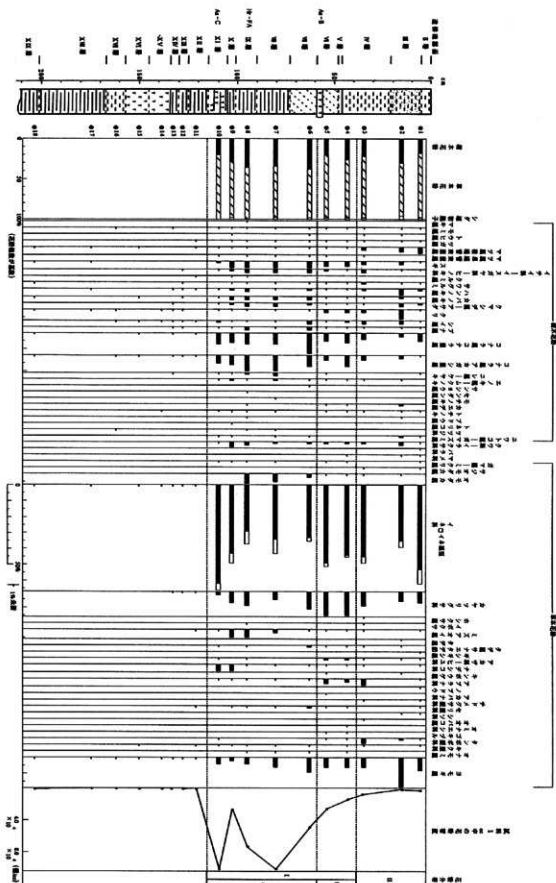
樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉では、イネ属型を伴うイネ科が優占し、カヤツリグサ科、ヨモギ属の出現率がやや高い。樹木花粉では、マツ属複雑管束亜属が出現しており、クリ、コナラ属コナラ亜属、ハンノキ属、スギ、コナラ属アカガシ亜属などが伴われる。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

XIX層から浅間C軽石（As－C、4世紀中葉）直下のXII層にかけては、少量ながらクリ、シイ属、コナラ属アカガシ亜属（カシ類）、イネ科、ヨモギ属などが検出され、遺跡周辺にこれらの樹木や草本が分布していた可能性が認められた。花粉があまり検出されない原因としては、乾燥あるいは乾湿を繰り返す堆積環境下

表1 北島遺跡における花粉分析結果

学名	和名	17地点A区																	
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
<i>Alnus pollen</i>	樺木花粉																		
<i>Podocarpus</i>	マキ属									1									
<i>Abies</i>	モミ属	2	2	2	3	1	4	2	3	5	1			1			1		
<i>Picea</i>	トウヒ属		1	1				1			1								
<i>Tsuga</i>	ツガ属	1	2	2	1	1	3	1	1	1	1		1						
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属(短葉亜属)	15	7	5	4	1	1	1	2	1	1	1					1	1	1
<i>Pinus subgen. Haploxylon</i>	マツ属(長葉亜属)																		
<i>Corymbia japonica</i>	スギ	4	5	8	18	14	22	20	26	20	6							1	1
<i>Taxus-Cephalotaxus-Cupressaceae</i>	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	3	2	6	4	6	11	8	13	7	1		1						
<i>Juglans</i>	クルミ属										1								
<i>Paracarya rhoifolia</i>	サワグルミ	1	1	4	3	2	3	3	1	2			1						
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	6	10	4	3	1	6	2	10	8	1	1	2	2				1	
<i>Betula</i>	カバノキ属	3	3	1	3	4	10	9	11	11	4		1			2			1
<i>Corylus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ	5	4	1	5	3	5	11	10	7	3			1					
<i>Castanea creata</i>	クリ	3	14	8	12	8	4	3	1	2	1		1	2	1		1	5	8
<i>Castanopsis</i>	シイ属	3	5	6	6	4	10	2	4	4	5		4	2	2	3	1	1	
<i>Fagus</i>	ブナ属	4	2	3	3	2	11	2	14	3	1		1	1					
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	19	5	14	36	25	64	32	44	31	32	1	1			1			2
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	4	4	9	41	14	35	45	65	32	22	1	2	1		1	2	1	1
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-クナギ	1				2		9	8	2	4								
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エニキ属-ムクノキ	1	1	1	1	1	2	5	4	7	1								
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ科属						1												
<i>Melic</i>	センダン科属																		
<i>Ros</i>	モモ科属									1									
<i>Acer</i>	カエデ科属			3		2	1			1									
<i>Asteraceae turbinate</i>	トチノキ	1	1	1	2	1			1	2	5	1				1			
<i>Vitis</i>	ブドウ科属			1						1									
<i>Fraxinus</i>	トネリコ科属											2							
<i>Ericaceae</i>	マツジ科属								1	1									
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ科属-ガマズミ科属	1	3					2	1		3	1							
<i>Alnus + Nonalderia pollen</i>	樺木-草本花粉																		
<i>Monocotyledonae</i>	クワ科-イラクサ科	2	5	4	8	5	7	6	13	18	4								
<i>Ranuncul</i>	ハナ科	1																	
<i>Lagymnites</i>	マメ科	1	1		1														
<i>Nonalderia pollen</i>	草本花粉																		
<i>Trifolium-Spergularia</i>	ガマ科-ミクリ科属	2			2	1		2	5	3	2								
<i>Alnus</i>	ササノミ科属	1		1															
<i>Sagittaria</i>	オモダカ科属			1	3	5	1	12	25	36									
<i>Gramineae</i>	イネ科	224	85	151	254	225	169	158	190	241	281	13	9	2	8	5		1	5
<i>Oryza type</i>	イネ属	38	9	14	4	8	11	41	52	31	38								
<i>Cyperaceae</i>	カヤツリグサ科	30	14	30	87	68	54	21	57	41	11	1	1	1					
<i>Eriocaulon</i>	ホシクサ科属																		
<i>Anemone latifolia</i>	イボクサ			3						2									
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属	1		2	1	3	1	11	32	26	4	1							
<i>Polygonum</i>	タデ科属		2																
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ科属サナエタデ節		1	1	4	4	7			2	2								
<i>Rumex</i>	ギンギン科属	1																	
<i>Chenopodiaceae-Amaranthaceae</i>	アカザ科-ヒコ科	2	1	1	7	5				1	1								
<i>Caryophyllaceae</i>	ナデシコ科属	2	1	4	1	2	2	3	20	19									
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ科属			2		1													
<i>Oxalis</i>	アザミ科	2																	
<i>Anagallis brevipedunculata</i>	ノボタ	2		14	11	12	2	1	2	4	3								
<i>Oxycoccus</i>	アカハナ科属	1																	
<i>Hydrocotylaceae</i>	チドメグサ科属	2		1															
<i>Apocynum</i>	セリ科属					3	1	5	1	1	1		1						
<i>Labiata</i>	シソ科	1	1																
<i>Plantago</i>	オオバコ科属				1														
<i>Valerianaceae</i>	オミナエシ科属																		
<i>Actinostemon lobatus</i>	ゴキウ					1	1												
<i>Lactucoidae</i>	タンポポ科属	1	3	9	5	1						1							
<i>Asteraceae</i>	キク科属	3	3	1			2	2	1	3	3	2				2			
<i>Zandaria</i>	オナモミ属				1		1	1	1										
<i>Artemisia</i>	ヨモギ科属	34	44	19	33	29	45	27	27	13	20	10	2	2	9	9	1	5	12
<i>Fern spore</i>	シダ植物胞子																		
<i>Monocot type spore</i>	単葉植物胞子	3	6		8	6	7	1	1	6	1	7	9	28	5	3	2	3	5
<i>Trilete type spore</i>	三葉植物胞子	3	5	4	5		1	4	2		2	7	4	3	1				
<i>Alnus pollen</i>	樺木花粉	76	76	77	147	92	196	161	226	155	86	10	11	13	5	6	5	8	15
<i>Alnus + Nonalderia pollen</i>	樺木-草本花粉	4	6	4	9	5	7	6	13	18	4	0	0	0	0	0	0	0	0
<i>Nonalderia pollen</i>	草本花粉	346	163	255	424	362	311	291	412	380	365	28	12	5	17	16	1	6	17
<i>Total pollen</i>	花粉濃度	426	245	336	580	459	514	469	661	556	485	38	23	18	22	22	6	14	32
	試料1cc中の花粉濃度	3.0	1.7	8.1	1.4	2.6	4.9	1.0	7.3	2.7	1.0	2.3	1.4	1.1	1.3	1.3	3.6	7.0	1.9
		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
<i>Unknown pollen</i>	未特定花粉	5	4	6	5	2	5	2	2	3	3	0	1	3	0	0	0	0	3
<i>Fern spore</i>	シダ植物胞子	6	11	4	13	6	8	5	1	8	1	14	13	28	8	4	2	3	5



で、花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

As-C 混の 層から浅間 B テフラ (As-B, 1108 年) 直下のⅧ層にかけては、イネ科、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、オモダカ属などの水生植物が生ずる滞水した環境であったと考えられ、周囲では水田稲作が行われていたと推定される。As-B 直上のⅥ層からⅣ層下部にかけては、水生植物が減少し、アブラナ科、アカザ科・ヒユ科などの乾燥を好む人里植物や畑雑草が増加することから、周囲では水田稲作に加えてアブラナ科などの畑も行われていたと推定される。森林植生としては、コナラ属コナラ亜属 (ナラ類) などの落葉広葉樹林、コナラ属アカガシ亜属 (カシ類) などの常緑広葉森林、およびスギなどの針葉樹林が、近接するか混在して分布していたと推定される。

Ⅳ層上部から遺構確認面のⅡ層にかけては、水田の環境であったと考えられ、周囲にはイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などの人里植物や耕地雑草が分布していたと推定される。また、この時期には遺跡周辺でクマノ木やマツの二次林が増加したと推定される。

文献

中村 純 (1973) 花粉分析, 古今書院, p.82-110.

金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原, 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.

島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態, 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.

中村 純 (1980) 日本産花粉の標識, 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

中村 純 (1974) イネ科花粉について, とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として, 第四紀研究, 13, p.187-193.

中村純 (1977) 稲作とイネ花粉, 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.

Ⅳ. 北島遺跡における寄生虫卵分析

1. はじめに

人や動物などに寄生する寄生虫の卵殻は、花粉と同様の条件下で堆積物中に残存しており、人の居住域では寄生虫卵による汚染度が高くなる。糞便の堆積物では、寄生虫卵の密度がとくに高くなることから、寄生虫卵分析を用いてトイレ遺構を確認することが可能である。また、寄生虫の生活史や感染経路などから、摂取された食物の種類や、そこに生息していた動物種を推定することも可能である。

2. 試料

試料は、17地点 A 区から採取された18点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 方法

微化石分析法を基本に以下に行った。

- 1) サンプルを採量する。
- 2) 脱イオン水を加え攪拌する。
- 3) 篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す。
- 4) 25%フッ化水素酸を加え30分静置（2、3度混和）。
- 5) 水洗後サンプルを2分割し、片方にアセトリシス処理を施す。
- 6) 両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。
- 7) 検鏡・計数を行う。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

4. 結果および考察

分析の結果、寄生虫卵および明らかな消化残渣は、いずれの試料からも検出されなかった。XIX層から浅間C軽石（As-C、4世紀中葉）直下のXIIにかけては、花粉もあまり検出されないことから（第Ⅲ章参照）、乾燥あるいは乾湿を繰り返す堆積環境下でこれらの有機質が分解されたことが考えられるが、当初から寄生虫卵に汚染されていなかった可能性も考えられる。なお、As-C混層より上位では、花粉が比較的良好に検出されていることから、寄生虫卵のみが分解されたことは考えにくい。このことから、当時の調査地点付近は寄生虫卵に汚染されていなかった可能性が考えられる。

文献

Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard (1992) Methods for Extraxting Pollen nd Parasite Eggs from Latrine Soils. Jounal of Archaeological Science, 19, p.231-245.

金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫。藤原京跡の便所遺構—藤原京7条1坊—、奈良国立文化財研究所、p.14-15.

金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扁形動物。医動物学、新版臨床検査講座、8、医歯薬出版、p.9-55.

金原正明（1999）寄生虫。考古学と動物学、考古学と自然科学、2、同成社、p.151-158.

表1 北島遺跡における寄生虫卵分析結果

分類群		17地点A区																	
学名	和名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

VI 調査のまとめ

1. 北島遺跡20地点における古代集落の動態

はじめに

北島遺跡は過去の調査において、大規模な律令期集落が展開することが判明している（浅野1989、田中2002など）。第20地点は区画溝を伴う大規模建物群が検出された第19地点の北側に位置する。調査区が道路予定地であるため、集落の全体像は窺い知れないが、北島遺跡全体の律令期集落の動向を分析する際の材料としては欠かすことはできない。ここでは、第20地点の古代集落について時期別の盛衰をまとめることで、遺跡全体の総括に備えたい。

1 土器編年

対象となる遺構は古墳時代前期の4軒を除く、41軒の住居跡と4棟の掘立柱建物跡などである。遺構相互の重複が激しく、遺物の出土量が全体的に少ないうえに、数時期の遺物が混じっているなど、編年を行う際の条件は良好とは言えない。編年の基軸は土師器供膳器の形態変化と組成に置いたが、伴出する須恵器や土師器甕とのセット関係や型式変化も慮内に入れた。7世紀後半以降の土器群については、熊野遺跡編年（富田2002）をベースとした。

第Ⅰ期 第39号溝跡・第29号溝跡出土土器をあて。いずれも有段口縁杯（第139図48・56）、坏身模倣坏（同図47・55）の両者をセットで持つ。口縁部のつくりや大きさから見て、第39号溝跡の方が古く、第29号溝跡が相対的に新しい要素が認められる。深谷市新屋敷・本郷東遺跡編年に当て嵌めれば、古墳時代Ⅳ期～Ⅴ期（田中1992）に相当する段階となろう。時間的には6世紀後半～7世紀前半頃と考えておきたい。また、第29号溝跡からは須恵器提振が検出されている（第139図53）。かなり小型の製品で、肩部に環状把手の痕跡が残る。天井部には絞目はないが円盤で閉塞されていた。胴部は全面カキ目調整され、頸部は太頸である。末野窯跡群でも灰年から検出されており提振の生産は

確実である（福田1998、赤熊1999）。末野遺跡からは環状把手と鉤状把手の両タイプが存在し、大きさや調整手法にもバラエティがあり直接の対比が難しい。消費地ではあるが花園町黒田古墳群第1号墳から太頸の提振が検出されている。形態的には比較的類似するが、黒田古墳群例では把手が鉤状となる（塩野・小久保1975）。時期比定に関しては更に検討が必要だが、第29号溝跡から出土した土師器杯と大きな齟齬はなさそうだ。TK209～TK217併行期に取まると考えておきたい。

また、第36号住居跡出土土器（第111図）も本期に属する可能性が高い。第111図1・2は口径が最も縮小する段階以前のタイプであり、Ⅰ期新相と捉えることができる。但し、3の須恵器低脚盤は混入と見た方が良からう。おそらくは後続する段階のものであろう。その他、第32・33号住居跡出土土器の内、古い一群（第109図3～5）が本期と考えられる。3・4は坏身模倣坏、5は有段口縁杯でⅠ期古相に比定される。

第Ⅱ期 有段口縁杯、模倣坏は小型化し、口径10～11cm前後のものが主体を占める。坏身模倣坏は姿を消し、新たに内屈・内湾口縁杯などと呼ばれる北武蔵型坏と北武蔵型（北島型）暗文坏、大型の皿形土器が組成に加わる。北武蔵型坏と同暗文坏は底部が丸底または、扁平な丸底形態を呈する。

須恵器では本期前半に杯Gとかえり蓋の出現、後半では大型の杯Aとセットとなる内面にかえりをもつ蓋が盛行する。概ね熊野Ⅰ期～Ⅱ期に対応する段階で、年代的には7世紀後半～8世紀1/4期頃となろう。

良好な資料に乏しいが、第32～35号住居跡出土土器（109図）、第1～4号掘立柱建物跡出土土器（第123図）、第25号溝跡出土土器（第136図23～31）等が該当しよう。

第32～35号住居跡出土土器では第109図3～5を除く土器が該期に含まれるであろう。1・3・14は北武蔵型環。口縁部が小さく内屈または内彎する深身の丸底形態をなす。本期前半に位置付けられる。7・8は北武蔵型環であるが、口縁部がやや長く直立するタイプである。型式的にはやや新しい様相が伺えるが大差はない。9・13は暗文皿。9には内面に放射暗文が施文されている。13は内面の暗文は不明確であるが、形態的に暗文皿のタイプに属する。2の土師器甕は小型品か。胴部は縦方向のヘラケズリ。10は口縁部が大きく開くタイプで、胴部は斜めケズリである。

第40号住居跡出土土器は砲弾状を呈し、胴部は縦方向のヘラケズリ調整が施される(第88図8)。本期前半に属する可能性が高い。

第1～4号掘立柱建物跡出土土器では、遺存率の低いものが多く、あまり良好な資料とはいえないが第123図3の暗文環、12の小型模倣環、15の口唇部が内彎する北武蔵型環などが本期の一例と考えられる。また、10の須恵器フラスコ瓶は本期に伴っても良い。13の土師器北武蔵型環が形態的に最も新しい様相を備えている。小破片であり不明確な点はあるが、8世紀前半～中頃に降る可能性はある。

遺構外出土の須恵器環G(第140図1)は口径8.7cmと非常に小振りで、底部はヘラ切り後軽いナデ調整される。胎土から末野窯跡群産と推定される。岡部町熊野遺跡第131次1号住居跡から出土した末野産環Gとはほぼ同一法量である(鳥羽2001)。同住居跡は畿内産土師器や須恵器の様相から飛鳥Ⅱ期～Ⅲ期にかけての土器様相を示すものと推定されており、本資料も第Ⅱ期前半段階、7世紀後半に属すると推定される。

その他第8号住居跡出土遺物(第88図1～7)も本期に属するであろう。3・4の須恵器環は混入であるが、内湾乃至直立口縁の北武蔵型環(1・2)、北武蔵型の皿(5)、湖西産の須恵器長頸瓶があり、本期新相(7世紀末葉～8世紀初頭頃)の土器群と

推定される。

第Ⅲ期 有段口縁環、模倣環は第Ⅱ期のなかで消滅し、土師器環は北武蔵型環を主体とし、暗文環が伴う。北武蔵型環は腰高の丸底タイプは減少し、扁平化した弱い丸底形態が主流となる。腰の位置は器高の中位から下位に向かって下がる傾向にあり、口縁部下の無調整部(ヘラケズリの及ばない範囲)が目立つようになる。

須恵器環は法量分化が解消(単一法量)し、口径14～13cm代と縮小化に向かっている。底部は平底化し、全体に扁平な器形となる。底部は糸切り後ヘラによる再調整が施される。熊野遺跡Ⅲ期～Ⅳ期に概ね並行する段階と考えておきたい。

この段階に含まれる資料としてはまず、第21号土器出土資料(第126図1～11)を挙げることができる。器形の判明する須恵器環(第126図5)は口径13.3cm、底部は糸切り後幅広くヘラケズリ調整が施されている。南北企産で、渡辺編年のHⅢ期に比定できるであろう。6・7の須恵器環は小片ではあるがほぼ同時期と見て差し支えなさそうである。土師器環(第126図1～4)のうち、4は扁平化が進んでいることやケズリの範囲が縮小していることから伴う可能性が高いが、1～3はやや古相を呈するといえようか。

第16号住居跡出土須恵器環(第97図4)は口径13.0cm、底部は回転糸切り後ヘラケズリ調整される。渡辺編年HⅢ期に比定しておきたい。その他、第4号住居跡出土土器が本期とできようか(註1)。須恵器環は底部ヘラによる再調整が施され(第85図6)、土師器環は扁平丸底形態の北武蔵型杯が伴う(同図1・4)。

第Ⅳ期 土師器環は平底、または平底風となる。須恵器環は口径12cm前後、底部は再調整を施すタイプも一部残るが、回転糸切り後無調整が主体となる。口縁部の外反はまだ弱く、底径は口径の1/2を超えるものが多い。第Ⅲ期との間には一型式程度の断絶がありそう。概ね熊野遺跡ⅤV期に相当するであ

ろう。

第2号住居跡、第5号住居跡、第45号住居跡出土遺物が該期に含まれる。第2号住居跡（第83図1～11）では3・6の土師器環、1の須恵器環、8の須恵器蓋、9の須恵器碗が伴う可能性がある。土師器環（3・6）は扁平な皿タイプである。1の口径はもう少し小さいかもしれない。9の碗は器肉が薄く、口唇部のつくりもやや甘く、該期が相当と考えた。

第5号住居跡（第86図）出土の土師器甕（16・18）はカマドから出土しており、遺構に伴う可能性が高い。口縁部の形状からいわゆる「コ」の字状口縁甕の初現タイプとみることができる。須恵器環（1～7）は全形が判明する資料はないが、底部調整は回転糸切り後無調整と周辺ヘラケズリ調整の両者がある。また、底径の縮小する、口唇部が外反するものがある点など、やや後出する要素も認められる。第4～7号住居跡出土須恵器環（第87図2～4）は底部回転糸切り後無調整、底径は口径の1/2を超える。本住居跡、または本住居跡の一部あるいは建て替えられた可能性の高い7号住居跡に伴うものと推定される。渡辺編年HⅥ～Ⅶ期に比定されよう。土師器環では第86図11・12が伴うと思われる。

第45号住居跡（第116図）資料は比較的多まっている。須恵器環（1～4）は口径に対する底径比が1/2ほどで、4は底径がかなり大きい。いずれも底部調整は回転糸切り後無調整である。全て南比企産で、渡辺編年HⅥ～Ⅶ期段階と推定される。須恵器碗は底部ヘラによる再調整が残るがほぼ同時期と見てよからう（8・9）。

土師器環（5・6）は平底化しており、体部は無調整である。土師器甕では11の口縁部が「コ」の字状、10はその前段階で、まだ口縁部の屈曲がやや弱いようである。

V期 第3号住居跡、第9号住居跡出土土器をあて。第3号住居跡（第83図12～16）では底部回転糸切り後無調整の須恵器環（13）と須恵器皿（14・

15）がある。いずれも末野産で、熊野遺跡Ⅵ期に概ね対比できる。

第9号住居跡出土遺物には明らかに数時期の遺物が混在している（第90図）。そのなかで最も新しい様相の土器群は平底・深身の土師器環（2）、口縁部が強く屈曲した土師器甕（22・24）、須恵器高台碗（16～19）と皿（20・21）があり、特に須恵器高台碗と皿が定量で含まれることから熊野遺跡Ⅵ期（9世紀後半）に近い土器様相と考えられる。9号住居跡は重複する住居群の中で最も新しいことから、これらの土器群で住居跡の時期を代表させることが妥当であろう。

Ⅵ期 住居跡出土土器には良好な資料はない。第1号溝跡出土土器の一部が該当する。第1号溝跡出土土器（第132図1～20、第136図21）には7世紀～10世紀に至る土器群が含まれているが、第132図2の土師器環、3の須恵器環はⅦ期に後続する段階と見てよからう。2は北武蔵型環の最終段階、体部の開きが大きく底部は平底化するもので北武蔵型環の流れを汲む形態としては終末期の特徴を備えている。3の須恵器環も小振りで深身、体部が大きく外傾するなど末野産須恵器としても新しい様相が認められる。10世紀前半の様相と推定される。

そのほか、第18号住居跡出土の灰釉陶器瓶（99図1）、グリッド出土の灰釉陶器碗（141図40）、須恵質羽釜（第141図45）などが本期、またはその前後の段階に含まれる可能性があるが、出土状況や資料的な制約から明確な位置づけが難しい。

各時期の年代観に関する検討はひとまず棚上げとし、大掴みに第Ⅰ期6世紀後葉～7世紀前半、第Ⅱ期7世紀後半～8世紀前半、第Ⅲ期8世紀中葉～後葉、第Ⅳ期9世紀前半～中頃、第Ⅴ期9世紀後半、第Ⅵ期9世紀末～10世紀前半としておきたい。

2 集落構成について

次に前項で検討した土器編年と遺構相互の新旧関係に基づき、また多少の推測を交えながら20地点の古代集落の変遷を追ってみたい。古代の遺構は調

査区西端にある埋没河川の東側に分布しているが、中央に一定程度の空閑地を挟み、東西の二群に分かれていた。西側の住居跡群を西群、東側のそれを東群と仮称したい。

I期の集落 西群には該期の遺構は見当たらない。東群では第29・39号溝跡と第46号住居跡、第36号住居跡（I期新相）が営まれる。また、不確定要素は残るが、第32・33号住居跡出土土器のうち該期に属する土器を第32号住居跡に帰属させることができるのであれば32号住居跡が本期古相に属するであろう。第20地点古代集落の嚆矢とできる。

II期の集落 西群では第40号住居跡が本期古段階またはI期に遡る可能性もある。また、重複する第8号住居跡は出土遺物から本期新段階と推定され、第40号住居跡→第8号住居跡という変遷で理解しておきたい。

東群では第33・34号住居跡、第35号住居跡、第1～4号掘立柱建物跡が本期に属する。また新旧関係を検討すると、第21号住居跡、第24号住居跡、第30号住居跡も本期に属する可能性が高い。第22号住居跡は本期、またはI期に遡ることになる。集落の構成軒数は増加傾向にあると考えられる。

III期の集落 西群では第4号住居跡（註2）、第16号住居跡、第19号住居跡が本期に属すると推定される。第16号住居跡・第15号住居跡を切る第1号土壌は本期に位置付けられることから第15号住居跡も本期に属すると考えられる。

東群では第26号住居跡が本期に位置付けられるが、他には明確に抽出できない。

IV期の集落 西群では第2号・5号住居跡が近接して営まれる。位置的に同時並存は難しく、ここでは第2号住居跡→第5号住居跡に建て替えられたと推定しておきたい。第15号住居跡も本期に含まれる可能性をもつが、断定はできない。また、第11号住居跡は出土土器から本期～V期にかけて営まれたと考えた方がよいかもしれない。

東群では第44号住居跡、第45号住居跡が該当しよう。集落としては散在的である。

V期の集落 西群では第9号住居跡が本期に属する。また、これに接する第3号住居跡は出土遺物が本期に位置付けられるものの遺構の時期としては整合せずとありえず保留しておきたい。

東群では本期に位置付けられる遺構は認められない。**VI期の集落** 西群では第18号住居跡から灰軸陶器長頸瓶が出土しており、本期または前期に属する可能性があるものの他に良好な資料がなく、時期の特定が難しい。また、第18号住居跡を切る第17号住居跡も本期に属する可能性はある。また、西群集落の東限を区画する第1号溝跡から本期に属する遺物が出土している。

東群には本期の遺構は検出されない。V期以降集落域からは外れるようである。

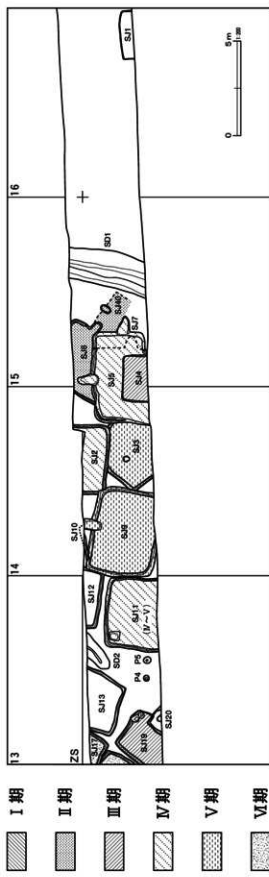
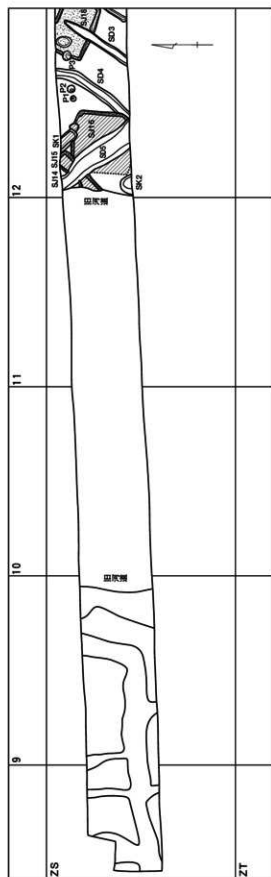
註1 遺構の新旧関係と出土遺物の時期が整合しないが、主体となる遺物から本期と考えておく。

註2 調査所見と出土遺物の時期は整合性を欠くが、ここでは出土遺物からIII期としておく。

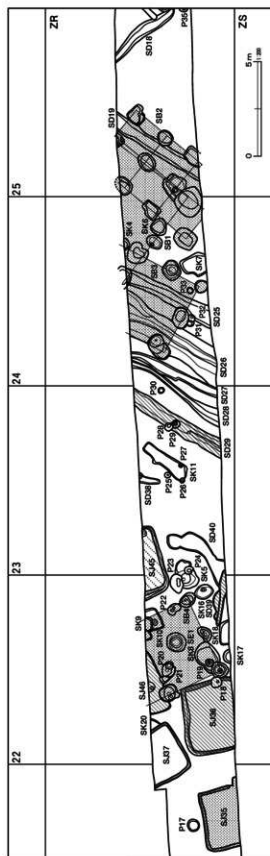
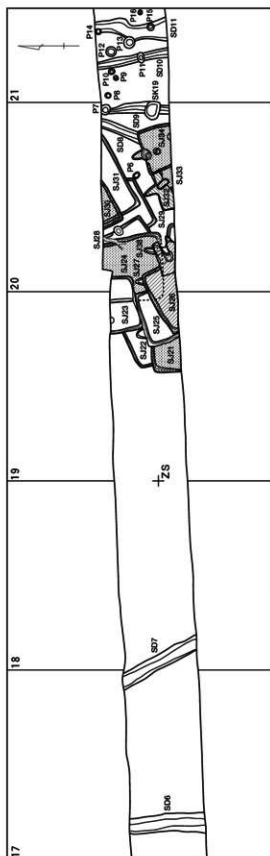
（富田和夫）

引用・参考文献

- 赤熊浩一 1999『末野遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第207集
浅野春樹 1989『北島遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第81集
田中広明 1992『新屋敷東・本郷前東』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第111集
田中広明 2002『北島遺跡Ⅴ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第278集
富田和夫 2002『熊野遺跡（A・C・D区）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第279集
鳥羽政之ほか 1997『熊野遺跡発掘調査概要報告書』岡部町遺跡調査会発掘調査報告書 第6集
鳥羽政之ほか 2001『熊野遺跡Ⅰ』岡部町遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書 第9集
福田 聖 1998『末野遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第196集
渡辺 一 1990『鳩山窯跡Ⅱ』鳩山町教育委員会



第20地点古代集落変遷図(1)



第20地点古代集落変遷図 (2)

2. 磨耗痕のある遺物について

1 はじめに

北島遺跡第20地点の調査では、大半の土器が磨耗した状態で出土したが、その中には自然の営力によらない磨耗痕跡が観察される遺物も含まれていた。

本項では、これらの痕跡を人為的痕跡（使用痕跡）とみなして、それに伴ういくつかの属性ごとに集計し、磨耗痕の在り方に何らかの特性が現れるのか、また磨耗痕跡観察に包含される用途復元の可能性や資料上の問題点を考察する一助としたい。

2 観察対象遺物とその方法

対象遺物は北島遺跡第20地点出土の須恵器・灰軸陶器である。土師器は大半の器面が風化しており観察に不適なこと、須恵器等と比較して硬度が低いため硯・砥石等への転用も考え難いことから除外した。また、今回は便宜上実測図掲載遺物122個体（須恵器118・灰軸陶器4）に限定して磨耗痕をカウントした。

対象遺物を器面観察が可能なものと不可能なものに分け、可能なものについては、その磨耗度に応じて分類し、磨耗部位・擦痕の有無・産地等を記録した。これらの観察は、すべて肉眼で行った。

尚、観察不可能なものあるいは磨耗痕が見られないものは1個体1カウント、1個体の遺物で複数の部位に磨耗痕が観察された場合はそれぞれを1つとしてカウントした為、個体数とカウント数が一致しないことがある。

また、このような資料構成上、統計的な信頼性は極めて乏しいので、グラフ等もあくまで傾向を推察するための参考資料にとどまる。

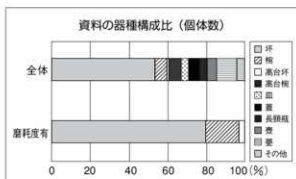
3 観察結果

対象遺物のうち観察可能なものは102個体（84%）あり、カウント数は111点であった。

器種（第1表）観察対象須恵器全118個体のうち、磨耗痕の見られる遺物は坏27個体、埴6個体、脚付甕1個体の計34個体である。カウント数でいえば坏31点、埴11点、脚付甕1点の計43点である。

すなわち、全体の約1/3の遺物に磨耗痕がみられ、そのうち坏が80%近くを占めている。ちなみに須恵器全体に占める坏の割合は54%である。

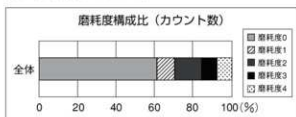
須恵器高台埴、壺・甕類、灰軸陶器には磨耗痕は観察されなかった。



磨耗度（第2表）遺物の磨耗程度に応じて、磨耗度0（観察されない）～4（極めて良く磨耗）の5段階（注1）に分類した。

磨耗度0が62%と半数以上を占める。磨耗痕が認められたものの中では磨耗度2が最も多く、磨耗度1・3・4はほぼ同数であった。

また、磨耗度が高くなるにつれ、磨耗痕の面積も広くなる傾向がみられた。



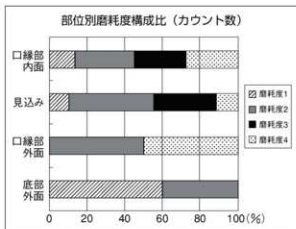
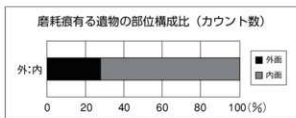
磨耗形態・部位（第3表）磨耗痕は、次のような形態を示すものが多かった。

A 口縁部…口唇端部直下から幅50～70mm程度の磨耗面がほぼ全周にわたって形成されている。B 見込部…粘土が隆起している部分を中心に磨耗面が形成されている。C 底部外面…底部と体部の境が磨耗して滑らかになっている。

磨耗痕は土器の外面28%、内面72%と、内面に観察される頻度が高かった。部位別に見ると口縁部（口唇端部を含む）が56%と大半を占めるが、そのうちの大多数が内面のみのものである。

尚、対象遺物の中には破断面に磨耗痕を持つものはなかった。

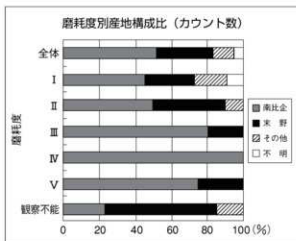
磨耗度別では、口縁部が各段階に分布し、磨耗度が上がるほど構成主体を占めるようになる。見込みも各段階に分布するが、口縁部より磨耗度はやや低い。それに対し、底部外面の磨耗は軽度～中程度に限られる。



産地 (第4表) 全体では南比企産が約半数、末野産が約1/3を占めている (註2)。

磨耗度別に比率構成比を比較すると、磨耗度0・1は全体の構成比とほぼ同様の傾向を示すが、それ以外では南比企産が卓越している。

胎土に含まれる鉱物の粒度が比較的均一な南比企産のものの方が磨耗痕の保存状態が良好であり、研磨を目的とした転用も行われやすいのではないかと推測が可能であるが、器面風化により観察不可能なものの約2/3が末野産であることから、判断は難しい。

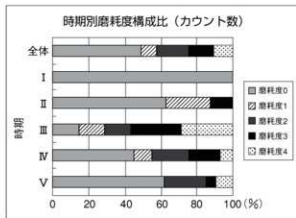


擦痕 擦痕は、磨耗痕の成因を考える上で重要な属性であるが、明瞭に観察された遺物は少数であった。観察された擦痕はすべて直線的で、回転運動に伴うと考えられるものはなかった。

時期 (第5表) 住居跡の時期区分は本書第Ⅵ章第1節に従った。また、住居跡出土の遺物のみをカウントし、時期不明とされたものは除外した。

磨耗痕を有する遺物が、混入とされるもの1点しかない。I期を除けば、磨耗痕を有する遺物の割合が最も高いのはⅢ期である。Ⅲ期は、磨耗度3・4の割合も他期に比べて高い。

Ⅱ・Ⅴ期はそれぞれ磨耗度0が約6割を占めているが、Ⅱ期には磨耗度が4に至る遺物はない。



4 まとめ

用途の推定 特別な磨耗形態を持ち、用途が推定され得るものが2点観察された (註3)。それ以外には用途を特徴付けるような磨耗痕を抽出することはできなかった。

3の磨耗形態Aのような磨耗痕は、実測図非掲載の薄片を含め時期を越えて広く観察されるものであり、特定の使用方法で生じたというよりは、食器という本来の用途での日常的使用により形成された可能性を考慮すべきかもしれない。

遺構との関連 時期に関連する観察結果を、中村倉司氏の視点 (後述) に従って考察するならば、Ⅲ期→Ⅳ期→Ⅴ期→Ⅱ期の順で遺構の存続期間が短くなる (あるいは須恵器供給サイクルが短くなる)、という見方もできよう。

5 磨耗痕分析の課題と展望

中村倉司氏は、磨耗状態の相違は使用期間を反映しているものととらえ、その観察は、土器形態の変

化が明確に現われないような極めて短い時間内における遺構の消長や細かな土器供給の動態を解明する(註4)可能性を有している、との視点から分析を試みている。

ただし、使用期間の推定には、使用用途・頻度が同じであるという仮定が前提とされ、資料の一括性も求められる、という問題点が存在する。

磨耗痕は残存率に左右されにくい属性であるため、より多くの遺物を対象にデータの収集分析ができるという利点がある一方、磨耗度区分の客観的基準が見出せないこと、遺物の属性として磨耗度が報告書に記載されるか否か大きなばらつきがあるため資料の集積が難しい、といった問題もある。

このように解決を要する問題点は山積しているが、それで中村氏の視点を否定するのは誤りであろう。

※註1 須恵器の器面には、整形時のヨコナデあるいはナデの痕跡が微小な筋の集合として観察されることが一般的である。磨耗度の区分は、磨耗によりその整形痕が消失しているかどうかを基準に設定した。

各磨耗度の設定基準は以下のとおりである。

磨耗度0…磨耗はほとんど見られず、整形痕が保存されている。

磨耗度1…磨耗はしているが、整形痕の消失には至らない。手触りはざらつく。

磨耗度2…磨耗により整形痕は消失しているが、明瞭な磨耗面の形成には至らない。ロクロ目の凸部頂部の磨耗はこの段階以降に見られる。

磨耗度3…磨耗により整形痕は消失し、明瞭な磨耗面が形成されている。口縁部の磨耗については、磨耗面幅が5mm未満のものをこの区分に含めた。

磨耗度4…整形痕が消失し、明瞭な磨耗面が形成される。ロクロ目の凸部が磨滅し、磨耗面がロクロ目凹部に及んでいる場合が多い。口縁部の磨耗については、磨耗面幅が5mm以上のものが当該区分に入る。手触りは非常に滑らかである。

※註2 産地の同定は胎土の観察により行い、埼玉県内の生産地の識別は次の基準に準拠した。

南比企産…胎土に白色針状物質を含む。

末野産…胎土に片岩粒を含む。

一般的に、胎土は南比企産のもののほうが精良であり、末野産のものには大きめの鉱物粒が含まれていることが多い。

尚、「その他」には群馬産、東海産、湖西産としたものが含まれている。

また、顕微鏡観察や実験観察の導入、視や摺鉢・捏鉢のように用途が既知の器種の磨耗痕との比較などにより磨耗痕の成因が特定できる可能性がある。そうすれば、食膳具・貯蔵具などという本来の用途以外の用いられ方の具体的な復元も可能になる。磨耗度と用途、共存遺物等との関連を検討することが、それを出土した遺構や遺跡全体の性格設定にも結びつき、地域史における遺跡の位置付けとも結びつくであろう。

磨耗痕分析は、遺跡内部の分析にとどまらず、時期・地域・性格等を異にする遺跡間の比較分析により微視的にも巨視的にも人間の生活活動のより立体的な復元への可能性を内包していると考えられる。

(久保田勝子)

※註3 本文中で報告されている遺物の詳録である。

①SJ19出土 坏(第99図2)口唇端部から口縁部内面にかけて幅約18mmの明瞭な磨耗面が形成されている。研磨面には斜方向に直線的な擦痕が見られる。破断面には磨耗痕・擦痕は認められない。砥石として転用されたと推定される。北島遺跡第4地点SJ10から須恵器破片を転用した砥石が出土している。破断面を使用している。

②SJ36出土 脚付盤(第111図3)内面の非常に滑らかな研磨面。墨痕から転用説と判断される。

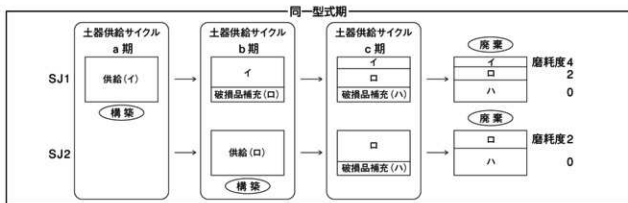
残存する使用面全面が磨耗している(磨耗度3)。「隆」に相当するロクロ目の隆起部分は特に良く磨耗している(磨耗度4)。

墨痕は、「隆」部頂部へ外端に濃く残っている。

※註4 中村氏は、下辻遺跡の出土資料を分析するにあたり、モデルを作成している(『下辻遺跡』p97第67図)。第1図は、そのモデルに筆者が加筆修正したものである。

同一型式期Aに属する住居跡SJ1、SJ2は切り合っており、遺構や遺物からはお互いの新旧関係はわからない。この2つの住居跡からは各々磨耗度の異なる土器群が出土したとする。個々の土器の使用頻度が同じだと仮定すれば、磨耗度の高い土器群イを持つSJ1の方がSJ2より存続期間が長いと推定できる。また、1土器供給サイクル期ごとに1段階ずつ磨耗度が高くなっていくとすると、イ・ロ・ハの磨耗度はそれぞれ3・2・1となるはずであるが、観察結果は異なっている。このことから、同一型式期Aの中で土器供給サイクルルが、サイクルa・cより長期にわたるものであったと考えることができる。

第1図 同一型式期の各住居跡における土器供給モデル



同時に供給された土器群は、一定の使用期間の経過後に一部破損・廃棄される。次回はその分を補うように供給されるとする。つまり一括廃棄された土器群にはイ～ハの各段階の物が含まれている。土器保管者がある時期に生産された土器を補給分も含めて一括保管し、随時供給したと仮定すれば、土器イ～ハの土器形態による弁別は不可能である。

第1表 対象遺物の器種構成と磨耗痕を持つ遺物(個体数)

器種	計	坏	碗	高台坏	高台碗	皿	壺	長頸瓶	壺	甕	甕	その他
全体	118	63 54%	7 6%	1 1%	8 7%	4 3%	7 6%	5 4%	6 5%	12 10%		5 4%
磨耗痕有	34 29%	27 43%	6 79%	0 86%	0 18%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	1 20%

※斜体数字は各器種における磨耗痕有る遺物の割合を示す。

第2表 各磨耗度のカウント数とその割合

	カウント数	
磨耗度0	68	62%
1	10	9%
2	16	14%
3	9	8%
4	8	7%
計	111	

第3表 各部位における磨減度別カウント数およびその割合

		磨耗度1		磨耗度2		磨耗度3		磨耗度4		計	
内 面	口縁部	3	14%	7	32%	6	27%	6	27%	22	71%
	見込み	1	11%	4	45%	3	33%	1	11%	9	29%
計		4	13%	11	35%	9	29%	7	23%	31	72%
外 面	口縁部	0	0%	1	50%	0	0%	1	50%	2	17%
	底部	6	60%	4	40%	0	0%	0	0%	10	83%
計		6	50%	5	42%	0	0%	1	8%	12	28%

※斜体数字は内面・外面それぞれ合計に対する各部位の割合を示す。

※ゴシック数字は全数に対する各部位の割合を示す。

第4表 各磨耗度における産地別カウント数およびその割合

	南比企		未 野		その他		不 明		計
磨耗度0	31	46%	19	28%	13	19%	5	8%	68
1	5	50%	4	40%	1	10%	0	0%	10
2	13	81%	3	19%	0	0%	0	0%	16
3	9	100%	0	0%	0	0%	0	0%	9
4	6	75%	2	25%	0	0%	0	0%	8
観察不可能	4	20%	13	65%	3	15%	0	0%	20
計	68	52%	41	31%	17	13%	5	4%	131

第5表 各時期における磨減度別カウント数およびその割合

	磨耗度0		磨耗度1		磨耗度2		磨耗度3		磨耗度4		計
I 期	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	1	100%	1
II 期	5	63%	2	25%	0	0%	1	12%	0	0%	8
III 期	1	14%	1	14%	1	14%	2	29%	2	29%	7
IV 期	13	45%	3	10%	6	21%	5	17%	2	7%	29
V 期	13	61%	0	0%	5	24%	1	5%	2	10%	21
計	32	48%	6	9%	12	18%	9	14%	7	11%	66

※斜体数字は全数に対する各期の磨耗痕有る遺物の割合を示す。

対象遺物属性一覧

遺物	図面番号	器 種	磨耗度	部 位	磨 損	産 地
SJ2	83	1 環	2	Aa	—	南北全
		8 環	0	—	—	南北全
		9 環	0	—	—	南北全
SJ3	83	13 環	0	—	—	本 野
		14 環	0	—	—	本 野
		15 環	0	—	—	本 野
SJ4-5	85	3 環	●	●	●	本 野
		6 環	1	Bc	—	南北全
		7 環	0	—	—	不 明
SJ5	86	1 環	●	●	●	本 野
		2 環	0	—	—	南北全
		3 環	2	Aa	—	南北全
		4 環	●	●	●	本 野
		5 環	1	Bc	—	本 野
		6 環	0	—	—	南北全
		7 環	1	Bc	—	南北全
		15 環	0	—	—	南北全
SJ4-7	87	19 環	0	—	—	不 明
		2 環	0	—	—	南北全
		3 環	●	●	●	本 野
SJ8	88	4 環	0	—	—	南北全
		3 環	0	—	—	南北全
		4 環	1	Ad	—	本 野
SJ9	90	6 長距離	0	—	—	その他
		6 環	4	Aa	—	南北全
		7 環	4	Aa	—	本 野
		8 環	0	—	—	本 野
		9 環	2	Ad	—	南北全
		10 環	2	Ad	—	本 野
		11 環	2	Bc	—	本 野
		12 環	0	—	—	本 野
		13 環	0	—	—	本 野
		14 環	2	Aa	—	南北全
		15 環	2	Ab	—	南北全
		16 環	3	Ab	○	南北全
		17 高台機	0	—	—	本 野
		18 高台機	0	—	—	本 野
		19 高台機	0	—	—	南北全
SJ11	92	20 環	0	—	—	本 野
		21 環	●	●	●	本 野
		26 環	0	—	—	不 明
		1 環	0	—	—	南北全
		2 高台機	0	—	—	本 野
		3 高台機	●	●	●	本 野
		3 環	0	—	—	南北全
SJ12	94	3 環	0	—	—	南北全
SJ15	97	1 環	3	Ad	○	南北全
SJ16	97	4 環	3	Ab	○	南北全
SJ18	99	1 長距離	0	—	—	その他
SJ19	99	2 環	4	Aa	○	南北全
SJ21	102	4 環	2	Ba	—	南北全
SJ25	102	5 環	3	Ab	○	南北全
SJ26	102	7 環	0	—	—	南北全
SJ28	102	8 環	2	Ab	—	南北全
SJ36	102	9 環	●	●	●	本 野
SJ38	102	10 環	4	Aa	—	南北全
SJ40	102	3 環	0	—	—	本 野
SJ44	104	4 環	1	Ab	—	南北全
SJ46	104	5 環	0	—	—	南北全

- 1) 表中「—」は無し、「●」は観察不可能だったことを示す。
 2) 磨耗度、産地の設定は本文註を参照
 3) 部位 a…内面 b…外面 c…口縁部 d…底部 e…見込み
 4) 観察 観察されたものに「○」

遺物	図面番号	器 種	磨耗度	部 位	磨 損	産 地
SJ36	111	3 脚付盤	4	Ab	—	南北全
SJ44	113	1 環	0	—	—	南北全
		2 環	0	—	—	南北全
SJ45	116	1 環	4	Aa	—	南北全
		2 環	4	Ad	—	南北全
		3 環	2	Ab	—	南北全
		4 環	2	Ad	—	南北全
		7 環	0	—	—	南北全
		8 環	3	Aa	—	南北全
		9 環	3	Ad	—	南北全
		10 環	1	Bc	—	南北全
SR2	123	10 フラスコ	0	—	—	その他
SK1	126	5 環	0	—	—	南北全
		6 環	2	Aa	—	南北全
		7 環	0	—	—	南北全
		8 環	4	Ba	—	本 野
		9 環	0	—	—	本 野
SD1	132	10 環	0	—	—	南北全
		3 環	●	●	●	本 野
		4 環	●	●	●	本 野
		5 環	2	Bc	—	南北全
		6 環	●	●	●	本 野
		7 環	1	Bc	—	その他
		8 環	0	—	—	南北全
		10 環	0	—	—	南北全
		11 高台機	0	—	—	本 野
		12 フラスコ	0	—	—	その他
		15 環	0	—	—	南北全
		16 環	0	—	—	本 野
SD25	136	17 環	0	—	—	南北全
		18 環	0	—	—	南北全
		19 環	0	—	—	南北全
		20 大 環	0	—	—	その他
		21 大 環	0	—	—	その他
		31 長距離	0	—	—	その他
		34 環	●	●	●	本 野
		35 環	2	Bc	—	本 野
		36 環	0	—	—	その他
		37 高台機	0	—	—	本 野
		40 長距離	0	—	—	南北全
		41 長距離	0	—	—	南北全
SD28	136	42 環	0	—	—	南北全
		43 環	0	—	—	その他
		45 環	0	—	—	その他
SD29	139	53 環	●	●	●	南北全
SD30	139	54 環	●	●	●	本 野
遺物外	140	1 環	0	—	—	本 野
		15 環	●	●	●	本 野
		16 高台機	0	—	—	本 野
		17 環	0	—	—	南北全
		18 環	0	—	—	南北全
		19 環	0	—	—	本 野
		20 環	0	—	—	その他
		21 長距離	0	—	—	その他
		22 環	0	—	—	南北全
		23 環	0	—	—	不 明
		36 環	1	Ab	—	南北全
		37 環	1	Ab	—	本 野
		38 環	●	●	●	南北全
		40 高台機	0	—	—	その他
		41 高台機	0	—	—	その他
		42 高台機	0	—	—	その他
遺物外	141	43 高台機	0	—	—	その他
		45 環	0	—	—	不 明

引用・参考文献

- 中村 倉司 1987 「下辻遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第69集
 1988 「小山ノ上遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第70集
 浅野 晴樹 1989 「北島遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第81集
 中村 倉司 1989 「北島遺跡（Ⅱ）」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第88集
 大谷 徹 1991 「北島遺跡（Ⅲ）」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第103集

3. 北島遺跡における弥生時代中期の治水・利水・灌漑について

はじめに

北島遺跡の発掘調査においては、弥生時代中期後葉の集落並びに同期の堰、水路、水田等の生産関連遺構が検出された。これら総合的な遺構が検出された例はまれで、関東地方では千葉県君津市常代遺跡、神奈川県返子市池子遺跡等に認められるに過ぎない。また、千葉県市原市市原条里制遺跡では、該期の広範囲にわたる水田跡が検出されており、近接する台地上に営まれる菊間遺跡、大塚遺跡などと総合的に分析すれば当てはまるものかもしれない。これら数少ない遺跡を含め該期の遺跡と比較検討することで北島遺跡の治水・利水・灌漑のあり方について探ってみたい。

集落立地と堰・水路の関係

北島遺跡の集落立地は報告書第286集でも述べたように東西方向に蛇行して流れる河川に挟まれた自然堤防上に立地している。一般に低地に立地する集落は河道が安定した自然堤防上の最も高い部分に立地している。この状況は北島遺跡に於いても何ら変わるところはない。但し、北側の河川に堰を築いてそこから集落を分断する形で開削した灌漑水路が検出されたことは注目に値する。これまでに、低地に営まれた集落で比較的規模の大きい集落には環濠と呼ばれるものが検出されていた。例えば長野県長野市松原遺跡、神奈川県小田原市中里遺跡、(註-1)埼玉県行田市池上遺跡などで検出されているが、これらの溝について(註-2)石川日出志氏は、中里遺跡や池上遺跡の溝を蛇行する河川間を繋ぎ集落を区画する機能を持つものとしている。また、灌漑的機能を持たせているとの見解も有り、北島遺跡の溝も両機能を備えていると考えられる。

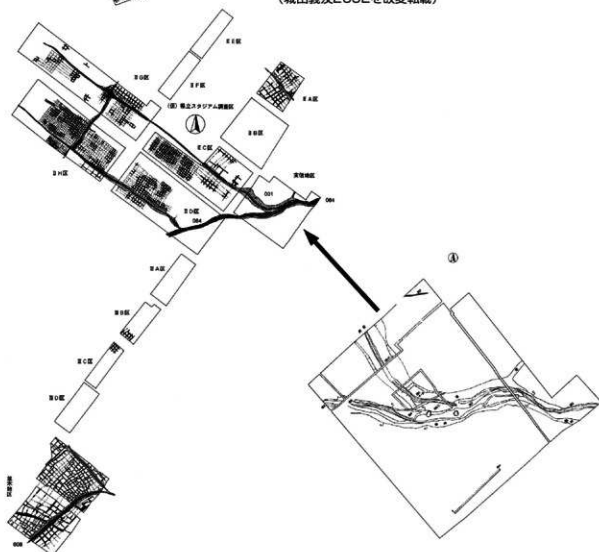
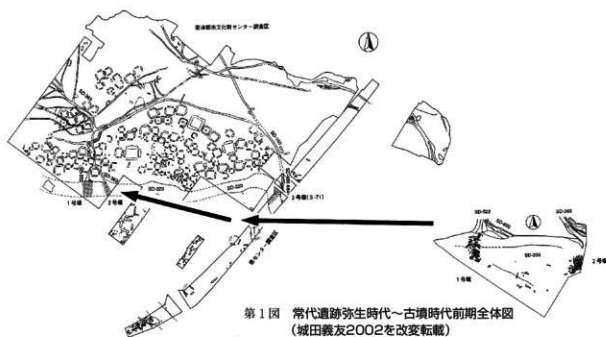
千葉県君津市常代遺跡(第1図)では小糸川旧河道に設けられた3箇所の堰を起点として取水路が自然堤防上に立地する方形周溝墓群をまたぐ形で検出された。何れも弥生時代中期後半から後期にかけての遺構で、堰の構造が合掌型を呈し取水路は自然堤

防を横断する形で設けられていることが北島遺跡と共通している。また、神奈川県返子市池子遺跡(第3図)でも中期宮ノ台式期の旧河道上に横木と斜設杭を用いた堰及び取水路が検出されている。この水路は河道間を接続するものであった。また周辺部では該期の堅穴住居跡、掘立柱建物跡も検出されている。

北島遺跡においては取水路は異なる2条の河川を繋ぐ状況にあり直線的で開削距離を長く設けている点で特徴的である。また、集落と水田を区画するという意味では、静岡県静岡市にある弥生時代後期の水田遺跡研究の嚆矢を切り開いた遺跡として有名な登呂遺跡において、集落域と水田域を南北に区画する幹線水路が東西方向に検出されている。この状況を北島遺跡に当てはめた場合、集落の南側を東西方向に流れる河川が対応するものと考えられる。このようにして河川が集落域を区画し、その南側に広がる幅の広い後背湿地に灌漑を施して開田している。つまり、北側の河川氾濫原での開田を避け自然堤防を横断してその背後にある比較的安定した後背湿地に水を引くことにより広範囲で良好な水田を確保したことになる。さらに、南側の河川跡からも水路が引かれているが、これについては水田域の拡大に伴う水量を寄り多く確保するために開削されたものか、または、北側の水路が使用不能になったために新たに設けられたものか、排水専用に使われたものかなど今後に検討の余地があるが、北側の水路に比べて時期がやや新しいことと、北側の水路と比較してより標高の低い部分を走行していることを考えると水田域の拡大が主目的であったと考えられる。

水田跡の状況

水田跡は、二箇所検出されたが各地点で畦畔の構築状況に相違が認められる。C区での畦畔構築状況は方形の大型区画(18m×21m=378m²)を設け、この区画内をさらに小区画に分ける方法を用いている。一方A区については等高線に直行する形で



主要畦畔を構築し、この間を等高線に平行する形で小区画に分けている。この状況についてはC区が比較的平坦部にあるのに対しA区はやや傾斜地形に立地している。このことから、畦畔の構築方法の違いには地形傾斜に大きな要因があると考えられるが、(註-3)「岡山県百間川遺跡の後期水田では微高地の縁辺部から微高地内に削りこんで造成された比較的小規模(平均25平方メートル)水田と、微高地間の低位部に位置して大畦によって大きく区画された中を小畦畔によって整然と方形に区画された比較的大形(60-70平方メートル)の水田の二者がみられる。」のように時期が新しくなると小区画の構成が大区画の中を細分する方法へと変化していくことから、時期的な問題も含め見当の余地がある。

千葉県市原市市原条里制遺跡(第2図)では、台地部と海岸に挟まれた低地帯に主要幹線水路から枝分かれした2条の分水路の両側に方形の小区画水田が整然と展開している。各区画は台地部側が長方形のやや大きい区画を呈し、海岸部側は小さい方形区画を呈している。また、この違いを水配り(水量の確保)の差として捉えている。長野県長野市川田条里遺跡(第4図)では、弥生時代中期栗林式期の水田跡が検出されている。この水田跡では、畦畔内部に木材を敷設した長方形の小区画水田が検出された。湿地型水田の畦畔崩壊防止のための措置と考えられる。また、周辺部には、榎田遺跡や松原遺跡など該期の大集落が立地している。

北島遺跡の各田面の面積は、遺構として残りのよいA区の状況からみる限り一区画の面積はA区で平均22.36㎡、C区で平均18.97㎡で、20から30㎡が最も多く所謂小区画水田の形態をとっている。また各区画の形状は大きく地形を変更させるものではなく地形傾斜に沿って区画されている。また、A区においては支水路の走行方向及び大畦によって本来の区画が斜めに分断される形となっている。

水口の配置については支水路に接する部分では水路の両側に設けられている。また周囲では等高線に

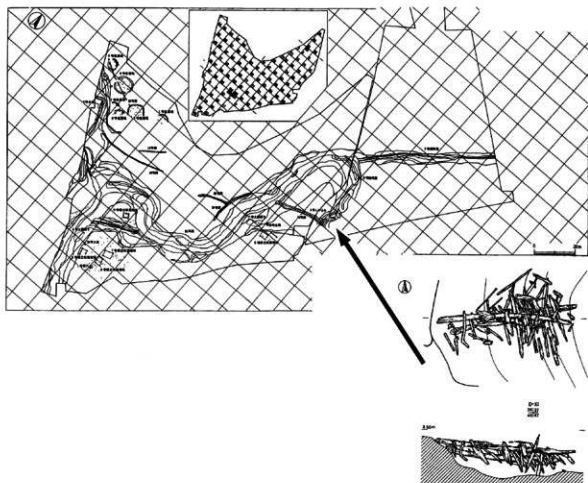
直行して設けられている。大畦付近でも同様に直行して設けられている。但し、離れた部分では平行して取り付いている状況も認められる。水口自体の取り付け状況が全体の区画に占める割合としては少数に留まっている。したがって本水田跡の水がかりは下位水田に対し田越しによる「懸け流し灌漑」が用いられていたと考えられる。

北島遺跡の水田経営の段階について

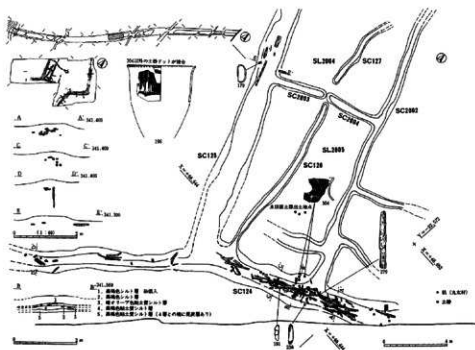
そこで、北島遺跡で検出された灌漑施設を含めた水田関連遺構の総合的な段階設定を試みると、広瀬和雄氏の段階設定に従えば、(註-4)北島遺跡では、水田の立地及び灌漑設備に関しては、基本的に第1段階にあたるものと考えられる。但し、取水路に関しては、集落を載せる自然堤防を横断し、背後にある広い後背湿地に灌漑を施す方法をとっており、また、南側河川と接続乃至は交差させるなど治水及び灌漑に積極的に取り組んでいる姿勢が読み取れる。従って本遺跡の灌漑技術は第1段階から第2段階への過渡期にあたるものと考えられる。

おわりに

北島遺跡で検出された弥生時代中期後葉第Ⅳ期の水田は河川氾濫原と自然堤防に挟まれた幅の広い後背湿地に開田されていた。またその形態は地形に適合して造られた小区画水田であり、該期の水田形態の一般的傾向を示すものである。但し、区画の詳細を見れば大区画の中を小区画に区切る方法も認められ、弥生時代後期水田に普及する形態の萌芽も認められる。また、その次の段階(註-5)である古墳時代前期以降に波及する極小区画水田や微高地への進出は認められない。灌漑施設は堰の構造に於いては合掌方の越流形態が用いられている。また、堰は北側河川のみならず南側河川にも想定され、自然堤防を横断し河川間を接続させる構造と共に各河川から取水することで、水量を増加させる工夫を施している。このように北島遺跡では、集落の開始当初から高度な灌漑技術を用いた水田経営が取り入れられ、弥生時代後期に洪水により一旦は廃絶するもの



第3図 池子遺跡群A-1. A-1東地点弥生時代全体図・しがらみ状遺構



第4図 川田条里遺跡 B2地区弥生水田

の古墳時代前期には同様の場所に河道の付け替えによる灌漑と地形を改変させ整然とした小区画水田、集落部分以外の微高地への畠作の進出を見るのである。

(吉田 稔)

註-1 池上遺跡プラントオパール採取地点における弥生時代中期池上式期の水田は第1地点は池上遺跡集落部分からはずれず西側、池上西遺跡北側の遺構が存在しない微低地部分に想定されている。第2地点は池上遺跡東側で集落部分から外れ河川の氾濫原及び後背湿地に想定されている。また、第2地点はプラントオパールと共にヨシが検出されており早くから湿地化された状況であった。第1地点から考えられる水田跡の立地は、集落部分に隣接して開田していた状況が窺える。また、第2地点では、湿地の可能性も考えられる。

小敷田遺跡では、榛名二ツ岳火山灰層に被覆された水田が3区から検出されプラントオパールの検出範囲と一致している。但し、弥生時代中期水田跡は検出されていない。想定されるものとして、3区水田跡下の黒色泥炭層と灰白色粘土層の互層が認められる谷地形部分があり、この部分に湿地型の水田が想定される。これらから導き出される水田跡の状況は1・2区に分布する集落と4区に分布する集落に挟まれた後背湿地に開田されていた可能性がある。

註-2 石川日出志2001「関東地方弥生時代中期中葉の社会変動」『職台史学』第113号職台史学会
環濠の役割を果す区画溝が掘削されることがある点は

宮ノ台期集落への過渡的な姿と認められる。

註-3 高畑知功他1984「第2節 水田遺構」『百間川原尾島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56
建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会

註-4 広瀬和雄1983「古代の開発」『考古学研究』第30巻第2号 考古学研究会

第一段階 自然河川に堰を設けて推移を上昇させ、溝で導水する灌漑システム。(僅かに水位を数10cmから1m程度上昇させるだけの構造では、あまり灌漑能力は高いとは言えず、ことに治水時には水がかりの範囲が広がれば広い程、水不足が問題となったであろう。それを防ぐには、一つには水田そのものが地下水位の高い地域に造られ、あまり灌漑用水を必要としないこと、いま一つは個々の堰からの取水に依存する水田の量を多くせずに、流路に一定の距離をおいて何ヶ所にも堰を設けることなどが考えられる。)

第二段階 縦向遺跡で検出されたような自然河川相互を結ぶ人口流路の掘削がこの段階を特徴づける。

註-5 斎藤英敏2003「水田研究の新視点—群馬県における水田跡理解の現状—」『考古学研究』第50巻2号 考古学研究会

群馬県には幾層ものテフラが累積していることから、水田跡の時代的変遷を実現することができる。それは、不定形小区画水田→極小区画水田→大区画水田という時代変遷である。6世紀までは小区画水田を志向し、9世紀前半代頃までには一区画100m以上の大区画を志向するようになっていく。このような変遷は、長野県や静岡県においても指摘されるようになってきている。

引用・参考文献

石川日出志 2000「中里遺跡と東日本の弥生時代」『小田原市遺跡調査発表会・中里遺跡講演会発表要旨』小田原市教育委員会

岡本 渉 2002「特別史跡 登呂遺跡」『登呂遺跡の再発掘成果と水田跡・畠跡研究の現状(第10回東日本の水田跡を考える会—資料集—)』東日本の水田跡を考える会

草原孝典 2002「集落遺跡の変遷からみた水田経営の画期—岡山県南部の弥生時代中・後期を中心に—」『環瀬戸内海の考古学—平井勝氏追悼論文集—』上巻 古代吉備研究会

- 斎藤英敏 2003「水田跡研究の新視点—群馬県における水田跡理解の現状—」『考古学研究』第49巻第4号
考古学研究会
- 城田義友 2002「農耕関連遺構の分析」『研究紀要』23 財団法人千葉県文化財センター
- 菅原康夫 1980「弥生系農業における水利施設の意義と展開（上）」『古代学研究』92 古代学研究会
- 根本 修 1992「3 水田造成の歴史 中国・四国における水稲耕作の受容」『新版古代の日本史 第4巻中国・四国』角川書店
- 藤原 哲 2002「弥生集落の農業経済力」『考古学研究』第49巻第3号 考古学研究会
- 正岡睦夫 1982「弥生時代及び古墳時代の水利と水田—西日本を中心として—（上）」『古代学研究』98 古代学研究会
- 正岡睦夫 1983「弥生時代及び古墳時代の水利と水田—西日本を中心として—（下）」『古代学研究』99 古代学研究会
- 松田隆二・岡本 渉・藤原 宏・宇多津徹朗 1991「静岡平野南部における弥生時代後期（登呂層）水田址の検討—登呂遺跡・有東柵子遺跡・鷹ノ道遺跡・有東遺跡を例として—」『考古学と自然科学』第23号 日本文化財科学会
- 第7回東日本埋蔵文化財研究会編1998『治水・利水遺跡を考える—人は水とどのようにつきあってきたか—』東日本埋蔵文化財研究会・山梨県考古学協会
- 日本考古学協会編1991『シンポジウム日本における稲作農耕の起源と展開』学生社
- 東日本の水田跡を考える会編1990『第3回東日本の水田を考える会—資料集—』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所1993『研究紀要Ⅳ—水田跡調査の方法と研究』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 伊藤友久他 2000『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書10—川田条里遺跡—』長野県埋蔵文化財センター—発掘調査報告書47 日本道路公団 長野県教育委員会 長野県文化財センター
- 伊藤伸久他 1996『常代遺跡群』君津市文化財センター—発掘調査報告書第112集 君津市常代土地区画整理組合・君津都市文化財センター
- 小久貫隆他 1999『市原市市原条里制遺跡』千葉県文化財センター調査報告第354集 日本道路公団 市原市 財団法人 千葉県文化財センター
- 中島 宏 1984『池上・池守』一般国道125号埋蔵文化財発掘調査報告書 埼玉県教育委員会
- 宮 昌之 1983『池上西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第21集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 山本暉久・谷口 肇『池子遺跡群Ⅳ No.1～A東地点』かながわ考古学財団調査報告45 財団法人 かながわ考古学財団
- 吉田 稔他 1991『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

写真図版



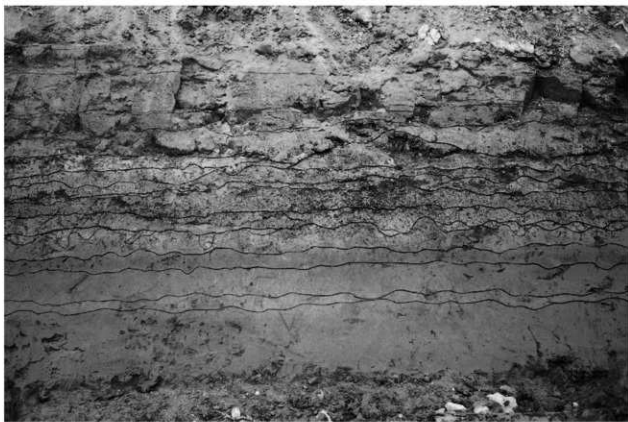
北島遺跡遠景（南西から）



北島遺跡全景（西から）



A区西壁土層堆積狀況



A区西壁土層堆積狀況（近接）



A区水田跡 AU39～43グリッド付近 (西から)



A区水田跡 AS39～43グリッド付近 (西から)



A区水田跡 AN41～43・AS39～43グリッド付近（西から）



A区水田跡、第124号溝跡 AO41～43グリッド付近（東から）



A区水田跡・大群 A040～43・AP41～43グリッド付近（東から）



第91号溝跡



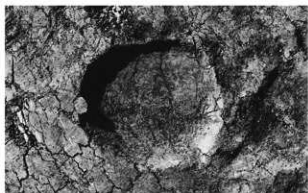
C区水田跡 AF~AH28~32グリッド (南から)



第171号溝跡



河川跡完掘状況



第74号土壙



第76号土壙



第75号土壙



第77号土壙



第91号溝跡遺物出土状況



A区水田跡 蛙・水口検出状況



第91号溝跡遺物出土状況



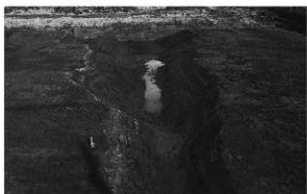
A区水田跡 小蛙群検出状況



第91号溝跡遺物出土状況（近接）



A区水田跡 大蛙遺物出土状況



第107号溝跡



A区水田跡 大蛙遺物出土状況（近接）



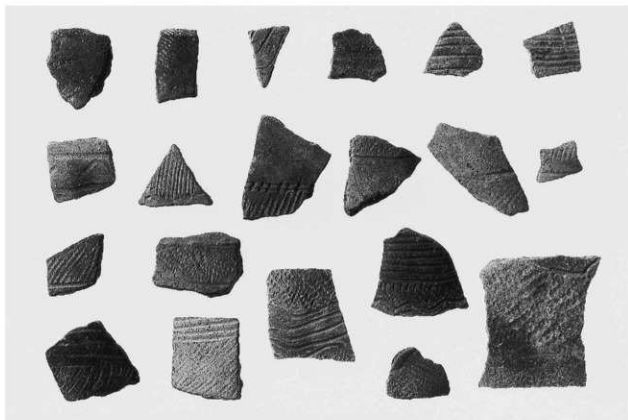
第91号溝跡 第12図1



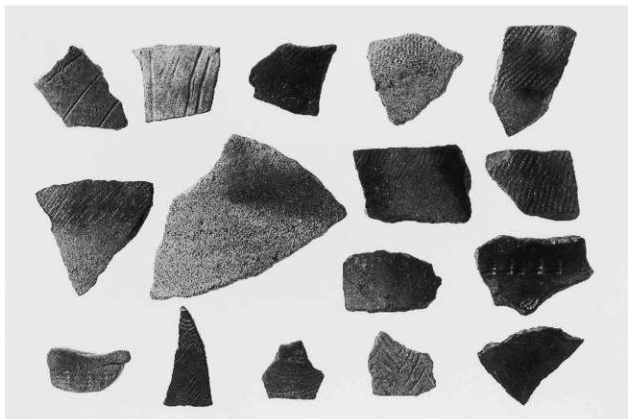
A区水田跡大畦 第39図1



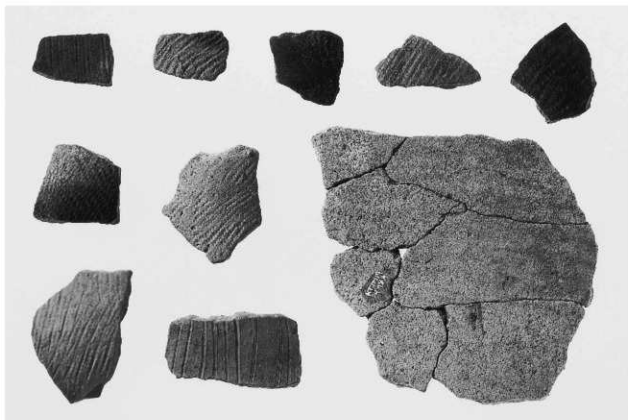
第91号溝跡 第12図2~4



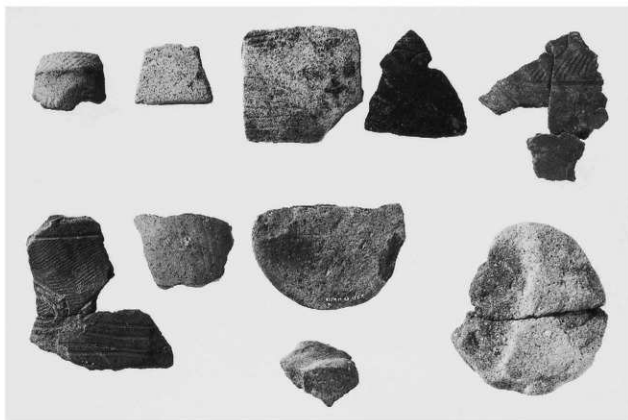
河川跡 第18図1~20



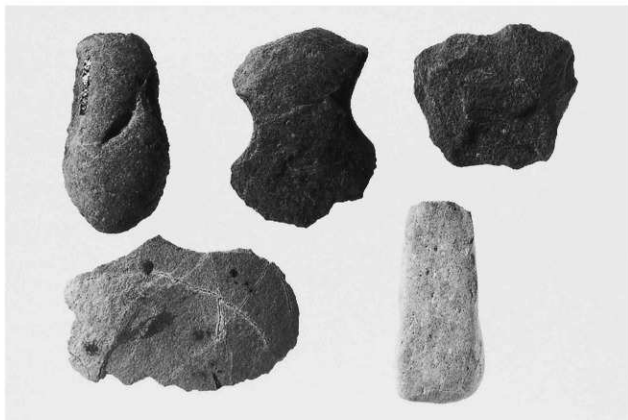
河川跡 第18圖21~36



河川跡 第18圖37~46



遺構外 第50図1~10



遺構外 第50図11~15



調査区全景（東側半分）



調査区全景（西側半分）



第41号住居跡



第42号住居跡



第47号住居跡（南東から）



第47号住居跡（南西から）



畠跡全景（東から）



畠跡全景（西から）



畠跡全景（西から）



畠跡 ZR31グリッド付近



畠跡 ZR32グリッド付近



畠跡 ZR33グリッド付近



水田跡全景（西から）



第41号住居跡遺物出土状況



第15・16号溝跡



第14号溝跡



調査風景



第41号住居跡 第58図1



第41号住居跡 第58図4



第41号住居跡 第58図2



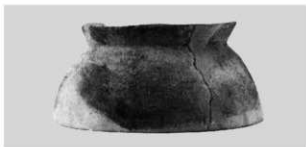
第41号住居跡 第58図5



第41号住居跡 第58図3



第41号住居跡 第58図8



第41号住居跡 第58図6



第41号住居跡 第58図7



第42号住居跡 第60図3



第43号住居跡 第62図2



第43号住居跡 第62図3



第42号住居跡 第60図2



第43号住居跡 第62図5



第43号住居跡 第62図1



第43号住居跡 第62図6



第15号溝跡 第68図1



第47号住居跡 第64図2



第31号溝跡 第77図2



第47号住居跡 第64図3



第14号土坑 第77図3



調査区ZR19～22グリッド付近（東から）



調査区ZS13～15グリッド付近（東から）



調査区ZR19～20グリッド付近（西から）



調査区ZR22～25グリッド付近（西から）



調査区ZR23～27グリッド付近（東から）



調査区ZR23～30グリッド付近（東から）



第1号住居跡、第6号溝跡



第2～8号住居跡



第2~12号住居跡，第2号溝跡



第5・7・8号住居跡，第1号溝跡



第13・17~20号住居跡，第3・4号溝跡，第1~3号小穴



第14・15・16号住居跡，第1・2号土壇，第4・5号溝跡，第1・2号小穴，旧河道



第21～27号住居跡



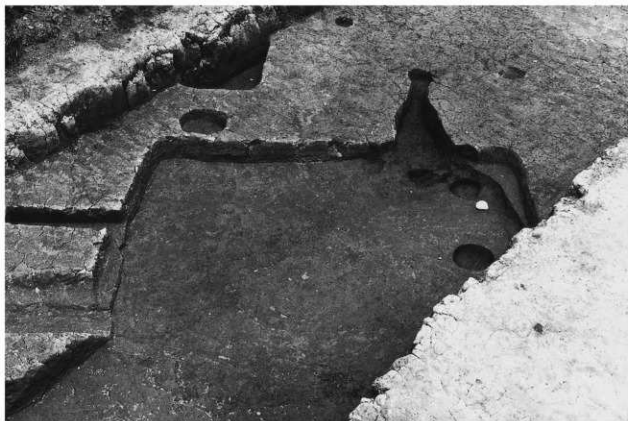
第28～31号住居跡，第8・9号溝跡



第35~37号住居跡，第11号溝跡，第14~17号小穴



第36号住居跡



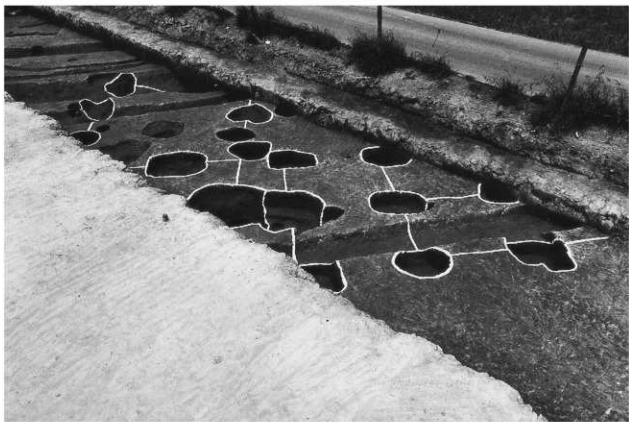
第44号住居跡，第3号土坑



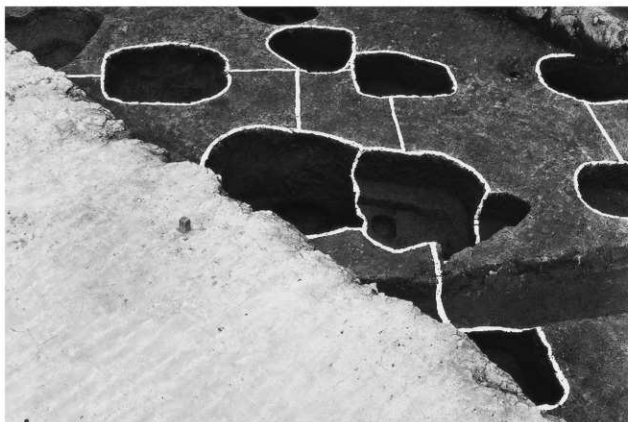
第45号住居跡



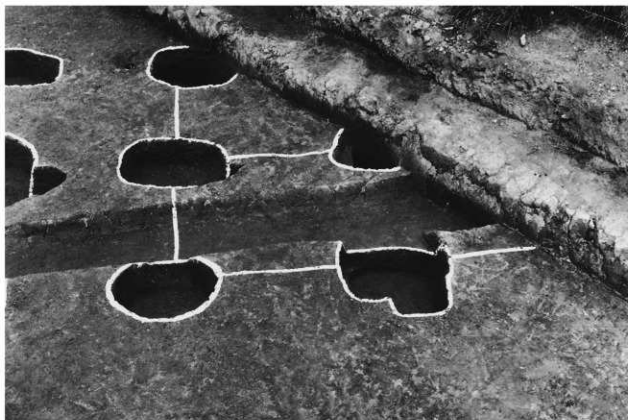
第46号住居跡



第1～3号掘立柱建物跡群



第1・2号掘立柱建物跡群



掘立柱建物跡群（第2号を中心に）



第4号掘立柱建物跡



第5号住居跡 カマド跡



第44号住居跡 カマド跡



第32・33号住居跡遺物出土状況



第1号掘立柱建物跡P2、第2号掘立柱建物跡P4



第3号掘立柱建物跡P5



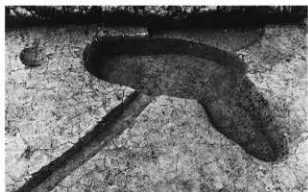
第1号井戸跡曝出土状況



第1号土壇



第1号井戸跡完掘状況



第12・13号土壇、第22号溝跡、第46号小穴



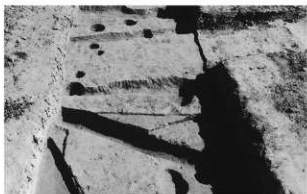
第44号小穴



第14号土壇



第7号溝跡



第8～11号溝跡，第19号土壇，第7～16号小穴



第25～29号溝跡，第3号掘立柱建物跡



第17・18号溝跡（北西から）



第30～35号溝跡（南西から）



第17・18号溝跡，第34・36号小穴（南から）



第30～35号溝跡（西から）



第20・21号溝跡，第15号土壇，第49号小穴



第37号溝跡



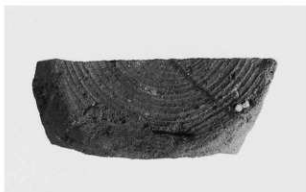
第5号住居跡 第86図17



第16号住居跡 第97図4



第5号住居跡 第86図16



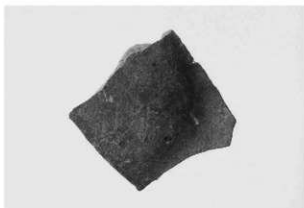
第21号住居跡 第102図5



第9号住居跡 第90図22



第32・33号住居跡 第109図7



第36号住居跡 第111図3



第45号住居跡 第116図8



第40号住居跡 第88図8



第45号住居跡 第116図9





第45号住居跡 第116図12



第3号掘立柱建物跡 第123図12



第45号住居跡 第116図13



第1号土壇 第126図5



第1号掘立柱建物跡 第123図5



第1号溝跡 第132図2



遺構外 第140図18



第25号溝跡 第136図26



遺構外 第140図1



第29号溝跡 第139図53



遺構外 第141図47



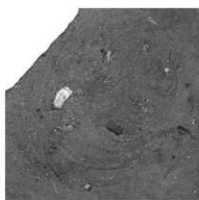
第9号住居跡 第90図27



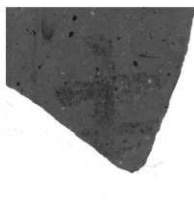
第1号土壙 第126図11



遺構外 第141図46



墨書 第90図18



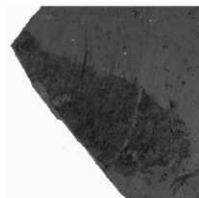
墨書 第104図3



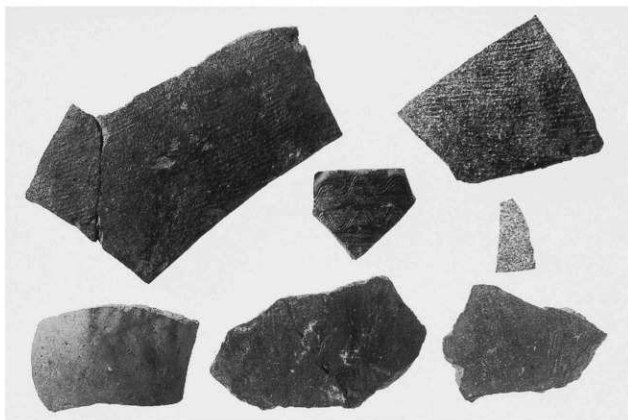
墨書 第113図2



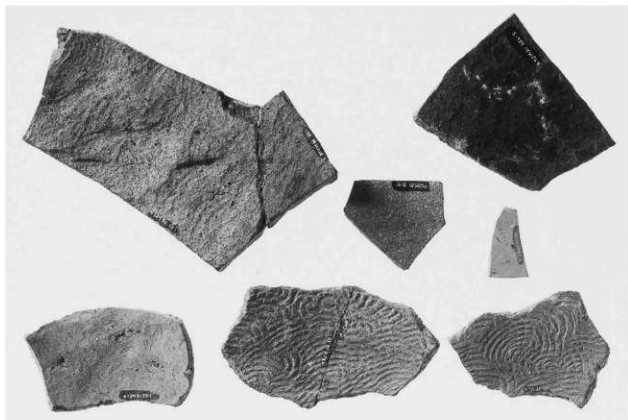
墨書 第139図54



墨書 第141図36



須恵器型類（外面）第4・5号住居跡，第1・26号溝跡 第85・86・132・136図



須恵器型類（内面）第4・5号住居跡，第1・26号溝跡 第85・86・132・136図



灰釉陶器（外面）第18号住居跡，遺構外 第99・141図



土錘 第2・3・4～7・24号住居跡 第83・87・104図



木製容器 第142図1



丸木弓 第142図2



第317号住居跡 第144図1



第317号住居跡 第144図2



第317号住居跡 第144図5



第317号住居跡 第144図3



第317号住居跡 第144図6



第317号住居跡 第144図4



第317号住居跡 第144図9



第317号住居跡 第145図12



第317号住居跡 第145図10



第317号住居跡 第145図13



第317号住居跡 第145図11



第317号住居跡 第145図14



第317号住居跡 第145図15



第318号住居跡 第148図1



第317号住居跡 第145図17



第318号住居跡 第148図2



第317号住居跡 第145図18



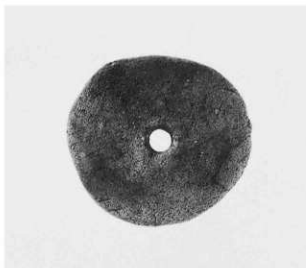
第318号住居跡 第148図3



第317号住居跡 第144図8



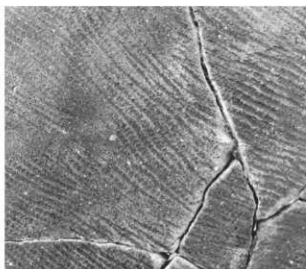
第318号住居跡 第148図4



第318号住居跡 第149図31



遺構外 第151図1



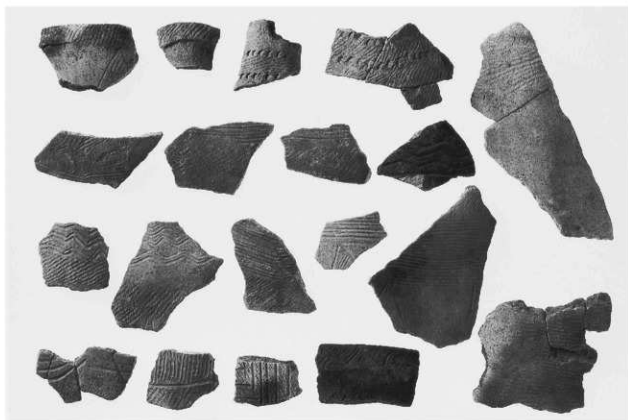
第317号住居跡 第145図12 縄文



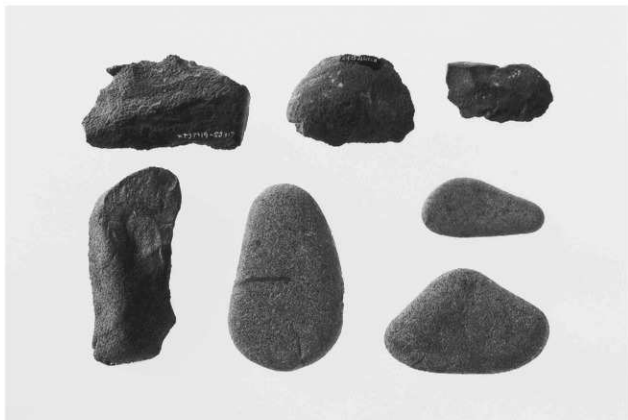
遺構外 第151図2



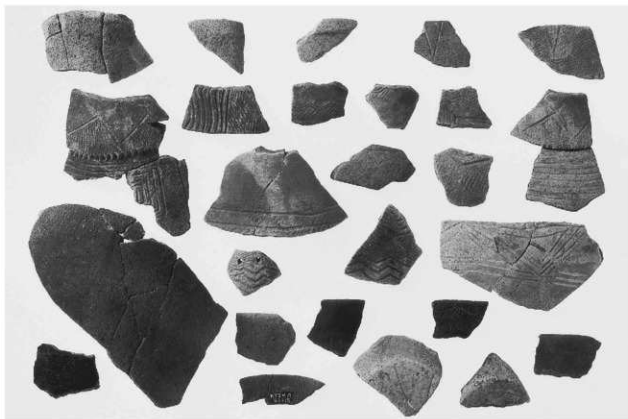
第317号住居跡 第145図14 粉痕



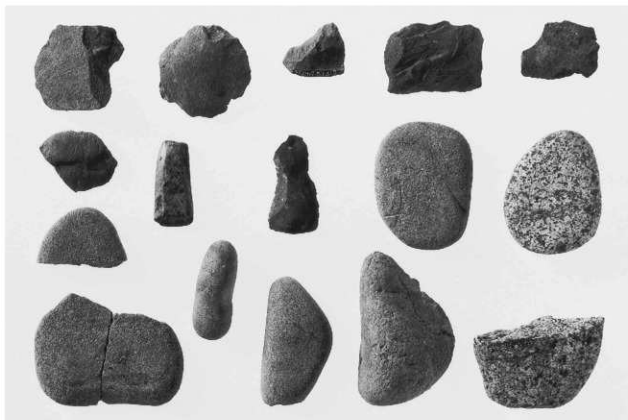
第317号住居跡 第144図7, 第145図19~30, 第146図31~36



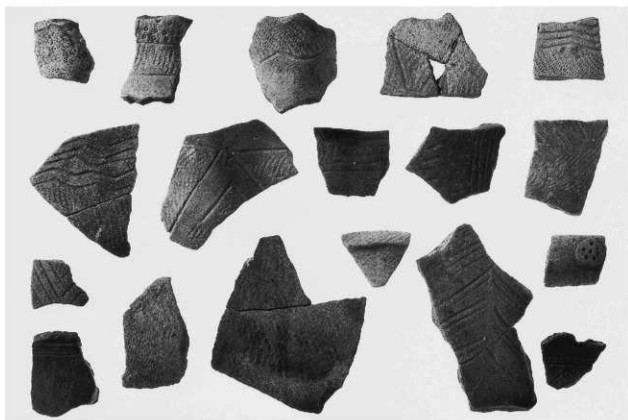
第317号住居跡 第146図37~43



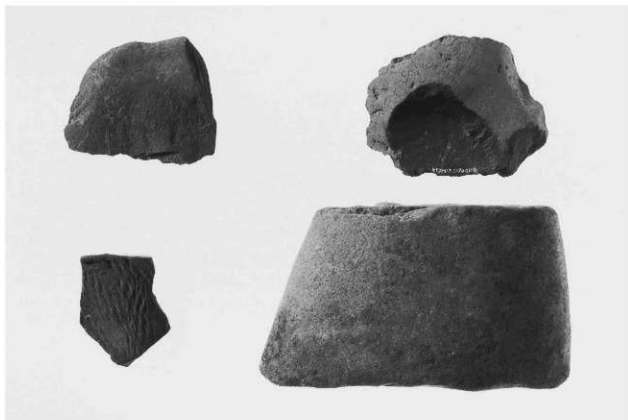
第318号住居跡 第148図5~30



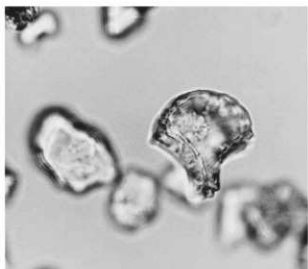
第318号住居跡 第149図32~47



第361号住居跡 第150図1~18



遺構外 第151図3~6



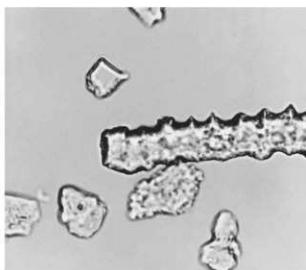
分類群 1 イネ



分類群 4 ヨシ属



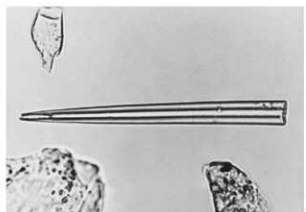
分類群 2 イネ



分類群 5 棒状珪酸体

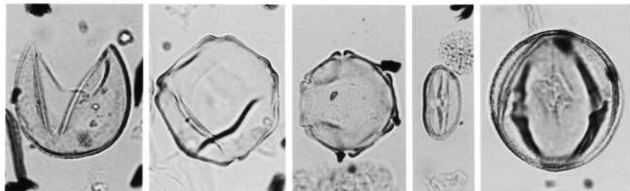


分類群 3 イネ (側面)



分類群 6 海绵骨針

北島遺跡の花粉・胞子遺体



1 スギ

2 クルミ属

3 ハンノキ属

4 シイ属

5 ブナ属

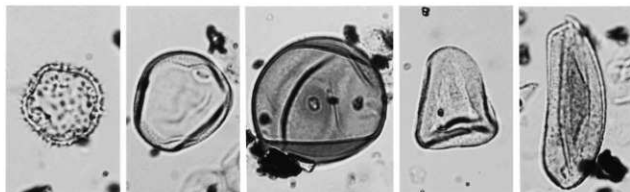


6 コナラ属コナラ亜属

7 コナラ属アカガシ亜属

8 ニレ属ーケヤキ

9 エノキ属ームクノキ



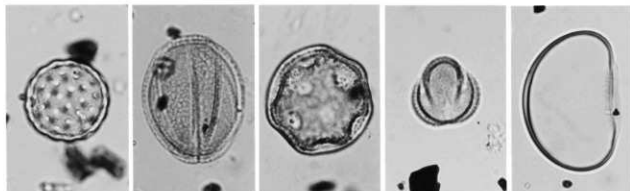
10 オモダカ属

11 イネ科

12 イネ属型

13 カヤツリグサ科

14 ミズアオイ属



15 アカザ科ーヒユ科

16 シソ科

17 ナadeshiko科

18 ヨモギ属

19 シダ植物単条溝胞子

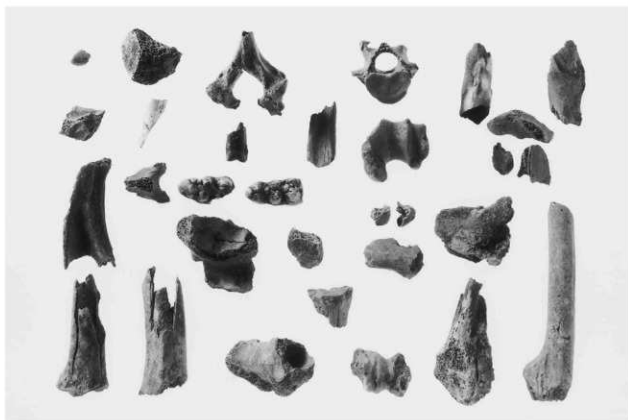
北島遺跡の花粉・胞子遺体



1a. ヒト下顎骨咬面 (人骨1)



1b. ヒト下顎骨左側面 (人骨1)



第19地点出土獸骨（1）



第19地点出土獸骨（2）



第19地点出土獸骨 (3)



第19地点出土獸骨 (4)

報告書抄録

ふりがな	きたじまいせき							
書名	北島遺跡Ⅱ							
副書名	熊谷スポーツ文化公園建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次	Ⅲ							
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第291集							
編著者名	吉田 稔・富田和夫・久保田睦子							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県大里郡大里町大字船木台4-4-1	TEL0493-39-3955						
発行年月日	西暦2004(平成16)年3月24日							
北島遺跡 所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
北島遺跡 17・19・20地点	埼玉県熊谷市 大宇上川上 町田364番地 他 天神森上317 番地61他 桜島196番地 他	11202	058	36 09 31	139 24 39	19990408～ 19991208 20000710～ 20001031 19990408～ 20000324 20000408～ 20001228 20000111～ 20000324 20000501～ 20000630	5 000	メインスタジアム建設
							1 000	屋内競技場建設
							1 780	外周道路建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
北島遺跡第17・19・20地点	集落跡 水田跡	弥生時代中期 ～古代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土壇 溝跡 水路 小穴 水田跡 畠跡 河川跡		45軒 4棟 26基 46条 2条 60基 2箇所 1箇所 2本	弥生式土器 土師器 須恵器 土製品 石器 石製品 木製品 骨類	弥生時代中期では関東地方有数の低地性集落。水利施設・水田遺構を検出。古墳時代前期の畠跡を検出。	

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第291集

熊谷市

北島遺跡Ⅶ

(第17・19・20地点)

熊谷スポーツ文化公園建設事業関係

埋蔵文化財発掘調査報告書

—Ⅲ—

平成16年3月1日 印刷

平成16年3月24日 発行

発行／埼玉県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 大里郡大里町船木台4丁目4番地1

電話 0493(39)3955

印刷／株式会社 太陽美術